

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第159集

おり づ しん まち
下 津 新 町 遺 跡

2009

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県の北西部に所在する稲沢市は、今日では植木や苗木の産地として知られ、また多くの企業の工場が並ぶ産業都市としても発展しています。尾張平野の中心に位置するこの地は、古くから尾張の中心地として栄え、古代には国府・国分寺・国分尼寺が作られ、中世には下津に守護所が設置されました。三宅川や五条川などの河川交通、鎌倉街道などの陸上交通も発達し、人々の往来は活発で、多様な文化が花開いた歴史があるといえましょう。

今回発掘調査を行いました下津新町遺跡は、尾張守護所が設置された下津城の近くに立地しており、古代から中世を中心に様々な時期の遺構や遺物が確認されています。稲沢市域では、古くから多くの地点で発掘調査などが行われてきており、既に膨大な知見の蓄積がありますが、今回の調査によって、その中でも下津城近隣の歴史的景観復元において新たな成果を加えることができました。本書は、その成果をまとめたものであります。

今後、こうした調査成果が、稲沢市域の歴史を明らかにする上で一助となり、埋蔵文化財の保護や啓蒙活動に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際して、地元住民の方々をはじめとする関係者および関係諸機関のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例 言

- 1 本書は愛知県稲沢市下津新町に所在する下津新町遺跡（県遺跡番号 090270）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、主要地方道路名古屋豊山稲沢線の道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査期間は平成 17 年 4 月から 11 月までで、2278 m²の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月にかけて実施した。
- 4 調査担当者は、宮腰健司（本センター調査研究専門員：当時主査）・鈴木正貴（本センター調査研究専門員：当時主任）、加藤博紀（現津島東高等学校：当時調査研究員）である。発掘調査は安西工業株式会社の支援を受けて実施した。なお、安西工業株式会社の調査スタッフは本文第 1 章に記した。
- 5 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、稲沢市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
- 6 本書の執筆と編集は鈴木正貴が担当したが、一部に分担執筆がある。
第 3 章第 2 節(1) 宮腰健司
第 4 章第 1 節 鬼頭剛
第 4 章第 2 節 パレオ・ラボ 藤根久・中村賢太郎
- 7 整理作業は鈴木正貴が担当した。整理作業は伊藤ますみ、小嶋由美子、三浦里美（整理補助員）の協力を得て実施し、遺物トレース作業をテイケイトレード株式会社に、地籍図および地図のトレースを GIS 中部株式会社に、編集作業を有限会社アルケアリサーチに、写真撮影を写真工房遊（金子知久）にそれぞれ作業を委託した。
- 8 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- 9 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
- 10 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
- 11 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
- 12 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を得ている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
磯谷和明・北村和宏・都築暢也・中野晴久・野口哲也・藤澤良祐・北條献示

目 次

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法と経過	4
第3節 地理的・歴史的環境	8

第2章 遺 構

第1節 基本層序と遺構の概要	9
第2節 古墳時代の遺構	10
第3節 古代の遺構	13
第4節 中世の遺構	70
第5節 近世の遺構	80

第3章 遺 物

第1節 出土遺物の概要	85
第2節 土器・須恵器・陶磁器類	85
第3節 石製品	114
第4節 木製品	114
第5節 金属製品・金属関連遺物	119

第4章 自然科学的分析

第1節 下津新町遺跡における地下層序と表層地形解析	122
第2節 下津新町遺跡出土木製品の樹種同定	128

第5章 考 察・まとめ

第1節 地籍図・村絵図による河道の検討	132
第2節 遺構の変遷	135
第3節 下津新町遺跡における古代土師器甕について	141
第4節 総 括	143

抄 録	149
-----	-----

付 表	151
-----	-----

遺構図版	171
------	-----

写真図版	179
------	-----

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図 (1)	1	第 46 図	竪穴建物跡 SB48 遺構図	50
第 2 図	遺跡位置図 (2)	2	第 47 図	竪穴建物跡 SB49 遺構図	51
第 3 図	調査区位置図 (1)	3	第 48 図	竪穴建物跡 SB50 遺構図	52
第 4 図	調査区位置図 (2)	4	第 49 図	竪穴建物跡 SB51 遺構図	53
第 5 図	調査区周辺の地籍図	5	第 50 図	竪穴建物跡 SB54 遺構図	54
第 6 図	基本土層断面図	9	第 51 図	竪穴建物跡 SB56・57 遺構図	55
第 7 図	SX07 遺物出土状態図	10	第 52 図	竪穴建物跡 SB58 遺構図	56
第 8 図	SX08・09・10 遺物出土状態図	11	第 53 図	竪穴建物跡 SB59 遺構図	57
第 9 図	土手状遺構とその周辺の遺構図	12	第 54 図	竪穴建物跡 SB60 遺構図	58
第 10 図	竪穴建物跡 SB03 遺構図	14	第 55 図	竪穴建物跡 SB61・62 遺構図	59
第 11 図	竪穴建物跡 SB04 遺構図	15	第 56 図	竪穴建物跡 SB63 遺構図	60
第 12 図	竪穴建物跡 SB05 遺構図	16	第 57 図	竪穴建物跡 SB64・65 遺構図 (1)	61
第 13 図	竪穴建物跡 SB06 遺構図	17	第 58 図	竪穴建物跡 SB64・65 遺構図 (2)	62
第 14 図	竪穴建物跡 SB07 遺構図	18	第 59 図	掘立柱建物跡 SB52 遺構図 (1)	63
第 15 図	竪穴建物跡 SB08・09 遺構図	19	第 60 図	掘立柱建物跡 SB52 遺構図 (2)	64
第 16 図	竪穴建物跡 SB10 遺構図	20	第 61 図	掘立柱建物跡 SB53 遺構図 (1)	65
第 17 図	竪穴建物跡 SB11・12 遺構図	21	第 62 図	掘立柱建物跡 SB53 遺構図 (2)	66
第 18 図	竪穴建物跡 SB13 遺構図	22	第 63 図	掘立柱建物跡 SB66、SA01・02 遺構図	67
第 19 図	竪穴建物跡 SB14 遺構図	23	第 64 図	溝 SD43・46 遺構図	68
第 20 図	竪穴建物跡 SB15・16 遺構図	24	第 65 図	土坑 SK20 遺構図	69
第 21 図	竪穴建物跡 SB17 遺構図	25	第 66 図	掘立柱建物跡 SB01 遺構図 (1)	71
第 22 図	竪穴建物跡 SB18 遺構図	26	第 67 図	掘立柱建物跡 SB01 遺構図 (2)	72
第 23 図	竪穴建物跡 SB19・21・22 遺構図 (1)	27	第 68 図	掘立柱建物跡 SB02 遺構図 (1)	73
第 24 図	竪穴建物跡 SB19・21・22 遺構図 (2)	28	第 69 図	掘立柱建物跡 SB02 遺構図 (2)	74
第 25 図	竪穴建物跡 SB20・36 遺構図	29	第 70 図	溝 SD03・04・08・11・12・13・14 遺構図	75
第 26 図	竪穴建物跡 SB23 遺構図	30	第 71 図	溝 SD23・30・33・39・42 遺構図	76
第 27 図	竪穴建物跡 SB23 地床・炉遺構図	31	第 72 図	井戸 SK14・土坑 SK05・08・09 遺構図	77
第 28 図	竪穴建物跡 SB24 遺構図	32	第 73 図	火葬施設? SX05 遺構図	78
第 29 図	竪穴建物跡 SB25・26 遺構図 (1)	33	第 74 図	SD01・SX12 遺構図	79
第 30 図	竪穴建物跡 SB25・26 遺構図 (2)	34	第 75 図	井戸 SK33・37 遺構図	81
第 31 図	竪穴建物跡 SB27 遺構図	35	第 76 図	井戸 SK58・65 遺構図	82
第 32 図	竪穴建物跡 SB28 遺構図	36	第 77 図	SX03 遺構図	84
第 33 図	竪穴建物跡 SB29 遺構図	37	第 78 図	古墳時代の土器	87
第 34 図	竪穴建物跡 SB30・37 遺構図	38	第 79 図	竪穴建物跡出土遺物 (1)	89
第 35 図	竪穴建物跡 SB37 遺構図	39	第 80 図	竪穴建物跡出土遺物 (2)	90
第 36 図	竪穴建物跡 SB31 遺構図	40	第 81 図	竪穴建物跡出土遺物 (3)	91
第 37 図	竪穴建物跡 SB32・33 遺構図 (1)	41	第 82 図	竪穴建物跡出土遺物 (4)	92
第 38 図	竪穴建物跡 SB32・33 遺構図 (2)	42	第 83 図	竪穴建物跡出土遺物 (5)	93
第 39 図	竪穴建物跡 SB34 遺構図	43	第 84 図	竪穴建物跡出土遺物 (6)	94
第 40 図	竪穴建物跡 SB35 遺構図	44	第 85 図	竪穴建物跡出土遺物 (7)	95
第 41 図	竪穴建物跡 SB40・44・45 遺構図	45	第 86 図	竪穴建物跡出土遺物 (8)	96
第 42 図	竪穴建物跡 SB41 遺構図	46	第 87 図	竪穴建物跡出土遺物 (9)	98
第 43 図	竪穴建物跡 SB42 遺構図	47	第 88 図	竪穴建物跡出土遺物 (10)	99
第 44 図	竪穴建物跡 SB46 遺構図	48	第 89 図	竪穴建物跡出土遺物 (11)	100
第 45 図	竪穴建物跡 SB47 遺構図	49	第 90 図	竪穴建物跡・溝 SD43 出土遺物	101

第 91 図	土坑出土遺物（1）	103	第 105 図	木製品（2）	120
第 92 図	土坑・竪穴建物跡出土遺物	104	第 106 図	金属製品・金属関連遺物	121
第 93 図	溝出土遺物（1）	106	第 107 図	下津新町遺跡における深掘調査地点	122
第 94 図	溝出土遺物（2）	107	第 108 図	地点 1（05B 区）における深掘層序断面	123
第 95 図	溝出土遺物（3）	108	第 109 図	地点 2（05C 区）における深掘層序断面	123
第 96 図	溝出土遺物（4）	110	第 110 図	下津新町遺跡周辺の等高線図	126
第 97 図	溝出土遺物（5）	111	第 111 図	明治 17 年作成地籍図からみた河道	133
第 98 図	柱穴等出土遺物	112	第 112 図	天保 12 年作成村絵図	134
第 99 図	土坑出土遺物（2）	113	第 113 図	古墳時代の遺構配置図	135
第 100 図	井戸出土遺物（1）	115	第 114 図	古代の遺構変遷図	137
第 101 図	井戸出土遺物（2）	116	第 115 図	中世～近世の遺構変遷図	140
第 102 図	溝・井戸出土遺物	117	第 116 図	下津新町遺跡周辺の旧河川と 自然堤防の想定	144
第 103 図	石製品	118	第 117 図	下津新町遺跡の範囲図	147
第 104 図	木製品（1）	119			

挿 表 目 次

第 1 表	地点 1（05B 区）における 放射性炭素年代測定結果	125	第 3 表	木製品の樹種一覧表	130
第 2 表	地点 2（05C 区）における 放射性炭素年代測定結果	125	第 4 表	木製品の樹種組成表	131

第1章 調査の概要

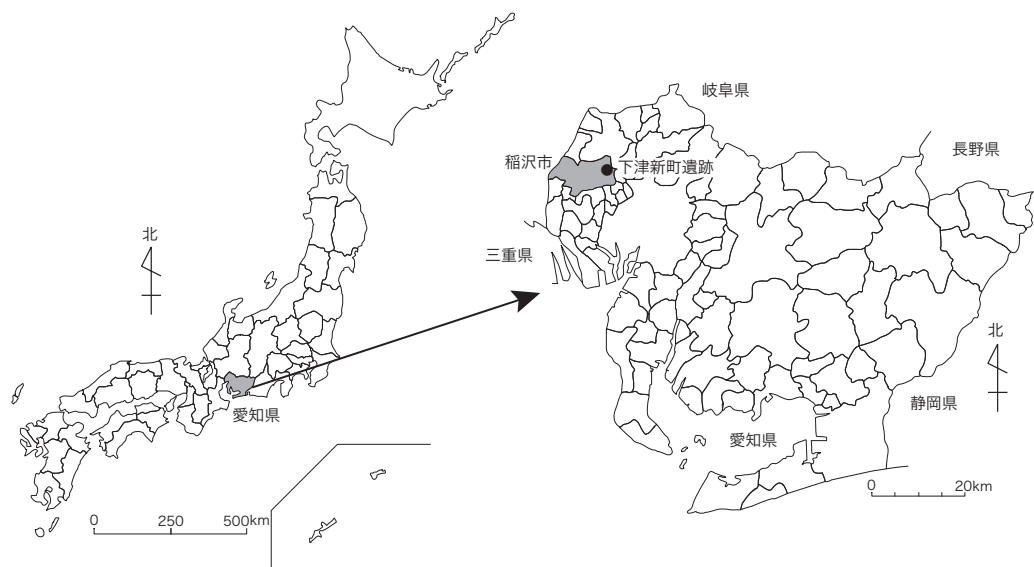
第1節 調査の経緯

下津新町（おりづしんまち）遺跡は、愛知県稲沢市下津新町に位置する遺跡である。下津新町遺跡は平成20年3月に県遺跡台帳に新規登録された遺跡であり、発掘調査を実施した平成17年度の時点では鎌倉街道周辺遺跡として周知されていたものである。鎌倉街道周辺遺跡（遺跡番号090001）は赤池東山町から下津下町まで広がる広大な範囲を持ち、これまでに稲沢市教育委員会によって下津城跡（鎌倉街道周辺遺跡に含まれる）の発掘調査などが実施され、中世を中心として多くの成果が明らかになっている。

愛知県建設部は、西春日井郡豊山町と稲沢市街地を結ぶ県道名古屋豊山稲沢線の建設を計画した。この計画路線の一部は鎌倉街道周辺遺跡の範囲に含まれており、遺跡の境界部の状況を確認するため、平成16年度に愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室は稲沢市下津新町143番地他に所在する道路建設予定地内に遺跡の有無確認調査を行った。調査の結果、旧岐阜街道の東側では遺跡は濃密に展開することが確認されたが、現宮田用水の西側では旧河川の堆積が確認されたに過ぎず、遺構や遺物が発見されなかった。このため、

旧岐阜街道の西側には遺跡が展開しないと判断された。

発掘調査は、愛知県建設部から委託を受け、平成17年4月から財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時）が実施した。調査開始当初は上記の経緯から旧岐阜街道の東側1678㎡が、実際に調査を開始してみると旧岐阜街道に接する部分でも古代の掘立柱建物跡などの遺構が展開していることが判明し、旧岐阜街道と現宮田用水の間の区域にも遺跡が展開することが十分に予測された。これを受け、本センター専門委員植崎彰一や稲沢市教育委員会北條献示らの助言を得て、県教委文化財保護室と調整を図り、平成17年9月2日に県文化財保護室野口哲也と県埋蔵文化財調査センター磯谷和明の立会のもとで範囲確認試掘調査を実施した。結果、旧岐阜街道の東側と同様の堆積が存在し、近世と中世の遺構面および中世遺構面で土坑1基と遺物約10点が確認された。中世遺構面の下層についても遺跡が存在する可能性が極めて高くなったため、平成17年10月1日から旧岐阜街道西側部分の道路建設予定地内600㎡の発掘調査を引き続き実施した。



第1図 遺跡位置図（1）

調査の概要



第2図 遺跡位置図 (2)



第3図 調査区位置図 (1) (S = 1 : 5000) 稲沢市都市計画図を改変した

調査の概要

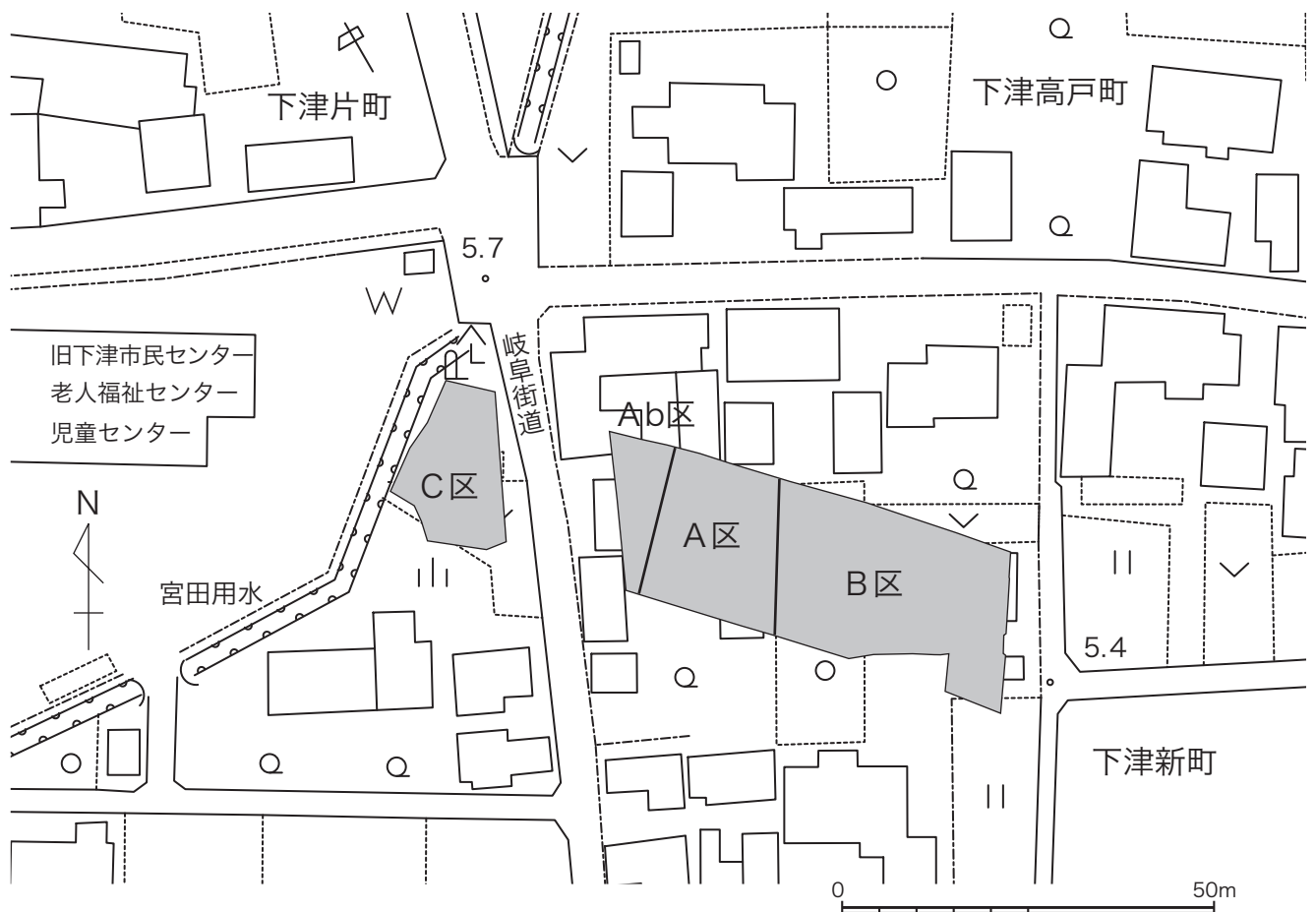
第2節 調査の方法と経過

発掘調査は愛知県埋蔵文化財センターが安西工業株式会社の支援を受け実施した。調査担当者は宮腰健司・鈴木正貴・加藤博紀である。安西工業のスタッフは下記のとおりである。

現場代理人：水野裕貴、調査補助員：久富正登、
測量技師：岩竹則和・儀間博、調査助手：山本雅徳・
吉岡宏・鈴木淳子、職長：林田玄、作業員：安藤
慶子・池田秀子・市橋久美子・岩室一栄・岩本三
希子・小田清子・粕谷和美・加藤尾羽・黒谷日佐
子・後藤純子・近藤洋子・今よし江・柴山香代子・
杉田千代子・杉本たみゑ・曾我雅彦・武田一二男・
中沢節子・西保・野垣豊子・羽田野明美・久田友子・
前芝忍・松永容子・山之内なつ子、土工：倉田正夫・
島哲司・中上登志夫・服部浩・松本親弘

調査区は便宜上、旧岐阜街道の東側をA区とB区、旧岐阜街道の西側をC区の3区に分けて実施し、B区→A区→Ab区（A区の道路際部分）→C区の順に行った。

調査方法は、はじめにバックホウにより黄褐色砂質土などの表土を除去し、室町時代の遺構面まで掘削した。実際にはその上位に江戸時代の遺物が確認されたが、少なくとも最初に調査したB区では江戸時代の顕著な遺構を発見できなかったため、上記のように判断した。遺構は最終的には、古墳時代、奈良時代、平安時代末期～鎌倉時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の各時期の遺構面が存在することが明らかになったが、現実的に遺跡全体をこの各遺構面で掘り分けることは難し



第4図 調査区位置図(2) (S = 1/1000)

調査の概要

く、結果的に鎌倉時代から江戸時代までの遺構を第1面、奈良時代から平安時代末期までの遺構を第2面、奈良時代の遺構を第3面、古墳時代から奈良時代の遺構を第4面として調査を実施した。したがって、この第1～4面の区分は時期的なまとまりを保証するものではなく、上位から順に検出・掘削した便宜上の遺構面にしか過ぎない。

5m グリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。部分的に包含層を人力で掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半裁掘削、溝や堅穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真は6×7リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を調査補助員久富正登が行った。

平成17年6月25日には現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明した。約90人の参加者があった。また、出土した遺物は現場で洗浄作業を実施し終え、その量は洗浄が終了した時点で27リットル入りコンテナで103箱に及ぶ。現地作業は平成18年11月1日に終了した。

整理・報告書作成作業は平成19年度に鈴木が担当して弥富市の愛知県埋蔵文化財センターで実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業を実施し、報告書に掲載する遺物については全て鈴木が実測図作成を行った。遺物実測図のトレースは多くの部分をテイケイトレード株式会社に、遺物の写真撮影は写真工房遊に、樹種同定分析をパレオラボ株式会社に、報告書編集作業（遺構図作成を含む）はアルケリサーチにそれぞれ作業を委託し行った。整理作業を終了した時点で、遺物は27リットル入りコンテナで75箱に整理され、愛知県に移管された。

平成20年度に報告書印刷作業を行い、印刷は新日本法規出版株式会社に委託した。

調査日誌抄

- ★3月29日（火）：安西工業と初打合せ。
- ★4月18日（月）：本調査前に状況確認の試掘を2ヶ所実施し遺構面などを確認。
- ★4月25日（金）：B区表土掘削を開始。下津詰所稼働。
- ★5月9日（月）：作業員による掘削作業を開始。壁トレンチ掘削。
- ★5月11日（木）：トレンチの状態から遺構の状況を確認。稲沢市教委北條猷示他1名来訪。
- ★5月16日（月）：B区1面遺構検出作業を開始。県サービスセンター監事視察。
- ★5月17日（火）：B区1面遺構掘削作業を開始。県教育長と稲沢市教委北條猷示来訪。
- ★5月20日（金）：大溝SD08の掘削を開始。
- ★5月27日（金）：B区1面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。
- ★5月30日（金）：B区1面遺構補足調査と2面に向け人力による包含層掘削作業。
- ★6月7日（火）：B区2面遺構検出作業を開始。
- ★6月8日（水）：B区2面遺構掘削作業を開始。
- ★6月9日（木）：県埋文調査センター都築暢也来訪。
- ★6月17日（金）：B区2面遺構清掃と写真撮影。
- ★6月20日（月）：B区2面遺構補足調査と3面に向け人力による包含層掘削作業。
- ★6月21日（火）：B区3面遺構検出作業を開始。安全パトロール実施。
- ★6月22日（水）：B区3面遺構掘削作業を開始。
- ★6月23日（木）：県埋文調査センター磯谷和明・江崎武来訪。
- ★6月24日（金）：B区3面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。現地説明会準備。
- ★6月25日（土）：地元向け現地説明会開催。約90名参加。
- ★6月27日（月）：B区3面遺構補足調査。
- ★6月28日（火）：中山春義来訪。
- ★7月1日（金）：城ヶ谷和広来訪。
- ★7月5日（火）：B区4面に向け重機による包含層掘削作業と遺構検出作業を開始。

- ★7月7日 (木): B区4面遺構掘削作業を開始。
- ★7月8日 (金): B区4面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。
- ★7月11日 (月): B区補足調査(土層断面図調査)を開始。
- ★7月14日 (金): B区補足調査(深掘り調査)を実施。鬼頭剛によりサンプル採取。井戸SK14断ち割り調査。埋め戻し作業も開始。
- ★7月19日 (火): A区表土掘削を開始。
- ★7月20日 (水): 壁トレンチ掘削とA区1面遺構検出作業を開始。
- ★7月22日 (金): A区1面遺構掘削作業を開始。
- ★7月28日 (木): A区1面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。
- ★7月29日 (金): A区1面遺構補足調査と2面に向け人力による包含層掘削作業。
- ★8月1日 (月): A区2面遺構検出作業を開始。稲沢市教委北條献示他1名来訪。
- ★8月2日 (火): A区2面遺構掘削作業を開始。
- ★8月3日 (水): 県埋文調査センター磯谷和明来訪。
- ★8月4日 (木): A区2面遺構清掃と写真撮影。
- ★8月5日 (金): A区2面遺構補足調査と3面に向け人力による包含層掘削作業。弥富町立桜小学校教諭3名来訪し取材。
- ★8月8日 (月): A区3面遺構検出作業を実施。
- ★8月9日 (火): A区3面遺構掘削作業を開始。
- ★8月11日 (木): A区3面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。
- ★8月12日 (金): A区3面遺構補足調査。
- ★8月16日 (火): A区4面に向け重機による包含層掘削作業を開始。堀木真美子によりSX05出土骨片サンプル採取。
- ★8月17日 (水): SB49炭化物土壌の篩別作業を実施するが、微細遺物などは確認されず。
- ★8月19日 (金): A区4面遺構掘削作業を開始。
- ★8月23日 (火): A区4面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。
- ★8月24日 (月): A区4面補足調査を開始。
- 稲沢市教委北條献示他2名来訪。
- ★8月25日 (火): 檜崎彰一の指導を受ける。
- ★8月26日 (金): A区補足調査(深掘り調査)を実施。鬼頭剛によりサンプル採取。井戸SK32・SK33・SK37断ち割り調査。県教委野口哲也来訪。
- ★8月29日 (月): 埋め戻し作業を開始。
- ★9月2日 (金): 旧岐阜街道西側で遺跡範囲確認調査を実施し、遺跡は広がることが判明した。
- ★9月6日 (火): 旧岐阜街道西側(C区)の調査を引き続き実施する方針を決定する。
- ★9月8日 (木): Ab区表土掘削。1面遺構検出と掘削作業を開始。
- ★9月9日 (金): Ab区1面遺構清掃と写真撮影。2面に向け人力による包含層掘削作業。
- ★9月12日 (月): Ab区2面遺構検出と掘削作業を開始。稲沢市教委北條献示来訪。
- ★9月13日 (火): Ab区2面遺構清掃と写真撮影。
- ★9月14日 (水): Ab区2面遺構補足調査と3面遺構検出・掘削・清掃・写真撮影を実施。
- ★9月15日 (木): Ab区4面に向け重機による包含層掘削と4面遺構検出・掘削作業を開始。
- ★9月16日 (金): A区4面遺構清掃と写真撮影。終了後埋め戻し作業。
- ★9月26日 (月): 詰所の移設作業。
- ★10月6日 (木): C区表土掘削を開始。
- ★10月12日 (水): 壁トレンチ掘削とC区1面遺構検出作業を開始。
- ★10月13日 (木): C区1面遺構掘削作業を開始。
- ★10月19日 (水): C区1面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。鬼頭剛によりサンプル採取。
- ★10月20日 (木): C区2面遺構検出と掘削作業を開始。鬼頭剛によりサンプル採取。
- ★10月24日 (月): 稲沢市教委北條献示他1名来訪。遺跡名称変更などの問題提起がある。
- ★10月25日 (火): C区2面遺構清掃と写真撮影および補足調査。
- ★10月26日 (水): C区3面に向け重機による

調査の概要

包含層掘削作業。

- ★ 10月28日（金）：C区3面遺構検出・掘削作業。
- ★ 10月31日（月）：C区3面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。井戸SK58サンプル採取。
- ★ 11月1日（火）：C区深掘り調査、鬼頭剛によりサンプル採取、井戸SK58・SK65断ち

割り調査など実施。終了後埋め戻し作業。県埋文調査センター都築暢也来訪。

- ★ 11月11日（金）：埋め戻し作業が終了。
- ★ 11月30日（水）：現場の全ての撤去作業が終了。
- ★ 12月16日（金）：センターにて成果品納品。調査の反省会を開催。

第3節 地理的・歴史的環境

遺跡が所在する稲沢市は愛知県北西部に所在し、広大な濃尾平野のほぼ中央に位置している。市域には三宅川や日光川などの北東部から南西部にかけて流れる河川が多く存在し、河川に伴う自然堤防と後背湿地によって形成されている。鎌倉街道周辺遺跡は青木川右岸のやや規模が大きい自然堤防上に立地しており、地表面の標高は6～7m前後を測る。鎌倉街道周辺遺跡から分離して設定された下津新町遺跡は、既に滅失した旧河川に伴う右岸自然堤防上に所在している。この河川は現青木川が下津蛇池町から分派し、現宮田用水を経由して下津新町付近で西に流れ大塚方面に向かうものであり、西接する下津北山遺跡で15世紀には埋没した流路として検出されたものと同一と思われる。

下津新町遺跡の周辺には、古代～中世の時期を中心に多くの遺跡が分布している。最も古い時期では、縄文時代後期末葉には下津城下層遺跡で遺物が出土し人々の営みの存在が確認され、弥生時

代には伝法寺野田遺跡の水田跡や飯守神遺跡と元屋敷遺跡の集落跡などが明らかになっている。古墳時代でも伝法寺本郷遺跡などで水田跡が確認され、後背湿地の開発が進んでいたことが判明した。古代には青木川などの河川がもたらす堆積による自然堤防の微高地が発達し、尾張国府跡、北丹波・東流遺跡、中之郷北遺跡、権現山遺跡などがある。これらは、尾張国府を除くと集落の展開は部分的で、当地域が活発に開発されるのは中世を待たなければならない。中世には、鎌倉街道周辺遺跡をはじめ、下津北山遺跡、島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡など多くの遺跡が展開する。記録の上では、鎌倉街道が整備されるとともに下津五日市などの町場が開発され、14世紀末には曹洞宗の巨刹正眼寺が創建され街道沿いに多くの末寺も建てられたと伝えられる。また、15世紀後葉まで尾張守護所が下津に存在したとされ、その段階では尾張の中心地であったといえる。近世以降は、岐阜街道が設置され下津下町や下津片町に町場が形成された。

（鈴木正貴）

第2章 遺 構

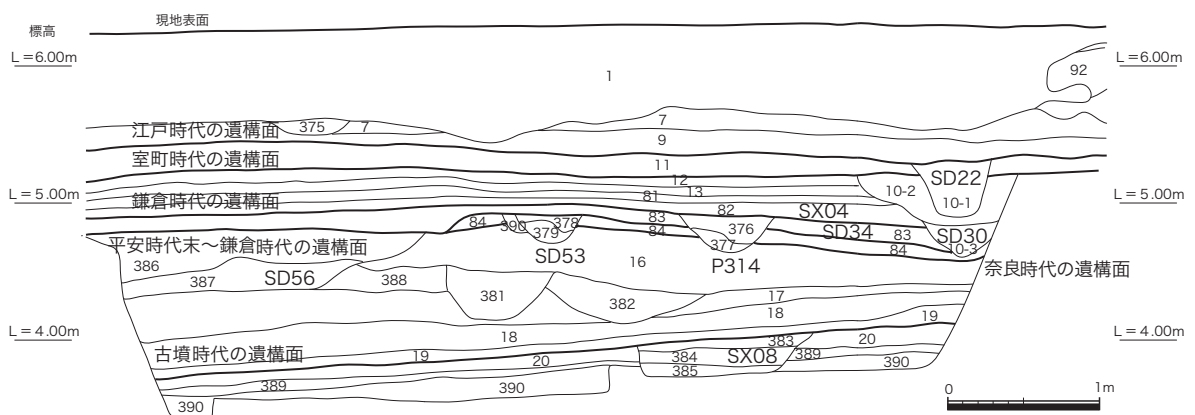
第1節 基本層序と遺構の概要

下津新町遺跡における基本的な層序は、A b 区北壁土層断面図（第6図）でみると、第1層：黄褐色砂質土（第6図1層）、第2層：鈍い黄橙色砂質土（第6図7,9層）、第3層：鈍い黄橙色砂質土（第6図11層）、第4層：褐色砂質土と灰黄褐色砂質土のブロック（第6図13層）、第5層：鈍い黄褐色砂質シルト（第6図83層）、第6層：灰黄褐色砂質シルトと鈍い黄橙色砂質土のブロック（第6図84層）、第7層：粘性の弱い鈍い黄橙色砂質シルト（第6図16層）、第8層：鈍い黄褐色砂質シルトと黄褐色砂質土のブロック（第6図17層）、第9層：粘性の強い鈍い黄褐色砂質シルト（第6図18層）、第10層：鈍い黄褐色粘質土と黄褐色粘質土のブロック（第6図19層）、第11層：黄灰色粘質シルト（第6図20層）、第12層：鈍い黄色粘土と褐色砂質土のブロック（第6図389層）、第13層：灰黄褐色粘土（第6図390層）の順に堆積している。上記の堆積層はその他の地点でも概ねが確認されるが、全く同一となってい

るわけではなく多少の異同が認められる。

このうち、第1層は表土で現代の盛土層、第3層の上面が江戸時代の遺構面である。第4層は斑土状の整地層と思われ、その上面が室町時代の遺構面と考えられる。第5層の上面が鎌倉時代の遺構面、第6層の上面が平安時代末期から鎌倉時代初期の遺構面と推測される。第7層から第10層までは大半は河川堆積物と思われるが、第7層の上面が奈良時代の遺構面となっていて、そこから堅穴建物跡が重複して掘削されたと理解される。第11層の上面が古墳時代の遺構面と考えられ、この面は西に向かうにつれて下がる傾斜面となっている。概ね第7層以下はA区とB区の境界部分が最も高くなっている印象がある。

ところで、第13層よりも下位の堆積については、第14層：黄灰色粘土、第15層：黒色粘土、第16層：青灰色シルト、第17層：灰色砂の順で堆積しており、第16層および第17層は1m以上堆積していてそこに至ると湧水が著しい。周辺の



05Ab区北壁セクション土層説明

第1層 10YR 5/6 黄褐色砂質土
第7層 10YR 6/3 鈍い黄褐色砂質土
第9層 10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質土
第11層 10YR 5/4 鈍い黄褐色砂質土
第12層 10YR 5/3 鈍い黄褐色砂質土
第13層 10YR 4/4 褐色砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土ブロック
第16層 10YR 7/2 鈍い黄褐色砂質シルト (粘性弱)
第17層 10YR 7/3 鈍い黄褐色砂質シルト + 10YR 5/6 黄褐色砂質土ブロック

第18層 10YR 7/4 鈍い黄褐色砂質シルト (粘性強)
第19層 10YR 7/4 鈍い黄褐色粘質土 + 10YR 5/6 黄褐色粘質土 (土器片混)
第20層 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルト
第81層 10YR 5/3 鈍い黄褐色砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土ブロック
第82層 10YR 5/2 灰黄褐色砂質土
第83層 10YR 5/4 鈍い黄褐色砂質シルト
第84層 10YR 6/2 灰黄褐色砂質シルト + 10YR 7/2 鈍い黄褐色砂質土ブロック

第6図 基本土層断面図（05Ab 区北壁）

遺 構

他の遺跡の成果からみて、第 15 層黒色粘土層が弥生時代相当の堆積層と考えられるが、本遺跡では該期の遺構や遺物は確認されなかった。

今回の調査で検出された遺構は全部で 550 基存在する。これらの遺構は上記で説明した各遺構面から掘削されたものと思われるが、実際の調査で

は、調査精度に問題があるためか、厳密に検出された遺構と遺構面が対応できる事例は限定されているのが現状である。本来は遺構面ごとに記述を進めるべきであろうが、ここでは大きく古墳時代・古代・中世・近世の 4 時期に区分して記述していきたい。

第 2 節 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には土坑や落ち込み、土手状遺構などが存在する。標高 4.0m 前後の黄灰色粘質シルトまたは黒色粘土の上面で遺構が検出され、その上位は厚い黄褐色砂質土などの堆積で覆われていた。A 区西部から C 区東部の間に、南北方向に伸びる流路(谷)状の緩やかな落ち込みが存在し、その肩部分に遺構が展開するようである。この緩やかな落ち込みは確認できた範囲で標高 3.2m まで落ち込むことが分かっており、おそらく現岐阜街道部分が最深部になると思われる。遺構の時期は概ね古墳時代前期(廻間Ⅱ式期～松河戸Ⅰ式期)に属する。では、個別に遺構を紹介していく。

(1) 土坑

S X 07 (第 7 図) 直径約 0.3m の円形土坑で非常に浅く、灰黄褐色粘質土の埋土中に S 字状口縁甕が横位に埋設されていた。口縁部が北に向けられていた。

(2) 落ち込み

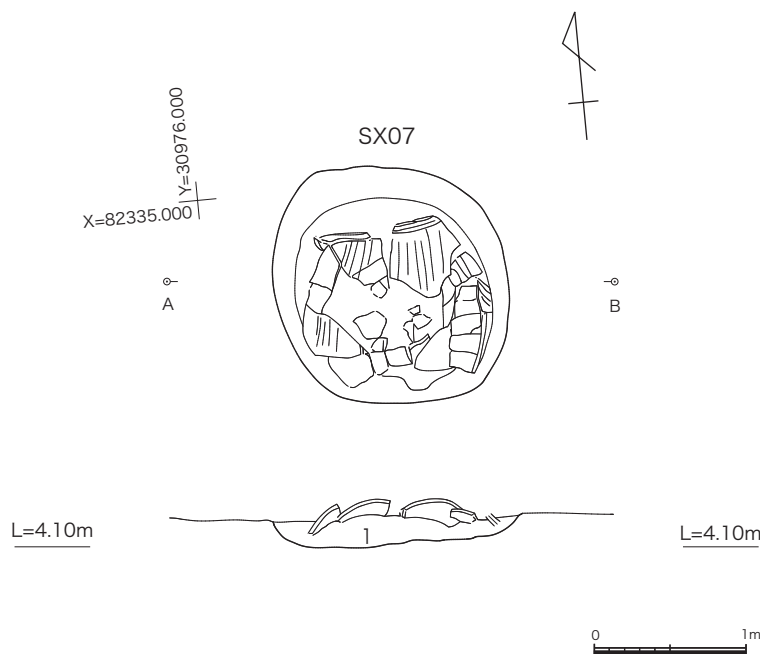
S X 08 (第 8 図) A 区北部で検出された浅い落ち込みで、北側は調査区外に拡がる。落ち込みの中央で丸底壺などの古式土師器が出土した。

S X 09 (第 8 図) A 区で検出された不定形の浅い落ち込みで、旧流路に向かって緩やかに傾斜する斜面に構築されていた。S 字状口縁甕や高坏などの土師器がまとまって出土した。

S X 10 (第 8 図) S X 09 に近接して検出された小型の落ち込みで、屈折脚高坏などの土師器が出土した。

(3) 溝

S D 64・S D 65 C 区西部に所在する南北方向に平行して走る溝である。S D 64 は幅約 60cm、S D 65 は幅約 80cm で、深さは共に 10cm 強を測る。A 区西部から C 区東部の間にある南北方向に伸びる谷状の落ち込みの西肩部分に構築されており、谷状の落ち込みと西に拡がる微高地を画する遺構の可能性が考えられる。出土遺物はほとんど



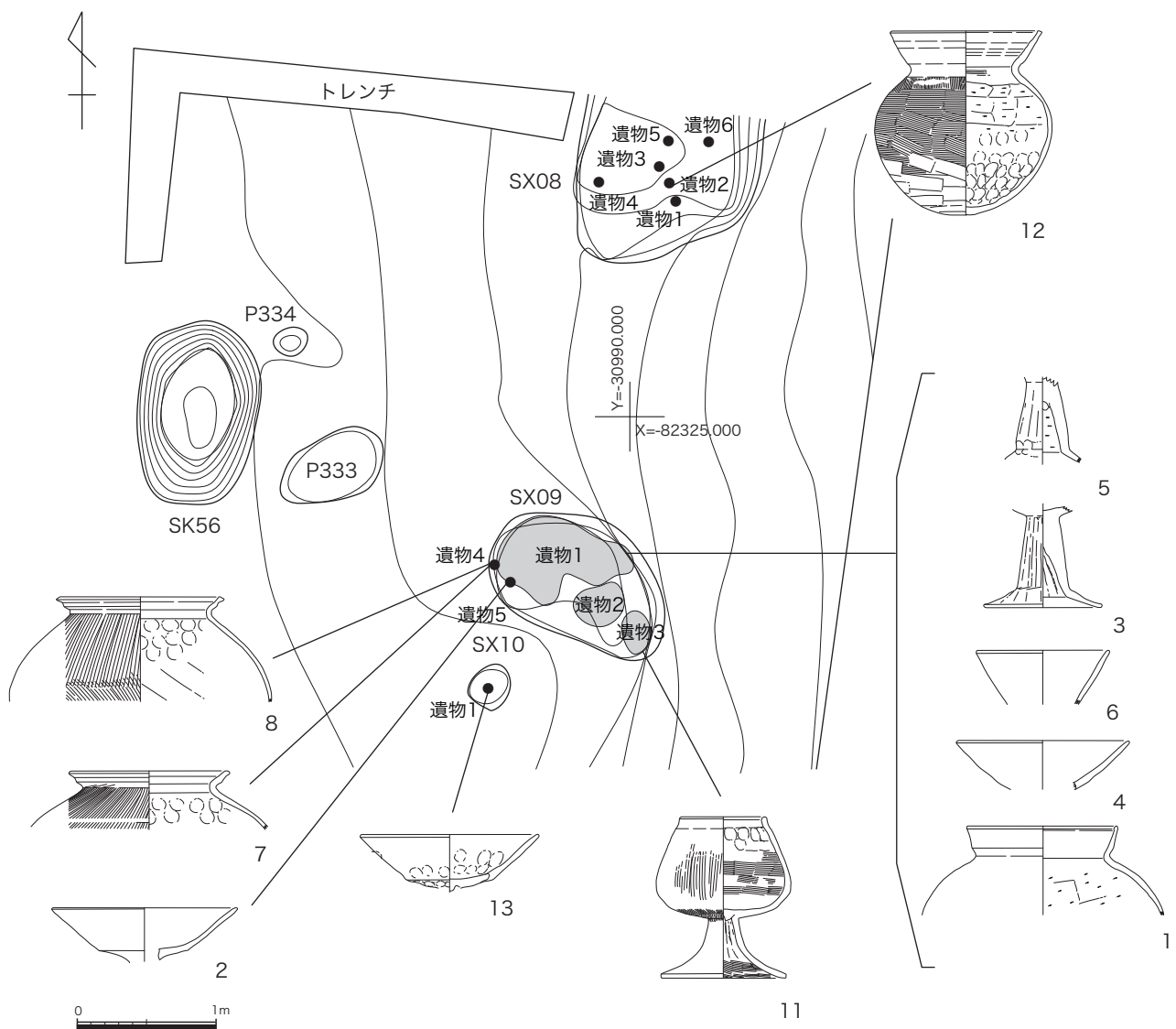
第 7 図 S X 07 遺物出土状態図 (S = 1/50)

認められないが、検出された土層断面からみて古墳時代前期と考えられる。

(4) 土手状遺構とその関連遺構群 (第9図)

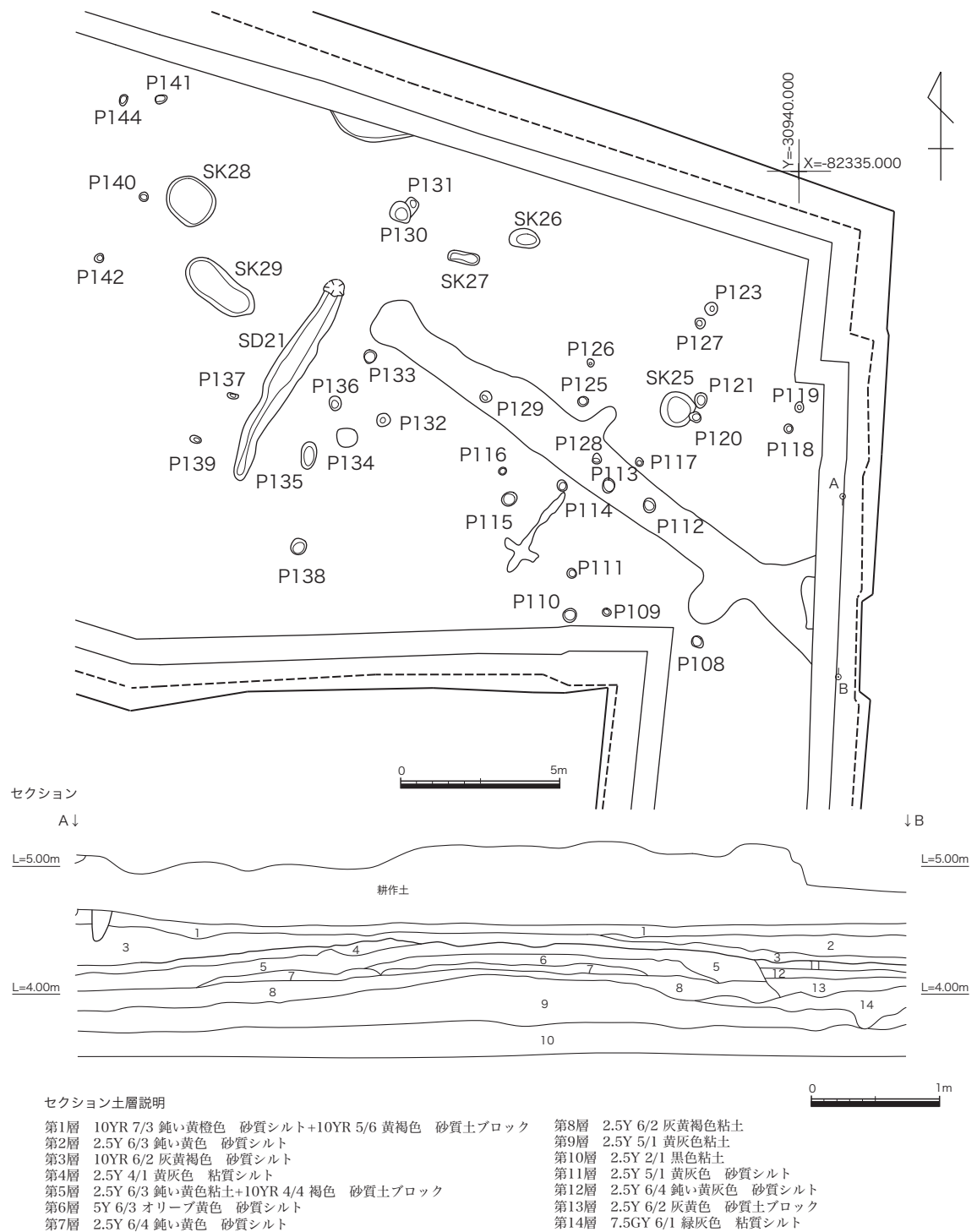
B区中央部から東部にかけて、帯状に広がる土手状の高まりが検出された。黄灰色粘土層上にオリブ黄色砂質シルトや鈍い黄色砂質シルトを約0.1m盛り上げて造られたものである。幅は約

1.4mを測り、北西から南東に伸びる形で検出され、3ヶ所の張り出し部が認められた。これに直交する方位の溝SD 21や平面形が十字形となる小規模な高まりが併存することから、水田状遺構の可能性が考えられるが、これ以上決め手となる状況が確認されなかった。時期は検出された面からみて古墳時代と推測される。



第8図 SX 08・09・10 遺物出土状態図 (S = 1/50、遺物は S = 1/6)

遺 構



第9図 土手状遺構とその周辺の遺構図

第3節 古代の遺構

古代（古墳時代後期～平安時代）の遺構には竪穴建物跡 50 棟・掘立柱建物跡 3 棟・溝・土坑などが存在する。標高 4.7m 前後の黄橙色砂質シルトや黄褐色シルトの上面で遺構が検出され、遺構の密度が高く遺構の切り合いは激しい状態であった。そのため遺構検出は難しく上位は厚い黄褐色砂質土などの堆積で覆われていた。この段階の遺構検出面（地表面）は東が高く西が低い非常に緩やかな斜面となっていて、古代の中でも上位の遺構検出面のレベルは B 区東部で標高約 5.00m、A b 区で標高約 4.80m、C 区西部で標高約 4.60m となって傾斜している。

古代の遺構は検出状況や出土遺物から概ね 8 段階に区分して整理することができた（第 5 章第 2 節参照）。ここではこれに基づいて、個別に遺構を紹介していく。

（1）竪穴建物跡

竪穴建物跡と思われる遺構は全部で 50 棟検出された。これらは遺構間の重複が激しく全体の形状が不明なものも多く含まれているが、ほぼ全て隅丸方形または隅丸長方形の平面プランを持つものである。多くの場合、掘形ににぶい黄褐色砂質シルトで整地した床面（貼床）を持っており、その上位には地山と同様な砂質シルト（覆土）が埋積している。したがって、平面での遺構検出は難しい場合があり、実際の調査では覆土から中世の遺物が多く混入したり、平面プランを誤ることもあった。S B 03（第 10 図） B 区北東部に所在し S B 04 と S B 05 を切る。東辺が調査区外に拡がり形状は特定できないが、平面形は 4.07m × 3.71m 以上の隅丸長方形で深さは 11cm を測る。黄褐色砂質シルトを整地して床面にし、四隅に支柱穴がある。北面では外側に掘り込まれたカマド状遺構が発見されたが、そこに焼土は確認されなかった。高蔵寺 2 号窯式期に属する須恵器が出土するが、切り合い関係などからみて時期は古代 7 段階（第 5 章第 2 節参照：以下同様）と考えられる。

S B 04（第 11 図） B 区東端部にありかつ S B 03 や攪乱に切られるので、詳細な形状は不明である。支柱穴らしきピットが 2 基確認された。出土須恵器からみて古代 6 段階と思われる。

S B 05（第 12 図） B 区北東部に存在し S B 03 に切れ、西隅部のみ確認された。下位には S B 19・S B 23 などが拡がっている。支柱穴が 1 基検出されたが、その他の施設は不明である。時期は古代 6 段階に比定される。

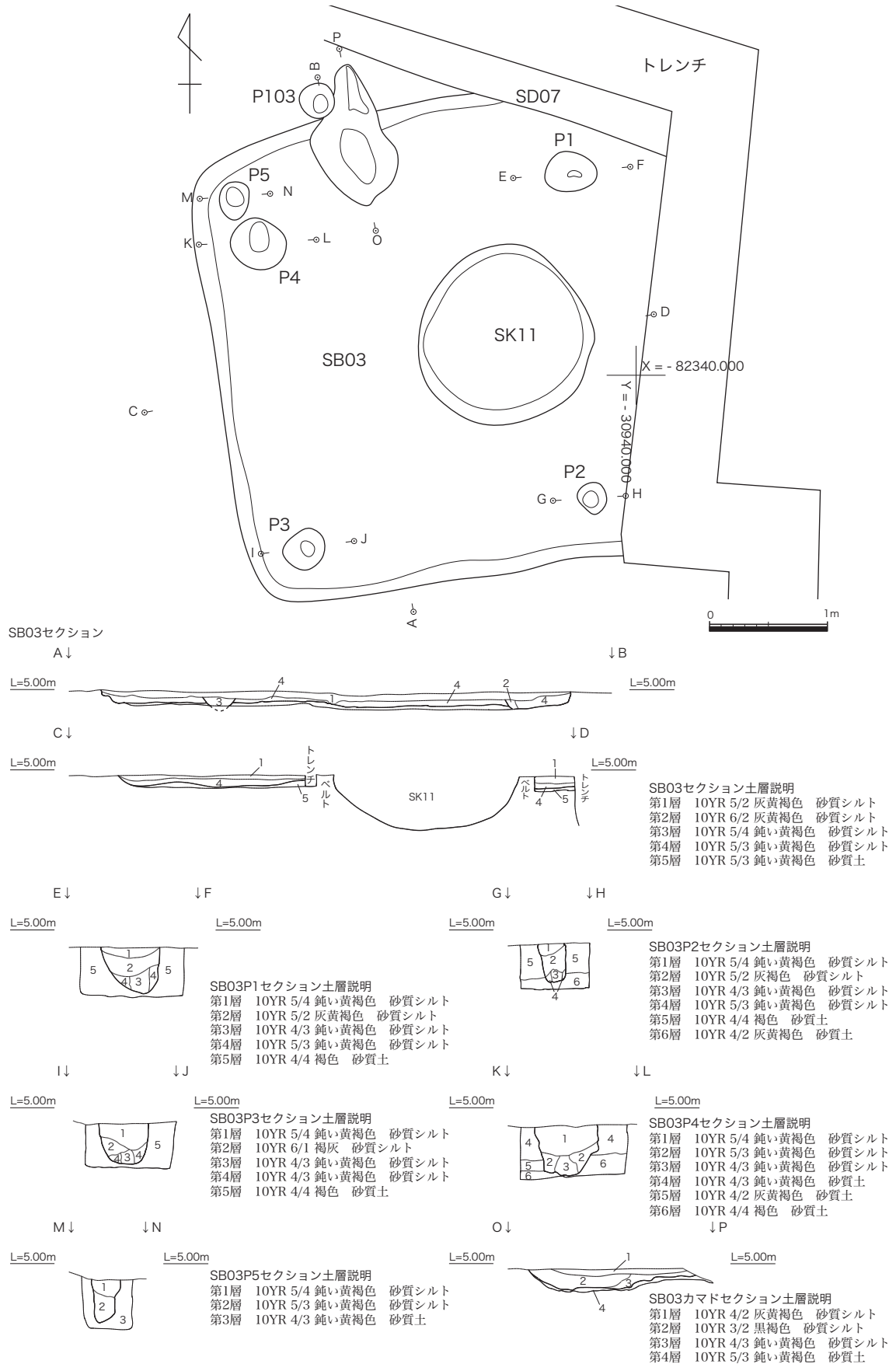
S B 06（第 13 図） B 区北部で検出された建物跡で S D 13 に切れ、下位に S B 07・S B 23・S B 24 などがある。平面形は 5.55m × 5.50m の隅丸方形で深さは 23cm を測る。にぶい黄褐色砂質土で床面が整地され、四隅に支柱穴がある。北面には部分的に周溝が確認されたが、カマドなどの火処遺構は検出されなかった。9 世紀前半の遺物も含まれ、古代 7 段階に位置づけられる。

S B 07（第 14 図） B 区北部に位置し S B 06 に切れ、下位には S B 24 が展開する。南西隅のみが確認され大部分は調査区外に拡がる。本来存在すると思われる南西隅に支柱穴は検出されず、黒褐色砂質シルトを整地層と西辺の周溝のみが確認された。出土須恵器からみて古代 6 段階の遺構と考えられる。

S B 08（第 15 図） B 区北西部で南東辺のみを検出した建物跡で大半は調査区外に展開する。支柱穴などの建物内施設は全く不明。S B 09 を切るので、古代 8 段階もしくはそれ以降に位置づけられよう。

S B 09（第 15 図） B 区北西部に所在し S B 08 に切られる竪穴建物跡で、下位に S B 28 が存在する。北辺と西辺は不明であるが、平面形は 6.22m 以上 × 4.56m 以上の隅丸長方形で深さは 22cm を測る。灰黄褐色砂質シルトを整地して床面にし、周溝 S D 01 と S D 02 を巡らせている。支柱穴らしきピットが多く存在するが、その中でも P 1 ～ 4 がほぼ方形に配置されている。当初方形の竪穴

遺構



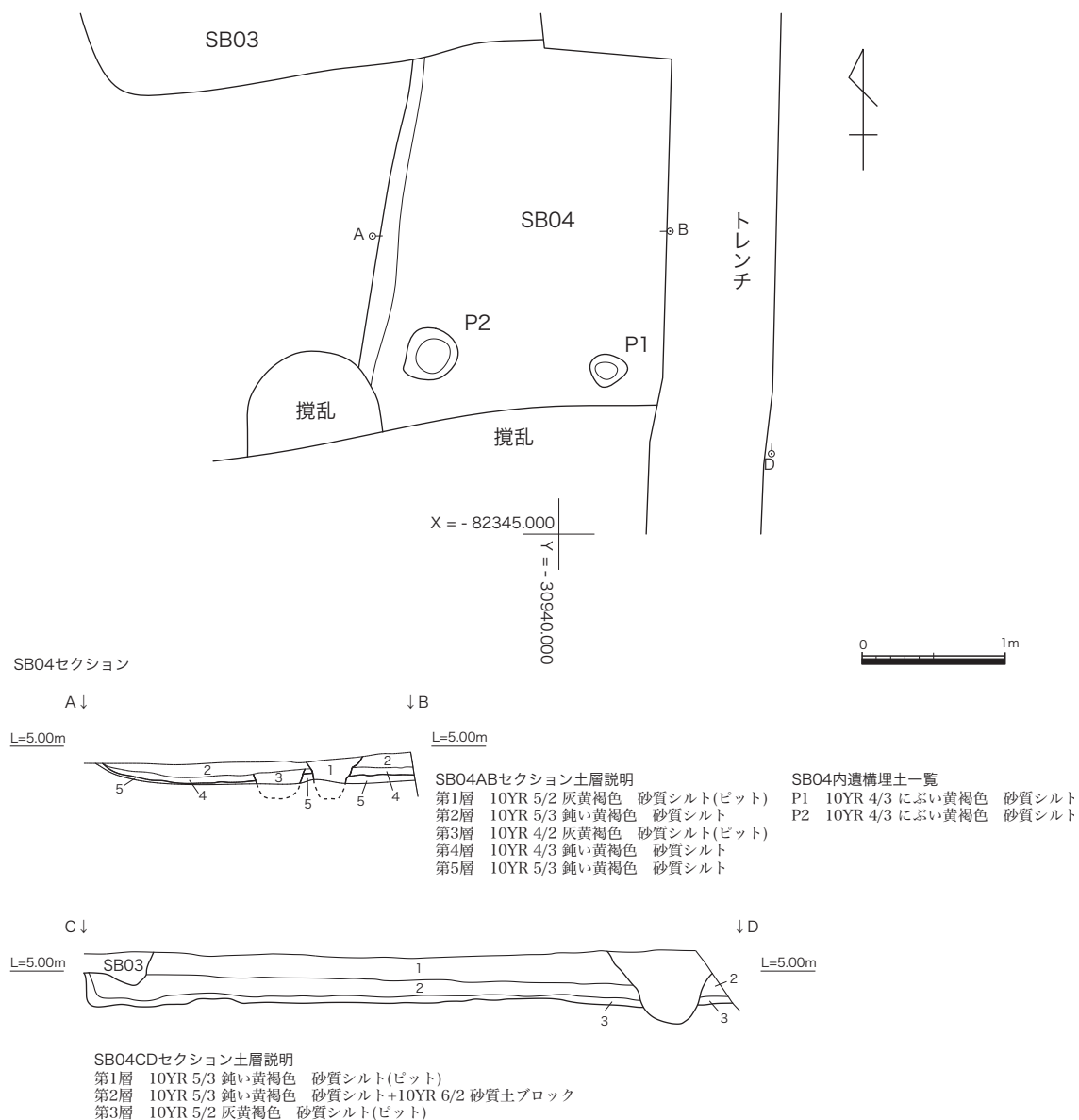
第 10 図 竪穴建物跡 S B 03 遺構図 (S=1:50)

建物跡であったのが北側に拡張された可能性も考えられる。火処遺構は確認されなかった。出土遺物からみて古代8段階に比定される。

S B 10 (第 16 図) B 区中央部にある竪穴建物跡で、掘立柱建物跡 S B 02 に切られ S B 11 など切を切る。平面形は 4.54m × 4.40m の隅丸方形で深さは 23cm を測る。南西隅を除く隅角部に支柱穴が検出されたが、火処遺構は確認できなかった。須恵器は東山 15 号窯式期から折戸 10 号窯式期に属するものが出土しており、遺構の時期は古代 7 段階と考えられる。

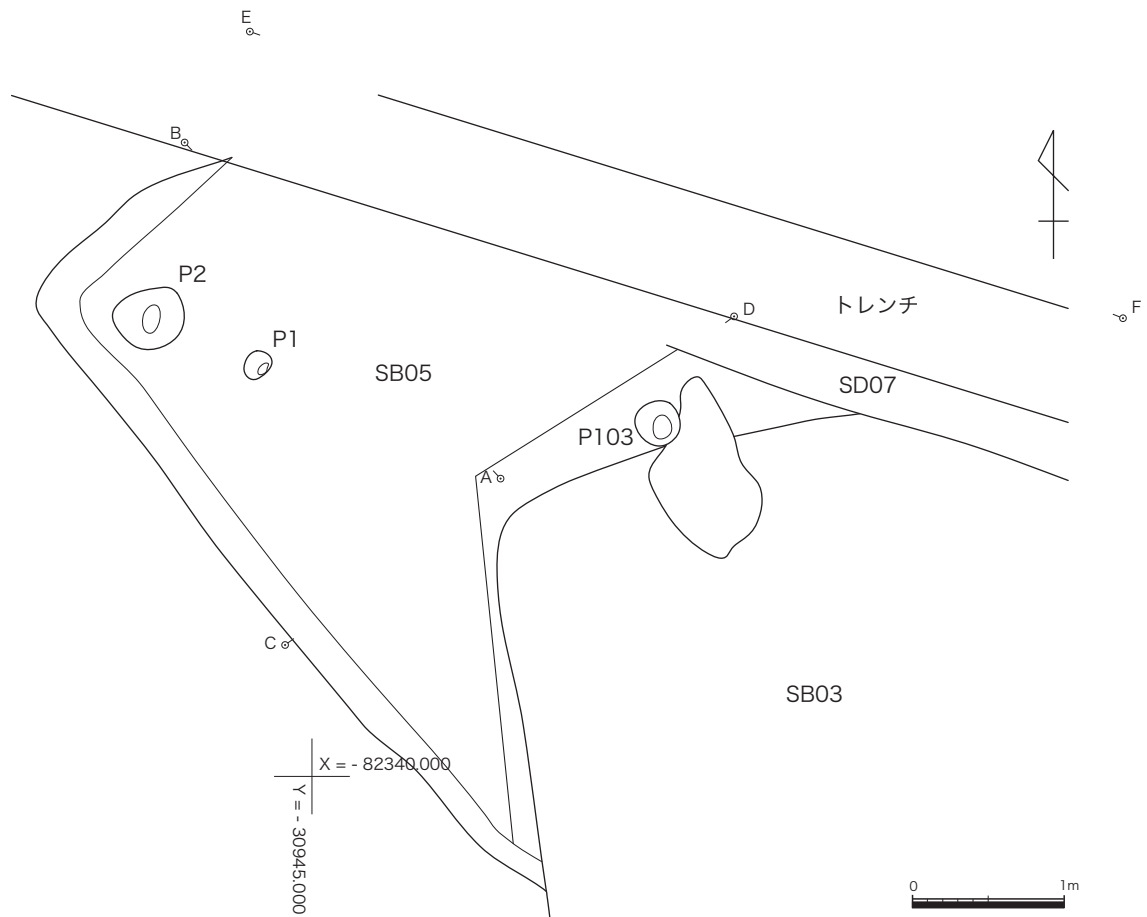
S B 11 (第 17 図) B 区南部に存在する竪穴建物跡で、S B 10 に切られ S B 12 を切っている。平面形は 4.10m × 4.00m の隅丸方形で深さは 26cm を測る。北隅を除く隅角部に支柱穴が検出されるが、火処遺構は確認されなかった。黒笹 90 号窯式期の瓶類が混入するが、遺構の時期は古代 6 段階と考えられる。

S B 12 (第 17 図) B 区南部にあり S B 10 と S B 11 に切られ下位で S B 25 が検出された竪穴建物跡。平面形は 5.50m × 4.62m の隅丸方形で深さは 20cm を測る。南辺の隅角部に支柱穴が

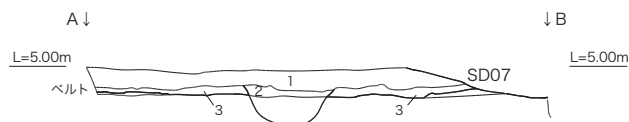


第 11 図 竪穴建物跡 S B 04 遺構図 (S=1:50)

遺構



SB05セクション

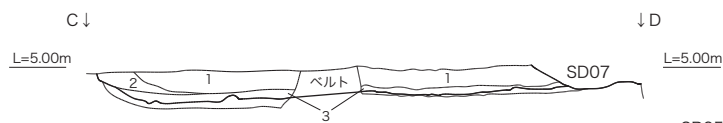


SB05内遺構埋土一覧

P1 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
P2 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト

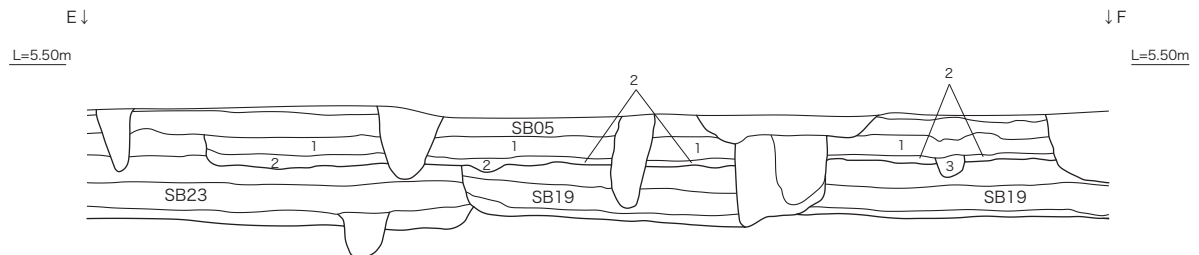
SB05ABセクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト



SB05CDセクション土層説明

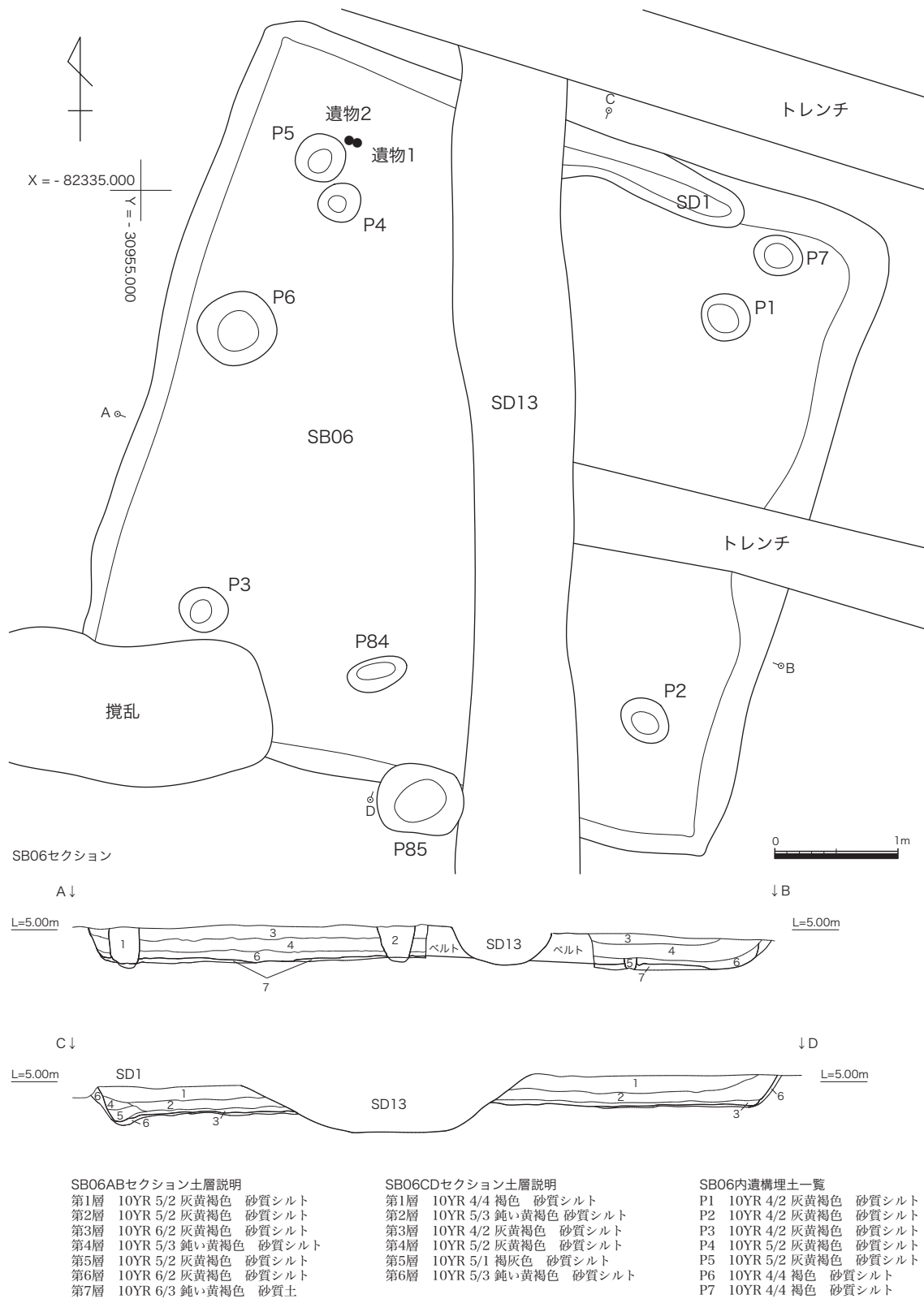
第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト



SB05EFセクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト

第 12 図 竪穴建物跡 S B 05 遺構図 (S=1:50)



第 13 図 竪穴建物跡 S B 06 遺構図 (S=1:50)

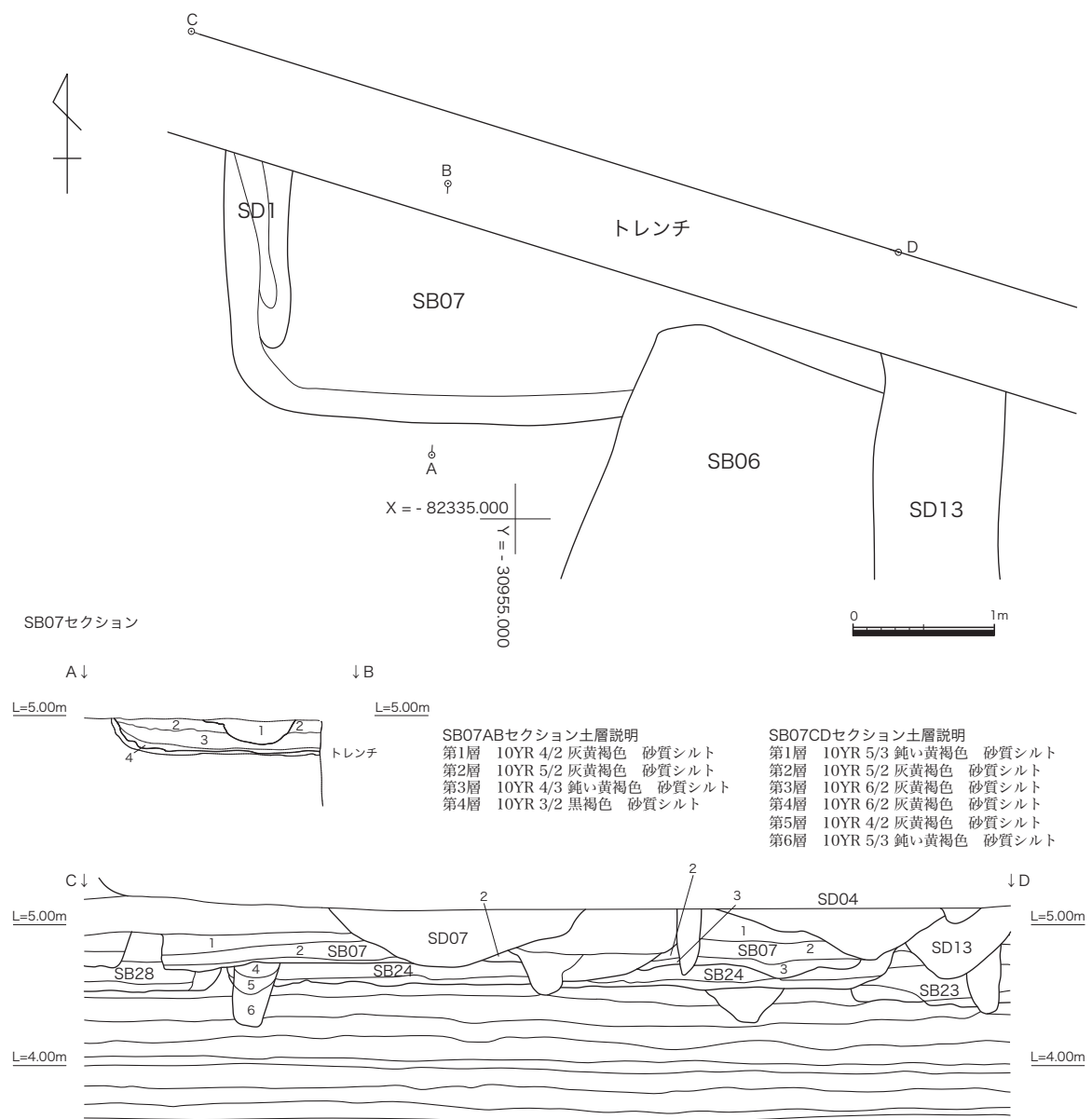
遺 構

2個ずつ検出され建て替えが行われたと思われる。火処遺構や周溝は確認されなかった。古代6段階に属すると考えられる。

SB 13 (第 18 図) B区中央部に位置する竪穴建物跡。西辺がSD 13に切られてプランは不明な点があるが、4.85m 以上× 3.95m の隅丸長方形である。東辺に支柱穴が2個確認されたが、火処遺構や周溝は発見されなかった。出土遺物には尾張型山茶碗などを含むが、おそらく時期は古代7段階と比定される。

SB 14 (第 19 図) B区中央部で南東端部が検出された竪穴建物跡である。SB 05・SB 13に切られ、下位にSB 20・SB 35などが拡がる。東辺に支柱穴2個と南辺の周溝が確認されたが、火処遺構は検出できなかった。遺構の重複関係からみて、古代6段階と思われる。

SB 15・SB 16 (第 20 図) B区西部からA区東部にかけて竪穴建物状に検出された遺構で、SB 45などに切られる形で確認された。各々2個の柱穴以外の内部施設は不明である。両者とも



第 14 図 竪穴建物跡 SB 07 遺構図 (S=1:50)



19

遺 構

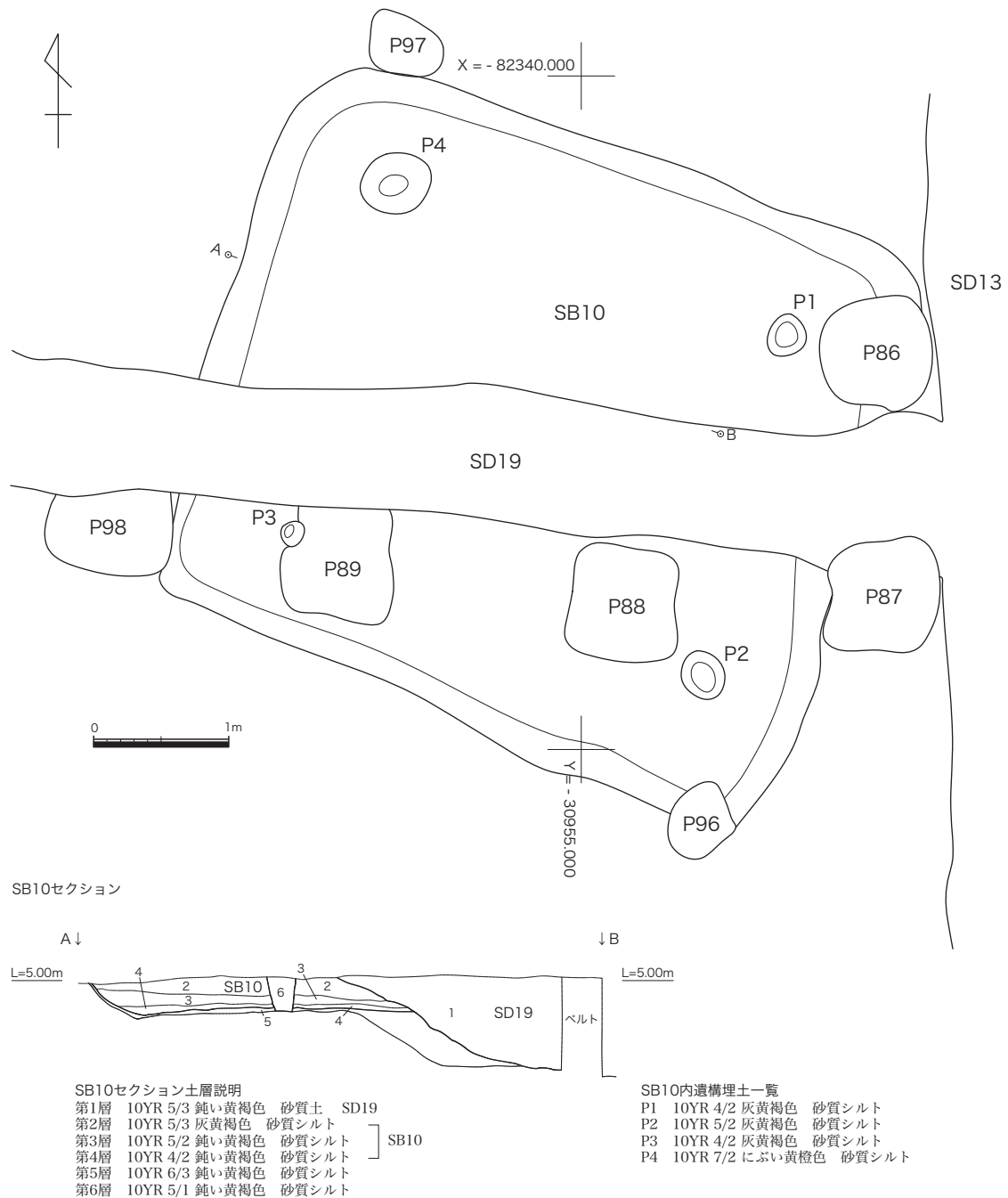
出土遺物は大半が中世に属するので、現状では古代の竪穴建物跡としての評価は難しい。

S B 17 (第 21 図) B 区北西部に所在する竪穴建物跡で、S D 12 などに切られ全形は不明である。南辺の隅角部 2 ヶ所で支柱穴が検出されたが、火処遺構や周溝は確認されなかった。時期は不明だが、おそらく古代 7 段階と思われる。

S B 18 (第 22 図) B 区南西部にある竪穴建物跡で、S D 08 に大きく切られ東西両端部のみが

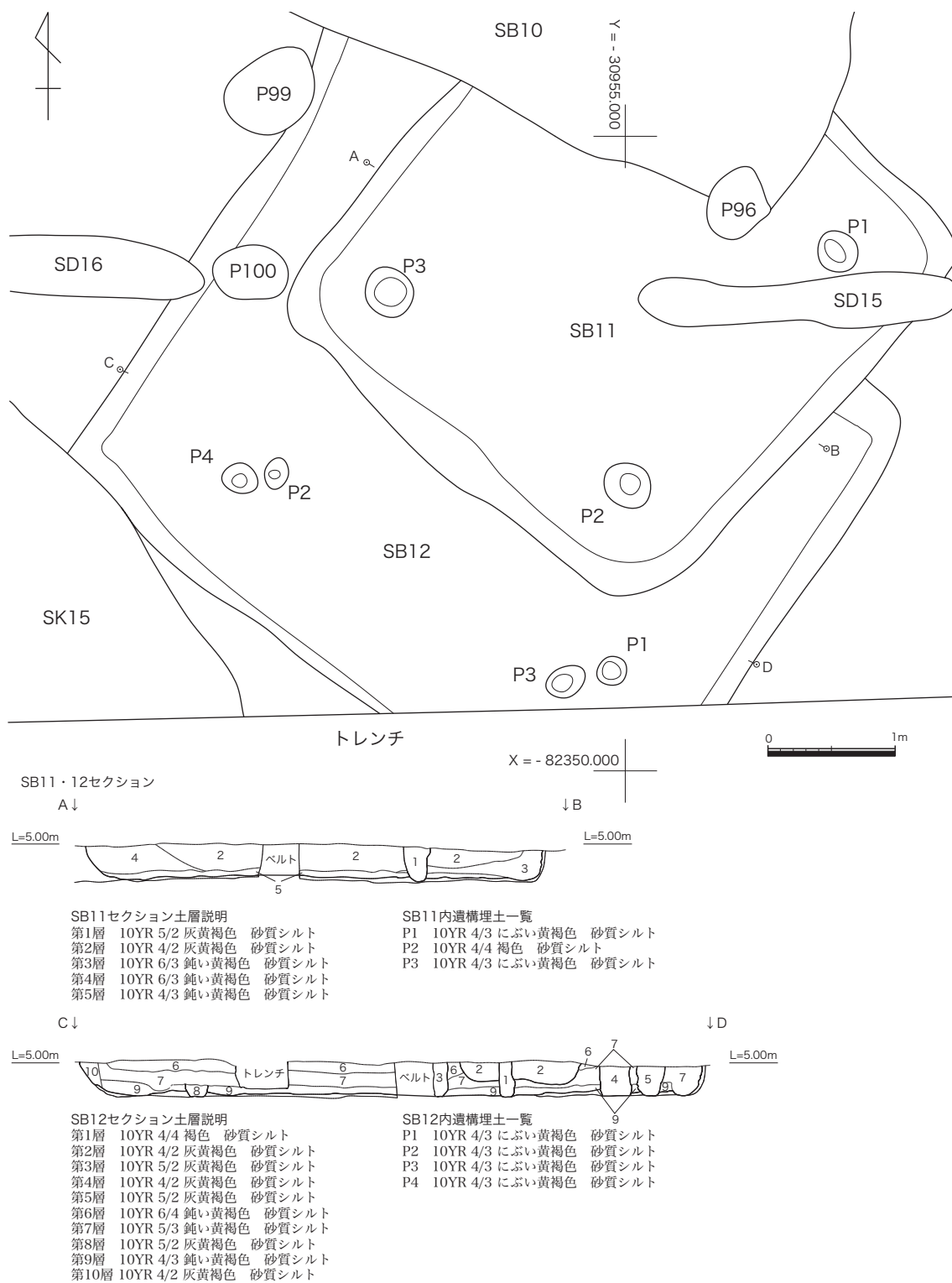
確認された。両端部が正しく同一の遺構であるかについては確実ではない。出土遺物は大半が中世に属するので、現状では古代の竪穴建物跡としては評価できない。

S B 19 (第 23・24 図) B 区北東部に存在する竪穴建物跡で、S B 05 などに切られ、S B 21・S B 22 などを切る。北辺と東辺は調査区外に拡がるが、平面形は 6.18m × 4.20m 以上の隅丸方形で深さは 23cm を測る。支柱穴らしきピット 2



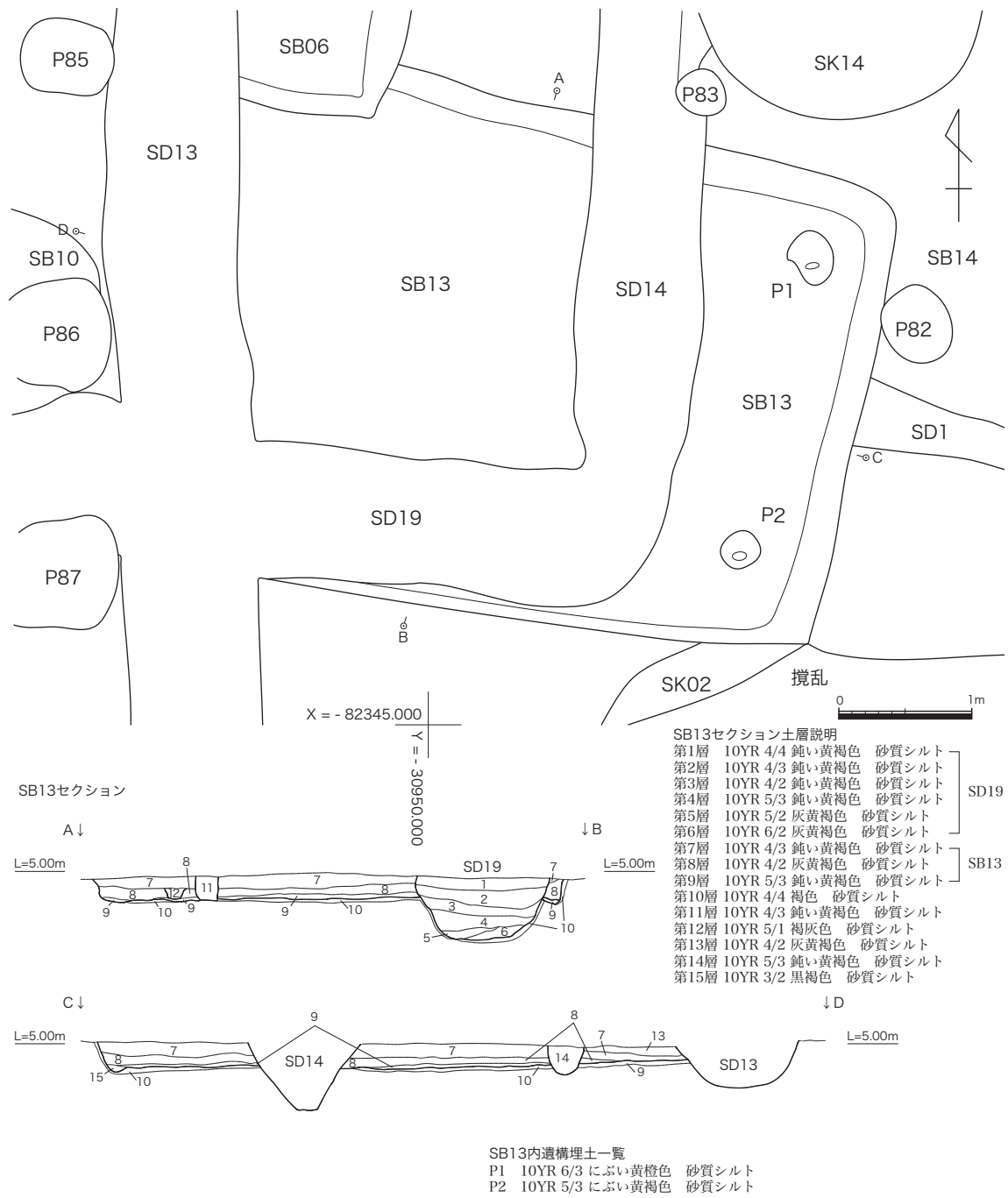
基と土坑が存在し、南部に地床炉と思われる焼土と炭化物の広がりが確認された。出土須恵器からみて古代5段階に位置づけられる。

S B 20 (第 25 図) B 区中央部で検出された竪穴建物跡で南側は攪乱により滅失していた。平面形は 5.16m × 2.26m 以上の隅丸方形で、深さは

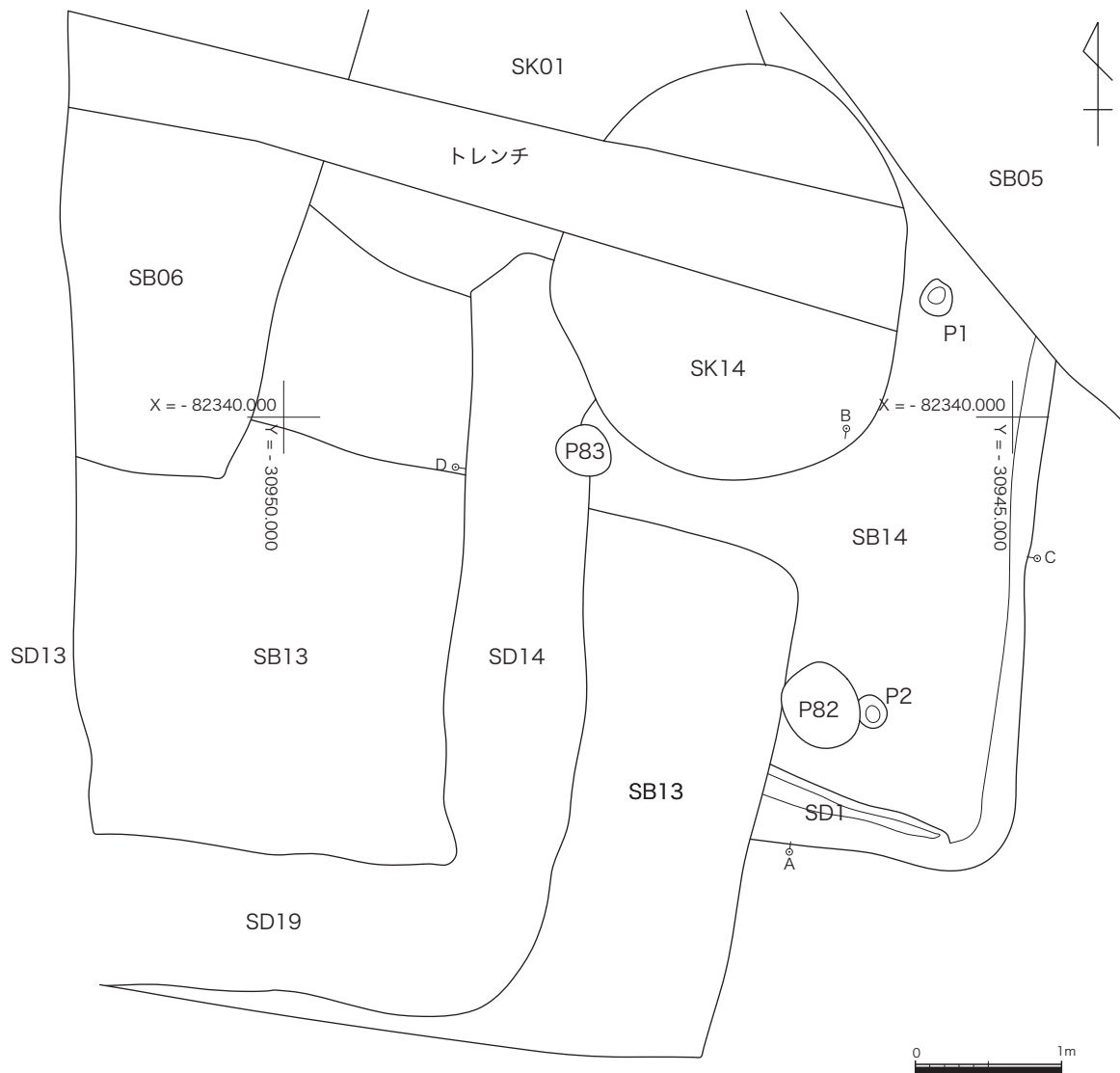


第 17 図 竪穴建物跡 S B 11・12 遺構図 (S=1:50)

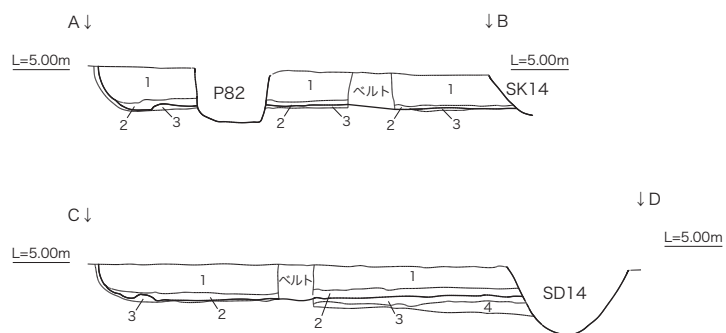
遺 構



第 18 図 竪穴建物跡 S B 13 遺構図 (S=1:50)



SB14セクション



SB14セクション土層説明

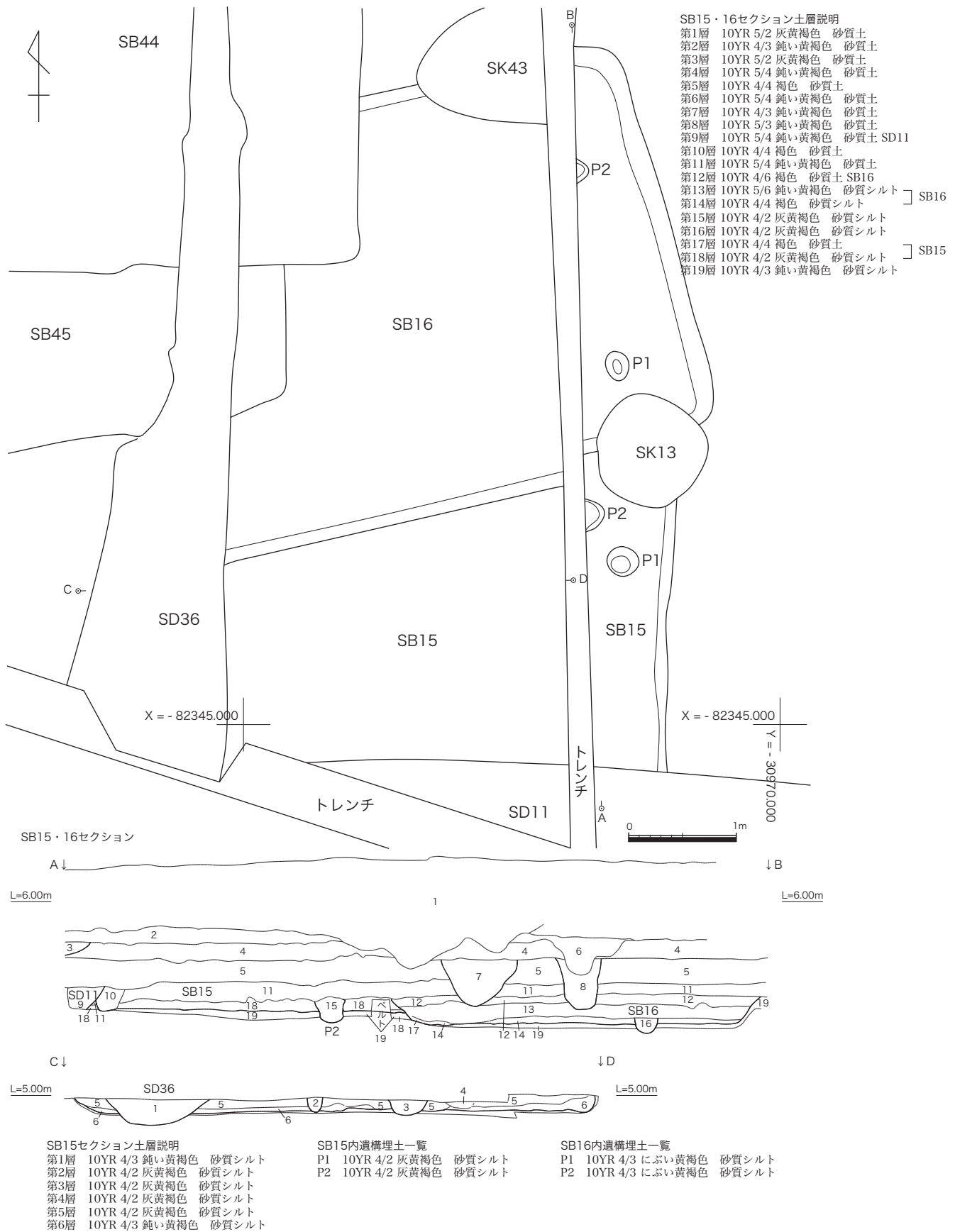
第1層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 6/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質土
第4層 10YR 4/2 鈍い黄褐色 砂質土

SB14内遺構埋土一覧

P1 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
P2 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト

第 19 図 竪穴建物跡 S B 14 遺構図 (S=1:50)

遺構



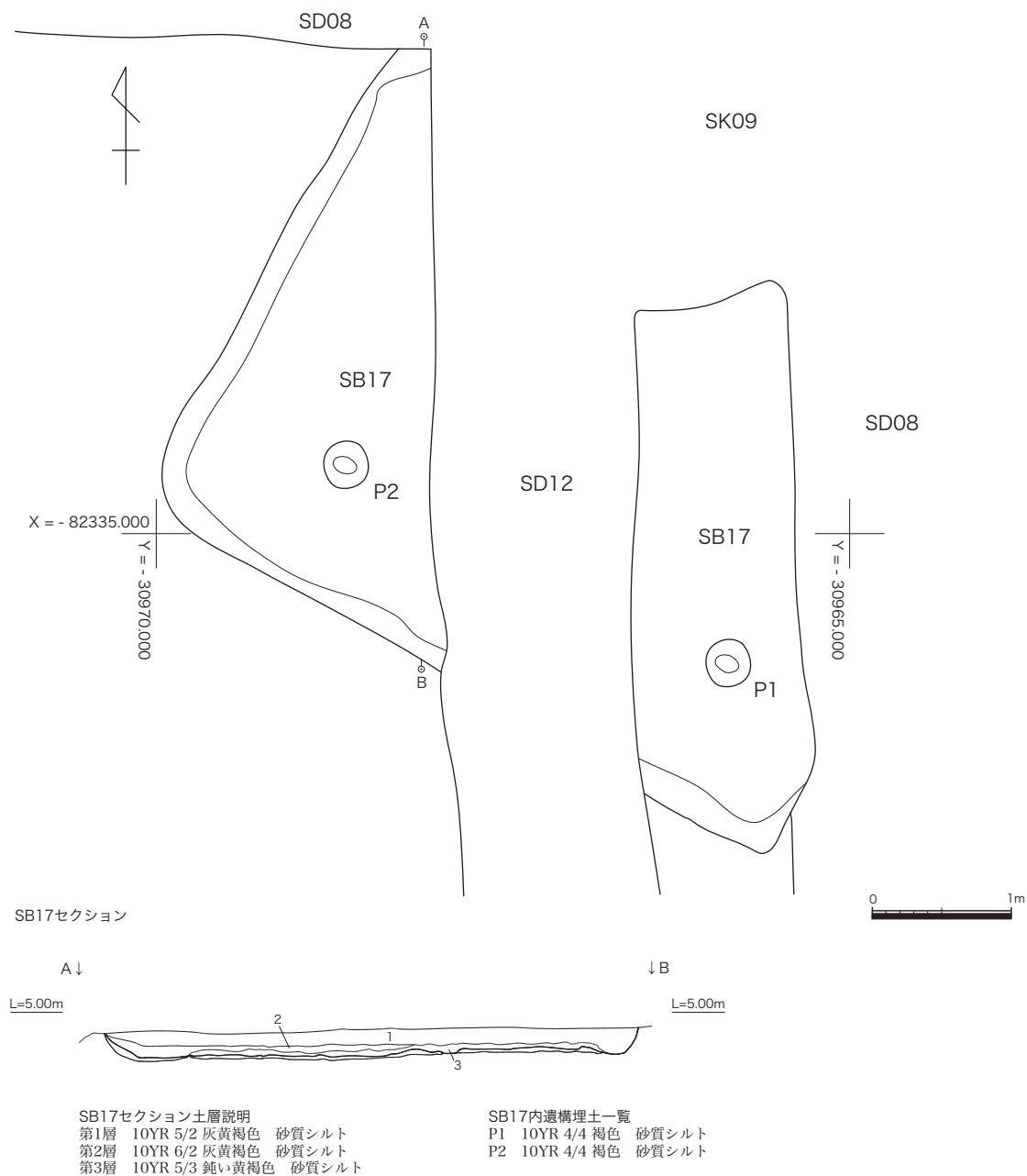
第 20 図 竪穴建物跡 S B 15・16 遺構図 (S=1:50)

20cm を測る。支柱穴らしきピットは 1 基しか確認できなかった。西壁端にカマドと思われる焼土と炭化物の厚い堆積が確認されたが、カマドの構造解明には至らなかった。下位には S B 36 があり、古代 5 段階に属するだろう。

S B 21 (第 23・24 図) B 区北東部に所在する 5.45m 以上×4.30m の隅丸長方形プランの竪穴建物跡で東辺は調査区外に拡がる。S B 19 に切られ S B 22 を切っており、深さは 23cm を測る。

支柱穴は特定しがたいが、北辺東部にカマドと思われる焼土と炭化物の広がりが確認された。出土須恵器からみて、時期は古代 4 段階と思われる。

S B 22 (第 23・24 図) B 区北東部にある竪穴建物跡で、S B 19・S B 21・S B 23 に切られプランを特定しがたいが 5.45m 以上×4.30m の隅丸長方形で、深さは 23cm を測る。柱穴や火処遺構などの内部施設は不明である。岩崎 17 号窯式期から高蔵寺 2 号窯式期の須恵器を含むが、遺



第 21 図 竪穴建物跡 S B 17 遺構図 (S=1:50)

遺 構

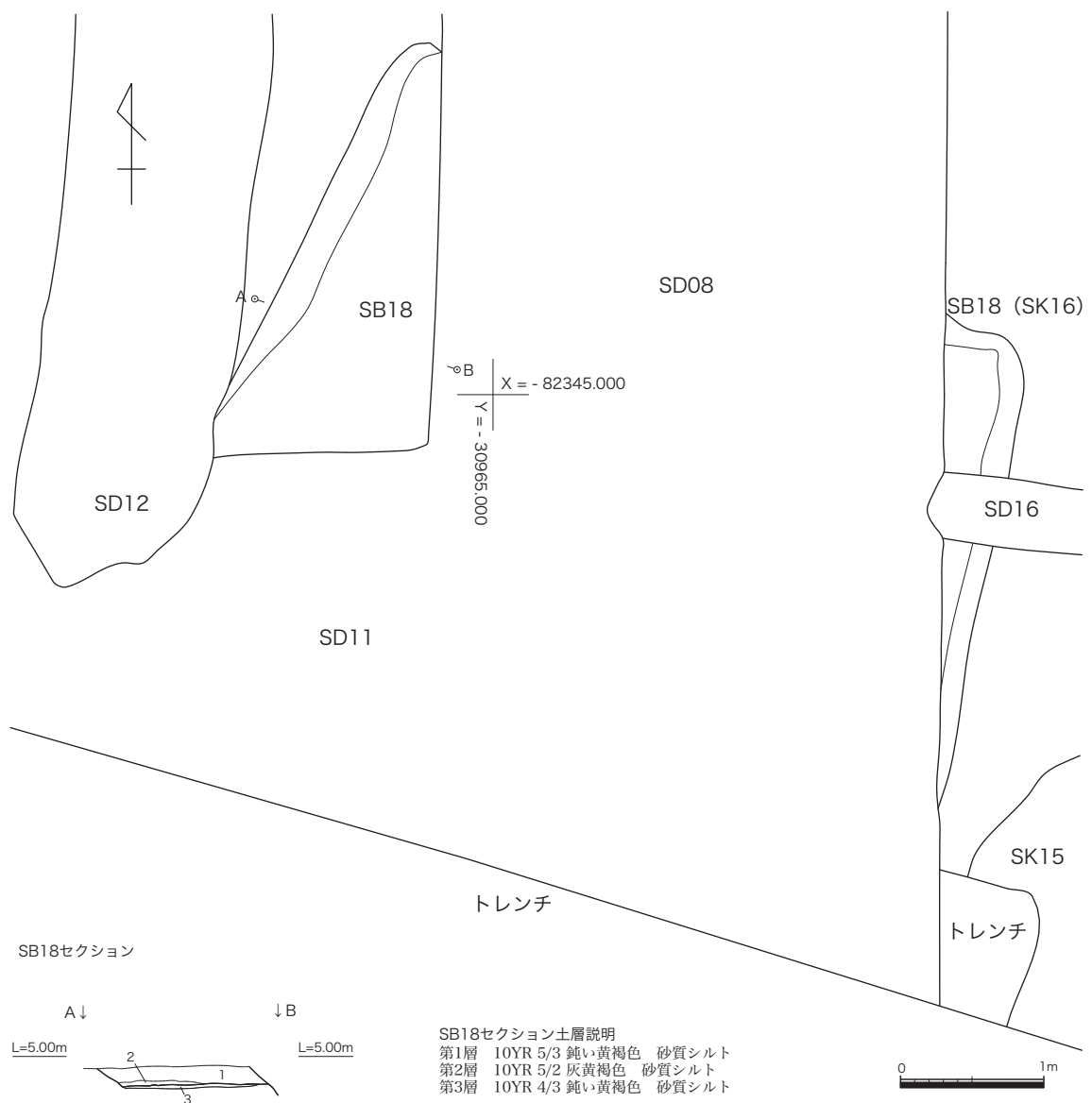
構の切り合い関係からみて古代3段階前後と推測される。

S B 23 (第26・27図) B区北部に存在する竪穴建物跡で、S B 22を切っており、北半部は調査区外に展開する。平面形は5.45m × 4.65m以上の隅丸方形で、深さは32cmを測る。にぶい黄褐色砂質シルト層を貼床にし、中央付近では焼土と炭化物の厚い堆積が確認された。これは床面よりもやや高く砂質土などを盛り上がりその表面が焼けていたもので、別の竪穴建物跡のカマドである可

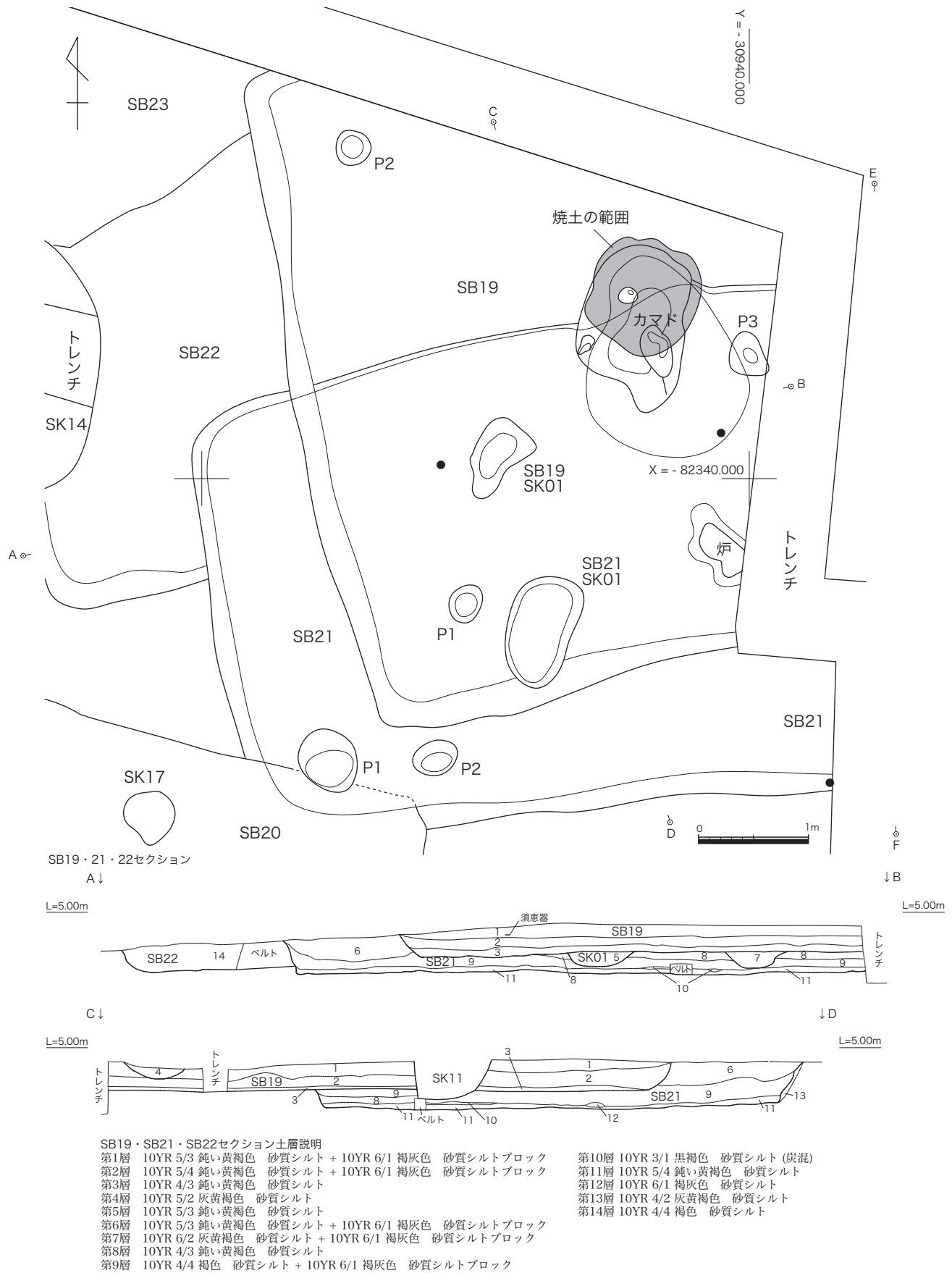
能性も考えられたが、ここではS B 23の地床炉と想定したい。時期は古代4段階に位置づけられる。

S B 24(第28図) B区北部に所在する幅3.70mの隅丸長方形の竪穴建物跡で、北辺は調査区外に広がる。S B 07の下位で検出され、S B 23を切っており、深さは20cmを測る。主柱穴などのピットが5基検出されたが、カマドなどの火処遺構は確認されなかった。時期は古代5段階と思われる。

S B 25 (第29・30図) B区南部に位置する竪穴建物跡で北西端がS D 19に切られ滅失する。



第22図 竪穴建物跡S B 18 遺構図 (S=1:50)



第 23 図 竪穴建物跡 S B 19・21・22 遺構図 (1) (S=1:50)

遺 構

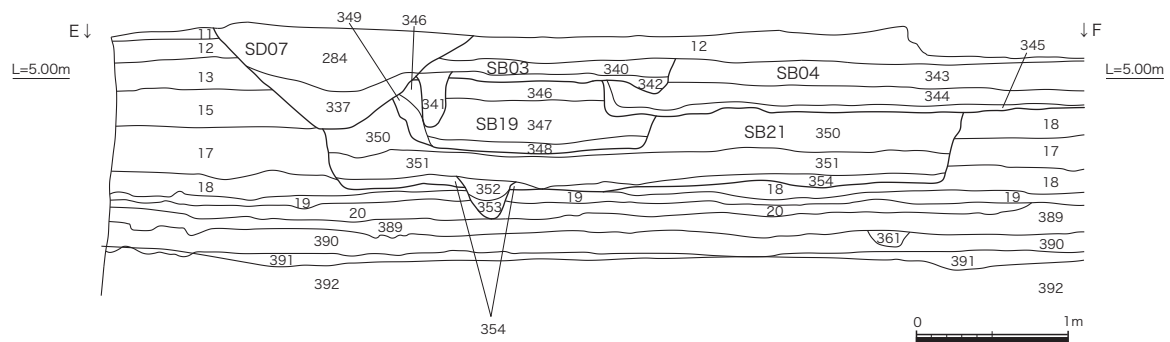
平面形は5.43m×5.34mの隅丸方形で、深さはやや浅く11cmを測る。柱穴は四隅に2基ずつ存在しており一度建替えが行われたものと推定される。中央部南西寄りに薄い焼土と炭化物の拡がり確認されたが、火処遺構と認定するには至らなかった。S B 10・S B 11よりも下位で検出され、S B 26を切りS B 27に切られることなどから時期は古代4段階に属するだろう。

S B 26 (第29・30図) B区南部にある竪穴建物跡でS B 25とS D 19に切られる。平面形は5.82m×3.20mの隅丸長方形で、深さは19cmを測る。柱穴は四隅で検出されるが、火処遺構は確認されなかった。古代3段階と推定される。

S B 27 (第31図) B区南部に存在する竪穴建物跡で、S B 25を切っている。平面形は5.78m×5.00mの隅丸平行四辺形で、深さはやや浅く11cmを測り、柱穴は東辺で2基が確認された。西辺南寄りに焼土と炭化物の拡がり確認され、土師器甕(324～327)の破片が出土していることからカマドと推定される。遺構の重複関係と出土遺物からみて、古代4段階と思われる

S B 28 (第32図) B区北西部のS B 09などの下位で検出された幅4.00mの隅丸長方形の竪穴建物跡で、北辺は調査区外に拡がる。支柱穴などのピット4基と土坑1基および溝2条が検出された。土坑S K 01の南に炭化物と少量の焼土ブ

SB19・21・22セクション



SB19内遺構埋土一覧

P1 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
P2 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
SK1 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
灰跡 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト

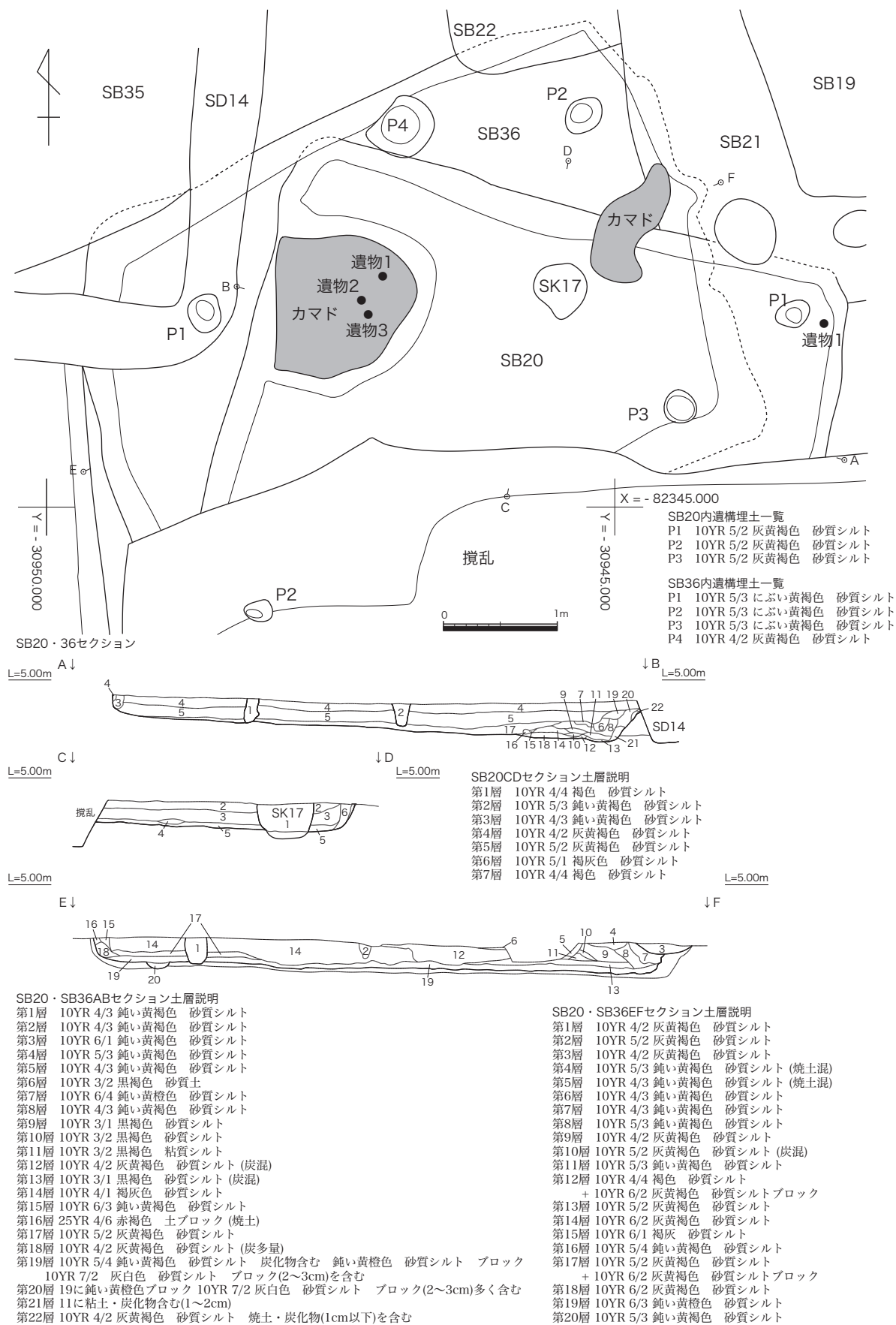
SB21内遺構埋土一覧

P1 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
P2 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
P3 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
SK1 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト

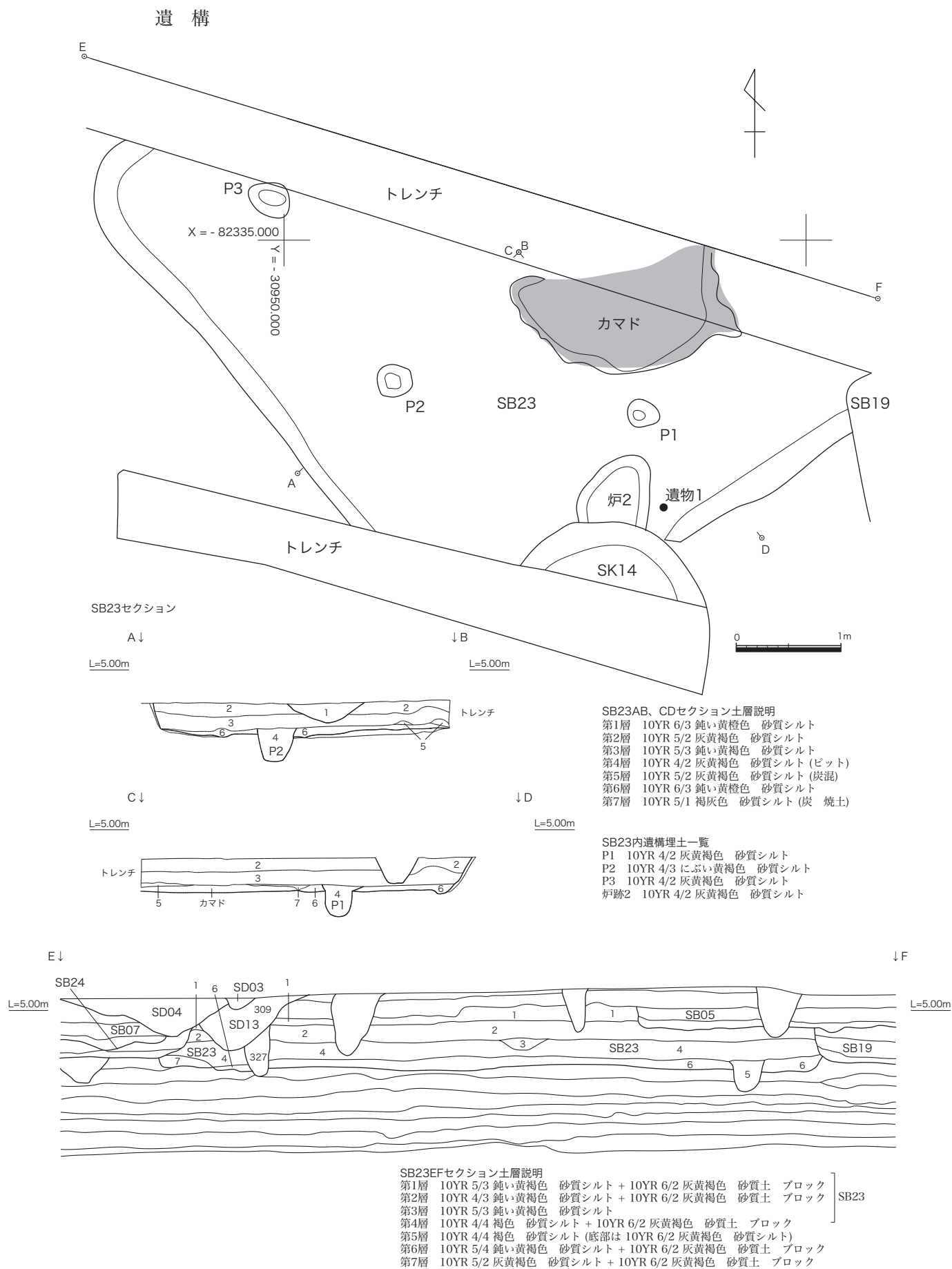
SB19・SB21・SB22セクション土層説明

11 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土
12 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
13 10YR 4/4 褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック
15 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土 + 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質土 ブロック (炭微量)
17 10YR 7/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 5/6 黄褐色 砂質土 ブロック
18 10YR 7/4 鈍い黄褐色 砂質シルト (粘性強)
19 10YR 7/4 鈍い黄褐色 粘質土 + 10YR 5/6 黄褐色 粘質土 (土器片混)
20 2.5Y 4/1 黄灰色 粘質シルト
340 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト SB03
341 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
342 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
343 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
344 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック } SB04
345 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
346 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
347 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック } SB19
348 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
349 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
350 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック
351 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック } SB21
352 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック
353 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト
354 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 4/4 褐色 砂質土 ブロック
361 2.5Y 6/2 灰黄色 砂質シルト
389 2.5Y 6/3 鈍い黄色 粘土 + 10YR 4/4 褐色 砂質土 ブロック
390 2.5Y 6/2 灰黄褐色 粘土
391 2.5Y 5/1 黄灰色 粘土 一部グライ化 褐色土の侵食をうける
392 2.5Y 2/1 黒色 粘土

第24図 竪穴建物跡S B 19・21・22遺構図(2)(S=1:50)



第 25 図 竪穴建物跡 S B 20・36 遺構図 (S=1:50)



第26図 竪穴建物跡S B 23 遺構図 (S=1:50)

ロックが広がる部分があり、地床炉などの火処遺構と想定された。古代5段階の遺構と考えられる。S B 29 (第33図) B区北西部に位置し南東端のみが確認された。柱穴は隅角部で1基検出されるが、火処遺構は不明である。出土須恵器からみて古代4段階と思われる。

S B 30 (第34図) B区南西部で展開する幅3.38mの隅丸方形の竪穴建物跡で、南半分の状況は不明。S B 37を切り、柱穴は隅角部で1基検出されるが、火処遺構は不明である。古代4段階の遺構であろう。

S B 31 (第36図) B区西部からA区東部に所在し、S B 15などの下位で検出された。平面形は4.64m×4.00mの隅丸長方形で、深さは16cmを測る。支柱穴は概ね四隅で確認された。にぶい黄褐色砂質シルト層を貼床にするが、火処遺構は確認されていない。時期は古代8段階か。

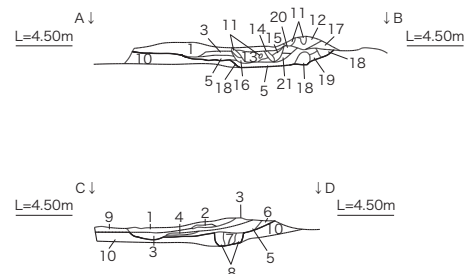
S B 32 (第37・38図) B区西部にある竪穴建物跡で東部はS D 08に壊される。S B 17の下位で検出されS B 33に切られる。平面形は4.80m以上×4.70mの隅丸方形で、深さは24cmを測る。南辺の支柱穴は確認できたが北辺は不明。北辺東寄りに灰黄褐色砂質シルトが充填された土坑上面に焼土面が広がっており、カマド状遺構と思われる。出土須恵器からみて古代1段階に属する。

S B 33 (第37・38図) B区西部に存在する竪穴建物跡で、S B 17の下位で検出されS B 32を切る。S D 08とS D 12に壊され規模は不明であるが、深さは23cmを測る。明瞭な支柱穴および火処遺構は確認されていない。時期は古代4段階と推測される。

S B 34 (第39図) B区中央部、S B 09などの下位で検出された平面形が5.52m×4.40mの隅丸長方形を呈する竪穴建物跡である。南東端が



SB23地床炉セクション



SB23地床炉セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/1 褐灰色 砂質土
- 第2層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質土
- 第3層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
- 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
- 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土 (炭多量混)
- 第6層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土
- 第7層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
- 第8層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質土 (炭多量)
- 第9層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
- 第10層 10YR 5/6 黄褐色 砂質土
- 第11層 7.5YR 7/6 橙色 土 (焼土)
- 第12層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質土
- 第13層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
- 第14層 10YR 5/1 褐灰色 砂質土
- 第15層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
- 第16層 5YR 4/3 鈍い赤褐色 土 (焼土)
- 第17層 10YR 6/1 褐灰色 砂質土
- 第18層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土
- 第19層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質土
- 第20層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質土
- 第21層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質土 (炭微量)

第27図 竪穴建物跡S B 23 地床炉遺構図 (S=1:50)

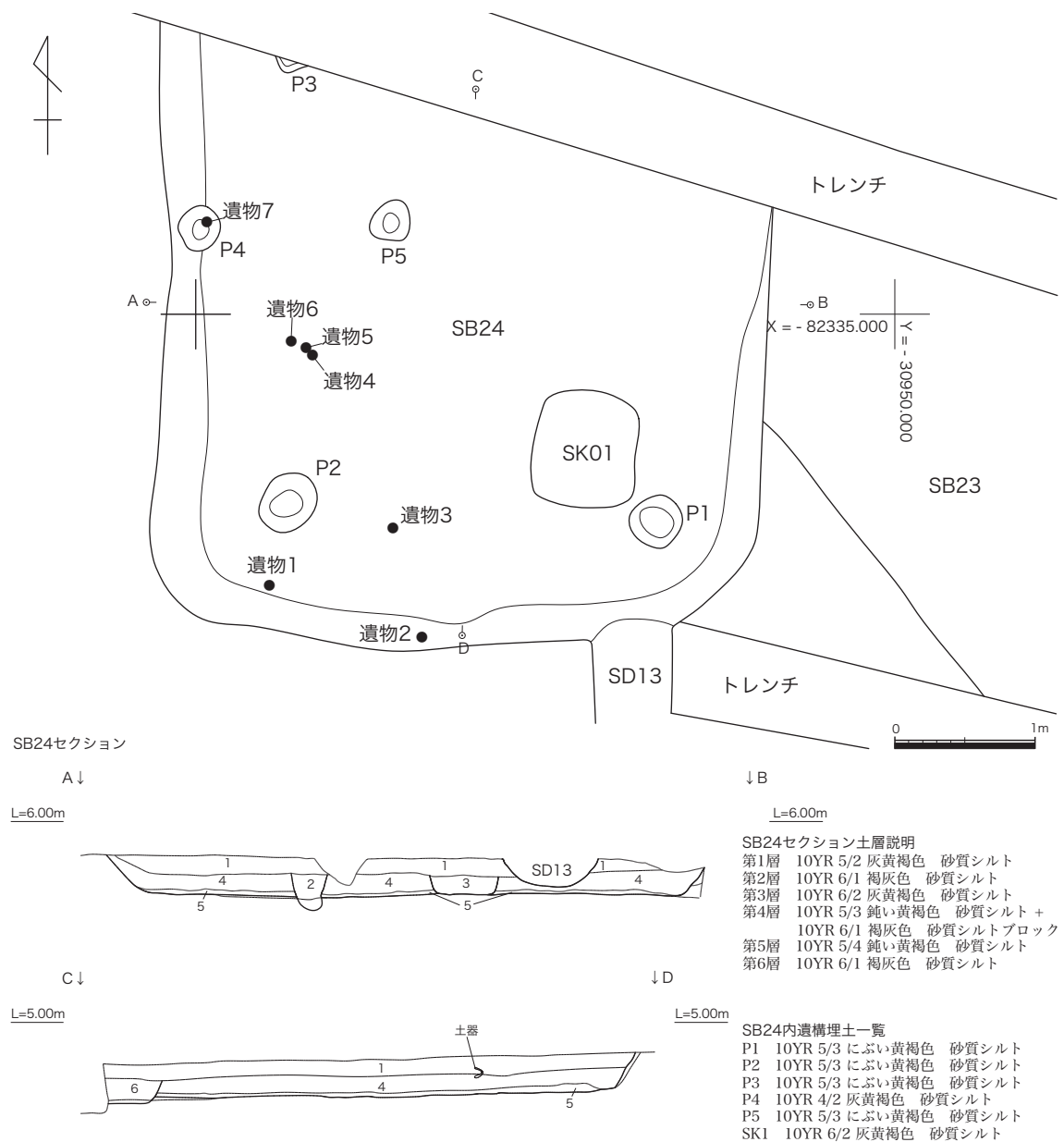
遺 構

S B 35 に切られ、深さはやや深く 31cm を測る。灰黄褐色砂質シルトを床面に貼り、そこから掘削された柱穴は四隅に 4 基確認されたが、火処遺構は発見されなかった。出土須恵器からみて古代 1 段階と考えられる。

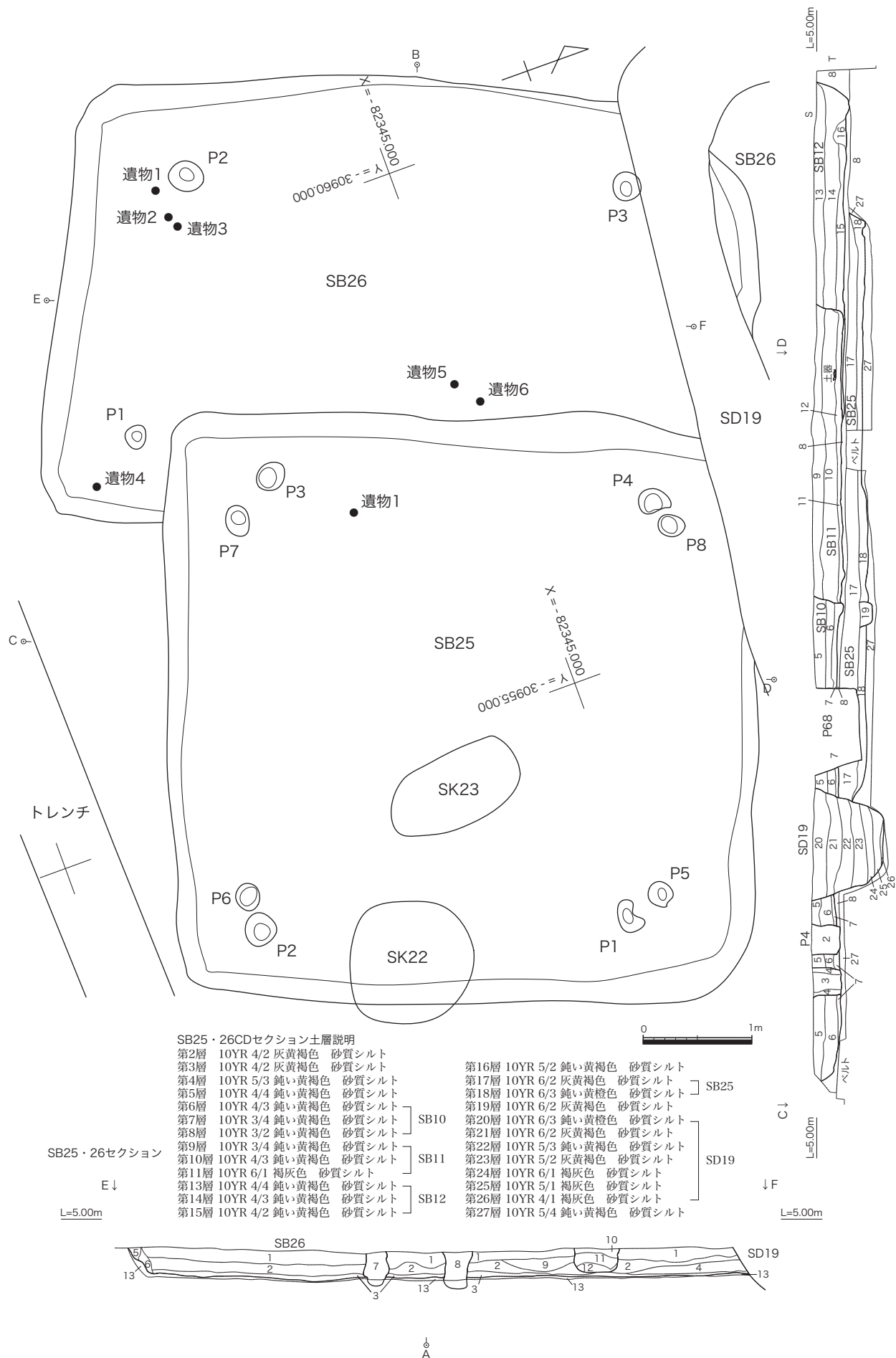
S B 35 (第 40 図) B 区中央部に位置する平面形が 7.00m × 4.50m の隅丸長方形となる竪穴建物跡である。深さは 22cm を測り、主柱穴は 6 基配列すると推測されそのうち 3 基が確認された。が、火処遺構は不明である。S B 25 に切られ S

B 36 を切ることなどから、古代 4 段階の遺構と推定される。

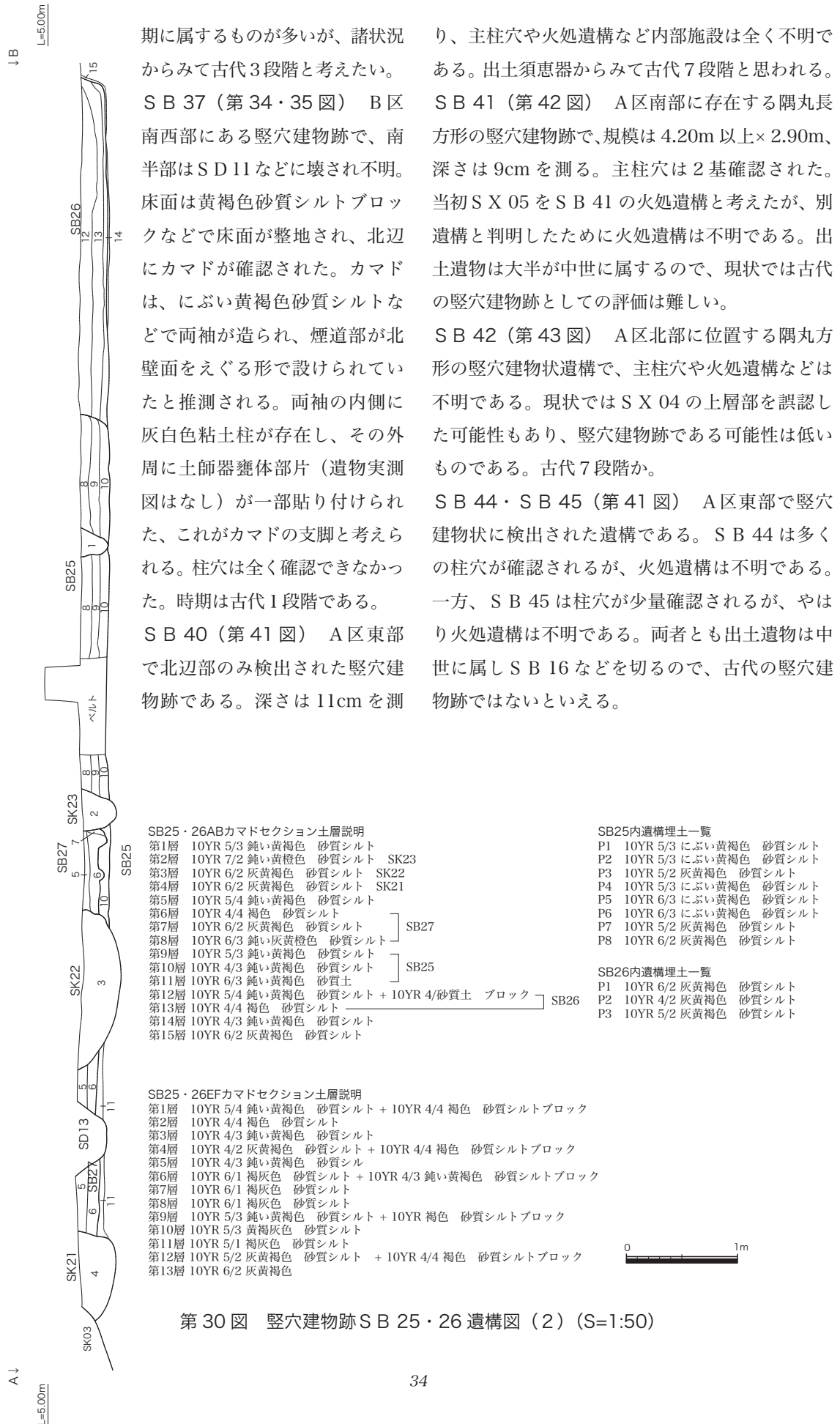
S B 36 (第 25 図) B 区中央部に所在する竪穴建物跡で、上位に S B 20 が展開している。平面形は 5.70m × 4.10m の隅丸長方形と推測され、深さは 21cm を測る。主柱穴らしきピットが 3 基、東辺にカマドと思われる焼土と炭化物の堆積が 1 ヶ所確認された。カマドは壁際ににぶい黄褐色砂質シルトで盛り上げられ、表面に焼土ブロックが拡がっていた。出土須恵器には高蔵寺 2 号窯式

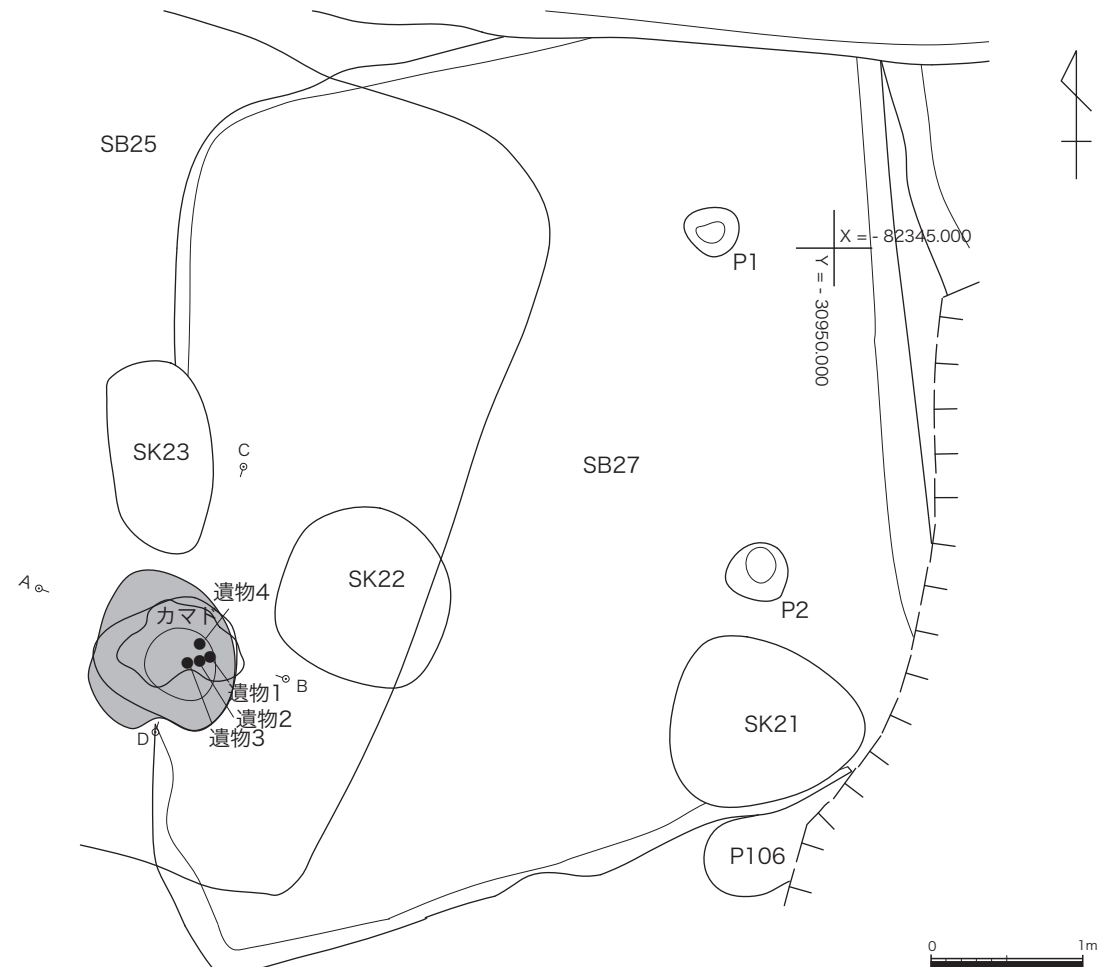


第 28 図 竪穴建物跡 S B 24 遺構図 (S=1:50)

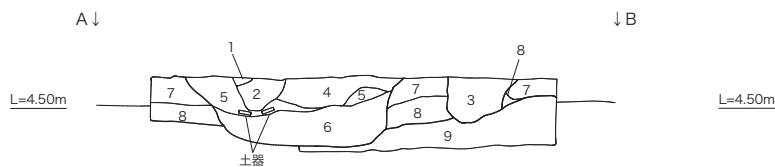


遺 構



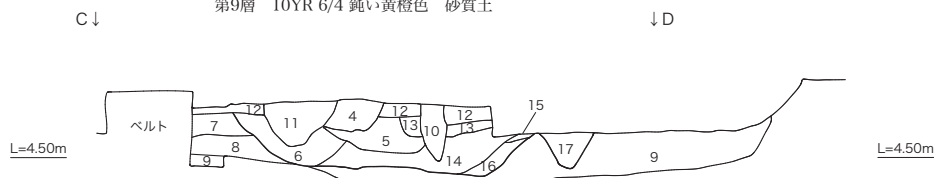


SB27セクション



SB27ABセクション土層説明

- 第1層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルトブロック
- 第3層 10YR 7/1 灰白色 砂質シルト
- 第4層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土 (酸化)
- 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト (炭混)
- 第6層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト (焼土混)
- 第7層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第8層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 5/6 黄褐色土ブロック
- 第9層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質土



SB27CDセクション土層説明

- 第10層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 第11層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第12層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第13層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルトブロック
- 第14層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト (炭混)
- 第15層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土
- 第16層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 第17層 10YR 4/1 褐色 砂質シルト

第 31 図 竪穴建物跡 S B 27 遺構図 (S=1:50)

遺 構

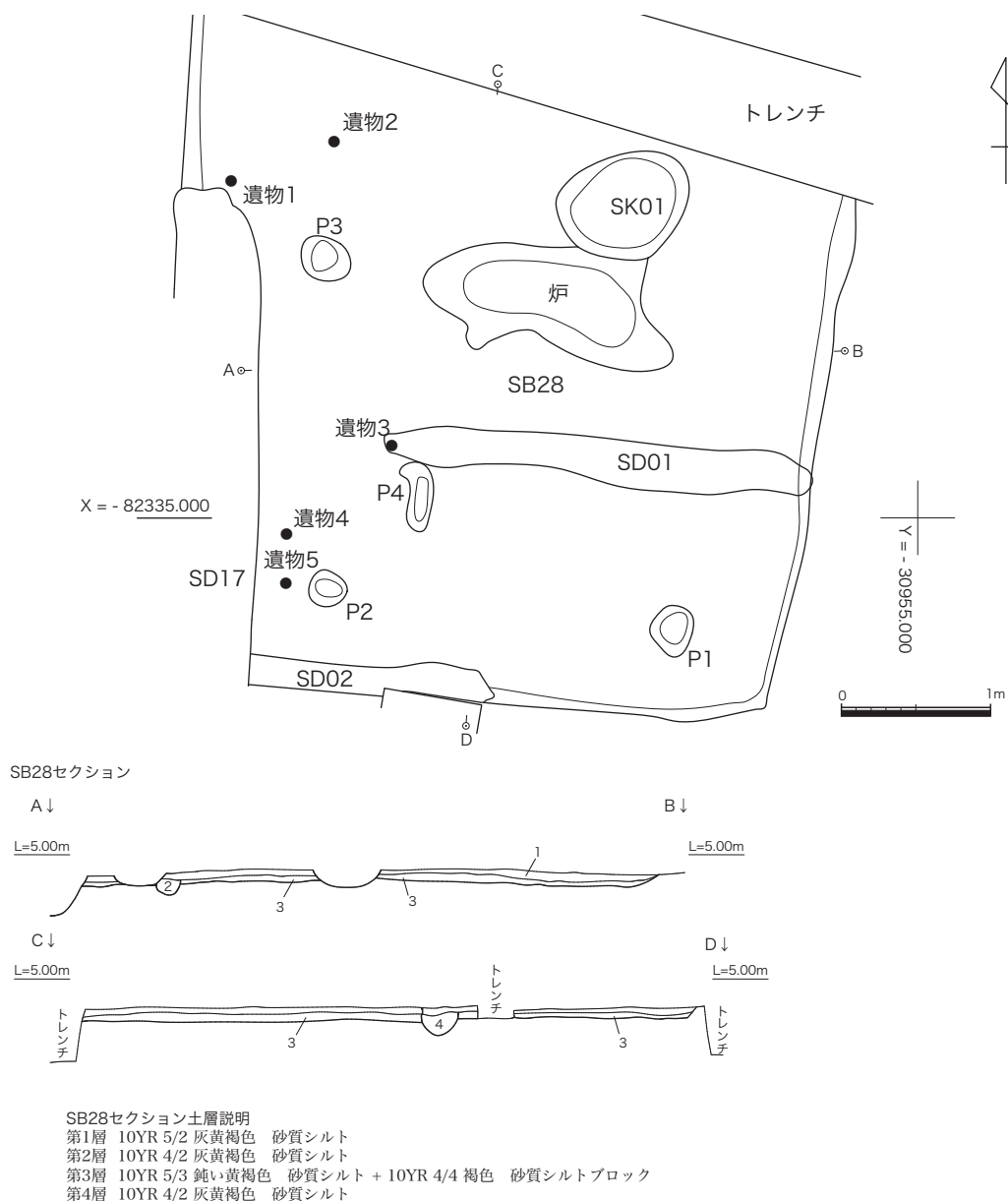
S B 46（第 44 図） A 区北部に位置する隅丸長方形の竪穴建物跡で、S B 42の下位で検出された。内部施設には柱穴のみが存在する。古代 5 段階か。

S B 47（第 45 図） A 区中央部にある平面形が 5.70m × 5.00m の隅丸長方形を呈する竪穴建物跡である。北東辺の北寄りにカマド状遺構が確認された。カマド状遺構は焼土ブロックや炭化物が堆積した状態が確認されており、破壊され本来の形状は全く保っていないものと思われる。支柱穴は 3 列 × 3 列に配置されるものと思われ現状で 6 基

確認された。覆土から 8 世紀、カマド状遺構から 6 世紀後半の遺物が出土しており、遺構の認識に誤認があった可能性がある。現状では古代 7 段階に位置づけたい。

S B 48（第 46 図） A 区中央部に存在する隅丸長方形の竪穴建物跡で、西部が S D 43 に切られる。内部施設として柱穴と土坑が確認された。出土遺物からは古代 4 段階の遺構と考えられる。

S B 49（第 47 図） A 区南部で検出された竪穴建物跡で、中央部を S D 43 により大きく破壊さ



第 32 図 竪穴建物跡 S B 28 遺構図 (S=1:50)

れている。平面形は $4.50\text{m} \times 3.30\text{m}$ の隅丸長方形で、床面は灰黄褐色砂質シルトで貼床として整地され、隅角部で支柱穴、西部で火処遺構が確認された。火処遺構は床面直上に炭化物や焼土ブロックが拡がる形で検出され、骨片らしき白色粒も確認された。この火処遺構は S X 05 と同様の火葬関連の遺構を誤認した可能性は捨てきれない。S D 43 以前の古代 4 段階の遺構と推測される。

S B 50 (第 48 図) A 区南西部に位置する平面形が $6.34\text{m} \times 3.27\text{m}$ 以上の隅丸長方形の竪穴建物跡であり、南部が調査区外に拡がる。床面はにぶい黄橙色砂質土で貼床され、西部の広い範囲で焼土ブロックや炭化物が拡がっていた。炭化物などの拡がりを断ち割って調査したが、特別な構造を確認することはできなかった。時期は古代 1 段階と思われる

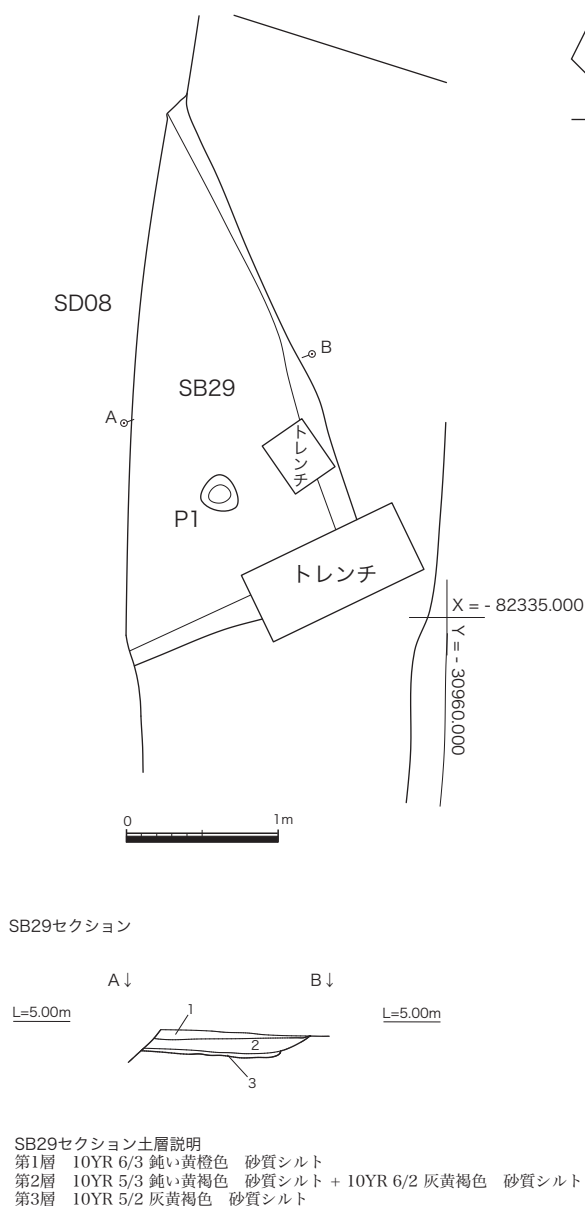
S B 51 (第 49 図) A 区南西端部で検出された隅丸長方形の竪穴建物跡だが、規模は不明である。床面はにぶい黄橙色砂質シルトで整地され、柱穴がいくつか確認された。深さは 31cm を測るが、火処遺構は不明である。出土遺物からみて古代 2 段階と考えられる。

S B 54 (第 50 図) A b 区に所在する隅丸長方形の竪穴建物跡である。周溝 (S D 48 と S D 51) が巡るとも考えられるが、内部にある溝 S D 49 と S D 50 の位置づけが難しい。火処遺構は確認されず、出土遺物は大半が中世に属するので、現状では古代の竪穴建物跡としては評価できないだろう。

S B 56 (第 51 図) C 区西部にある幅 3.60m の隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。S B 58 を切る形で検出され、深さは 24cm を測り、支柱穴が 2 基確認されたが、火処遺構は不明である。古代 5 段階に位置づけたい。

S B 57 (第 51 図) C 区北西端部に存在する竪穴建物跡で、S B 61・S B 64 を切り、支柱穴が 1 基確認された。床面は灰黄褐色砂質シルトと褐色砂質土で整地されている。出土須恵器からみて古代 7 段階と思われる。

S B 58 (第 52 図) C 区中央部で検出された平面形が $5.00\text{m} \times 3.80\text{m}$ の隅丸長方形を呈する竪穴建物跡である。支柱穴は 6 基存在したと推測され 5 基が確認された。火処遺構は検出されなかったが、北部では大型土坑 S K 66 に切られている。S B 56 に切られ S B 59 を切る形で検出されたことからみて古代 4 段階であろう。



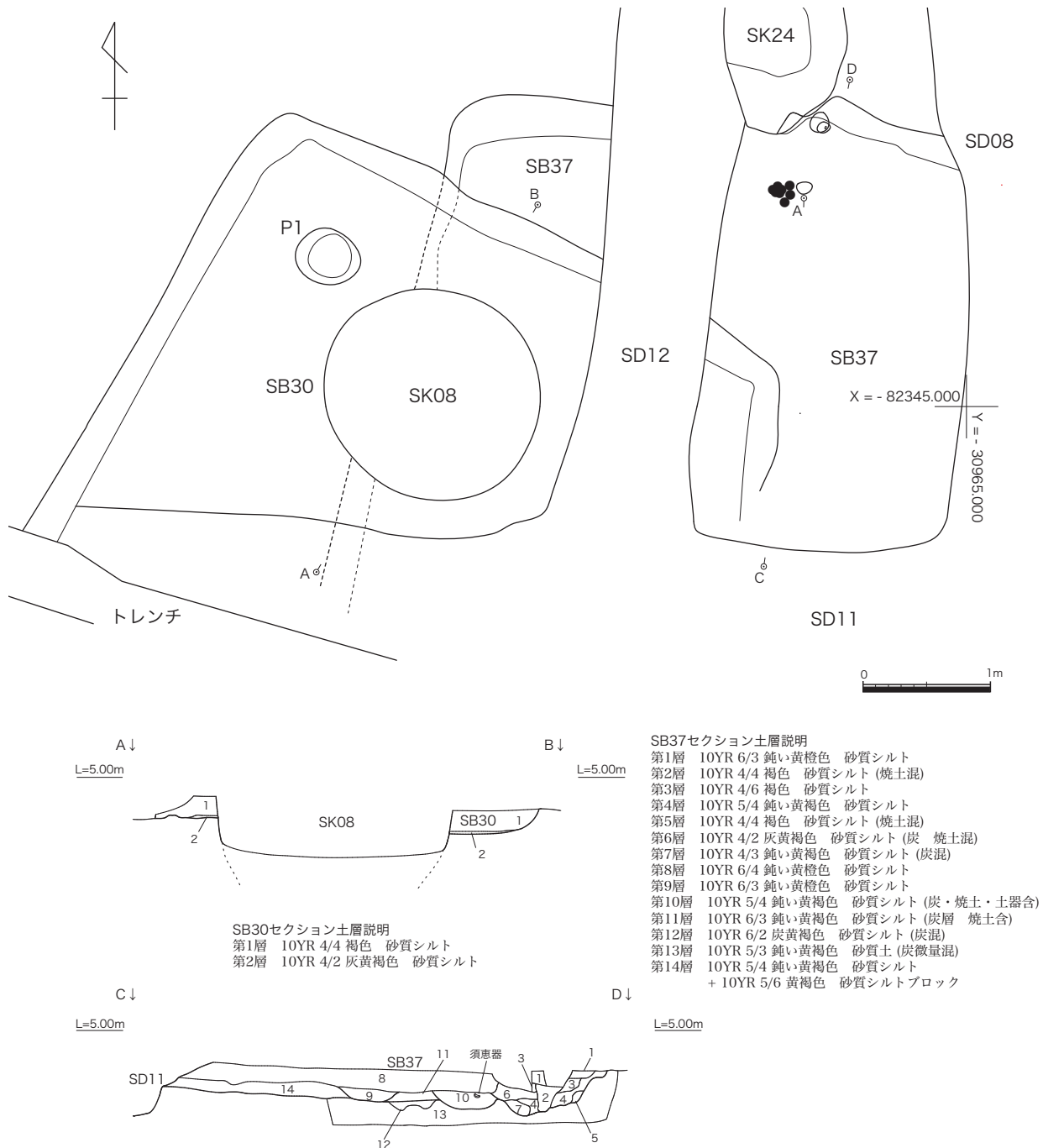
第 33 図 竪穴建物跡 S B 29 遺構図 (S=1:50)

遺 構

S B 59 (第 53 図) C 区中央部に位置する竪穴建物跡で、平面形は 6.30m × 4.25m の隅丸長方形である。S B 58・S B 65 に切られ、S B 60・S B 64 を切る形で検出された。主柱穴は 4 ヶ所で確認され、西端部で火処遺構が検出された。火処遺構は土坑状の凹みに炭化物や焼土ブロックが含まれており、地表面付近で薄い炭化物層が拡

がっていた地床炉と思われる。S B 64 との重複関係に問題があるが、時期は古代 3 段階と推測される。

S B 60 (第 54 図) C 区東部に所在する平面形が 5.00m × 4.95m の隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。床面は灰黄褐色砂質シルトで整地され、主柱穴は 2 基と土坑 1 基が内部施設として存在す



第 34 図 竪穴建物跡 S B 30・37 遺構図 (S=1:50)

る。火処遺構は検出されなかった。S B 59 と S B 62 に切られる形で検出されたが、出土遺物からみると鳴海 32 号窯式期の時期と推測され矛盾する。ここでは遺構検出の認識に問題があったと考えて古代 5 段階と推定しておきたい。

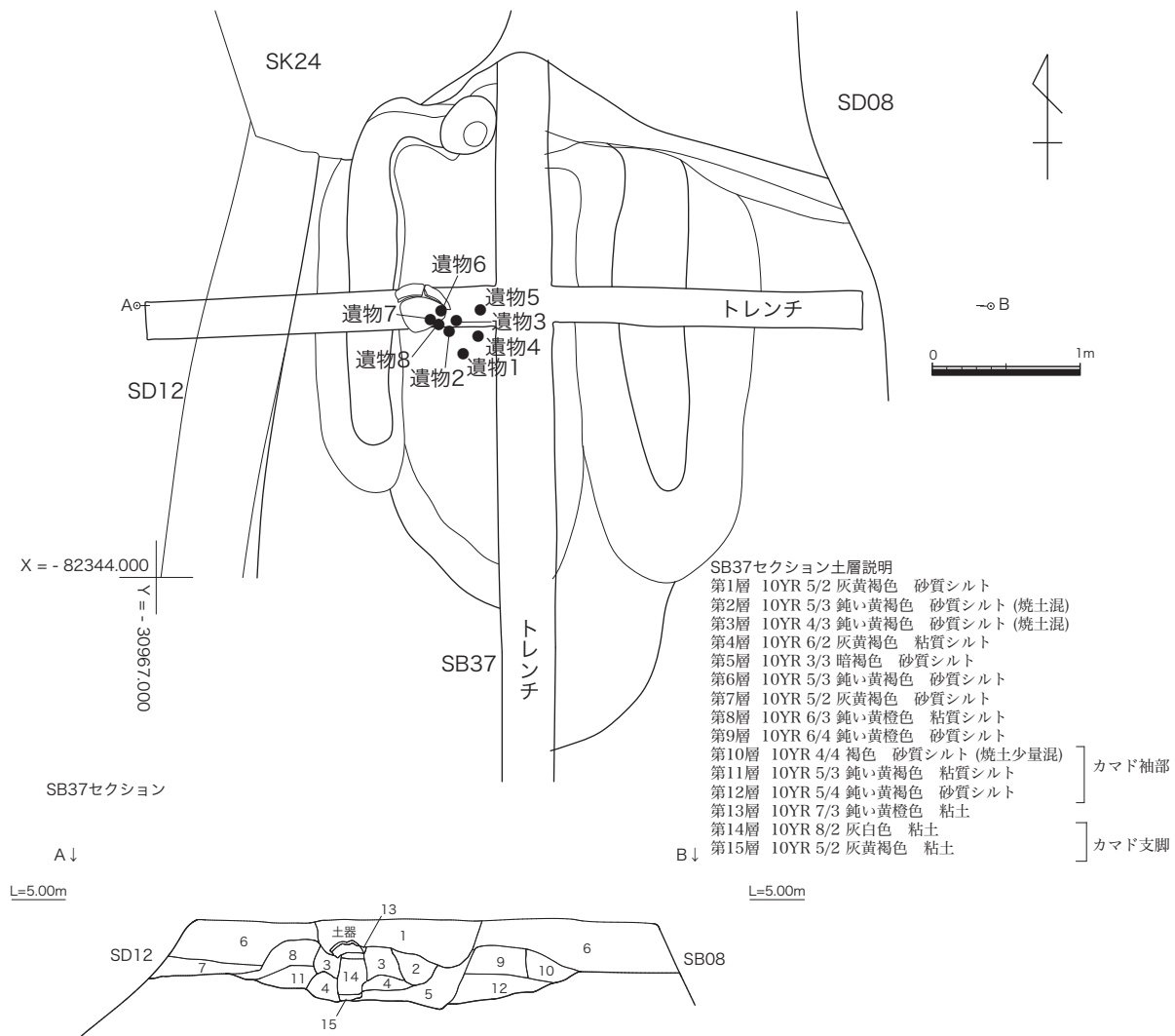
S B 61 (第 55 図) C 区北部にある竪穴建物跡で、南側の隅角部のみを検出した。床面は灰黄褐色砂質シルトで整地されており、土層断面では床面直上に炭化物が拡がっていることが確認された。S B 57 に切られているが、詳細な時期は不明である。古代 6 段階か。

S B 62 (第 55 図) C 区東部に存在する竪穴建物跡で、西側の隅角部のみを検出した。床面はにぶい黄橙色砂質シルトで整地される。S B 60 を

切る形で検出されたが、出土遺物からみると前後関係が逆転する。ここでは古代 2 段階の遺構と推定しておきたい。

S B 63 (第 56 図) C 区南部で検出された幅が 3.70m を測る隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。床面は灰黄褐色砂質土などで整地され、内部施設として柱穴やカマド状遺構が確認された。カマド状遺構は北辺西端部に所在し、浅い土坑状の凹みに炭化物や焼土ブロックが含まれていた。出土遺物からみて古代 4 段階と推測される。

S B 64 (第 57・58 図) C 区北西部に位置する隅丸方形の竪穴建物跡である。床面はにぶい黄橙色砂質土で整地され、内部施設として土坑 S K 01 とカマド状遺構が確認された。カマド状遺構



第 35 図 竪穴建物跡 S B 37 遺構図 (S=1:50)

遺 構

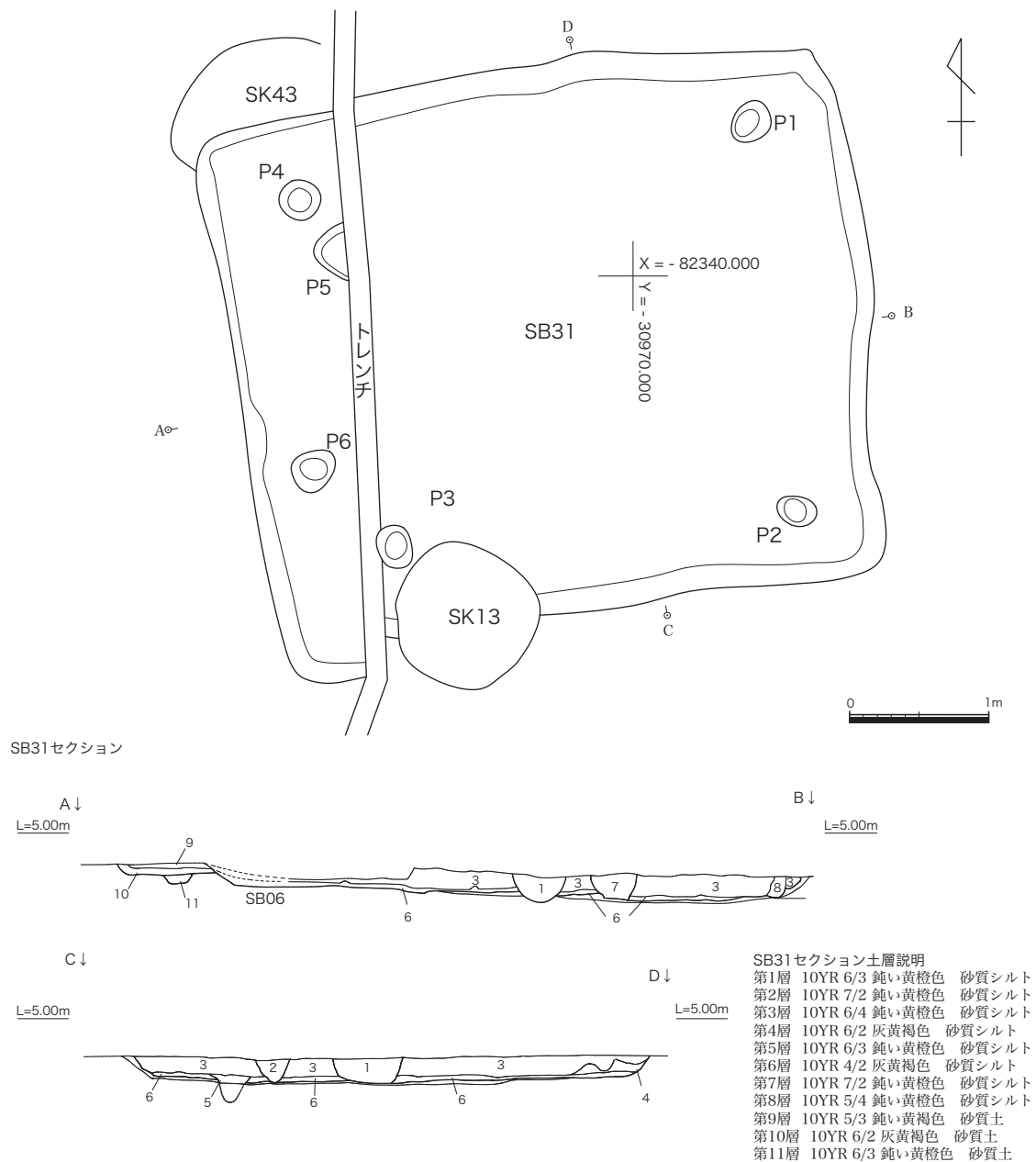
は北辺中央付近に所在し、壁際に炭化物や焼土ブロックが拡がっていた。土坑 S K 1 にも炭化物層が認められており、これは地床炉の可能性も考えられる。S B 57・S B 59・S B 65 に切られる形で検出されたが矛盾することが多く、ここでは時期は古代 4 段階と推定しておきたい。

S B 65 (第 57 図) C 区北東部で確認された平面形が 4.40m × 3.50m の隅丸長方形の竪穴建物跡である。内部施設として隅角部で支柱穴 4 基と

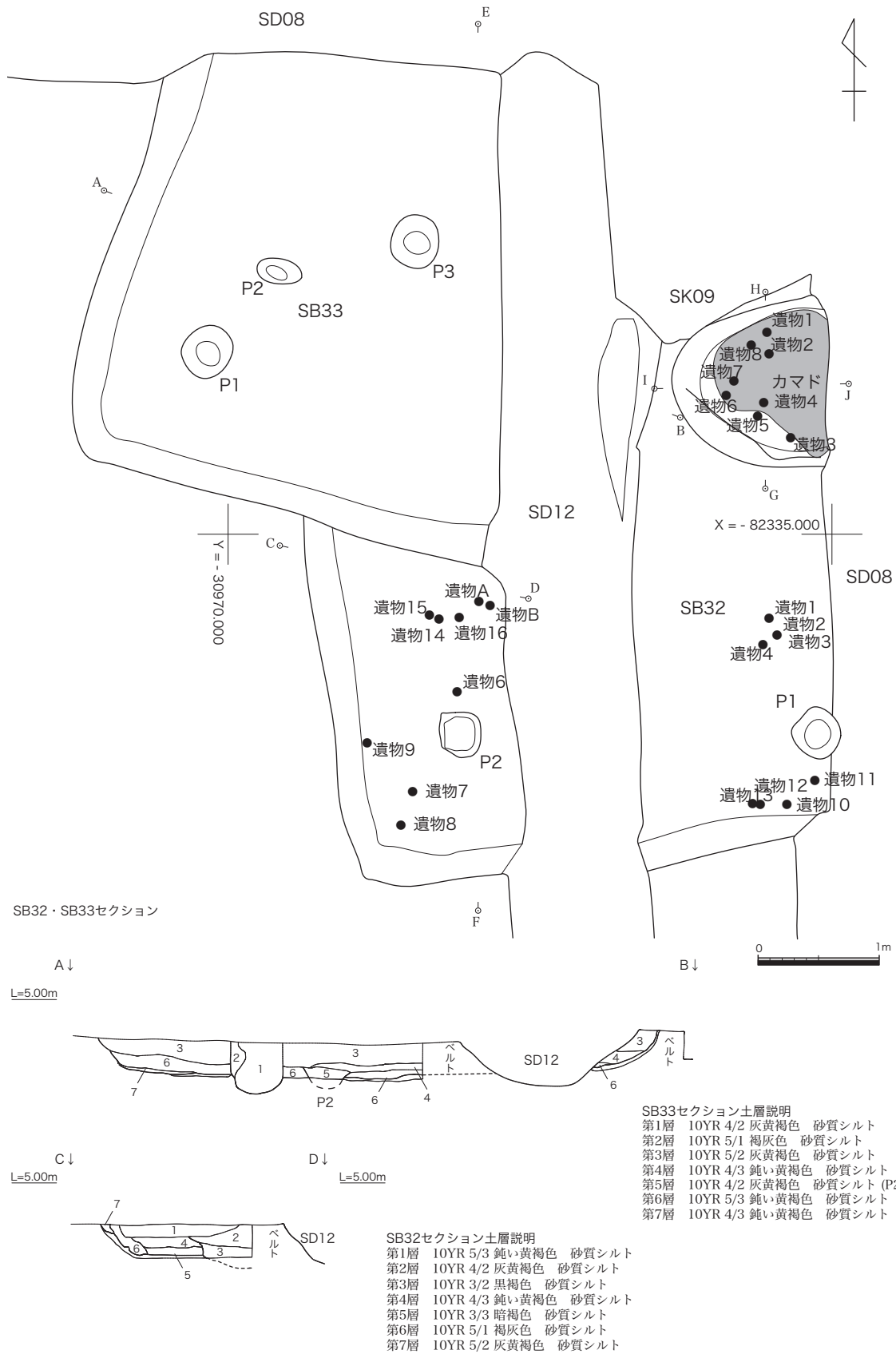
北辺東寄りでカマド状遺構が確認された。カマド状遺構は壁際の凹部に炭化物や焼土ブロックが拡がるものである。S B 59 と S B 64 を切ることで、時期は古代 5 段階と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡・柵列

S B 52 (第 59・60 図) A 区西部で検出された 2 間 × 3 間の総柱掘立柱建物跡である。A 区の 4 面目の調査、すなわち基本層序第 11 層の黄灰色粘質シルト上面 (第 8 図) で初めてその存在が



第 36 図 竪穴建物跡 S B 31 遺構図 (S=1:50)



第 37 図 竪穴建物跡 S B 32・33 遺構図 (1) (S=1:50)

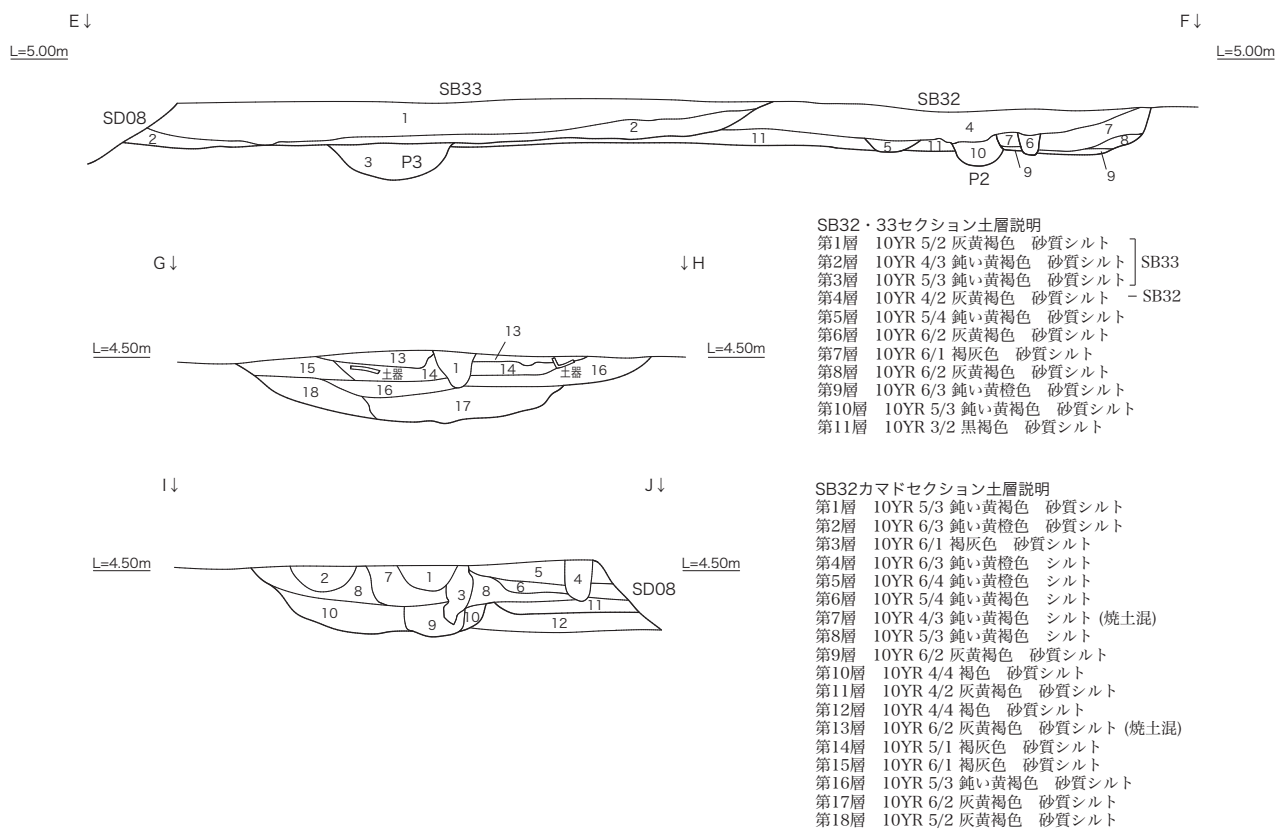
遺 構

確認された建物跡であるが、その後の壁面の詳細な検討から、本来は同第7層のにぶい黄橙色砂質シルト上面から掘り込まれた遺構であると推測された（写真図版参照）。規模は5.30m×4.40mを測り、柱穴P 223～P 234によって構成される。P 234はP 235を切っているので、S B 52は後述するS B 53よりも新しいといえる。柱穴の掘形は隅丸長方形を呈するものが多く、P 223、P 224、P 225、P 226、P 230、P 231、P 234には柱材が残存していた。柱材が遺存しない柱穴についても、土層断面の観察から柱材を抜き取るための穴などが確認できないことから、S B 52の基礎構造は柱を抜き取らないまま朽ちたものと思われる。東西方向の柱間間隔は西から約2.2m・約2.2m、南北方向の柱間間隔は北から約1.8m・約1.8m・約1.7mを測り、概ね等間隔である。柱穴からはわずかな須恵器と古式土師器の小片が

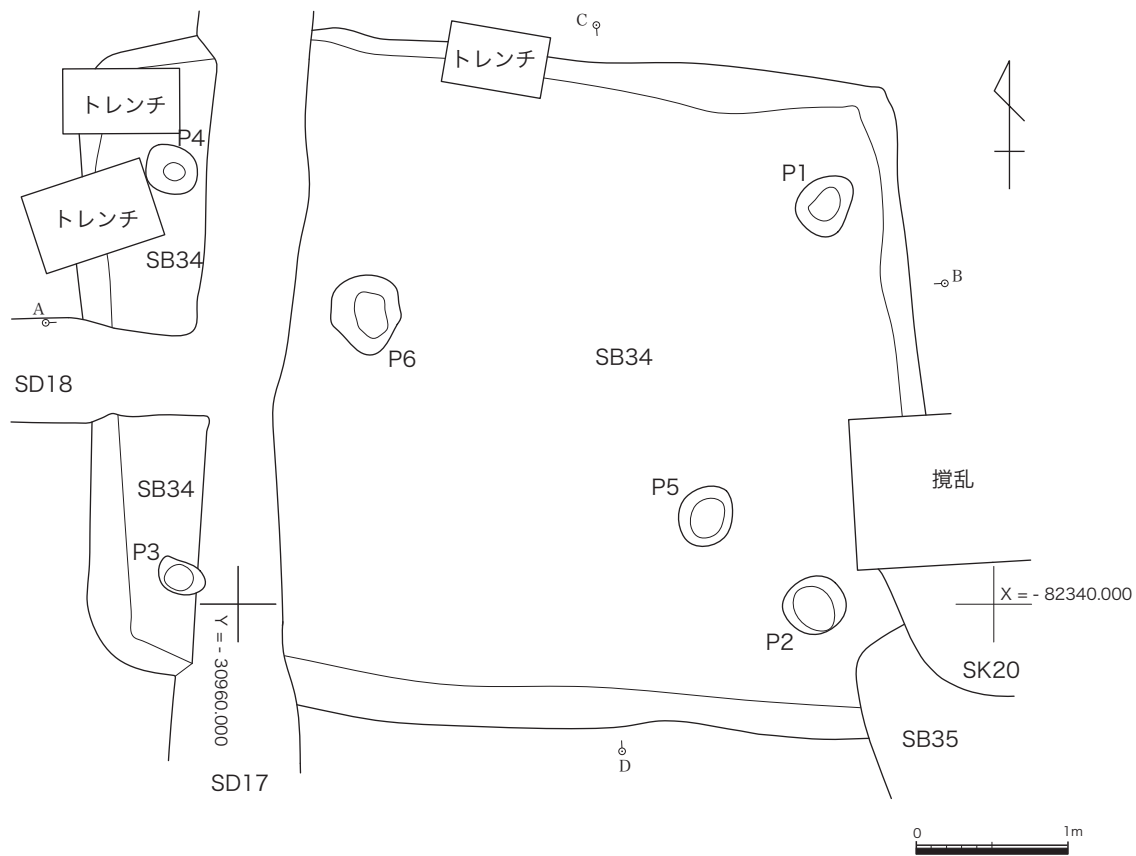
出土しており、遺構の時期は奈良時代前後であることは想定されるが、それ以上詳細な時期の特定は難しい。周囲の遺構配置からみて古代6段階と推定しておきたい。

S B 53（第61・62図） A区西南部に存在する2間×3間の総柱掘立柱建物跡である。S B 52と同様A区の4面目の調査、すなわち基本層序第11層上面で初めて確認された遺構であるが、本来は同第7層上面から掘り込まれた遺構と思われる。規模は4.30m×4.10mを測り、柱穴P 235～P 246によって構成される。P 235はP 234によって切られ、P 244はP 247を、P 245はP 248を、P 246はP 249を、P 242はP 250を切っている。柱穴の掘形は楕円形に近い崩れた隅丸長方形を呈するものが多く、柱材は全く遺存しない。土層断面の観察から明瞭に柱材を抜き取るための穴は確認されないが、S B 53は柱を抜

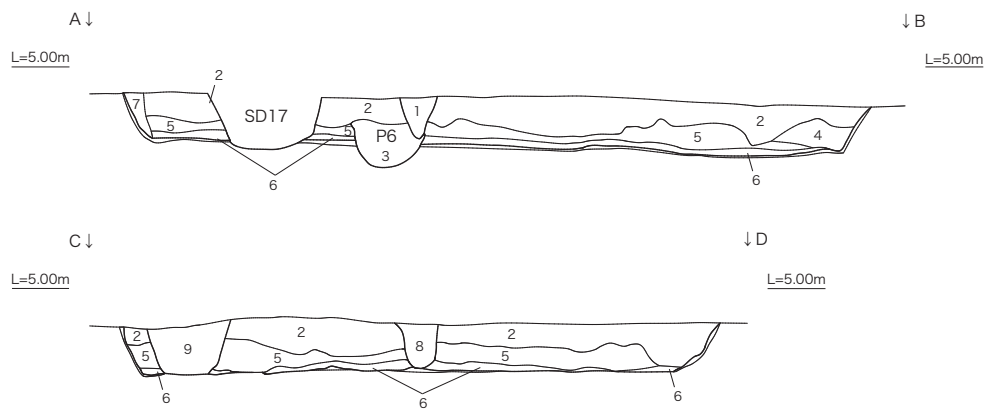
SB32・SB33セクション



第 38 図 竪穴建物跡 S B 32・33 遺構図 (2) (S=1:50)



SB34セクション

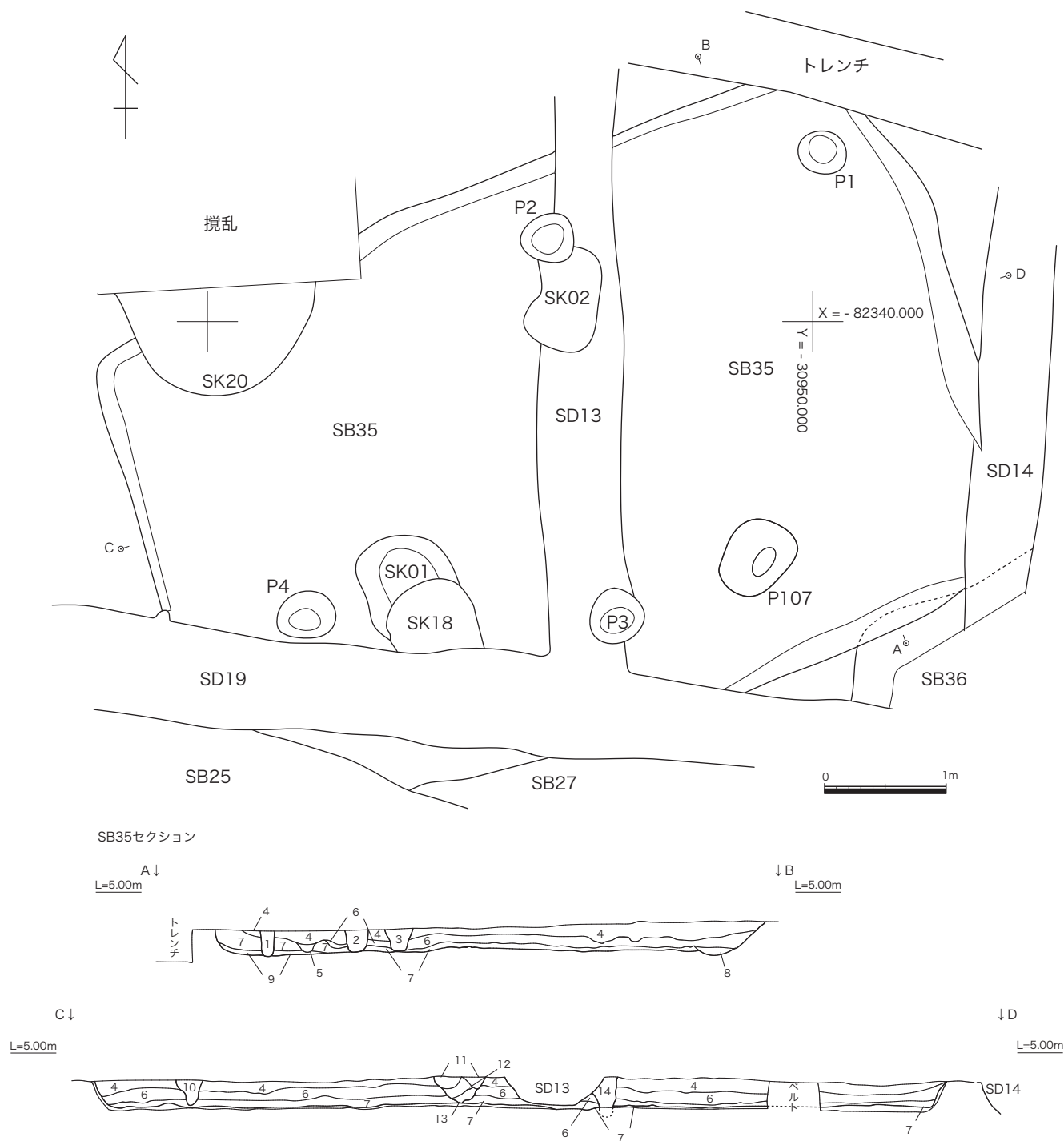


SB34セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト (ビット)
- 第2層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/1 褐灰色 砂質シルトブロック
- 第3層 10YR 6/1 褐灰色 砂質シルト
- 第4層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/1 褐灰色 砂質シルトブロック
- 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第6層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト (貼床)
- 第7層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第8層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質シルト (ビット)
- 第9層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト (ビット)

第 39 図 竪穴建物跡 S B 34 遺構図 (S=1:50)

遺構



SB35セクション

A ↓
L=5.00m

B ↓
L=5.00m

C ↓

D ↓

L=5.00m

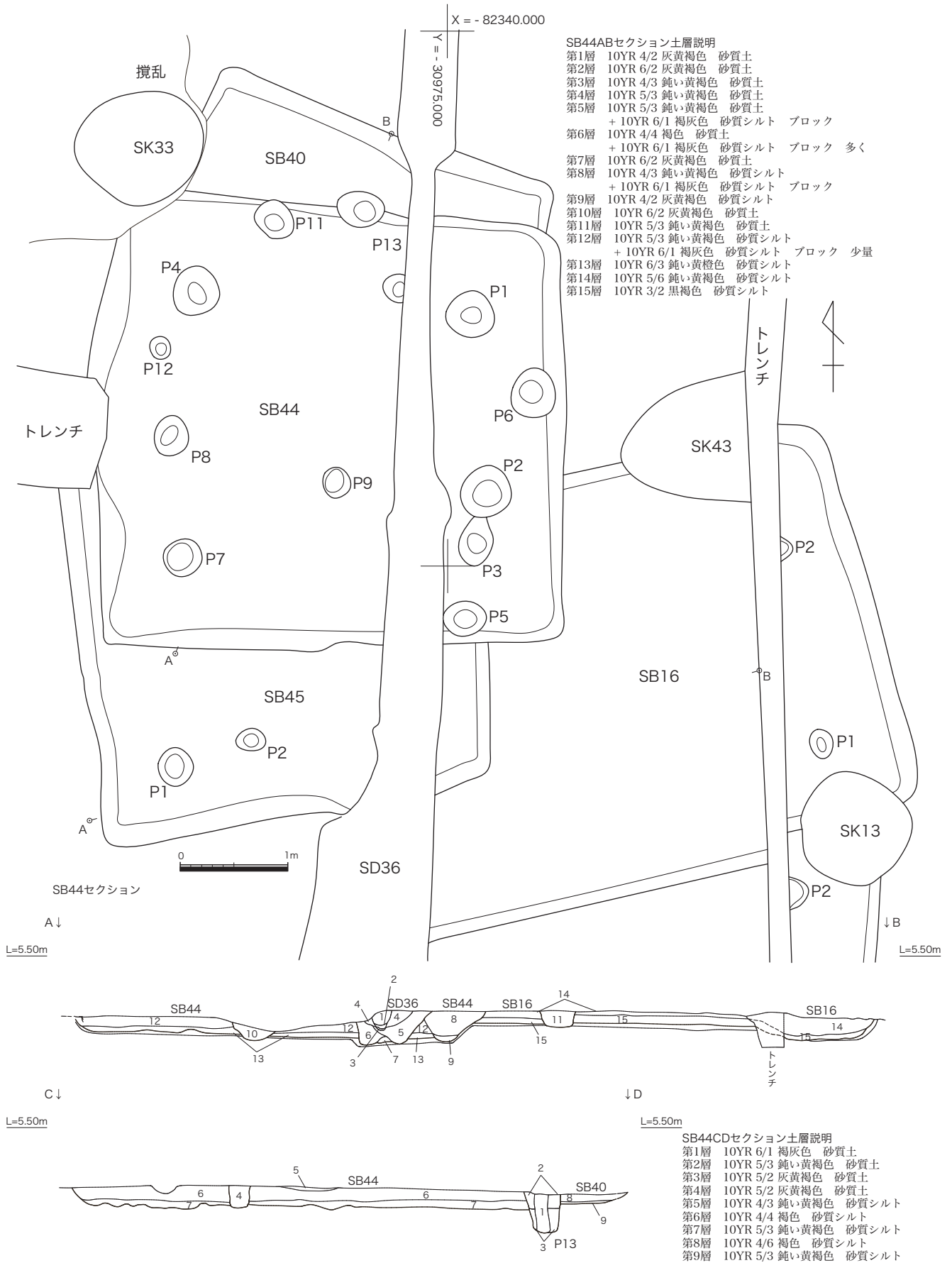
L=5.00m

SB35セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第2層 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
- 第3層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第5層 10YR 4/6 褐色 砂質シルト
- 第6層 10YR 4/4 褐色 砂質シルト
- 第7層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 4/6 褐色 砂質シルトブロック
- 第8層 10YR 6/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第9層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質シルト (貼床)
- 第10層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 第11層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 第12層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第13層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 第14層 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト

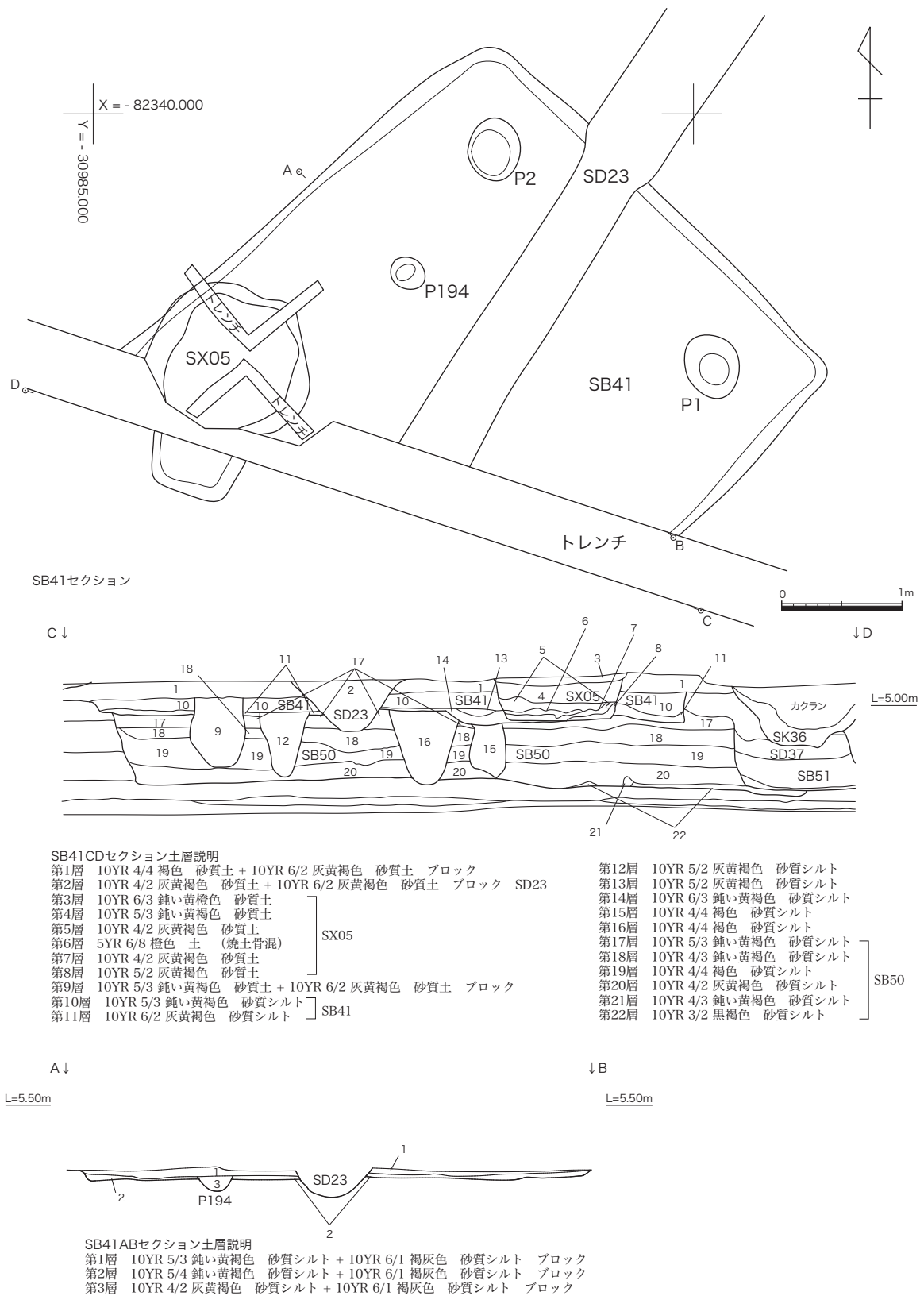
第 40 図 竪穴建物跡 S B 35 遺構図 (S=1:50)

遺 構



第 41 図 縦穴建物跡 S B 40・44・45 遺構図 (S=1:50)

遺構

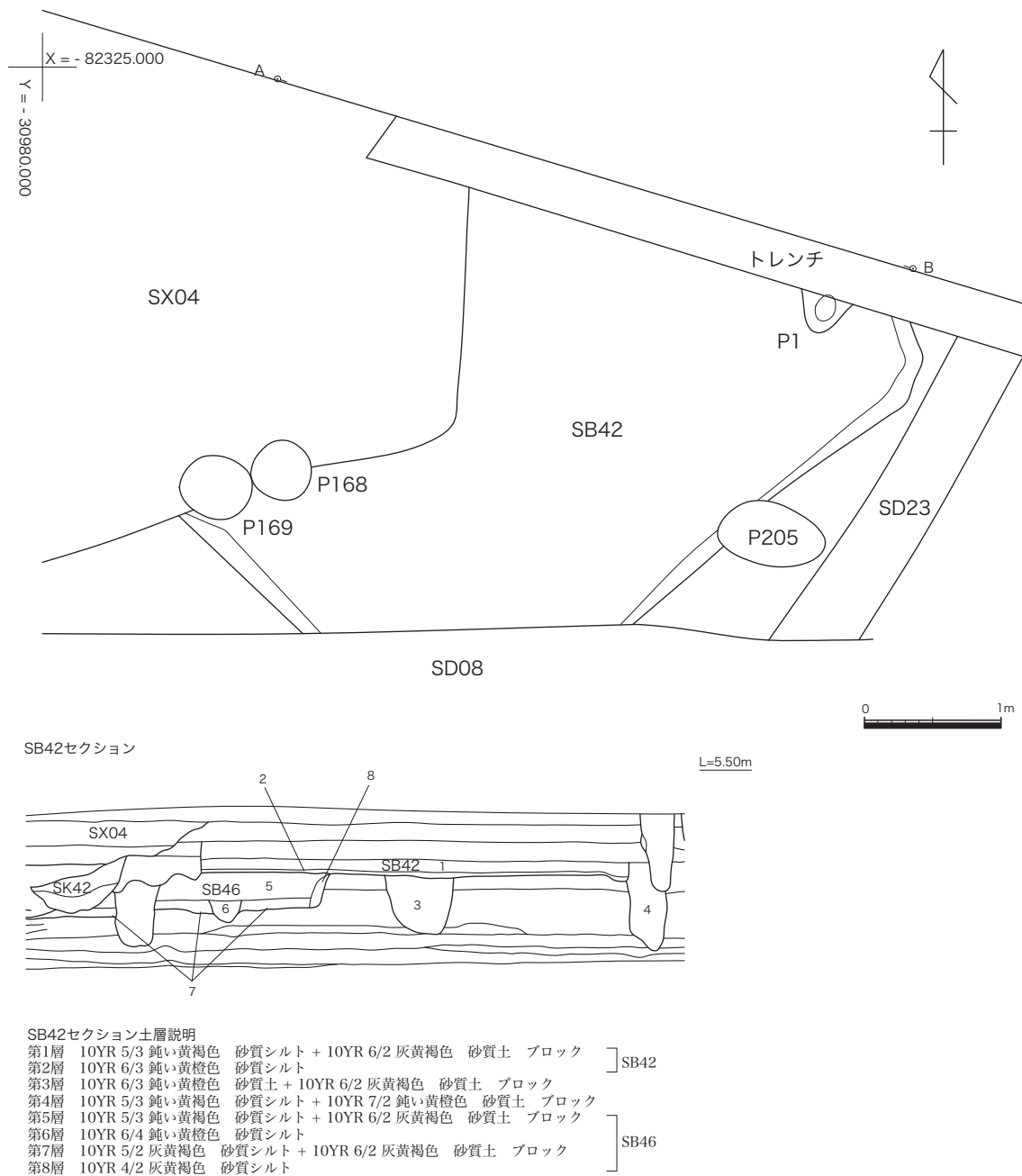


第 42 図 竪穴建物跡 S B 41 遺構図 (S=1:50)

き取られて廃絶した建物跡と思われる。東西方向の柱間間隔は西から概ね約 2.1m・約 2.0m、南北方向の柱間間隔は北から概ね約 1.4m・約 1.3m・約 1.6m を測るが、ややばらつきが認められる。S B 53 に切られる P 247～P 250 の 4 つの柱穴は 1 間×2 間の L 字状に並ぶ柵列（あるいは掘立柱建物跡の一部）ということもできるが、想像をたくましくすれば S B 53 を建てる前に建設が放棄

された柱穴群と考えることもできよう。柱穴からはわずかな須恵器と古式土師器の小片が出土しており、遺構の時期は奈良時代と推測されるが、詳細は不明。周囲の遺構配置からみて古代 5 段階と推定しておく。

S B 66（第 63 図） A 区東南部に所在する 2 間×3 間の掘立柱建物跡である。A 区 4 面目（基本層序第 11 層上面）で確認された建物跡で、本来



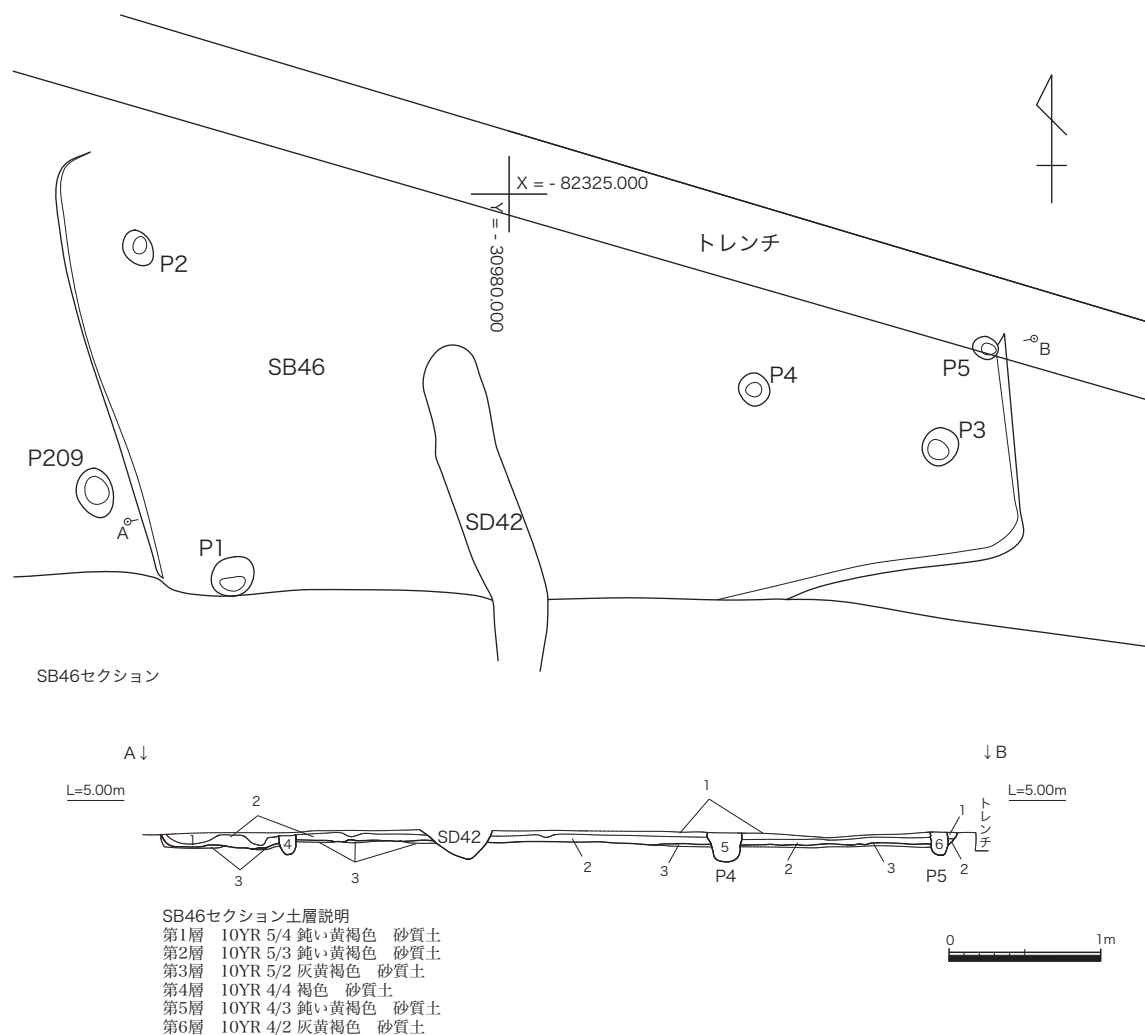
第 43 図 竪穴建物跡 S B 42 遺構図 (S=1:50)

遺 構

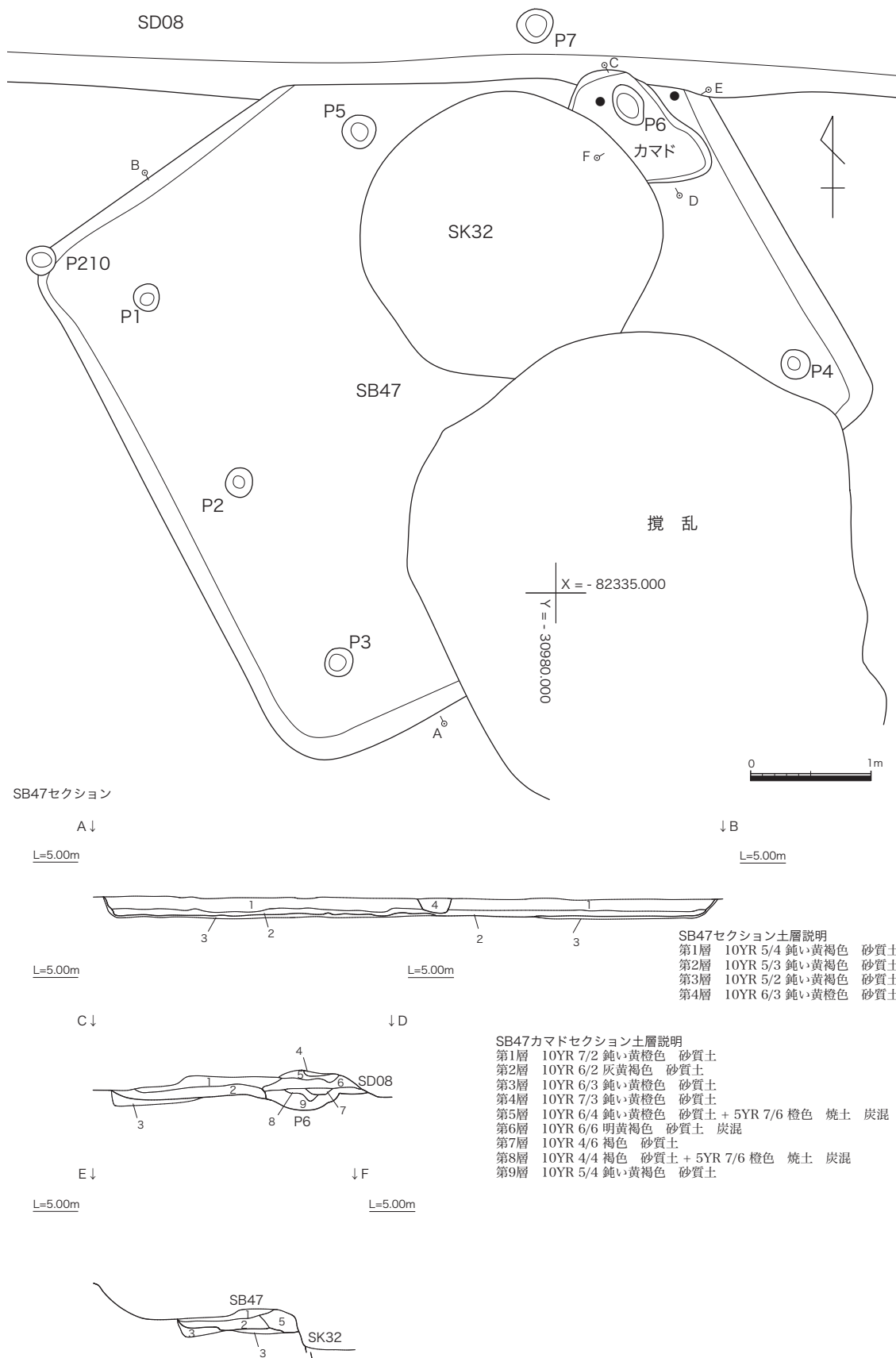
は同第7層上面から掘り込まれた遺構と推測される。規模は6.30m×4.90mを測り、柱穴P 255～P 259およびP 263～P 265によって構成され、南西端の柱穴は調査区外にあって不明で、南辺中央の柱穴は検出できなかった。柱穴の掘形は崩れた隅丸長方形を呈しており、柱材は残存しない。北辺の柱間間隔は西から約2.2m・約2.7m、東辺の柱間間隔は北から約2.3m・約2.0m・約2.0mを測る。遺構の時期は奈良時代頃と思われるが、詳細な時期は不明。古代5段階と想定しておく。

S B 02 (第68・69図) B区中央部で検出された2間×3間の掘立柱建物跡である。B区の2面目の調査、すなわち基本層序第6層相当の標高約

5.00mの高さで確認された建物跡であるが、正確にどの面から掘り込まれていたかは明らかにできなかった。規模は6.15m×4.29mを測り、柱穴P 85～P 90、P 92、P 97、P 98、P 102によって構成される。P 102はP 91に切られている。柱穴の掘形は隅丸長方形を呈するものが多く、柱材は残存していない。柱穴の土層断面の観察から、上位の堆積はブロック状の埋め土で柱材を抜き取るための穴である可能性が考えられると思われる。北辺の柱間間隔は西から約2.0m・約1.8m・約2.0m、東辺の柱間間隔は北から約2.1m・約1.7mを測る。P 86などの柱穴からは須恵器と古式土師器の小片が出土しているが、鎌倉時代の溝S D 13とS D 19に切れ、古代7段階の竪穴建



第44図 竪穴建物跡S B 46 遺構図 (S=1:50)



第 45 図 竪穴建物跡 S B 47 遺構図 (S=1:50)

遺 構

物跡 S B 06・S B 10 を切る状況からみて、遺構の時期は古代 8 段階に比定される。

S A 01 (第 63 図) A 区東部に位置する 2 間分の掘立柱柵跡である。A 区 4 面目 (基本層序第 11 層上面) で確認され、本来は同第 7 層上面から掘り込まれた遺構と推測される。規模は 3.30m を測り、柱穴 P 275～P 277 によって構成される。柱穴の掘形は崩れた隅丸長方形を呈しており、柱材は残存しない。遺構の時期は奈良時代頃と思われるが、S D 46 との重複関係を含めて詳細な時期は不明。古代 6 段階と推定しておく。

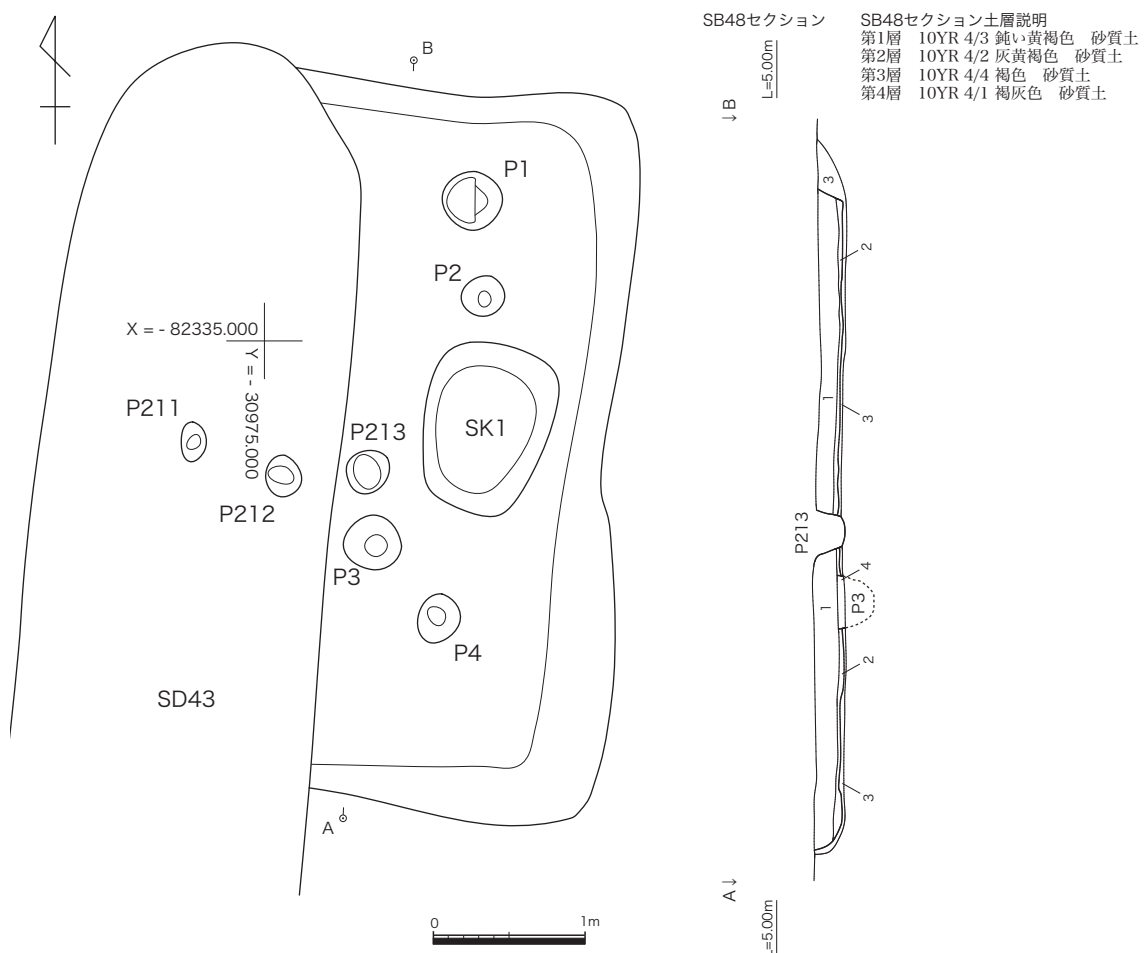
S A 02 (第 63 図) A 区東部から B 区西部で検出された 3 間分の掘立柱柵跡である。A 区 4 面目 (基本層序第 11 層上面) で確認され、本来は同第 7 層上面から掘り込まれた遺構と推測され

る。規模は 8.20m を測り、柱穴 S K 52 と P 252～P 254 によって構成される。柱穴の掘形は崩れた楕円形を呈しており、柱材は残存しない。遺構の時期は奈良時代頃と思われるが、詳細な時期は不明。古代 6 段階と推定しておく。

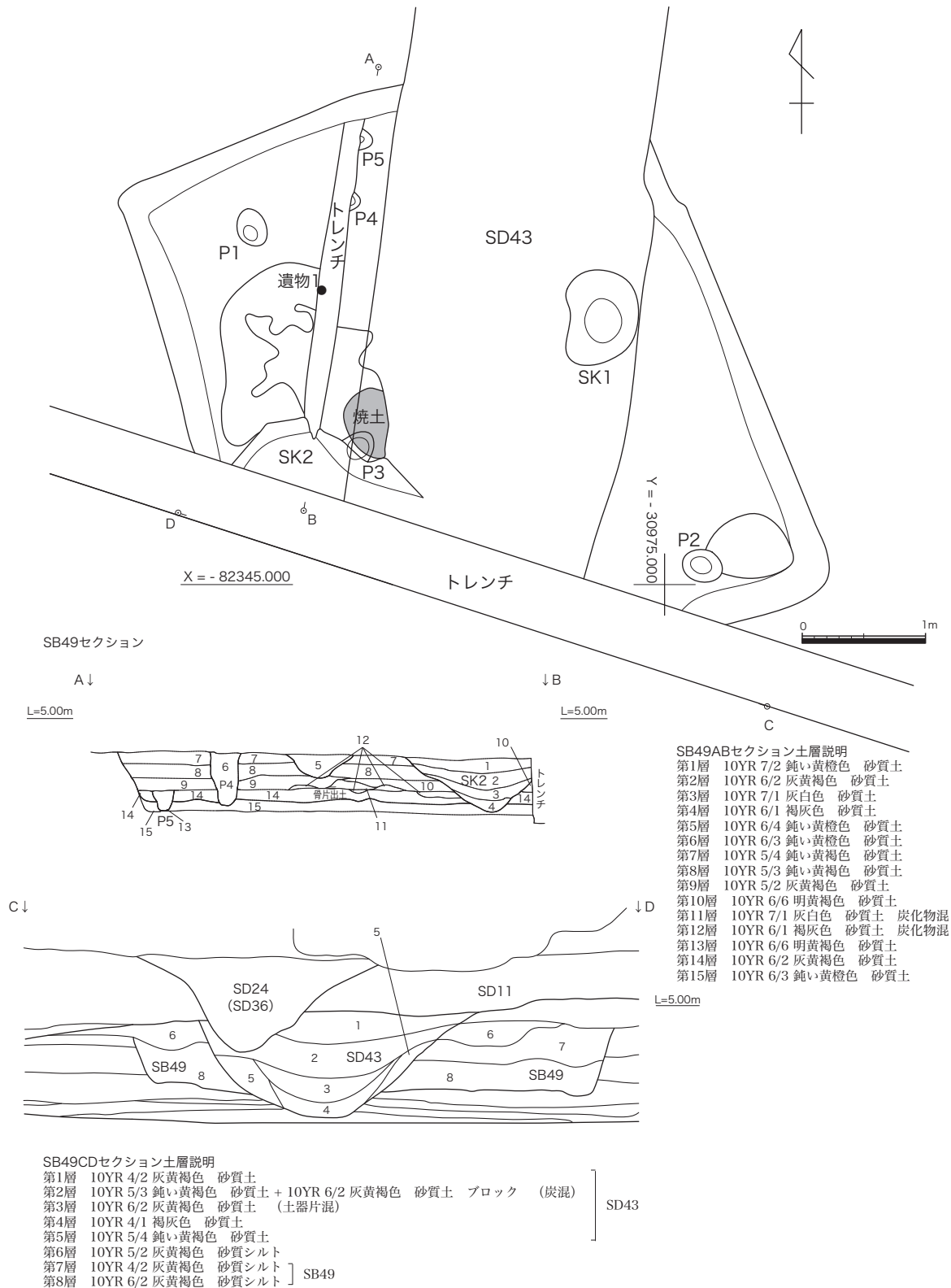
(3) 溝

S D 43 (第 64 図) A 区中央部でおおよそ南北方向に確認された幅約 2.03m、深さ約 0.59m の溝である。南端部が調査区外に伸び、全長は不明。S B 40 などの下位で検出され、S B 48・S B 49 を切ることなどからみて、古代 6 段階の時期と推測される。

S D 46 (第 64 図) A 区 4 面中央部で検出された幅約 1.65m、深さ約 0.21m の溝である。本来検出されるべき遺構面よりも下げた面で確認され

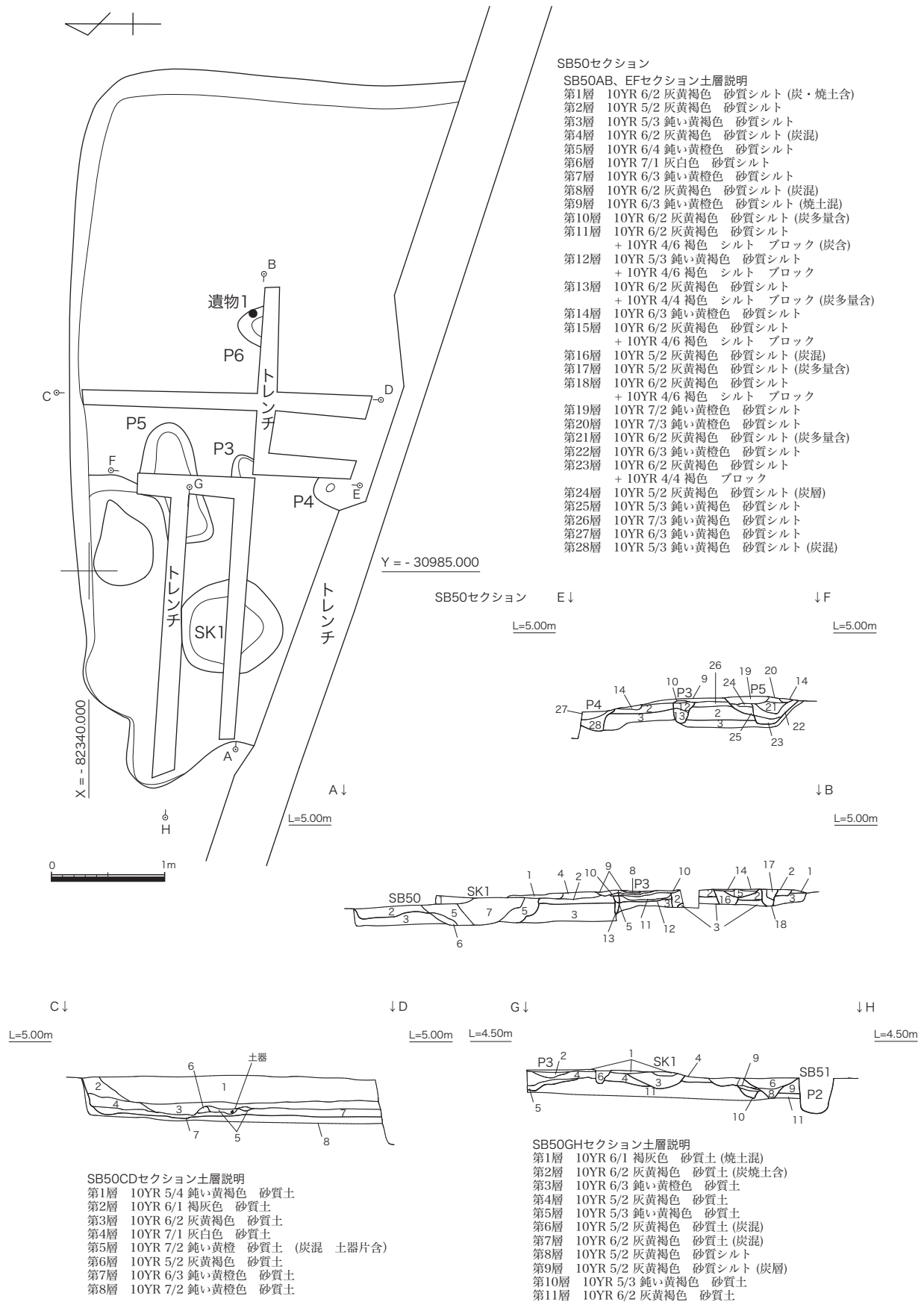


第 46 図 竪穴建物跡 S B 48 遺構図 (S=1:50)



第 47 図 竪穴建物跡 S B 49 遺構図 (S=1:50)

遺構



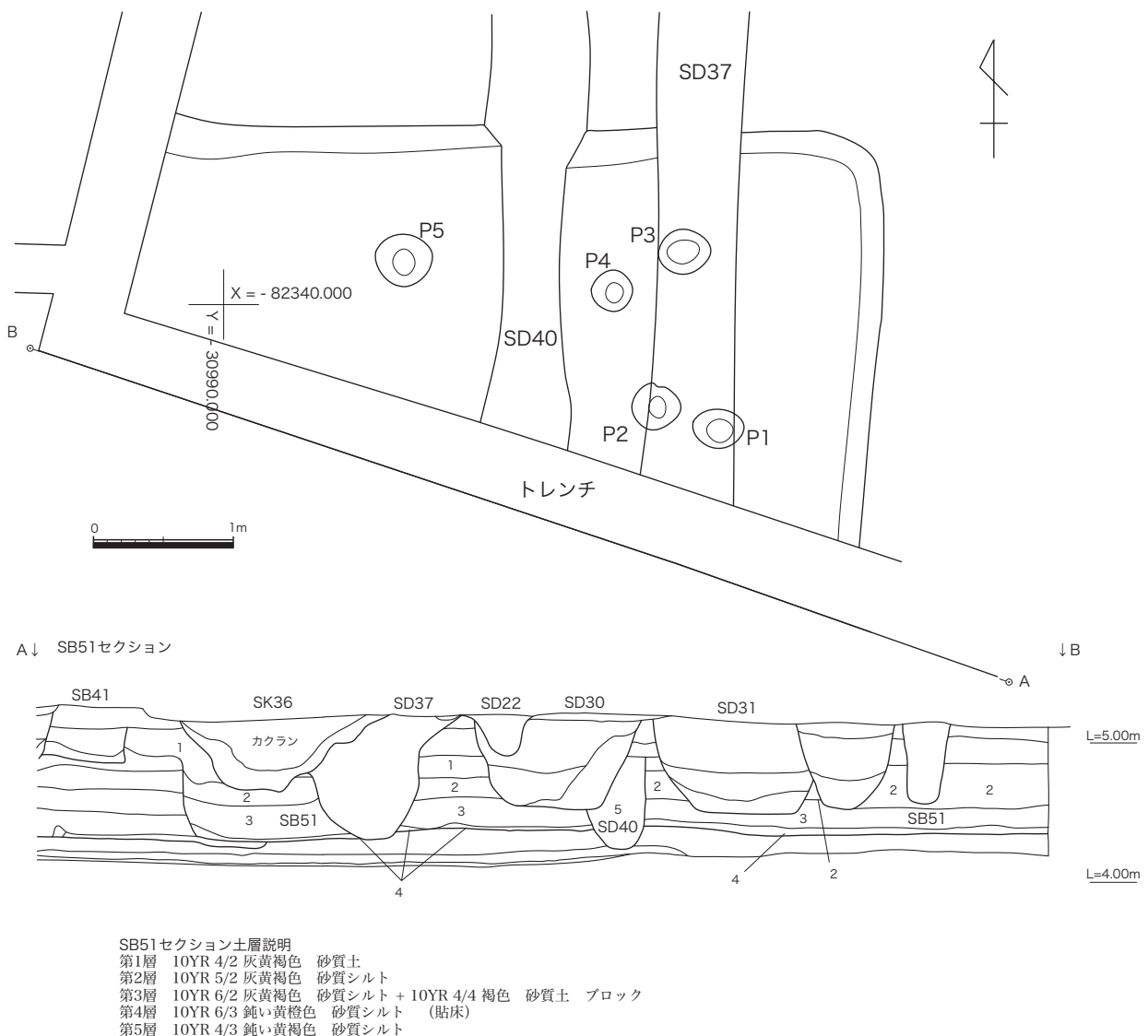
第 48 図 竪穴建物跡 S B 50 遺構図 (S=1:50)

た遺構で、西端部の状況は詳らかではない。上位で古代1段階のS B 32などが検出されているにも拘らず、出土遺物からみると遺構の時期は奈良時代頃と思われるが、詳細な時期は不明である。

(4) 土坑

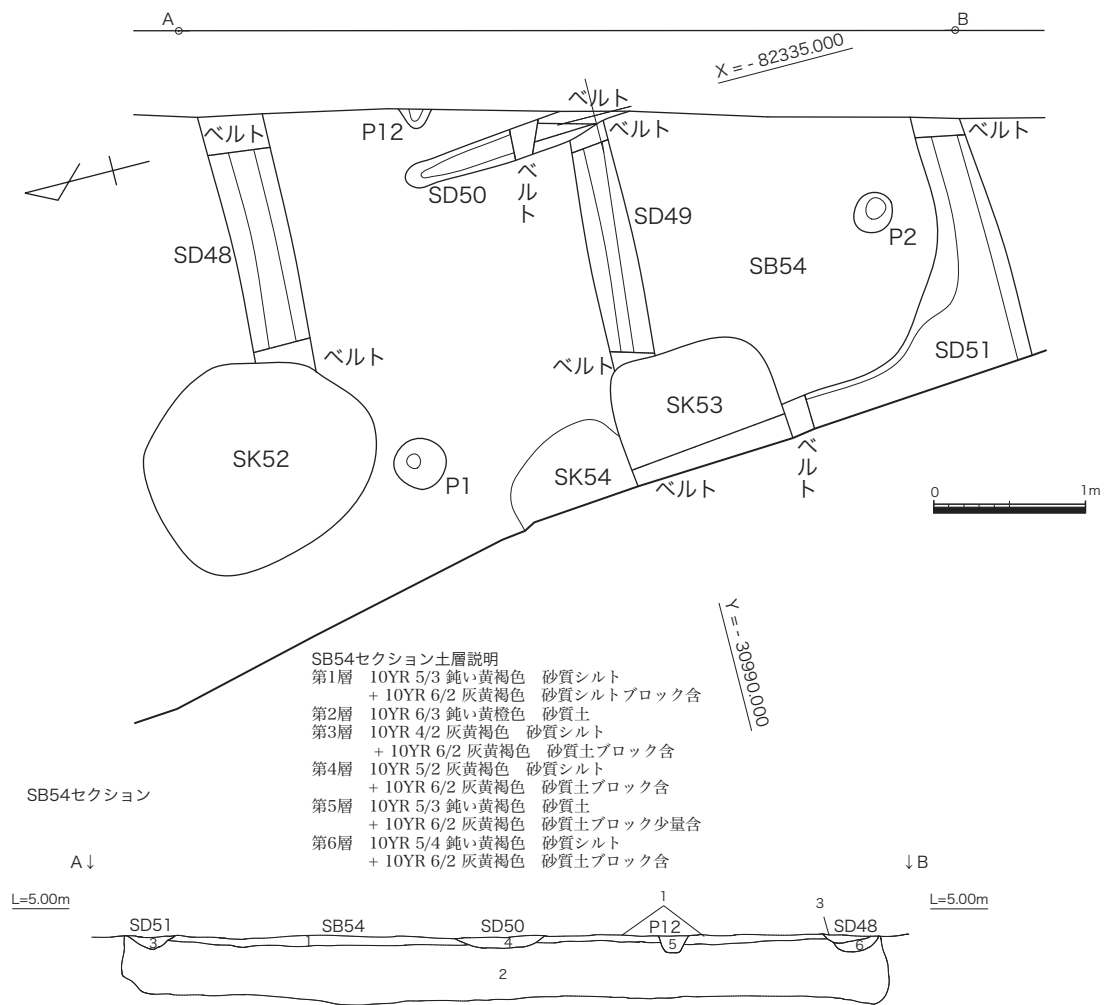
S K 20 (第 65 図) B 区中央部に位置する平面形が1.40m×0.91mの楕円形で、深さ0.72mを測る土坑である。底部は平坦となっており、内部から須恵器甕が破損した状態で出土している。S B 34とS B 35を切る形で検出され、時期は8世紀代と推測される。

S K 66 (第 52 図) C 区中央部に所在する土坑で、下位にS B 58が拡がっている。平面形が1.30m×0.85mの歪な楕円形で、最深部で深さ0.50mを測る。内部から須恵器・土師器甕・製塩土器などが多数出土しており、高蔵寺2号窯式期のまとまった資料であると思われる。古代4段階。
S K 67 C 区中央部にある1.50m×1.30mの楕円形土坑で、深さ0.45mを測る土坑である。黒褐色砂質土と灰黄褐色砂質土が互層になって堆積していた。S B 63を切る形で検出され、内部から出土した遺物から、古代4段階と推測される。

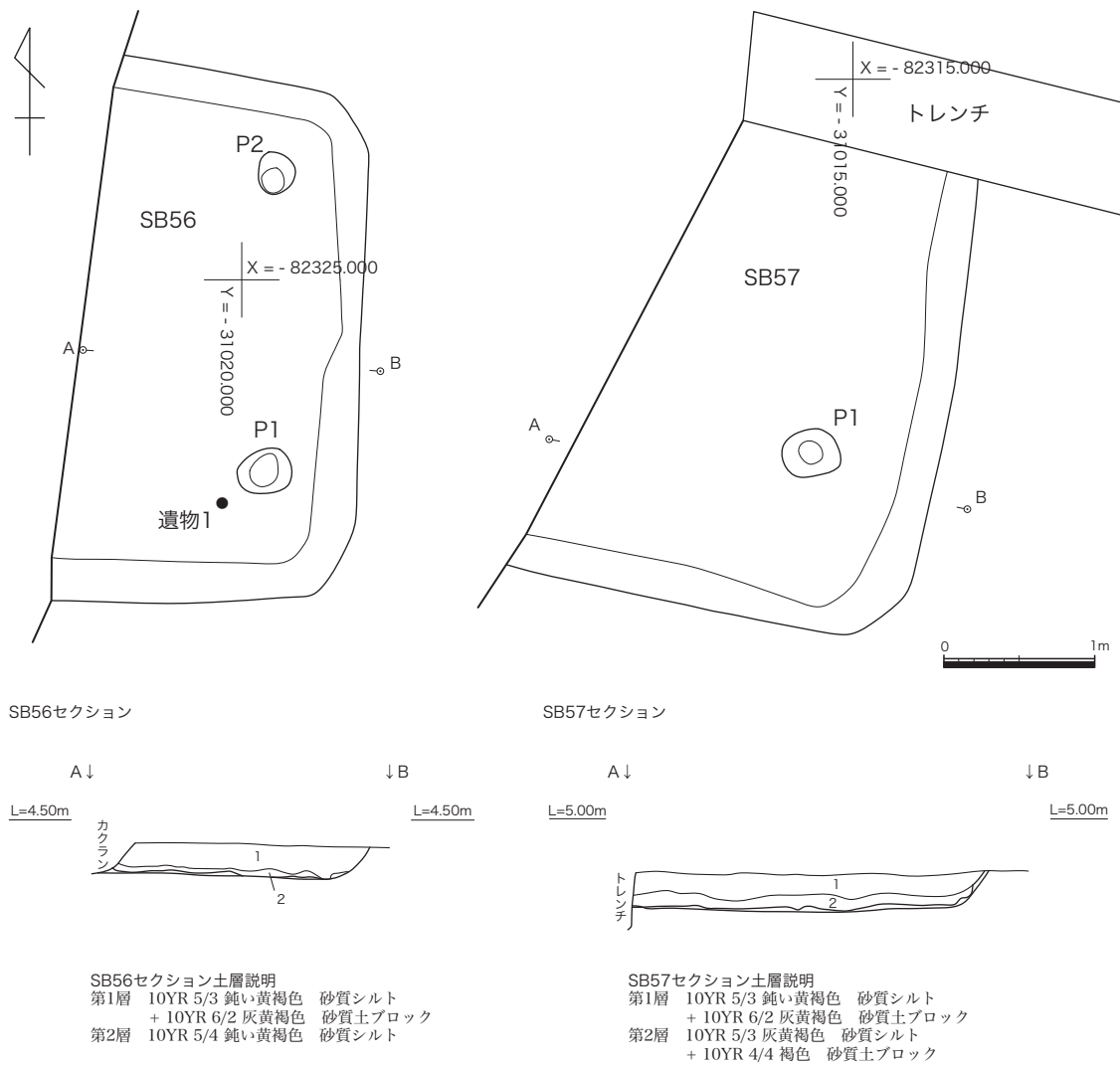


第 49 図 竪穴建物跡 S B 51 遺構図 (S=1:50)

遺 構

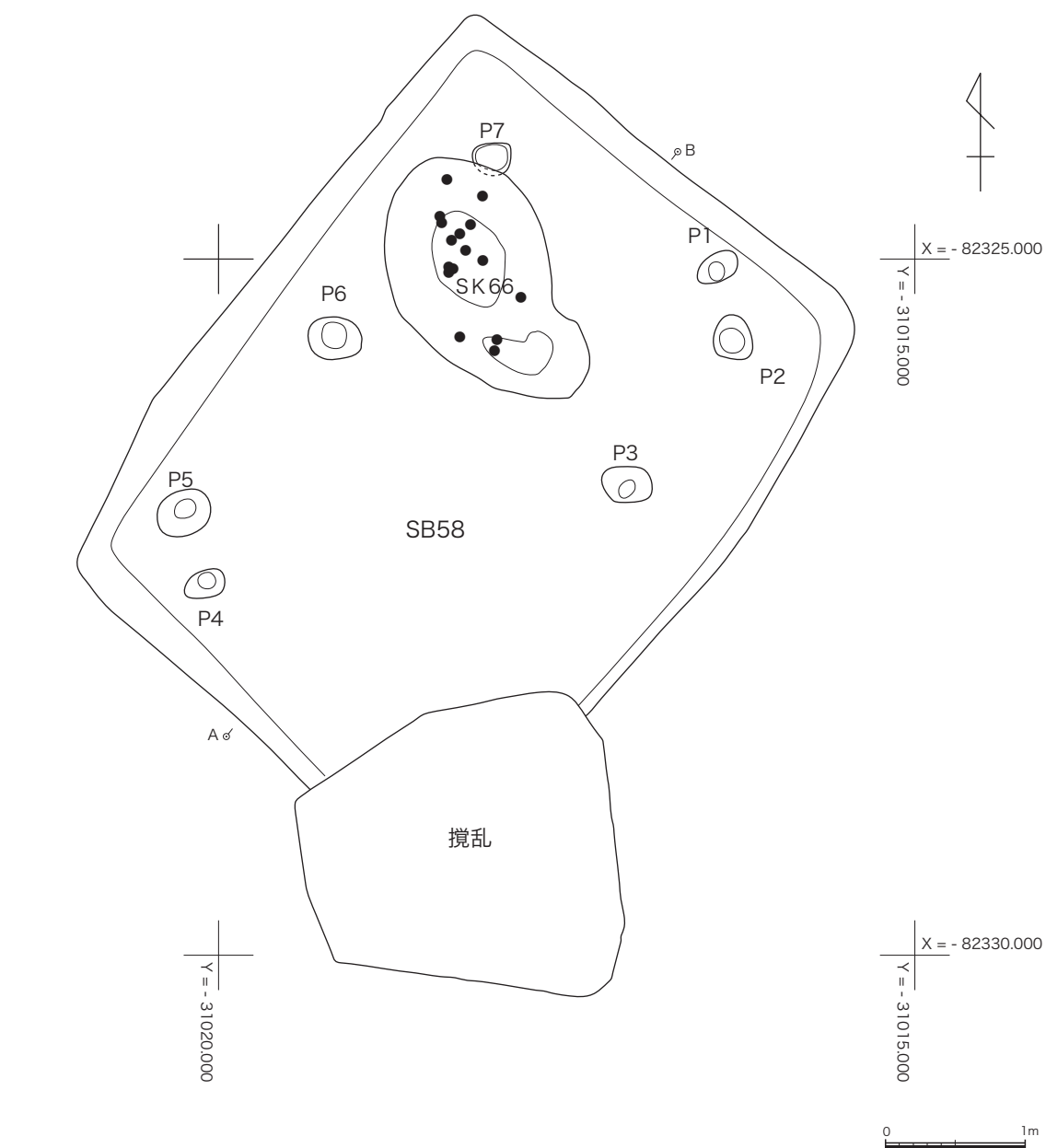


第 50 図 竪穴建物跡 S B 54 遺構図 (S=1:50)

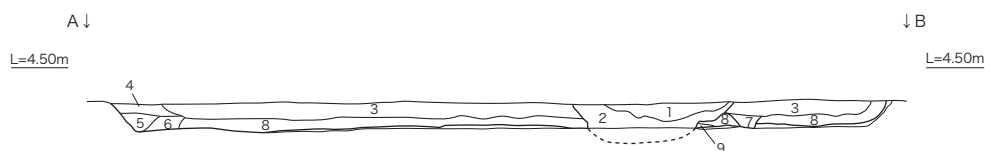


第 51 図 竪穴建物跡 S B 56・57 遺構図 (S=1:50)

遺 構



SB58セクション



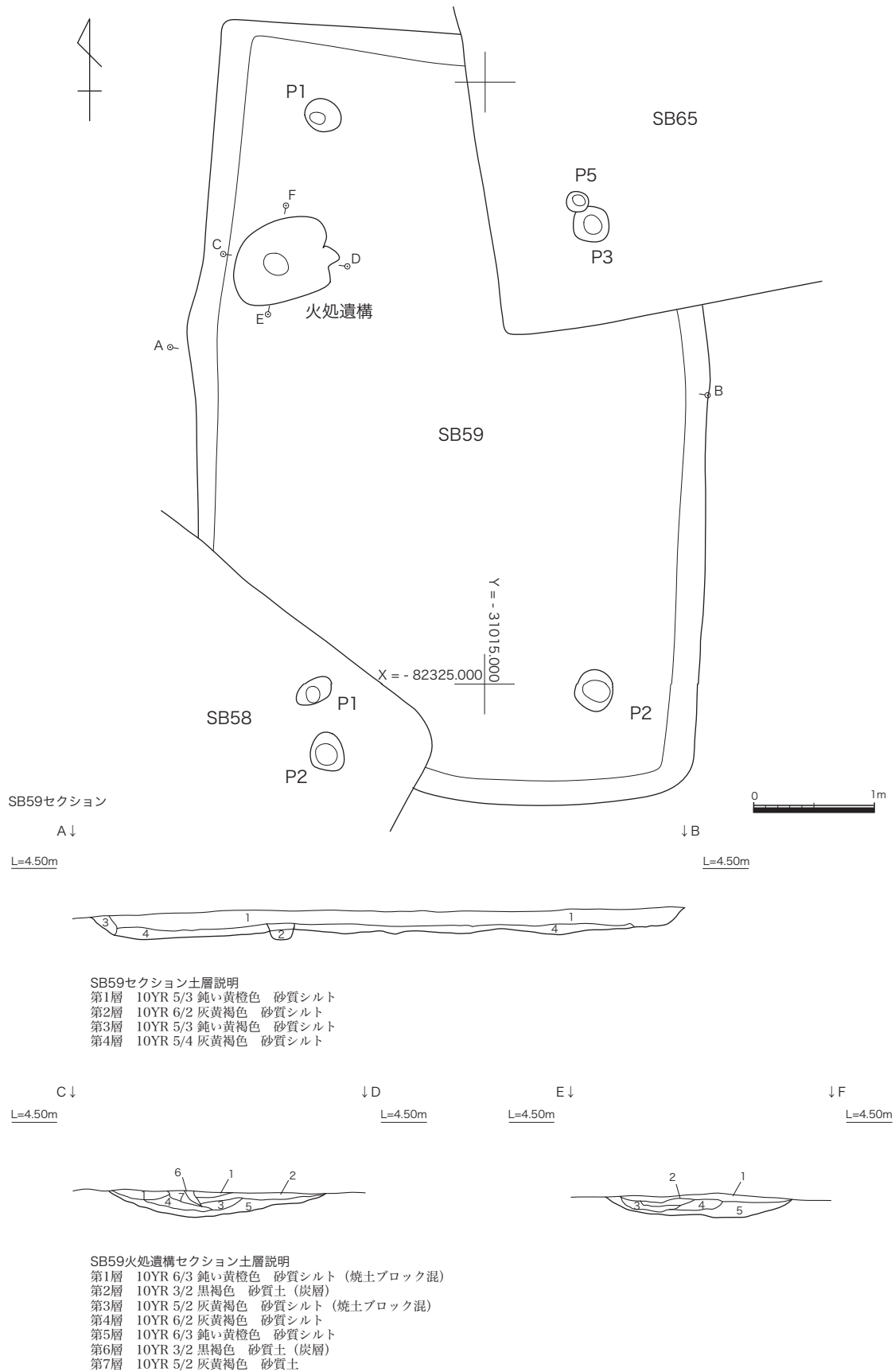
SB58セクション土層説明

- | | | | |
|-----|----------------|-----------------------|--------------|
| 第1層 | 10YR 6/4 鈍い黄褐色 | 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 | 砂質土大ブロック |
| 第2層 | 10YR 6/3 鈍い黄褐色 | 砂質土 | (炭多量に入る) |
| 第3層 | 10YR 3/3 鈍い黄褐色 | 砂質シルト | |
| 第4層 | 10YR 6/2 灰黄褐色 | 砂質シルト | |
| 第5層 | 10YR 5/2 灰黄褐色 | 砂質シルト | |
| 第6層 | 10YR 5/4 鈍い黄褐色 | 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 | 砂質土ブロック |
| 第7層 | 10YR 6/2 灰黄褐色 | 砂質土 | |
| 第8層 | 10YR 5/4 鈍い黄褐色 | 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 | 砂質土ブロック多量に含む |
| 第9層 | 10YR 5/2 灰黄褐色 | 砂質シルト | (炭化物含) |

SB58内遺構埋土一覧

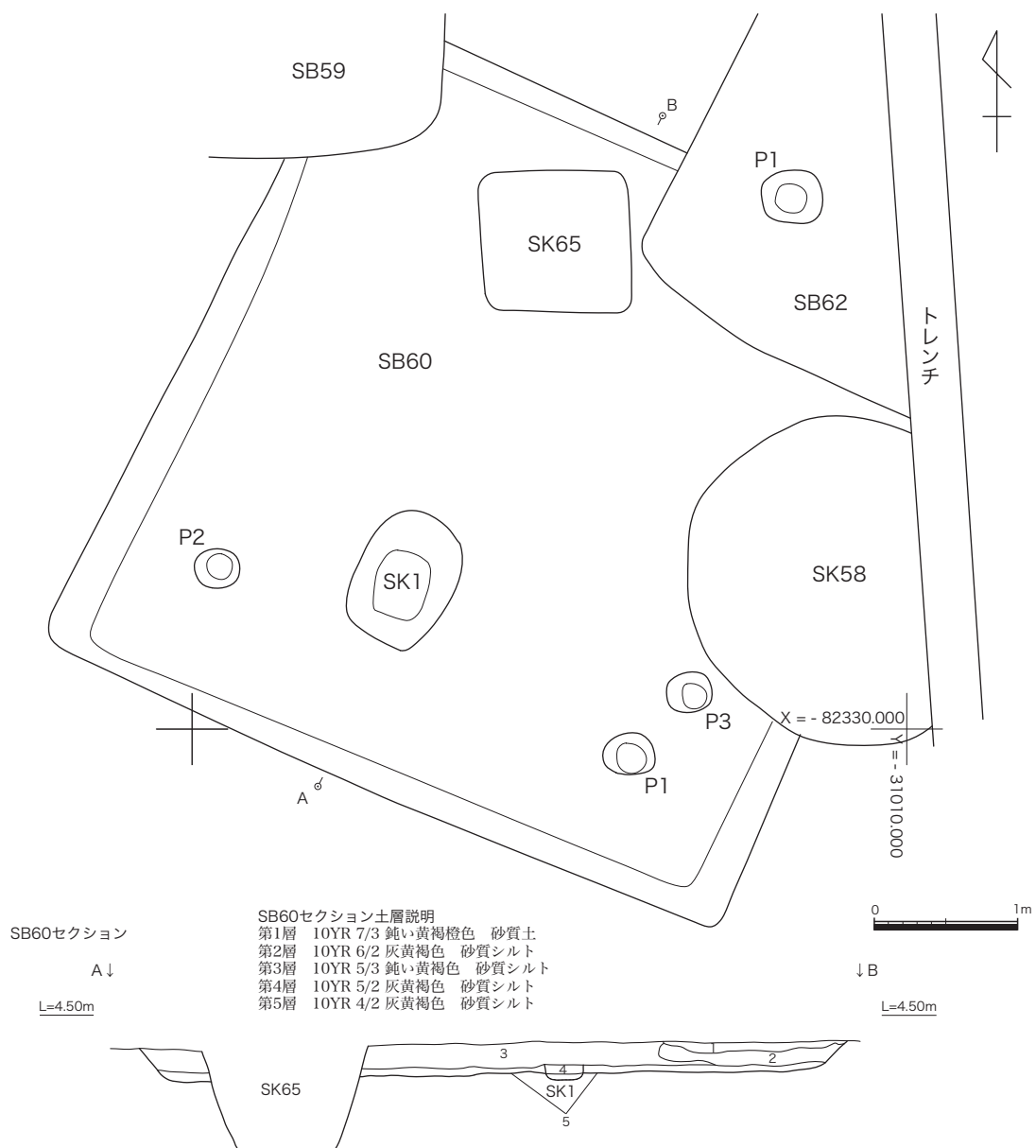
- | | | |
|----|-----------------|-------|
| P1 | 10YR 6/3 にぶい黄褐色 | 砂質シルト |
| P2 | 10YR 6/3 にぶい黄褐色 | 砂質シルト |
| P3 | 10YR 6/3 にぶい黄褐色 | 砂質シルト |
| P4 | 10YR 5/6 黄褐色 | 砂質シルト |
| P5 | 10YR 5/6 黄褐色 | 砂質シルト |
| P6 | 10YR 6/3 にぶい黄褐色 | 砂質シルト |
| P7 | 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | 砂質シルト |

第 52 図 竪穴建物跡 S B 58 遺構図 (S=1:50)

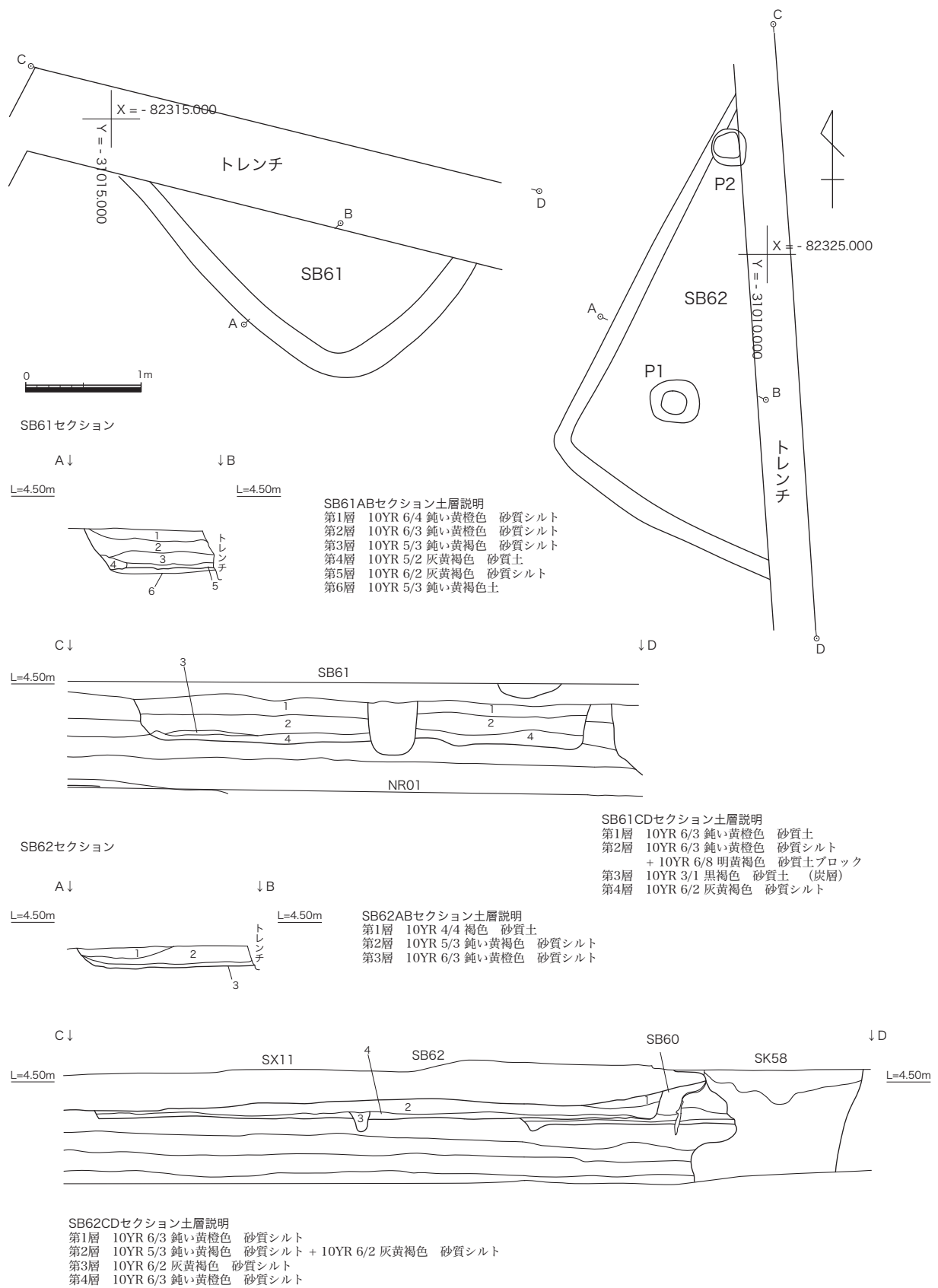


第 53 図 竪穴建物跡 S B 59 遺構図 (S=1:50)

遺 構

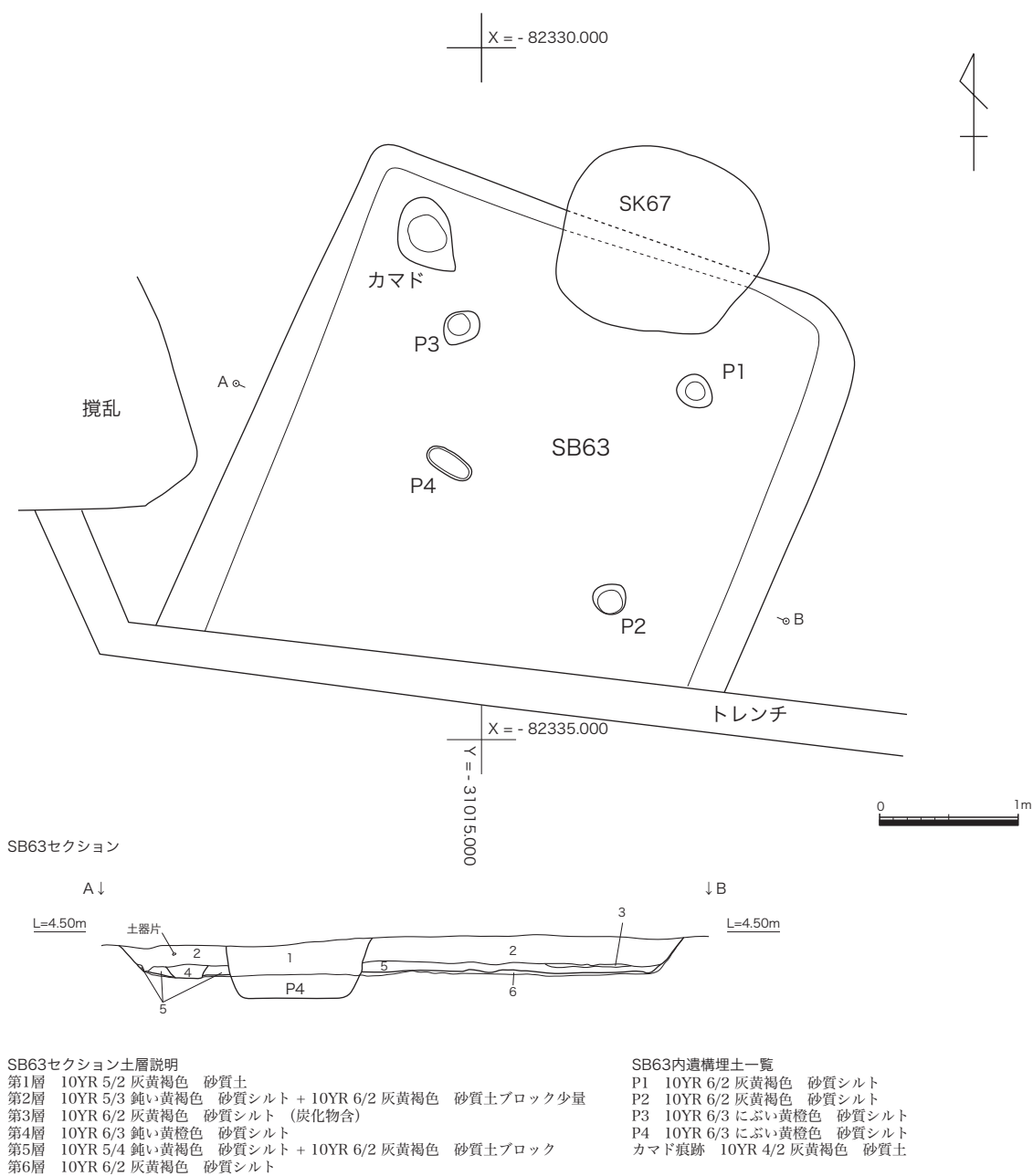


第 54 図 竪穴建物跡 S B 60 遺構図 (S=1:50)

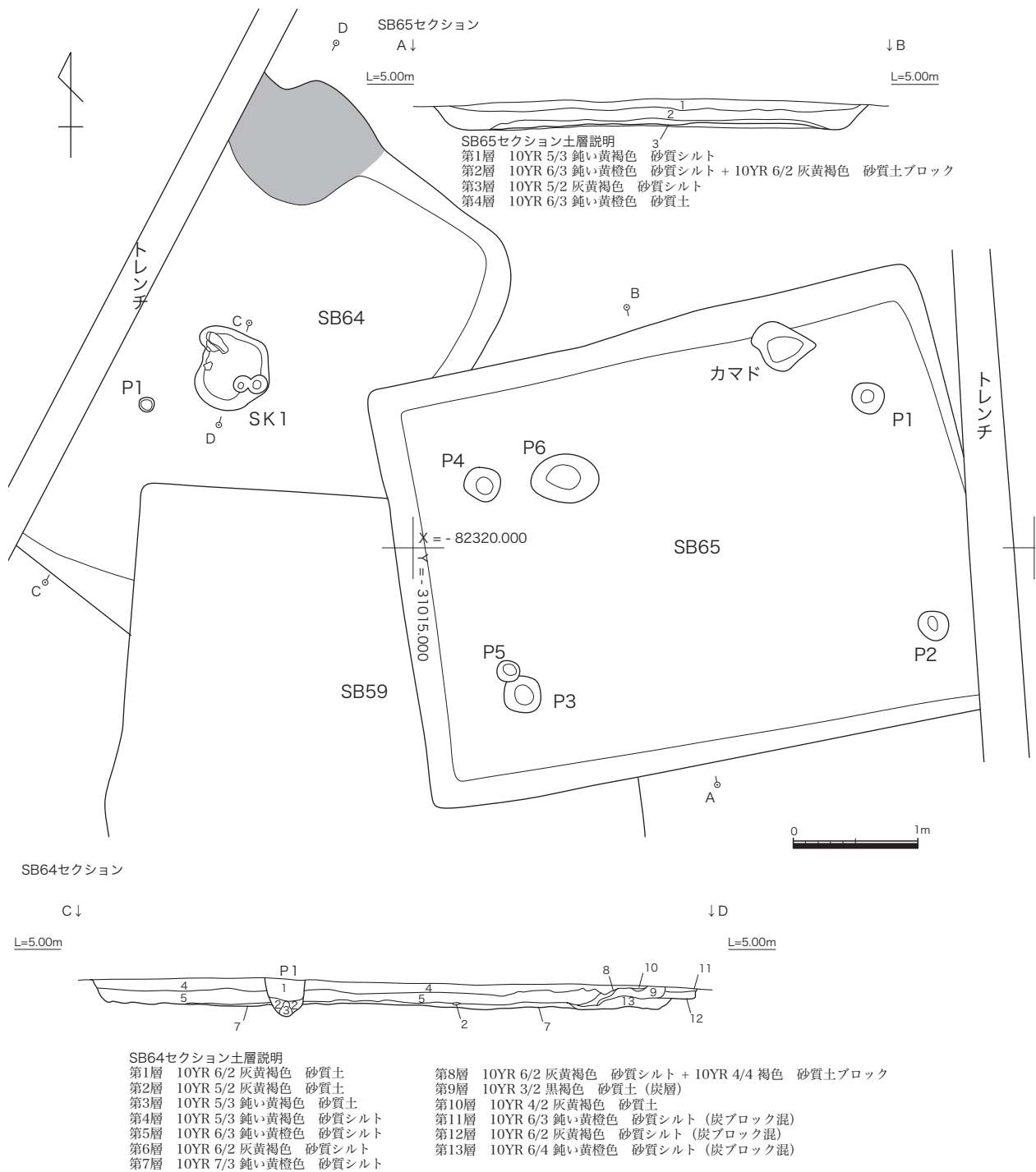


第 55 図 竪穴建物跡 S B 61・62 遺構図 (S=1:50)

遺 構

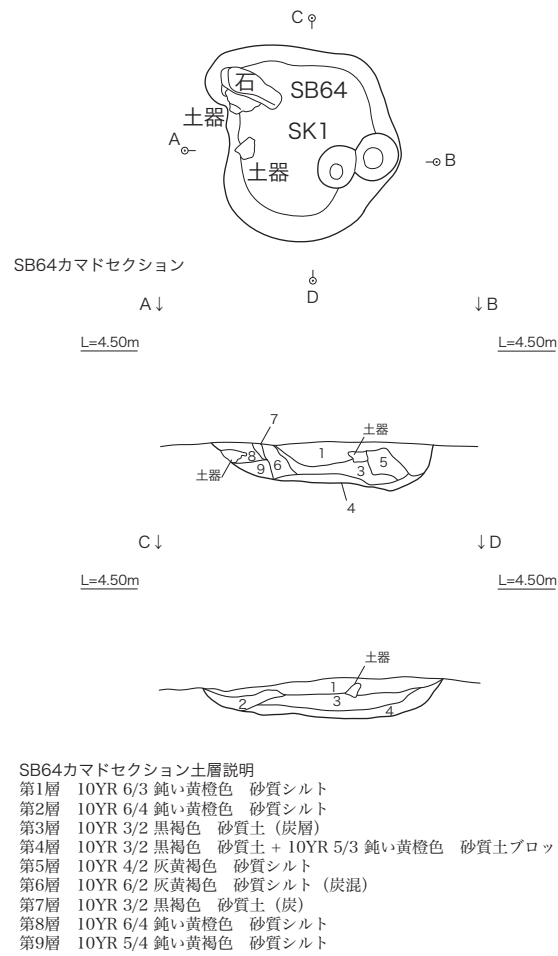


第 56 図 竪穴建物跡 S B 63 遺構図 (S=1:50)

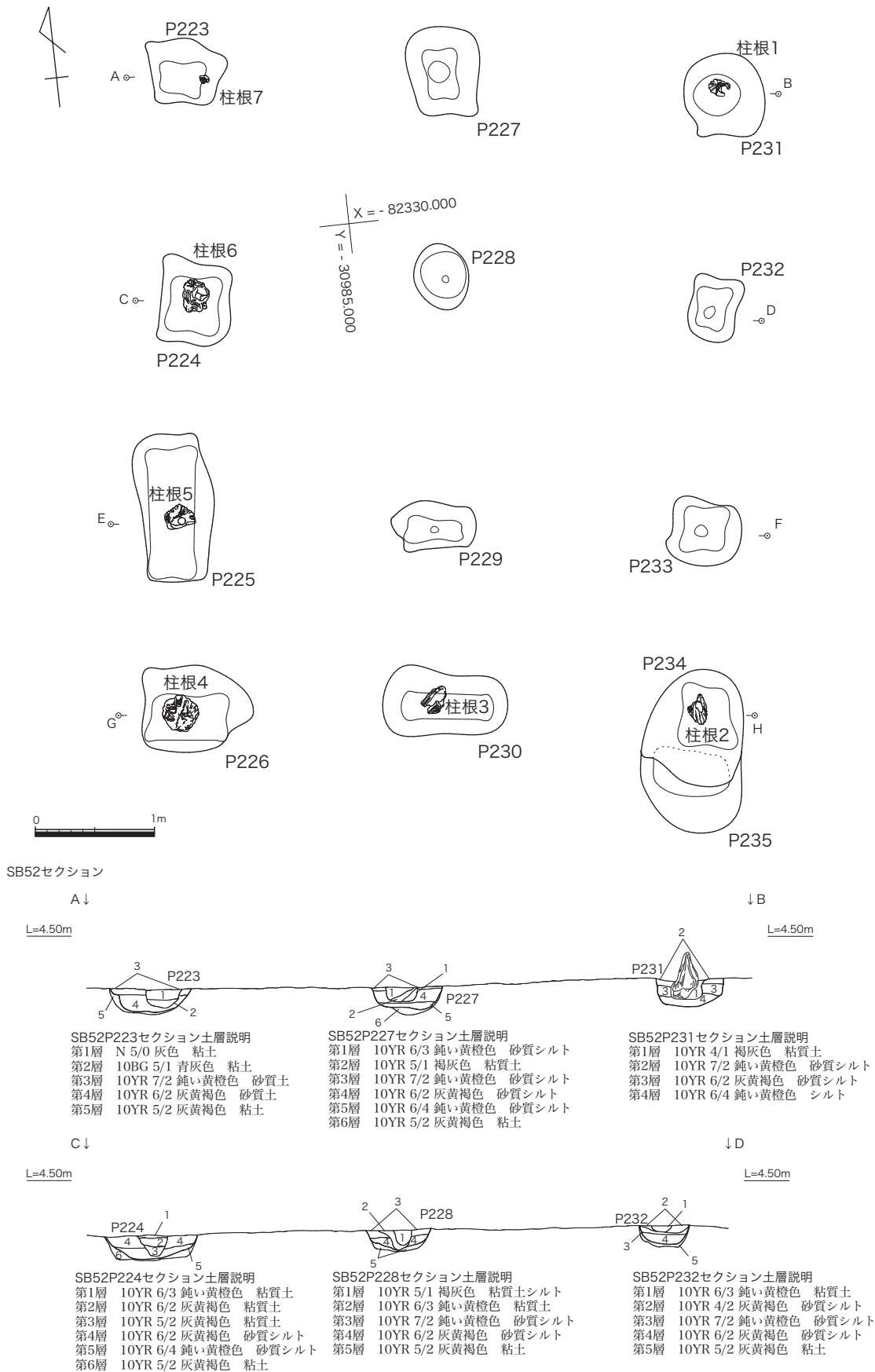


第 57 図 竪穴建物跡 S B 64・65 遺構図 (1) (S=1:50)

遺 構



第 58 図 竪穴建物跡 S B 64・65 遺構図 (2)

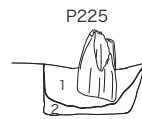


第 59 図 掘立柱建物跡 S B 52 遺構図 (1) (S=1:50)

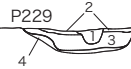
遺 構

SB52セクション
E ↓

L=4.50m



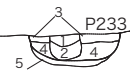
SB52P225セクション土層説明
第1層 10BG 5/1 青灰色 砂質シルト
第2層 N 3/1 暗灰色 粘土



SB52P229セクション土層説明
第1層 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粘質土
第2層 5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質シルト
第3層 7.5GY 5/1 緑灰色 砂質シルト
第4層 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粘土

↓ F

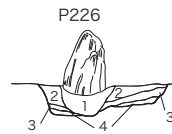
L=4.50m



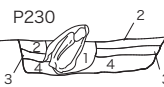
SB52P233セクション土層説明
第1層 10YR 5/6 黄褐色 粘質土
第2層 10YR 3/1 褐灰色 年質土
第3層 10YR 7/2 鈍い黄橙色 砂質シルト
第4層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト
第5層 10YR 5/2 灰黄褐色 粘土

G ↓

L=5.00m



SB52P226セクション土層説明
第1層 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粘質土
第2層 5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質シルト
第3層 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト
第4層 7.5GY 5/1 緑灰色 砂質シルト



SB52P230セクション土層説明
第1層 5GY 5/1 オリーブ灰色 粘質シルト
第2層 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト
第3層 5GY 3/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト
第4層 7.5GY 5/1 緑灰色 砂質シルト

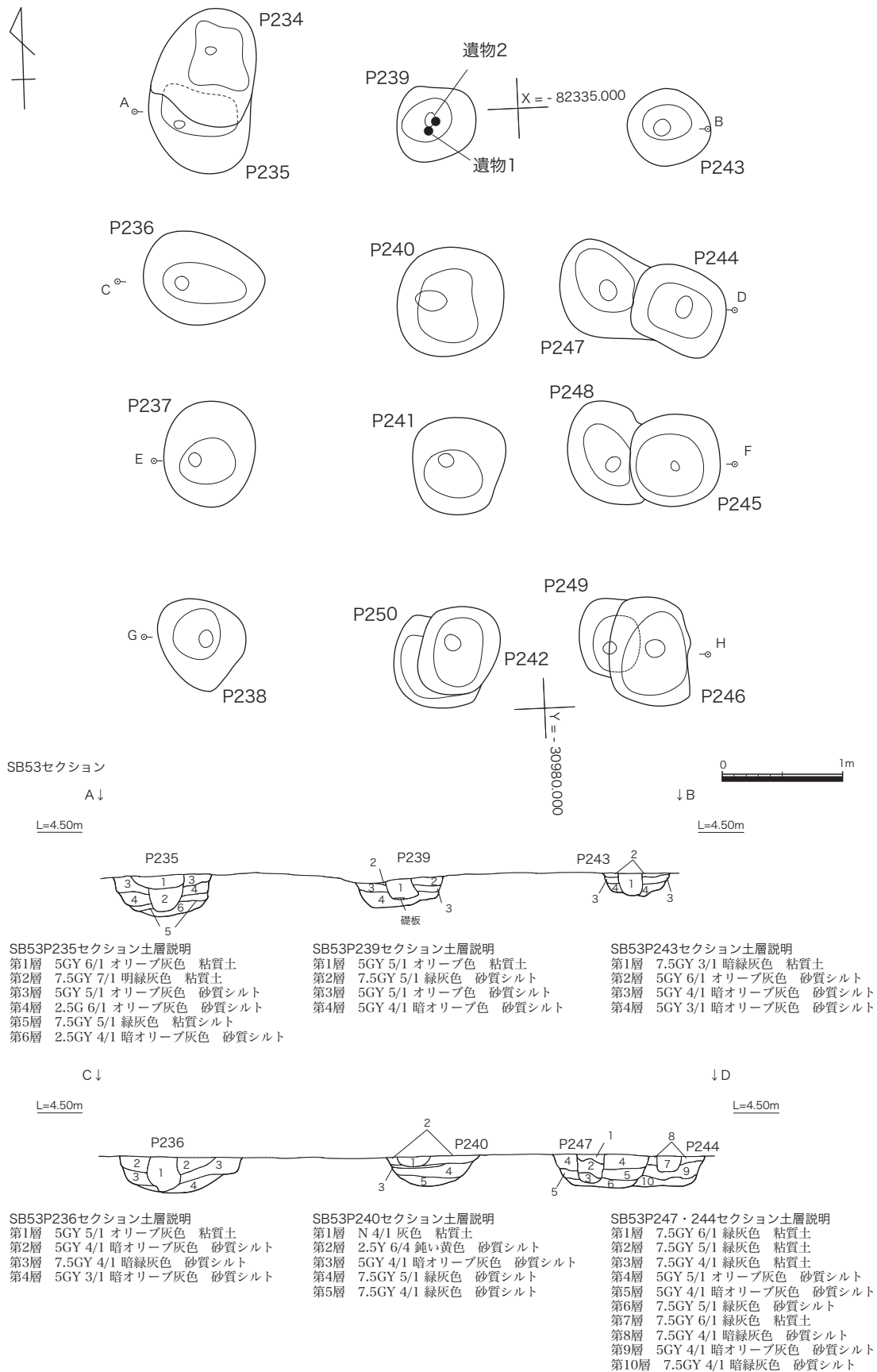
↓ H

L=5.00m



SB52P234セクション土層説明
第1層 10GY 4/1 暗緑灰色 粘質土
第2層 5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質シルト
第3層 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト

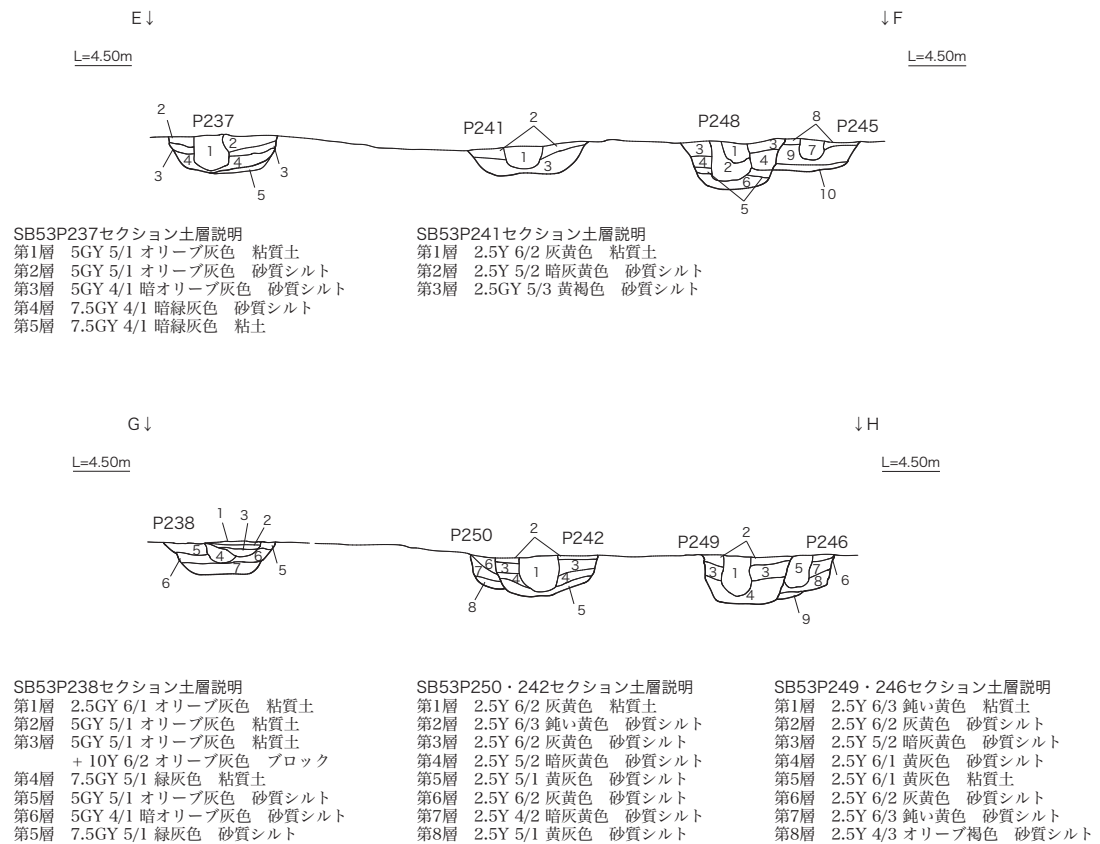
第 60 図 掘立柱建物跡 S B 52 遺構図 (2) (S=1:50)



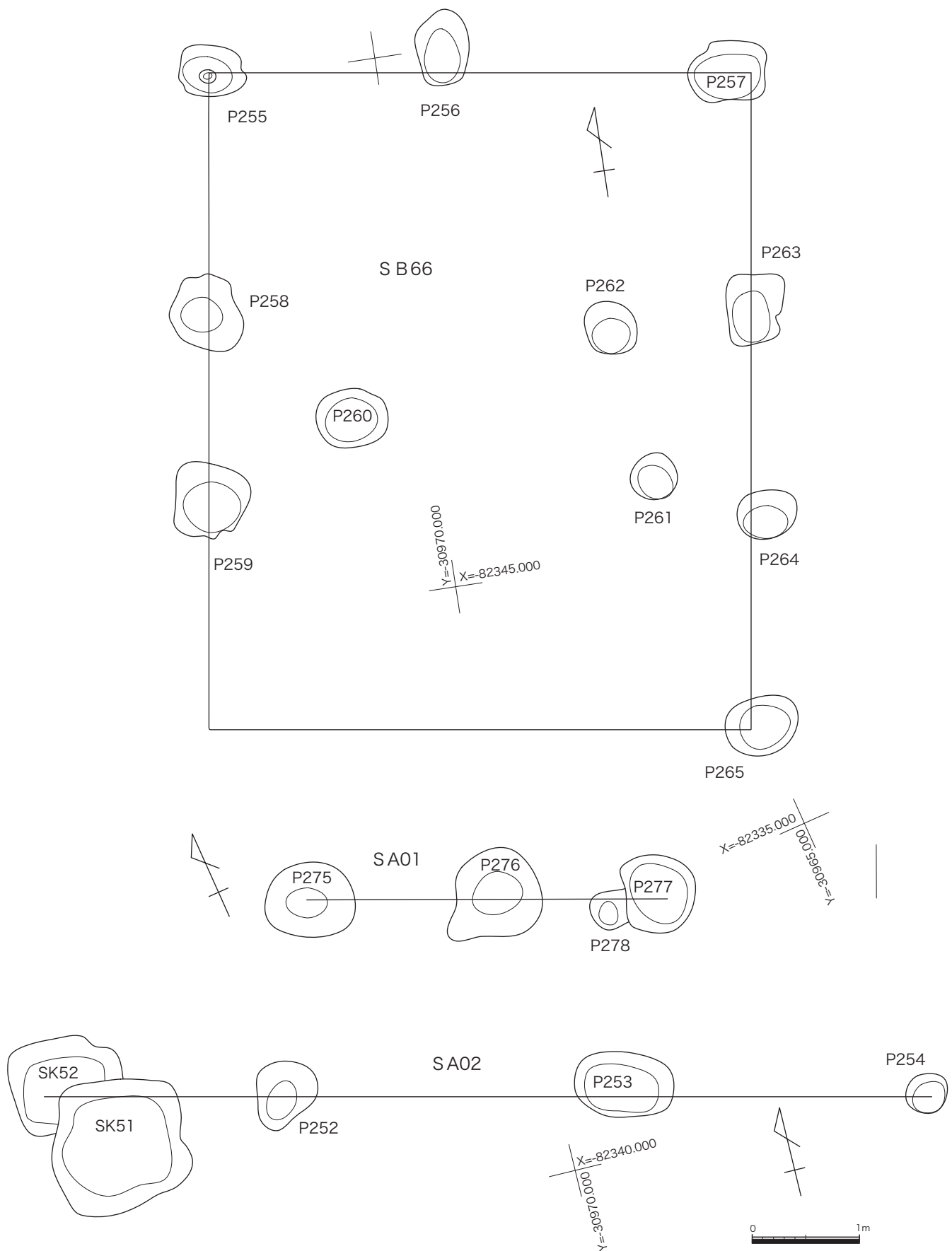
第 61 図 掘立柱建物跡 S B 53 遺構図 (1) (S=1:50)

遺 構

SB53セクション

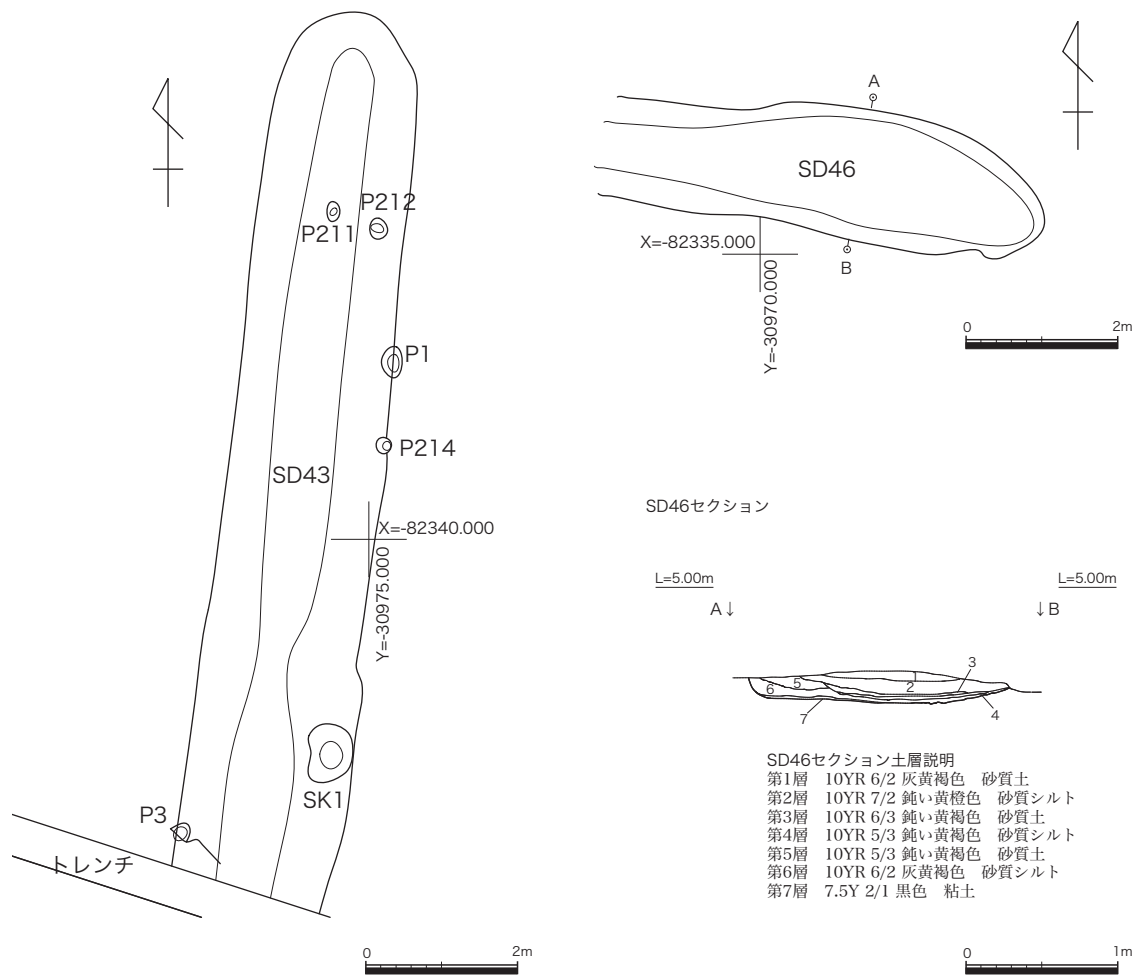


第 62 図 掘立柱建物跡 S B 53 遺構図（2）（S=1:50）



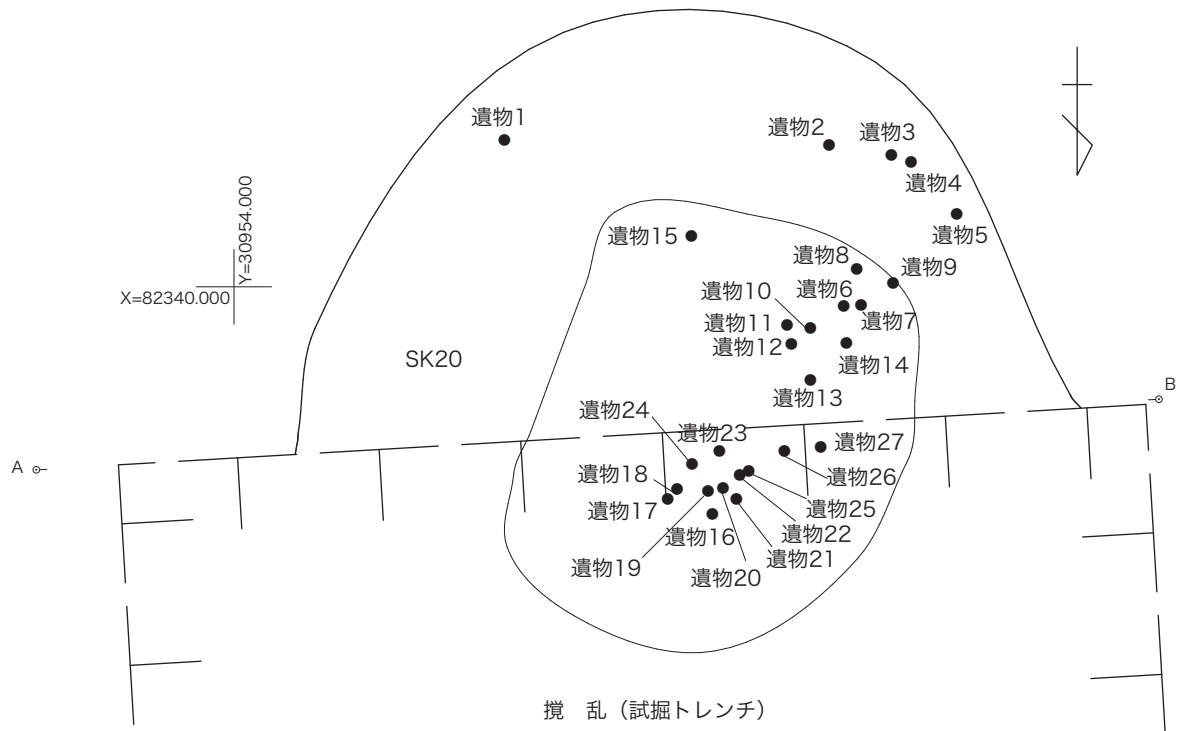
第 63 図 掘立柱建物跡 S B 66、SA01・02 遺構図 (S=1:50)

遺 構

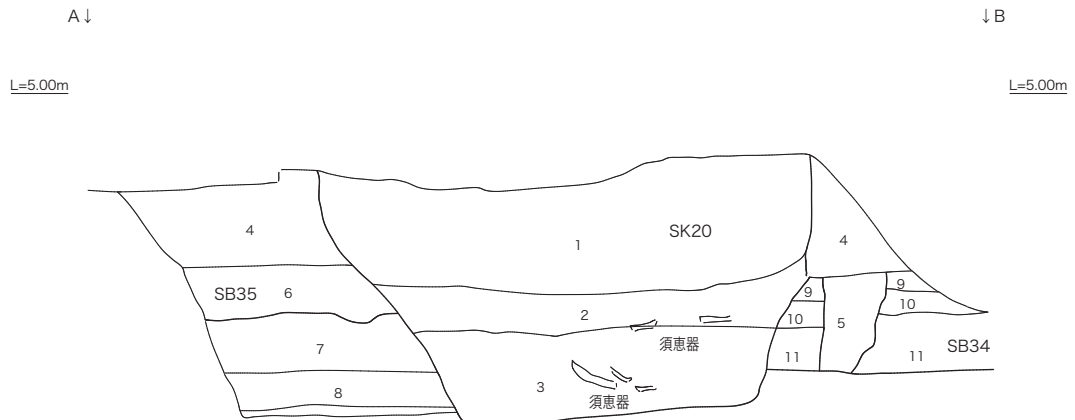


第 64 図 溝 S D 43 ・ 46 遺構図 (S=1:50、1:100)

遺 構



SK20セクション



SK20セクション土層説明			
第1層	10YR 5/2 灰黄褐色	砂質シルト	SK20
第2層	10YR 5/3 鈍い黄褐色	砂質シルト	
第3層	10YR 7/3 鈍い黄橙色	粘質シルト	
第4層	10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土	SB35
第5層	10YR 4/3 鈍い黄褐色	砂質シルト (ビット)	
第6層	10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土 (ややシルト質)	
第7層	10YR 5/2 灰黄褐色	砂質土	SB34
第8層	10YR 4/2 灰黄褐色	砂質土	
第9層	10YR 4/4 褐色	砂質シルト	
第10層	10YR 4/3 鈍い黄褐色	砂質シルト	
第11層	10YR 6/4 鈍い黄橙色	砂質シルト	

第 65 図 土坑 S K 20 遺構図 (S=1:20)

第4節 中世の遺構

中世（平安時代末から室町時代）の遺構には掘立柱建物跡3棟以上・溝・井戸・土坑などが存在する。これらの遺構は標高4.7m～5.3mの第4～6層の各上面で掘削されていたと考えられるが、実際の調査では第4～6層の面的な区分を分離して遺構を検出することが難しく、便宜的な遺構面（第1面と第2面）を設定して調査は実施された。このため遺構の密度はそれほど高いとは言えないが、結果として遺構の切り合いが激しい状態となってしまう。中世の遺構は検出状況や出土遺物から概ね5段階に区分することができた（第5章第2節参照）。ここではこれに基づき個別に遺構を紹介していく。

（1）掘立柱建物跡・柵列

中世の掘立柱建物跡として認識し得たものは8棟存在するが、いずれも柱穴の並びは完全には揃わないものであった。その中でも3棟については比較的良好な状態で特定できたものである。

S B 01（第66・67図） B区中央部に位置し2面目の調査で検出された2間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴が掘り込まれていた正確な面は明らかにできない。規模は5.40m×3.37mを測り、柱穴P 25、P 26、P 28、P 30、P 31、P 35、P 47、P 68、P 70、P 76によって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多く、柱材は残存していない。柱穴に近在して他の柱穴が存在するケースが多いことから、何度か建て替えられた可能性がある。北辺の柱間間隔は西から約1.7m・約1.7m、南北方向の柱間間隔は北から約2.0m・約1.5m・約1.6mを測る。柱穴P 31から土師器皿、柱穴P 47から東濃型山茶碗などが出土しているが、詳細な時期の特定は難しい。ここでは建物方位からみて中世5段階に位置づけたい。

S B 38 A区中央部にあり1面目の調査で確認された2間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴が掘り込まれていた正確な面は明らかにできない。規模は6.00m×4.70mを測り、柱穴P 146、P 147、P 149、P 157、P 159、P 163、P 164、

P 168、P 173によって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多く、柱材は残存していない。柱穴P 147から土師器内彎型羽釜などが出土しており、遺構の時期は室町時代と考えられる。ここでは建物方位からみて中世5段階に位置づけたい。

S B 39 A区中央部に所在し1面目の調査で発見された3間×2間の掘立柱建物跡である。規模は4.90m×3.00mを測り、柱穴P 183、P 184、P 186、P 190～P 197によって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多く、柱材は残存していない。柱穴P 194から東濃型山茶碗などが出土しているが、遺構の時期の特定は難しい。中世4段階か。

（2）溝

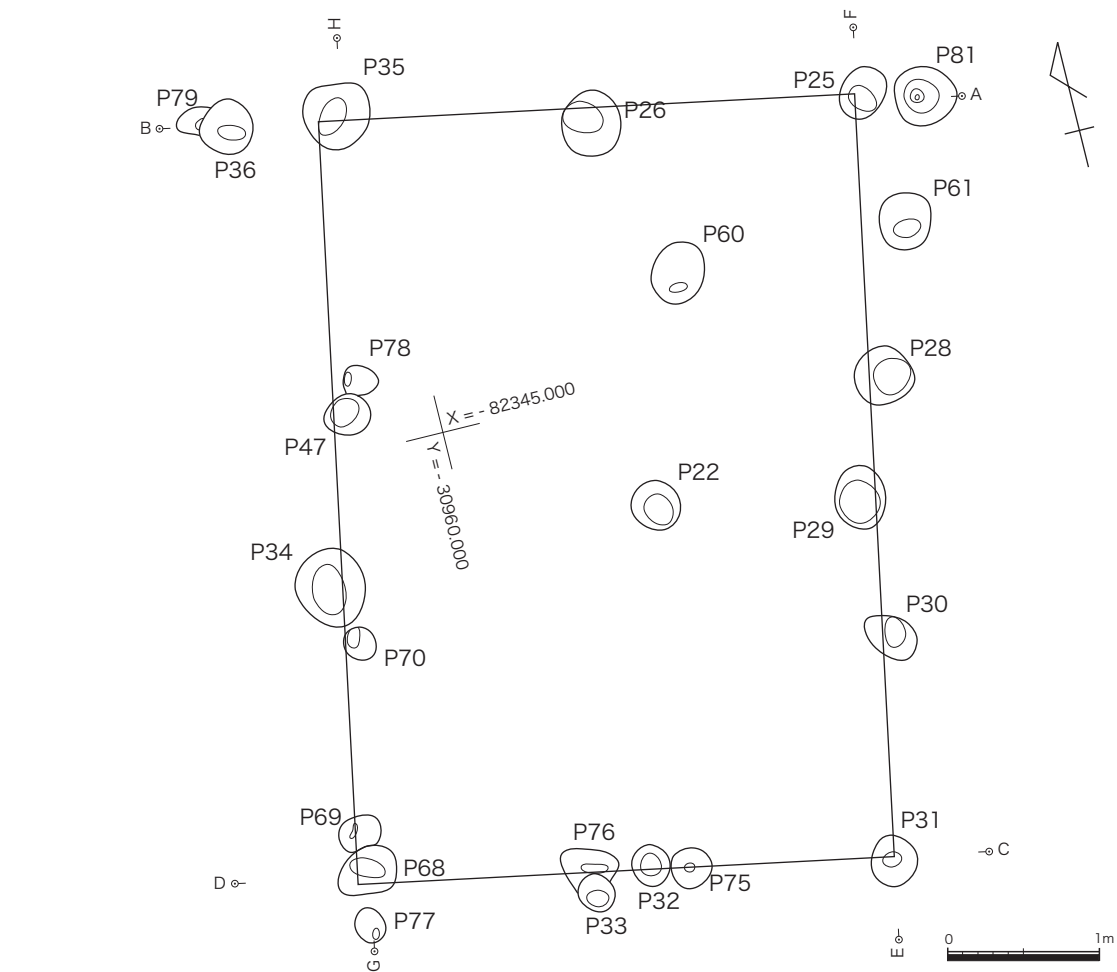
中世の溝は全部で25条検出された。規模の大小は様々であるが、全て素掘り溝である。

S D 04（第70図） B区中央部に所在する南北方向に走る幅2.32m、深さ0.24mの溝である。西肩にはテラス状の段差を持ち、東側が深い断面形を呈している。東肩は近世溝S D 03に切られ全形は不明である。出土遺物には古瀬戸後IV期新段階の陶器を含むが、S D 07に切られているので中世4段階と位置づけたい。

S D 05 B区中央北部にある南北方向に走る溝である。全長5.02m、幅0.81m、深さ0.15m、時期は中世4段階と思われる。

S D 07 B区北部に位置する幅0.71m以上、深さ0.34mの溝である。方位がおおよそN-70°-Wを測る点が特徴的である。遺構の時期は、出土した古瀬戸灰釉縁釉小皿からみると15世紀中頃と推測されるが、S D 05を切ることから中世5段階に位置づけられる。

S D 08（第70図） A区からB区にかけてL字状に屈曲する溝で、南北方向の溝は幅3.86m、深さ1.07m、東西方向の溝は幅2.28m、深さ0.80mの規模を持つ。屈曲部から北側に南北溝が延びる可能性がある。横断面形は逆台形を呈し、埋土は大部分が埋め立てられた斑土である。南北方向の



SB01P25・81セクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第3層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第5層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第6層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土

SB01P26セクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第3層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第4層 10YR 4/6 褐色 砂質シルト
 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第6層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第7層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土
 第8層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土

SB01P35・36・79セクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第3層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第4層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第6層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第7層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土
 第8層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土

SB01P31・SD10セクション土層説明

第1層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/2 灰色褐色シルト
 第3層 10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト
 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第5層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第6層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土
 第7層 10YR 4/4 褐色 砂質土

SB01P32・75・76セクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第3層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第5層 10YR 4/4 褐色 砂質土
 第6層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土

SB01P68・SD08セクション土層説明

第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第2層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第3層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
 第4層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
 第5層 10YR 4/4 褐色 砂質土

第 66 図 掘立柱建物跡 S B 01 遺構図 (1) (S=1:50)

遺 構

溝については、横断面の土層観察から護岸施設が存在した可能性が考えられたが、詳細な構造は不明である。B区南部でS D 11とT字状に交差する。また、A区西端部ではS D 30よりも西側でS D 08の続きが確認することができないことから、S D 30とT字状に交差すると思われる。S D 23には確実に切られている。埋土から須恵器、山茶碗、古瀬戸製品などの遺物が多数出土しているが、時期的なまとまりがなく遺構の時期は特定しがたい。南北溝はS D 11との関連から中世2段階に掘削されるが、東西溝はこれよりも遅れて掘削されたようである。南北溝と東西溝はともに中世5段階には埋没したと考えられる。

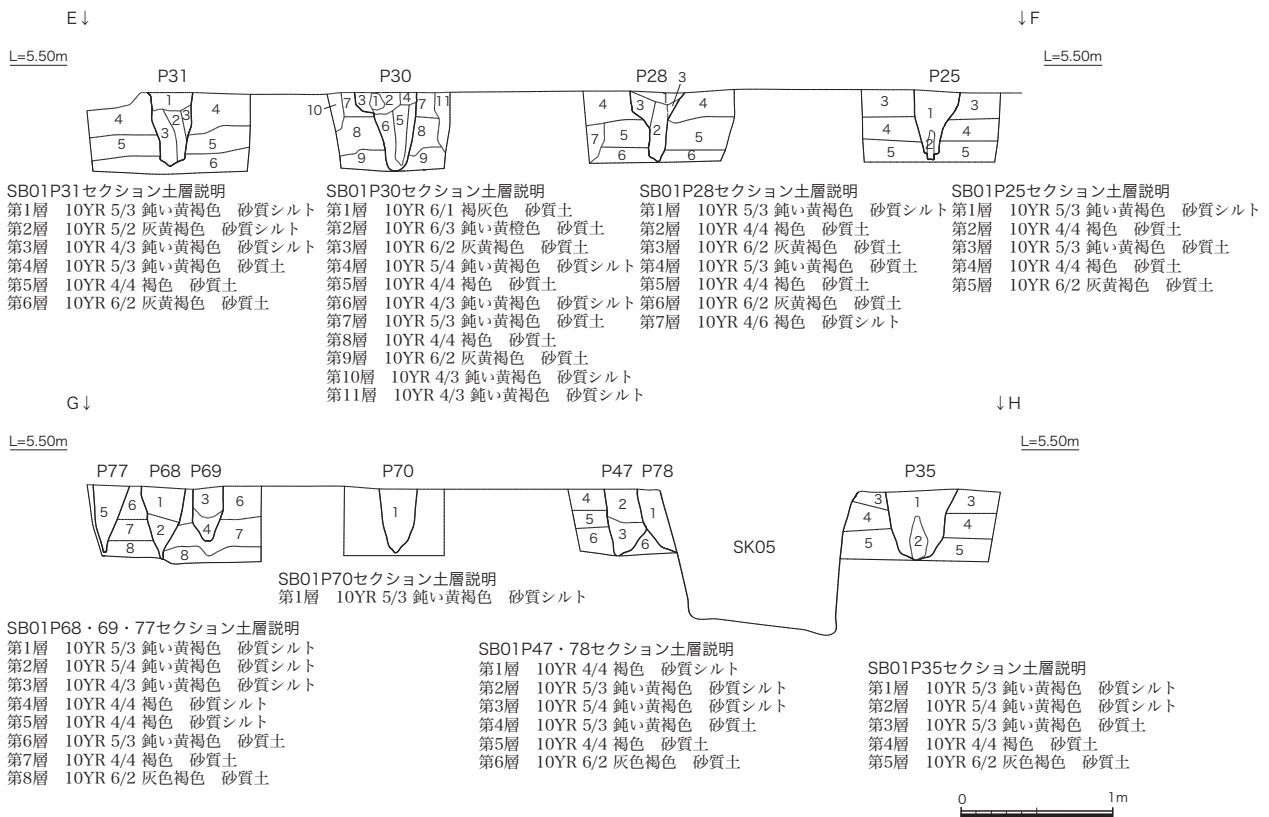
S D 11（第70図） B区南西部で確認された東西方向に走る溝で、南肩は調査区外に展開している。幅2.26m、深さ0.83mを測ると思われ、S D 08とT字状に交差している。埋土中から多量の山茶碗類が出土しており、S D 24に切られて検出されたことから。遺構の時期は中世2段階と位置づけられる。

S D 12（第70図） B区西部に所在し第2面で確認された南北方向に走る溝である。両端はそれぞれS D 08とS D 11に交わり、断定はできないが両溝の外側には広がっていないようである。検出状態ではS D 08とS D 11に切られている形で確認された。幅1.37m、深さ0.49mを測り、遺構の時期は中世1段階と推測される。

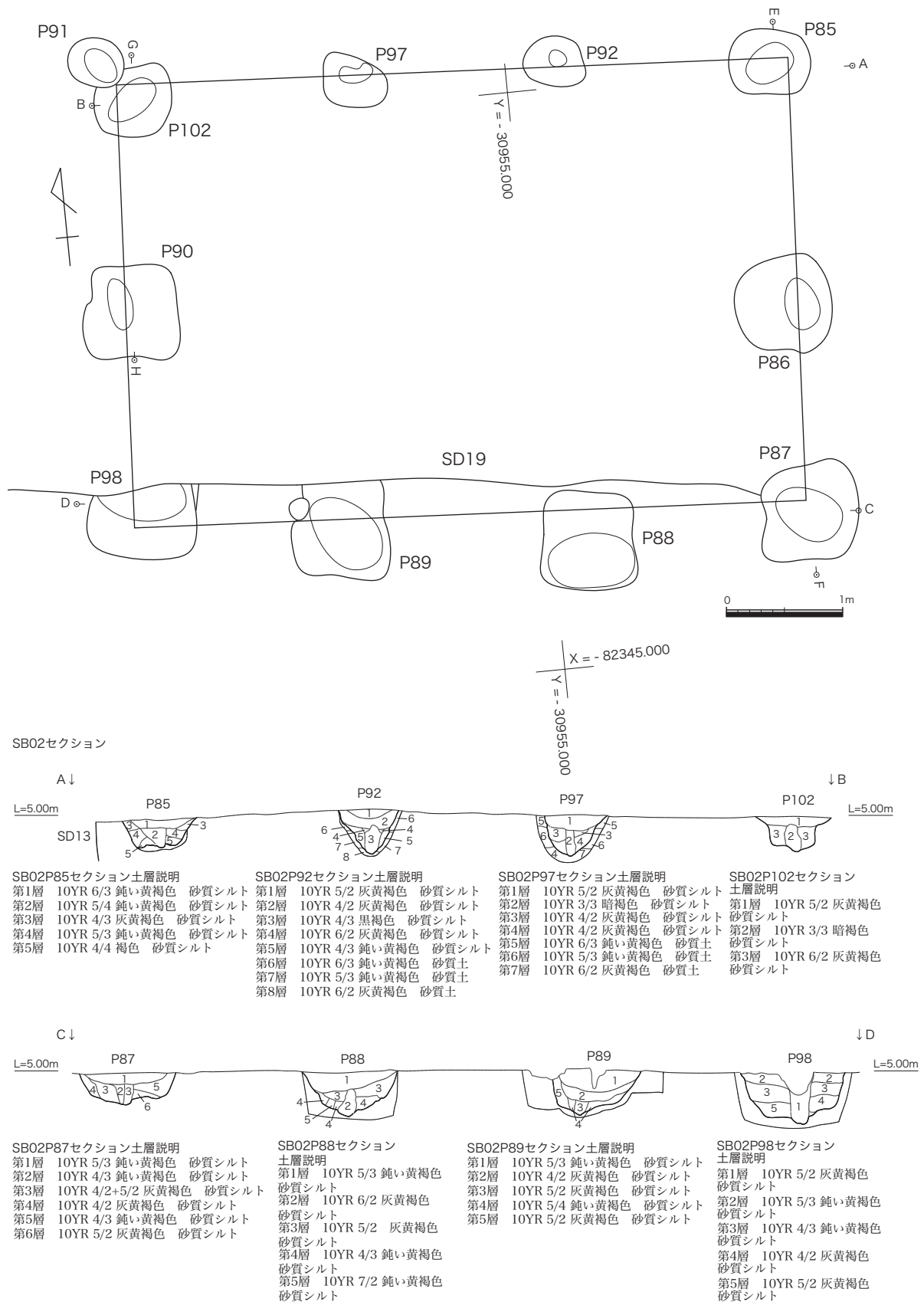
S D 13（第70図） B区第2面の中央部で確認された南北方向に走る溝で、南北両端は調査区外に伸びている。S D 19を切る形で検出され、規模は幅1.00m、深さ0.35mを測る。出土遺物が少ないが、中世3段階と思われる。

S D 14・S D 17・S D 19（第70図） B区北半部に位置する「コ」字状に屈曲する溝である。東溝（S D 14）は幅0.87m、深さ0.36m、西溝（S D 17）は幅0.84m、深さ0.32m、南溝（S D 19）は幅0.96m、深さ0.45mを測り、西溝（S D 17）の北端部は途中で収束している。東溝（S D 14）も、S K 01に切られて不明な点が多いが、S K 01より北に広がらないことが分かる。溝で

SB01セクション



第 67 図 掘立柱建物跡 S B 01 遺構図（2）（S=1:50）



第 68 図 掘立柱建物跡 S B 02 遺構図 (1) (S=1:50)

遺 構

画された空間の東西幅は約 12m を測る。西溝 (S D 17) の中程で S D 18 と T 字状に交差している。この溝群は S D 18 とともに、時期は中世 1 段階と位置づけられる。

S D 15・S D 16 B 区南部で東西方向に走る溝である。配置からみて両者は本来同一のものであった可能性が高い。幅約 0.30m ～ 0.45m、深さ約 0.10m の小規模な溝である。第 2 面で検出され、S D 13 と S D 18 で挟まれた空間を区切る形となっている。中世 3 段階と推測される。

S D 23 (第 71 図) A 区中央部に所在する幅 1.02m、深さ 0.36m を測る溝である。方位が N -30° - E を測る点が特徴的で、両端は調査区外に広がる。S D 08 を切る形で検出されたため、遺構の時期は中世 5 段階と推測される。

S D 24・S D 36 A 区中央南部で検出された南北方向に走る最大幅 0.74m、深さ 0.20m を測る溝である。南端は調査区外に広がる。出土遺物から時期は 15 世紀後半と推測される。

S D 30 (第 71 図) A 区西部に所在する南北方向に走る幅 2.85m、深さ 0.72m の溝である。第 3 面で S D 40 として再検出されたが、これは S D 30 と同一のものであろう。西肩にはテラス状の段差を持ち、東側が深い断面形を呈している。溝最深部の上位には近世溝 S D 22 が重複してい

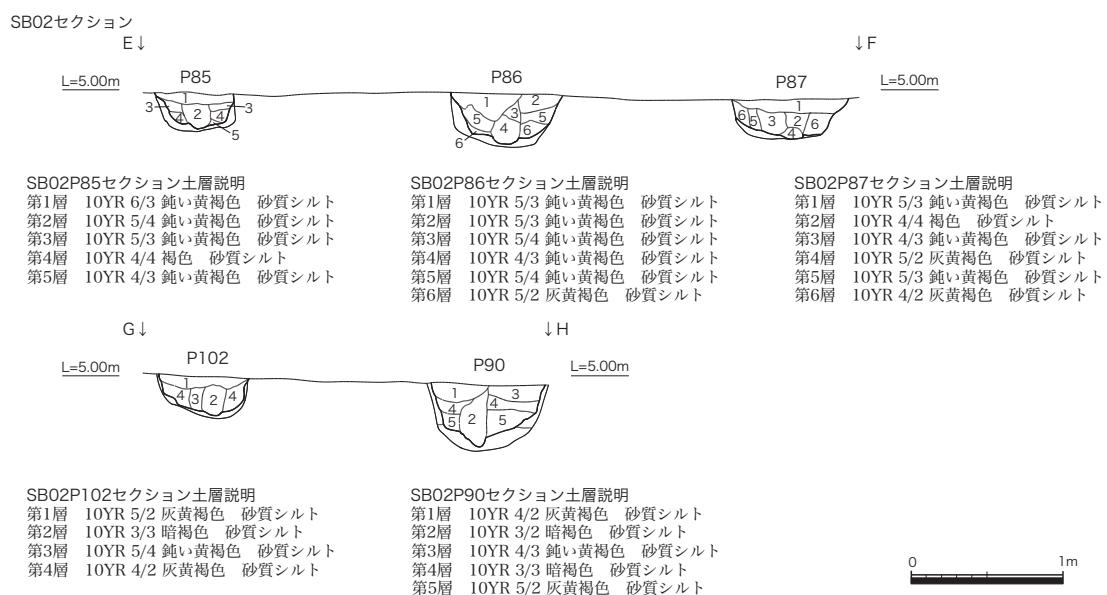
て、両端は調査区外に広がる。北部で S D 08 が交わる形で検出された。遺構の時期は中世 4 段階と思われる。

S D 31 A 区南西部に位置する南北方向に走る溝で、南端は調査区外に広がる。幅 1.23m、深さ 0.37m を測り、S D 30 の下位で検出された。時期は中世 2 段階と推定される。

S D 32・S D 37 A 区西部にある南北方向に走る溝で、第 2 面では途切れているように検出され異なる遺構番号を付けたが、第 3 面では両者は同一のものであることが判明した。幅 1.13m、深さ 0.44m を測り、S D 08 に切られ S D 33 を切っている。時期は中世 3 段階と推測される。

S D 33 (第 71 図) A 区第 2 面で検出されたほぼ東西方向に走る溝で、幅 1.01m、深さ 0.36m を測る。S D 32 に切られ、S D 35・S D 38 と交差している。東側で北寄りに方位が触れて調査区外に伸びる。東部で多数の山茶碗類が出土し、中世 2 段階に位置づけられる。

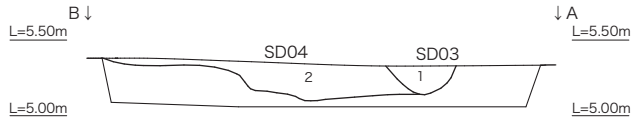
S D 39・S D 20 (第 71 図) A 区北部に存在する東西方向に走る幅 0.85m、深さ 0.22m の溝である。S D 41 の上位にあり S D 30 で交わっている。西端部は一旦収束するが、S D 52 につながっているように思われる。東端部は S D 20 と同一の可能性が高く S D 08 と合流する。時期は中世 3 段階と推測される。



第 69 図 掘立柱建物跡 S B 02 遺構図 (2) (S=1:50)

遺 構

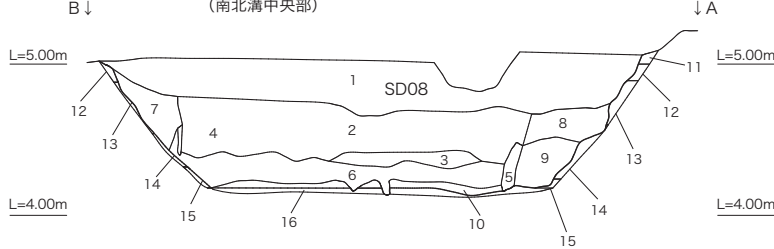
SD03・SD04セクション



SD03・SD04セクション土層説明

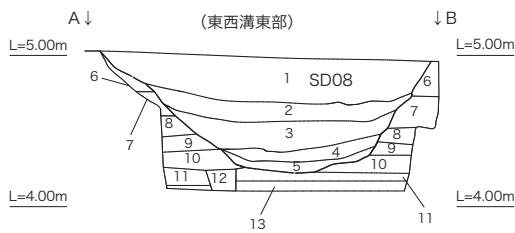
- 第1層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土 (SD03)
第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土 (SD04)

SD08セクション



SD08セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
第2層 10YR 4/4 褐色 砂質土
第3層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
第4層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 シルト
第5層 10YR 4/2 灰色褐色 砂質シルト
第6層 10YR 5/2 灰色褐色 粘質土
第7層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土
第8層 10YR 5/3 鈍い黄色褐色 砂質土 60%
+ 10YR 6/2 灰色褐色 砂質シルト
第9層 10YR 6/2 灰色褐色 砂質土
第10層 10YR 6/3 鈍い黄褐色茶色 砂質土
第11層 10YR 7/3 鈍い黄褐色 砂質土
第12層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
第13層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土
第14層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質土
第15層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土(粘性弱)
第16層 10YR 3/2 黒褐色 粘性土



SD08セクション土層説明

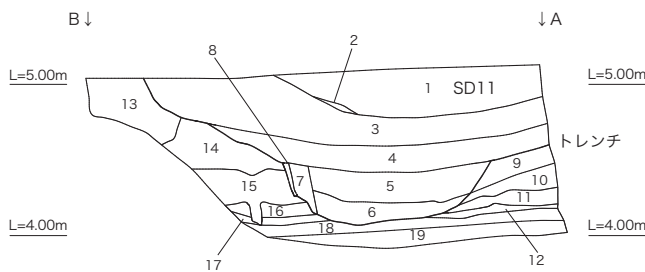
- 第1層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土
第4層 10YR 4/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
第5層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質粘土シルト
第6層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土
第7層 10YR 3/4 暗褐色 砂質土
第8層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土
第9層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土
第10層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土(粘性あり)
第11層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土(粘性あり)
第12層 10YR 6/3 鈍い橙色 砂質シルト
第13層 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト



SD08セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/3 鈍い黄色 砂質シルト
+ 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 小ブロック
第2層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
+ 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 小ブロック まばら
第3層 10YR 3/4 暗褐色 砂質シルト
+ 10YR 6/1 褐灰色 砂質土ブロック
第4層 10YR 4/4 褐色 砂質シルト
+ 10YR 6/1 褐灰色 砂質土ブロック

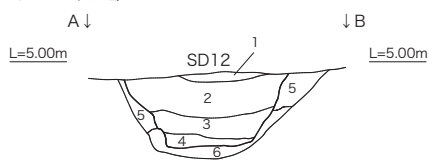
SD11セクション



SD11セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第4層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土
第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質粘土シルト
第6層 2.5Y 6/1 黄灰色 砂質シルト
第7層 2.5Y 4/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
第8層 2.5Y 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト
第9層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土
第10層 10YR 4/4 褐色 砂質土
第11層 10YR 4/1 鈍い黄褐色 砂質シルト
第12層 10YR 6/3 鈍い黄褐色 砂質土
第13層 10YR 5/3 褐色 砂質シルト
第14層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
第15層 10YR 6/4 暗褐色 砂質土
第16層 10YR 3/2 鈍い黄褐色 砂質土
第17層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第18層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
第19層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土

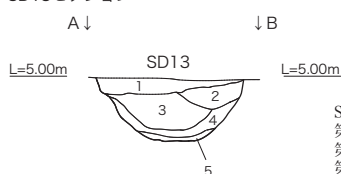
SD12セクション



SD12セクション土層説明

- 第1層 10YR 4/6 褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 5/1 褐灰色 砂質シルト
第4層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルト
第5層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第6層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト

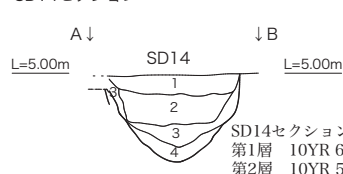
SD13セクション



SD13セクション土層説明

- 第1層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第4層 10YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
第5層 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト

SD14セクション



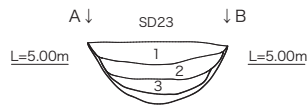
SD14セクション土層説明

- 第1層 10YR 6/3 鈍い橙褐色 砂質シルト
第2層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第3層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第4層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルト

第 70 図 溝SD03・04・08・11・12・13・14 遺構図 (S=1:50)

遺 構

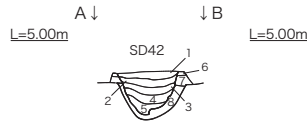
SD23セクション



SD23セクション土層説明

第1層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土ブロック
第2層 10YR 4/4 褐色 砂質シルト + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土ブロック
第3層 10YR 3/4 暗褐色 砂質シルト + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土ブロック

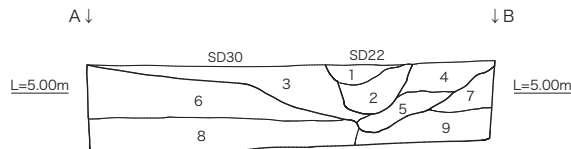
SD42セクション



SD42セクション土層説明

第1層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土
第2層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土
第3層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第4層 10YR 3/2 黒褐色 砂質土
第5層 10YR 4/4 褐色 砂質土
第6層 10YR 3/2 黒褐色 砂質土
第7層 10YR 3/4 黒褐色 砂質土
第8層 10YR 4/6 褐色 砂質土

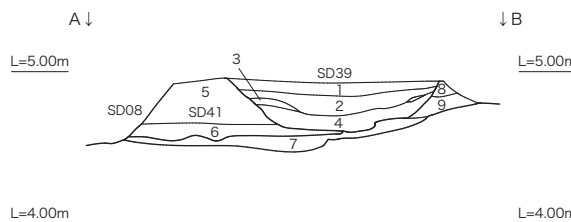
SD30セクション



SD30セクション土層説明

第1層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂
第2層 10YR 4/4 褐色 砂 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック
第3層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第4層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土
第5層 10Y 6/1 灰色 砂質シルト
第6層 10YR 3/2 黒褐色 粘質シルト
第7層 10YR 4/4 褐色 砂質シルト
第8層 10YR 3/1 黒褐色 粘質シルト
第9層 10Y 6/1 灰色 粘質シルト

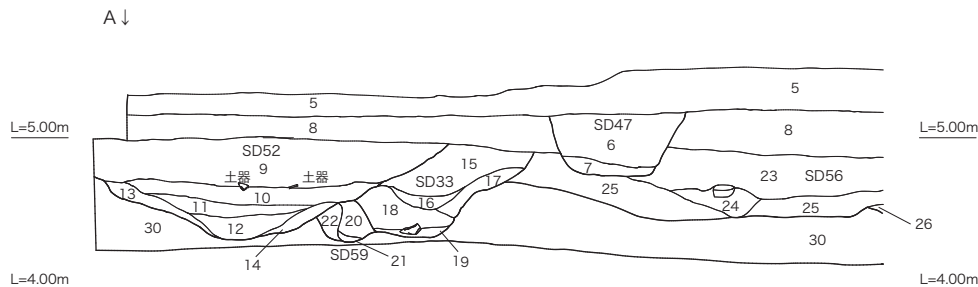
SD39セクション



SD39セクション土層説明

第1層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 ブロック
第2層 10YR 4/4 褐色 砂質土 + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 ブロック
第3層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第4層 10YR 3/4 暗褐色 砂質土 + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 ブロック
第5層 10YR 4/6 褐色 砂質土
第6層 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 + 10YR 6/1 褐灰色 砂質土 ブロック
第7層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第8層 10YR 4/6 褐色 砂質土
第9層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土

SD33セクション

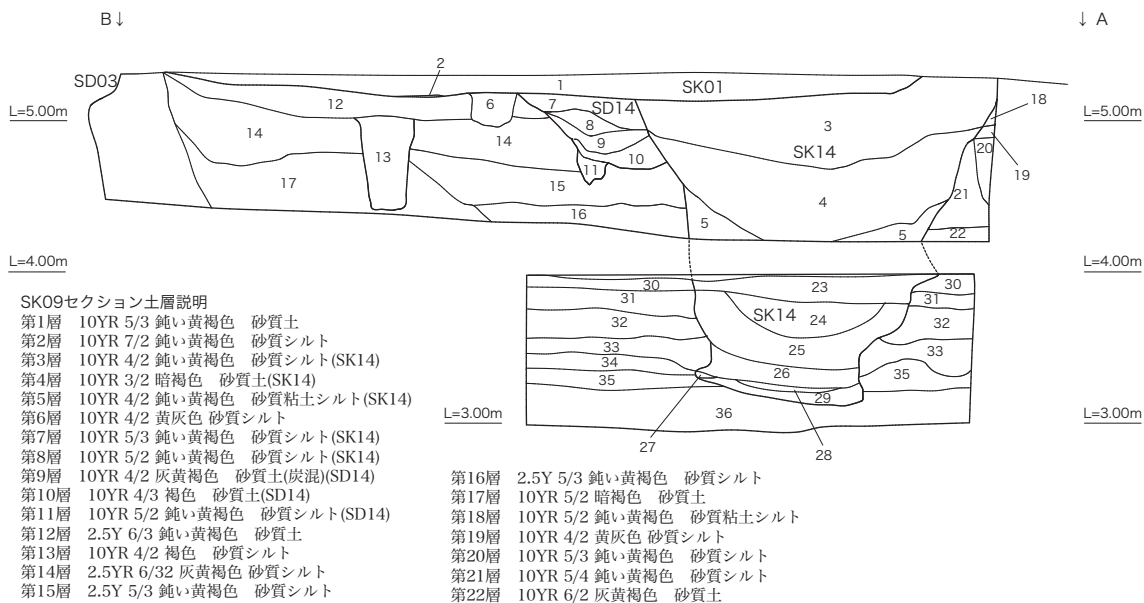


SD33セクション土層説明

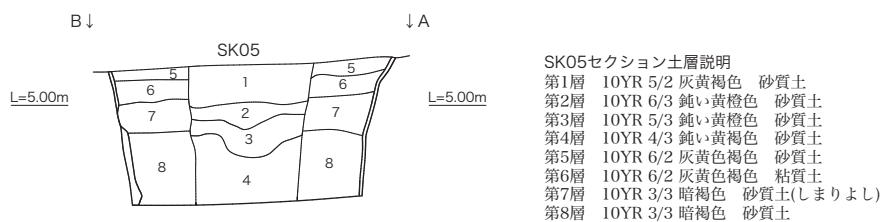
第5層 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック少量
第6層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック少量
第7層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質土
第8層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック多量
第9層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック微量
第10層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第11層 10YR 4/1 褐灰色 砂質シルト 土器混
第12層 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト
第13層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト
第14層 10YR 5/2 灰黄褐色 砂質シルト
第15層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック
第16層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第17層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 粗砂質シルト
第18層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック
第19層 10YR 3/2 黒褐色 シルト
第20層 10YR 4/1 褐灰色 砂質シルト
第21層 10YR 3/2 黒褐色 シルト
第22層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第23層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質シルトブロック
第24層 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト
第25層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 5/4 鈍い黄褐色 砂質シルトブロック
第26層 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト
第30層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質シルト + 10YR 4/4 褐色 シルトブロック

第 71 図 溝SD23・30・33・39・42 遺構図 (S=1:50)

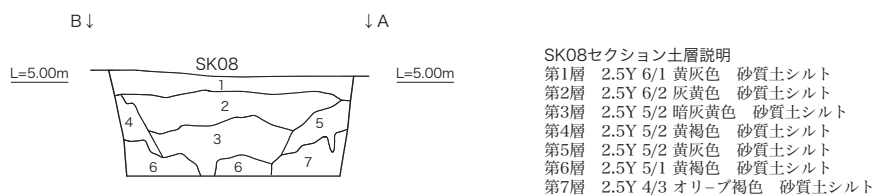
SK01・SK14セクション



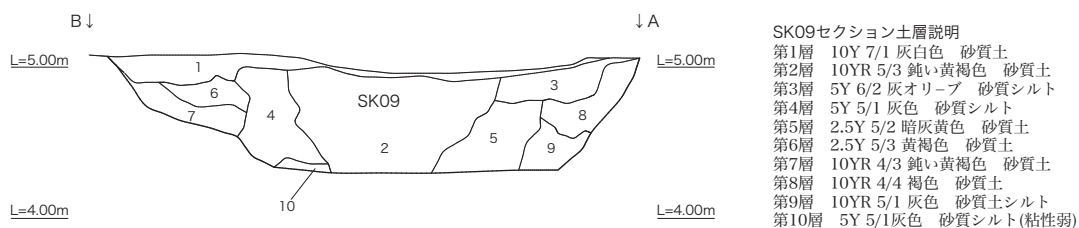
SK05セクション



SK08セクション



SK09セクション



第 72 図 井戸SK 14、土坑SK 05・SK 08・SK 09 遺構図 (S=1:50)

遺 構

S D 52 (第 71 図) A b 区中央部で検出された東西方向に走る幅 1.68m、深さ 0.30m の溝である。S D 39 の西側延長部のような配置であるが、断面形状などが異なるため別遺構として認識した。土層断面観察から S D 33 を切ることが判明し、中世 3 段階に位置づけられる。

S D 56 (第 71 図) A b 区北西部で確認された南北方向に走る溝と思われる。北部と西部が調査区外に広がるため規模は特定できないが、比較的大規模と思われる。南部で S D 57 と同一である可能性が考えられる。S D 56 の南半部では下位で S K 56 が確認された。多数の山茶碗類が出土

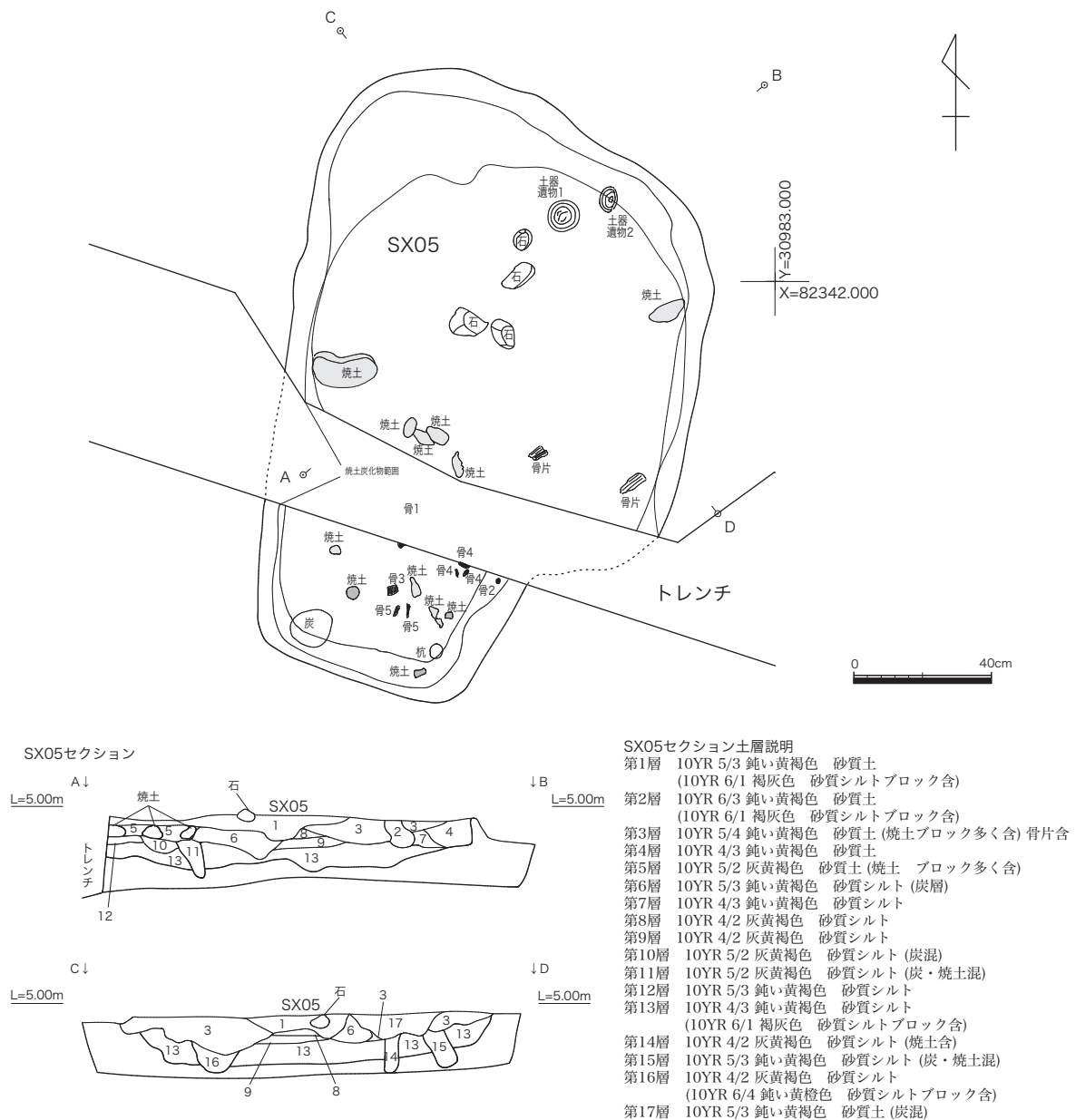
し、時期は中世 1 段階と推測される。

S D 58 中央部に位置する東西方向に走る溝である。A 区西部では確認できなかった遺構である。遺構の時期は不明。

S D 62 C 区南部で検出された東西方向に走る溝である。幅 1.35m、深さ 0.25m を測り、両端は調査区外に延びるが、A b 区ではその延長部は確認されなかった。詳細な時期は特定できないが、S D 33 と一連の遺構かもしれない。

(3) 井戸

S K 14 (第 72 図) B 区中央部に位置する平面形が 1.40m × 0.91m の楕円形で、深さ 0.72m を



第 73 図 火葬施設? S X 05 遺構図 (S=1:20)

測る土坑である。底部で湧水層に達しており、井戸と判断された。内部から木材片が出土しているが、構築物としての位置を保っておらず、井戸側が破損しているものと考えられよう。状況から見て方形木組み井戸と推測されるが、詳細は不明。S D 14 を切ることなどから時期は中世 1 段階と推測される。

S K 56 A b 区北西部に所在する土坑で、S D 56 の下位で検出された。平面形が $2.93\text{m} \times 1.59\text{m}$ の歪な楕円形で、最深部で深さ 1.21m を測る。埋土は黒褐色砂質土で底部から湧水したが、井戸側などの構築物は残存していない。井戸か否かははっきりしない遺構である。中世 1 段階。

(4) 火葬施設？

S X 05 (第 73 図) A 区南部で確認された平面形が $1.61\text{m} \times 1.37\text{m}$ の隅丸方形の土坑である。検出段階では S B 41 の火処遺構と認識したが、最終的には別遺構と認定したもので、南部は A 区の調査終了直前に調査区を拡張して検出を試みたものである。床はにぶい黄褐色砂質シルトで整地され、その面に礫数個と小ピット群が存在した。

床上位には、北部で焼土ブロックが馬蹄形状に拡がり土師器皿が 2 点出土し、南部では炭化物が薄く堆積しその中に骨片が含まれていた。火葬施設とするには土坑壁が焼けておらず、火葬施設を破壊したものか、あるいは火葬骨を土壤ごと土壇墓に再葬したものかもしれない。時期は中世 1 段階と推測される。

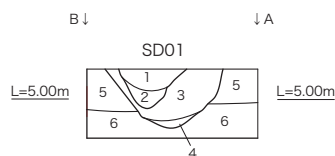
(5) 土坑

S K 05 (第 72 図) B 区中央部に位置する平面形が $1.90\text{m} \times 1.70\text{m}$ の円形で、深さ 0.72m を測る土坑である。掘肩の形状や堆積状況は一見井戸と思われるが、底部が湧水層には達していないため土坑と考えられる。

S K 08 (第 72 図) B 区中央部に所在する土坑である。平面形が $1.65\text{m} \times 1.60\text{m}$ の円形で、最深部で深さ 0.70m 程度を測る。S K 05 と同様一見井戸と思われるが、底部が湧水層には達していない。

S K 09 (第 72 図) B 区北西部で S D 08 の屈曲部に接する位置にある土坑である。平面形は $3.55\text{m} \times 2.40\text{m}$ の楕円形を呈しているが、性格は不明。

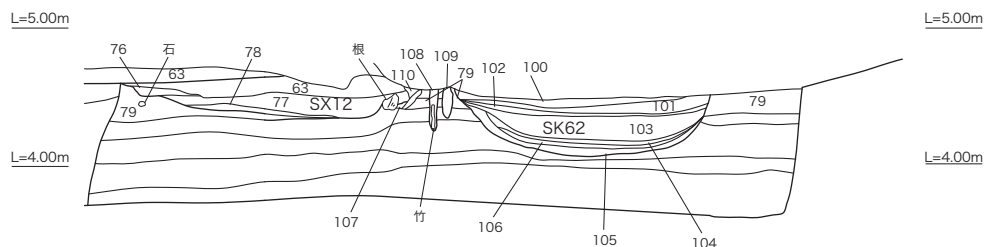
SD01セクション



SD01セクション土層説明

第1層	10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土シルト
第2層	10YR 6/3 灰黄褐色	粘質シルト
第3層	10YR 5/3 鈍い黄褐色	細砂質土
第4層	10YR 4/3 鈍い黄褐色	細砂質土(炭混)
第5層	10YR 4/4 褐色	砂質土
第6層	10YR 3/3 暗褐色	砂質土

SX12セクション



SX12セクション土層説明

第63層	10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土 + 10YR 5/6 黄褐色	砂質土ブロック少量含
第76層	2.5Y 6/3 鈍い黄色	砂質土	
第77層	2.5Y 6/1 黄灰色	砂質土	
第78層	10YR 5/4 鈍い黄褐色	砂質土 (マンガン) 含む	
第79層	2.5Y 5/1 黄灰色	砂質土	

第100層	10YR 6/2 灰黄褐色	砂質土 + 10YR 3/4 褐色	砂質土ブロック
第101層	2.5Y 6/1 黄灰色	砂質土 + 2.5Y 5/4 黄褐色	砂質土ブロック
第102層	2.5Y 5/1 黄灰色	砂質土	
第103層	5Y 4/2 灰オリーブ色	粘質土	
第104層	5Y 3/1 オリーブ黒色	砂質土	
第105層	5Y 5/1 灰色	砂質土	
第106層	5Y 3/1 オリーブ黒色	砂質土	
第107層	2.5Y 5/1 黄灰色	砂質シルト	
第108層	2.5Y 5/1 黄灰色	砂質シルト (竹入る)	
第109層	2.5Y 5/1 黄灰色	砂質シルト + 10YR 4/6 褐色	砂質土 (竹)
第110層	2.5Y 6/1 黄灰色	砂質土	

SK62

第 74 図 S D 01、S X 12 遺構図 (S=1:50)

第5節 近世の遺構

近世（江戸時代）の遺構には溝・井戸・土坑などが存在する。基本的には標高約5.4mの第3層上面で遺構が掘削されていた。実際の調査では第3層上面を掘り飛ばしてしまい、下位の中世の遺構面で近世の遺構も検出したので、浅い遺構を見逃している可能性を否定できない。また、B区東部から東に拡がる現在認められる水田がいつ構築されたかを知る資料を得ることはできなかったが、おそらく近世であろうと想定している。なお、今回の調査で16世紀から18世紀前半までの遺物は極めて少なく、この段階の遺構は確認されなかった。したがって、ここでは18世紀後半以降の遺構を2段階に区分して個別に遺構を紹介していくこととしたい。

（1）溝

S D 01（第74図） B区西部に位置し1面目の調査で検出された南北方向に走る溝である。幅0.86m、深さ0.31mを測る小規模なもので、S D 08が埋没・整地された後に掘削されている。近世1段階の遺構と思われる。

S D 02・S D 06 B区中央部にあるS D 01とほぼ平行に走る溝群である。S D 02は幅0.41m、深さ0.03m、S D 06は全長5.10m、幅0.41m、深さ0.03mを測る小規模な溝であるが、両者は本来同一の溝であった可能性が高い。時期はS D 01と同時期と推測される。

S D 03（第70図） B区中央部に所在する南北方向に走る幅0.46m、深さ0.18mの溝である。下位に中世溝S D 04があり、掘り直されている形となっている。近世1段階と推測される。

S D 09・S D 10 B区南部で検出された南北方向に走る溝で、配置からみて両者は本来同一のものであった可能性が高い。幅約0.20m、深さ約0.02mの小規模な溝で、古瀬戸後期の遺物を含むが、近世1段階であると推測される。

S D 22（第71図） A区西部に所在する南北方向に走る幅0.76m、深さ0.25mの溝である。下

位にS D 30が重複していて、両端は調査区外に拡がる。遺構の時期は近世1段階と考えられる。

S D 25～S D 27 A区東部で検出された南北方向に走る溝で、配置からみて三者は本来同一のものであった可能性が高い。幅約0.12m～0.24m、深さ約0.06mの小規模な溝で、遺構の時期は近世1段階と思われる。

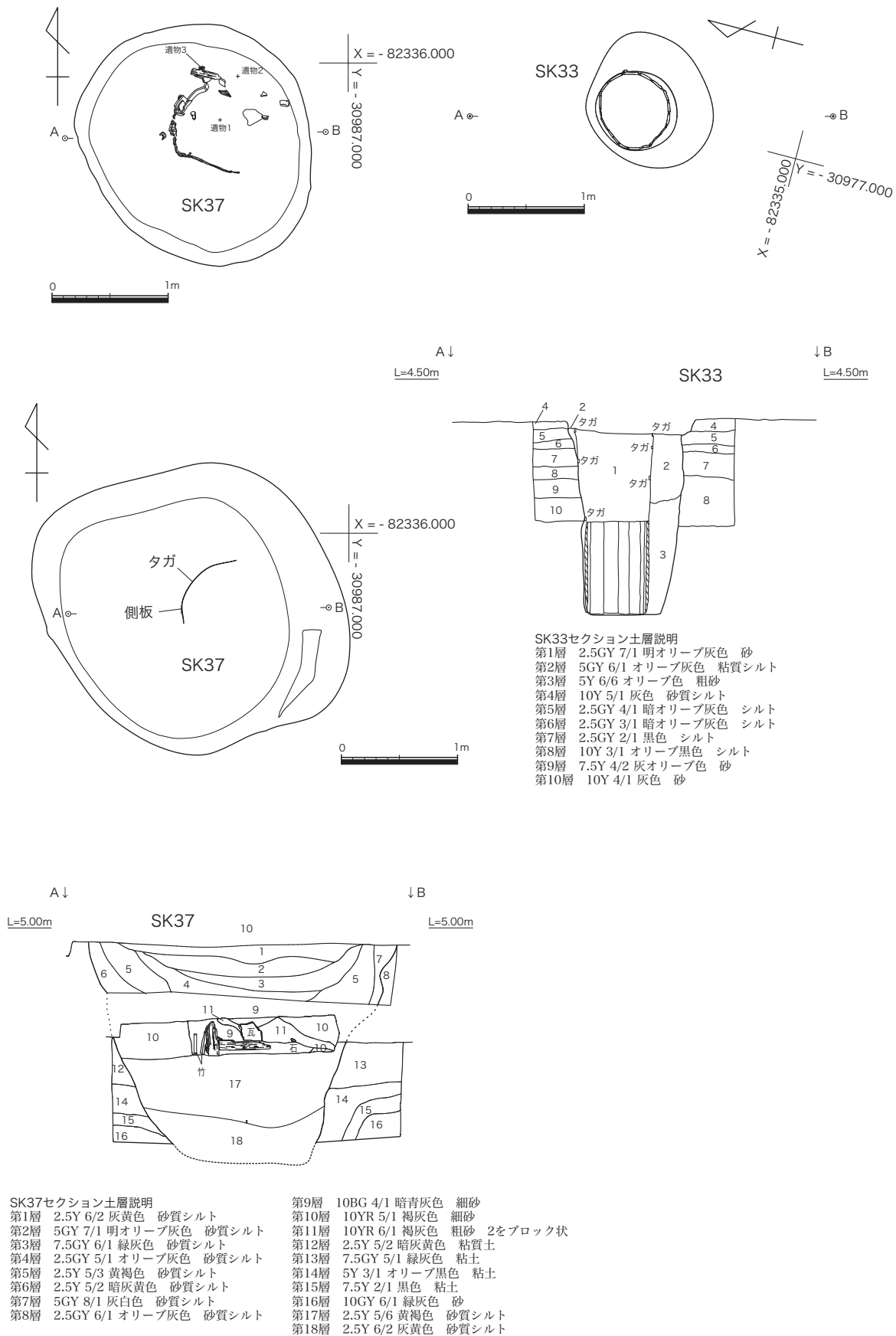
（2）井戸

S K 32 A区中央部に位置する平面形が2.30m×2.18mの円形土坑である。底部で湧水層に達しており井戸と判断される。井戸側の構築物は全く残存していないが、土層断面からみて井戸側が既に抜き取られて遺存しないものと判断された。時期は近世2段階と推測される。

S K 33（第75図） A区中央部に所在する平面形が1.10m×1.05mの円形土坑で、上位は現代の攪乱で破壊されていた。井戸側は現状で木製結筒が2段あったものと推測され、上位結筒は既に材が抜き取られて箍のみが残存しており、下位結筒のみが完存していた。井戸の掘肩は井戸側の割に小規模で、井戸側は中でも北西に偏在して設置されていた。最下部で湧水した。時期は近世1段階と推測される。

S K 37（第75図） A区南西部で検出された平面形が2.73m×2.44mのやや歪な円形土坑である。底部で湧水層に達しており井戸と判断される。最下部で木製結筒に伴う箍が一部残存しており、井戸側は既に抜き取られたものと考えられる。内部からは常滑窯産赤物井筒が4個体分出土しており、これらを総合的に考えると、本来の井戸側は下位に木製結筒を1段、上位に常滑窯産赤物井筒を4段重ねて構築された井戸と復元できる。それとは別に土坑中位付近で複数の材で方形枠らしきものを形成しており、南西部では竹列、北西部で棧瓦、北部で縦板、南部で横板が存在した。これらは構造物として組まれておらず井戸側を維持できる構築物ではないことから、結筒井戸が廃絶され

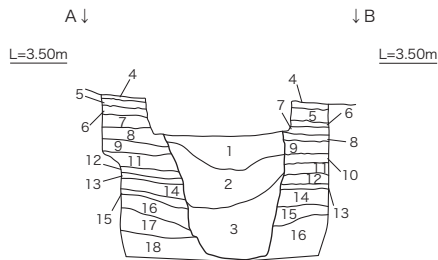
遺構



第 75 図 井戸 S K 33・37 遺構図 (S=1:50)

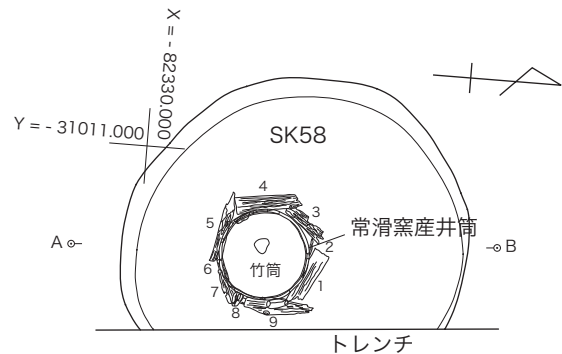
遺 構

SK65セクション



SK65セクション土層説明

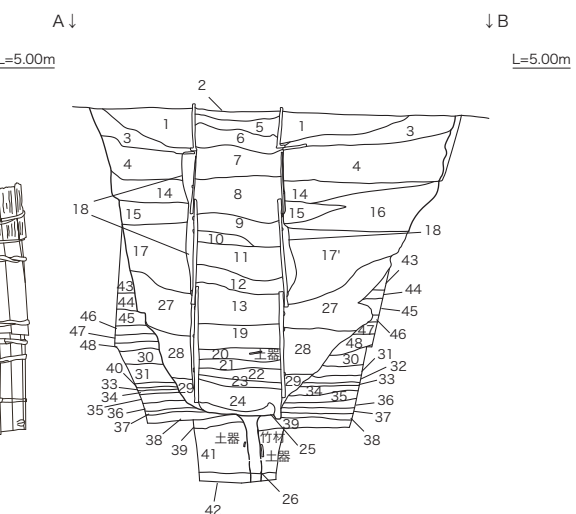
- 第1層 5GY 6/1 オリーブ灰色粘質土 同色細砂含+N3/ 暗灰色粘質シルトブロック
- 第2層 5GY 5/1 オリーブ灰色シルト
- 第3層 10Y 5/1 灰色シルト
- 第4層 10YR 3/1 黒褐色粘質土
- 第5層 5Y 6/1 灰色粘質土
- 第6層 5Y 5/1 灰色粘質土
- 第7層 2.5GY 7/1 明オリーブ灰色粘質土
- 第8層 7.5GY 6/1 緑灰色粘質土
- 第9層 5GY 5/1 オリーブ灰色粘質土
- 第10層 10GY 6/1 緑灰色粘質土
- 第11層 N 3/ 暗灰色粘質土
- 第12層 N 3/ 暗灰色粘質土+ 7.5GY 6/1 緑灰色粘質土ブロック少量
- 第13層 N 2/ 黒色粘質土
- 第14層 N 4/ 灰色粘質土
- 第15層 N 3/ 暗灰色粘質土 同色細砂含
- 第16層 N 4/ 灰色粘質土 同色細砂含
- 第17層 5BG 5/1 青灰色シルト
- 第18層 5BG 4/1 暗青灰色シルト



SK58セクション土層説明

- 第1層 10YR 4/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土ブロック
- 第2層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土ブロック
- 第3層 10YR 6/1 褐色細粒 砂質土
- 第4層 10YR 6/1 褐色 砂質シルト
- 第5層 10YR 5/3 鈍い黄褐色 砂質土 + 10YR 4/4 褐色砂質土ブロック
- 第6層 10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 + 10YR 4/4 褐色砂質土ブロック
- 第7層 10YR 6/1 褐色 砂質シルト
- 第8層 10YR 5/1 褐色 粘質土
- 第9層 7.5Y 5/1 灰色 砂質土
- 第10層 7.5Y 6/3 オリーブ黄色 砂質土
- 第11層 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト
- 第12層 7.5Y 5/3 灰オリーブ色 砂質シルト
- 第13層 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト
- 第14層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第15層 2.5Y 6/3 鈍い黄色 砂質シルト
- 第16層 5Y 6/1 灰
- 第17層 5Y 6/2 灰オリーブ色 砂質シルト
- 第17層 5Y 7/3 浅黄色 砂質シルト
- 第18層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- 第19層 10Y 5/1 灰色 砂質土
- 第20層 10Y 4/1 灰色 砂質シルト
- 第21層 10Y 3/1 オリーブ黒色 砂質土
- 第22層 10Y 5/1 灰色 砂質シルト
- 第23層 10Y 3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
- 第24層 10Y 4/1 灰色 砂
- 第25層 7.5Y 4/3 暗オリーブ色 粘土 (10Y 8/1 灰白色粘土)
- 第26層 10Y 4/1 灰色 砂
- 第27層 10Y 6/1 灰色 砂質土
- 第28層 10Y 5/1 灰色 砂質土
- 第29層 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第30層 2.5GY 7/1 明オリーブ灰色 粘質シルト
- 第31層 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第32層 5GY 6/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第33層 5GY 5/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第34層 5GY 6/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第35層 N 3/0 暗灰粘質シルト + 5GY 5/1 オリーブ灰色 粘質シルトブロック
- 第36層 N 3/0 暗灰色 粘質シルト
- 第37層 N 4/0 灰色 粘質シルト
- 第38層 N 3/0 暗灰色 粘質シルト
- 第39層 N 4/0 灰色 粘質シルト
- 第40層 5GY 6/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第41層 5GY 6/1 オリーブ灰色 粘質シルト
- 第42層 N 7/0 灰白砂 (湧水層)
- 第43層 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂
- 第44層 10YR 7/2 鈍い黄褐色 砂質シルト
- 第45層 2.5Y 6/3 鈍い黄色 砂質シルト
- 第46層 2.5Y 7/2 灰黄色 砂質シルト
- 第47層 2.5Y 4/1 黄灰色 粘質シルト
- 第48層 5Y 5/1 灰色 粘質シルト

SK58セクション



第 76 図 井戸 S K 58・65 遺構図 (S=1:50)

た後に水溜状遺構として簡易な枠を設置したものと理解したい。S D 22 を切る形で検出されたので、井戸が構築された時期は近世 2 段階と思われる。

S K 58 (第 76 図) C 区東部で確認された平面形が 2.50m × 1.60m 以上の円形土坑で、井戸側は上位に常滑窯産赤物井筒が 1 段、下位に木製結筒が 3 段重ねられたものである。常滑窯産赤物井筒は倒立した状態で据えられ上部は欠損していた。赤物井筒と木製結筒の間には板材を円形に並べたものが挟まれて、赤物井筒の口縁部外側には数個の円礫が置かれていた。3 段の結筒は、上位の結筒上部のみが腐食していたが、それ以外はよく残存していた。この状況からみて、本来は 3 段以上の木製結筒で井戸側が構成されていたものが、上位木製結筒の破損などの理由によって、上位のみ板材を介して常滑窯産赤物井筒に造り替えられたものと推測される。最下部は暗オリーブ色粘土で底部が覆われ、その中央部に竹筒 (1107) が差し込まれていた。竹筒の上位に土師器皿 (1086) が裏を向けて置かれており、井戸廃絶に伴うものかもしれない。時期は近世 1 段階と考えられる。

S K 65 (第 76 図) C 区中央部で検出された平面形が 1.05m × 1.00m の隅丸方形の土坑である。底部は勢い良く湧く湧水層に達していないが、地下水は蓄積される深さにはなっている。井戸側の構造物は残存せず、井戸側が構築された痕跡も確認されない。井戸と判断することが難しい遺構である。時期は不明。

(3) だるま状遺構

S X 03 (第 77 図) A 区南西部に位置する平面形がだるま形を呈する遺構である。全長 8.15m、最大幅 5.20m を測る大規模な遺構で、土坑 S K 38 ~ 40 と周溝 S D 29 で構成される。S K 38 と S K 39 は非常に浅い落ち込みで黄灰色砂質シルトが充填され、その床面は暗黄灰色砂質シルトで構成され表面は硬化していた。S D 01 を切る形で構築されており、時期は近世 2 段階と推測される。性格は全く不明であるが、平面プランのみで比較すれば、竈状遺構として報告された清洲城下町遺跡 S X 4006 に近似している (鈴木編 1995)。井戸 S K 37 とセットで存在した可能性も考えられる。

(4) 土坑

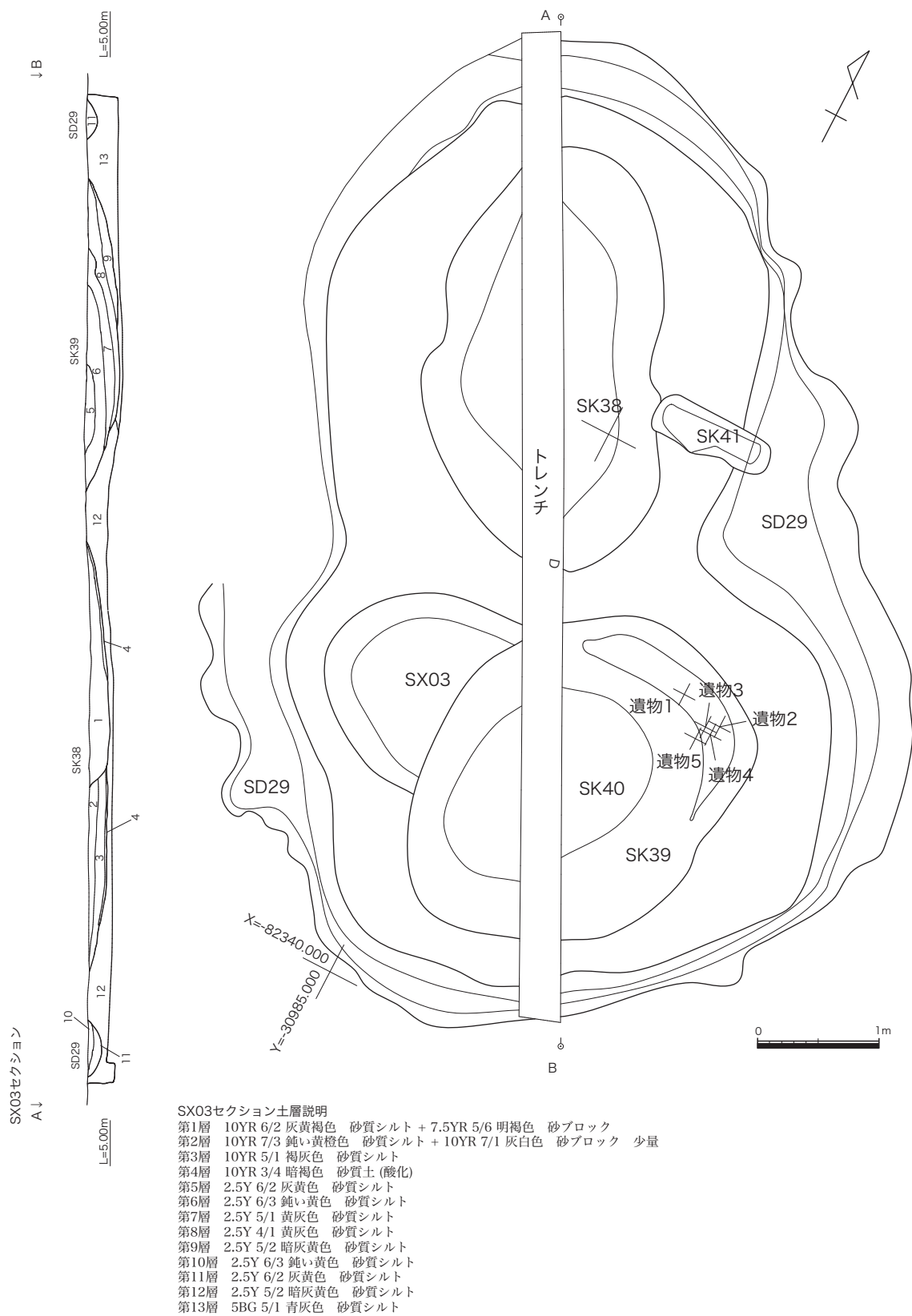
S K 01 B 区中央にある平面形が 4.80m × 4.00m の楕円形土坑である。掘肩の形状や堆積状況は一見井戸と思われるが、底部が湧水層には達していないため土坑と考えられた。

(5) 不明遺構

S K 03 B 区南東部に位置する不定形な巨大土坑である。調査区東側に展開する現水田に伴うものかもしれない。

S X 12 (第 74 図) C 区南東部に位置する遺構で、南部と東部は調査区外に拡がる。土坑 S K 59、S K 62 と周溝 S D 61 で構成され、周囲には無数の杭 (おそらく竹杭) の痕跡が拡がっている。基盤はにぶい黄橙色砂質土がグライ化した状態で、S K 62 には下位は灰オリーブ色粘質土・上位は黄灰色砂質土が堆積していた。性格は全く不明であるが、時期は近世 2 段階と推測される。

遺構



第 77 図 S X 03 遺構図 (S=1:50)

第3章 遺 物

第1節 出土遺物の概要

今回の調査で下津新町遺跡から出土した遺物は、整理作業終了後の段階で27リットル入りコンテナに約75箱（焼物と石製品は69箱）にのぼる。その内訳は、土器・須恵器・陶磁器類、石製品、金属製品、木製品などに分けることができる。ここでは、遺物をこの材質別に大別して報告することとしたい。

遺物の採取方法は、通常の包含層や遺構掘削において発見された遺物を採取する方法であり、篩別などの厳密な方法を採用してはいない。遺物は

多くは遺構から出土しているが、実際の調査では厳密に遺構面を把握して遺構を掘削していないことなどから、別遺構を起源とする遺物を含んでしまっている場合も想定される。多くの資料群にこのような一括性について疑問が生じていることをあらかじめ断っておきたい。

以上のような状況ではあるけれども、本報告では比較的豊富な出土量を持つ竪穴建物跡や溝などの出土資料を中心に図化して紹介することとした。

第2節 土器・須恵器・陶磁器類

本遺跡から出土した焼物（土器・須恵器・陶磁器類）は遺構内出土遺物と遺構外出土物を合わせて接合前破片数で35469点が出土している。古墳時代から江戸時代までに至る幅広い時期の遺物が存在しており、ここではさらに古墳時代、古代、中世、近世に大きく時期で分けて記述を進めていきたい。（鈴木正貴）

（1）古墳時代

古墳時代の遺物は、A区からC区にかけて南北に走る浅い谷状の落ち込み部分及びその近辺の標高約4.0mの黒灰色粘土層上面で出土している。土器の所属時期は廻間Ⅲ式期から松河戸Ⅰ式期が主体であるが、一部廻間Ⅰ・Ⅱ式期まで遡るものもある。

SX 02 出土遺物（第78図16） S字状口縁甕D類。口縁端部はヨコナデにより肥厚するが、明瞭な面はもたない。頸部にはヘラによる沈線が巡る。体部は外面が粗い斜位・横位のハケ調整、内面がナデ・イタナデ調整される。脚部は外面が斜位のハケ調整後に縦位にナデ消され、内面は端部が折り返された後ナデ調整される。また脚部内面上部には、粗い砂粒などを含まない粘土充填がみられる。

SX 06 出土遺物（第78図14・15） 14は屈折脚高坏の坏部。受け部と口縁部の接合部がやや凹んで沈線状になり、口縁端部はヨコナデにより内面側がわずかに凹面をなす。15はS字状口縁甕C類になるもので、口縁部は上外方に延びて丸く収束する。体部外面は粗いハケ調整がなされる。

SX 07 出土遺物（第78図17） S字状口縁甕D類。口縁端部はヨコナデによって横外方に延びて面をなし、頸部には沈線が巡る。体部外面には斜位の粗いハケ、内面はナデ・イタナデ調整が施される。また外面には成形時についたと思われる指による凹凸が残る。

SX 08 出土遺物（第78図12） 口縁部がわずかに有段状を呈する丸底壺。口縁部はやや強いヨコナデ、体部外面はハケ・イタナデ、体部内面はナデ・ケズリ成形・調整される。口縁部外面には煤が付着する。

SX 09 出土遺物（第78図1～11） 1は布留甕。口縁部は有段形を呈し、端部は内側に肥厚して丸く収束する。体部外面はナデ、内面は右上がりの斜め方向のケズリ成形・調整がなされる。7～10はS字状口縁甕。7～9はS字状口縁甕D

遺 物

類の口縁部から体部上半部で、口縁端部がヨコナデにより横外方に延びて斜めの面をなす。体部外面には粗い斜位のハケ調整が施され、7には横位のハケもみられる。10は甕脚部で、端部は内面に折り返されている。ナデ調整。6は直口壺の口縁部、2～5は屈折脚高坏になる。2は坏口縁部と受部の境界に明瞭な稜をもち、4は不明瞭である。調整はナデ。3の脚部は外面イタナデ、内面ナデ調整され、4は外面ナデ（イタか）調整、内面横位のケズリ成形・調整される。11はワイングラス形高坏で、坏部最大径は下位になるが、明瞭な稜はもたない。坏部口縁は端部がヨコナデによりわずかに凹面をなして内湾し、外面がハケ・ミガキ、内面がハケ・ナデ調整される。脚部はゆるやかに八字状に延び、外面がミガキ、内面がハケ調整される。透かし孔はみられない。この一群の土器群の中で11のみ廻間Ⅱ式期以前に遡る可能性が考えられる。

S X 10 出土遺物（第78図13） 屈折脚高坏の坏部。口縁部と受部の境界に明瞭な稜をもち、ナデ・ヨコナデ調整される。

S X 11 出土遺物（第78図20） 高坏の脚部か。外内面とも赤彩が施される。廻間Ⅱ式以前のものと思われる。

S K 33 出土遺物（第78図18） 有段口縁をもつ太頸壺。内面上位にはイタによる連続刺突が1段施され、下位には焼成前の穿孔がみられる。

S K 50 出土遺物（第78図19） 有稜高坏の坏部。口縁端部がヨコナデにより横外方にわずかに肥厚する。外内面ともミガキ調整。

その他の出土遺物（第78図21～23） ここでは遺構を検出する際に出土した遺物を紹介する。21・22は屈折脚高坏。23は口縁端部がヨコナデによって横内外方に延び、横位の面をなす鉢。全体にヨコナデまたはナデ調整される。時期は不明。

（宮腰健司）

（2）古代

古代の遺物には須恵器と土師器などが存在する。須恵器はほとんどが猿投窯系のものと思われ、器

種は杯身と杯蓋が最も多く、この他に高杯、はそう、甕、壺類、瓶類などがある。時期によっては灰釉陶器が伴う場合もある。土師器は甕類が圧倒的に多く、わずかに杯などの供膳具や製塩土器などが認められる。土師器甕は口縁端部をつまみあげる伊勢型甕と、口縁部が肥厚し頸部内面に荒いハケ調整が残る濃尾型に分けることができる。

S B 03 出土遺物（第79図24～27） 須恵器杯身（24・25）は高蔵寺2号窯式に、須恵器杯蓋（27）は岩崎41号窯式に属する。

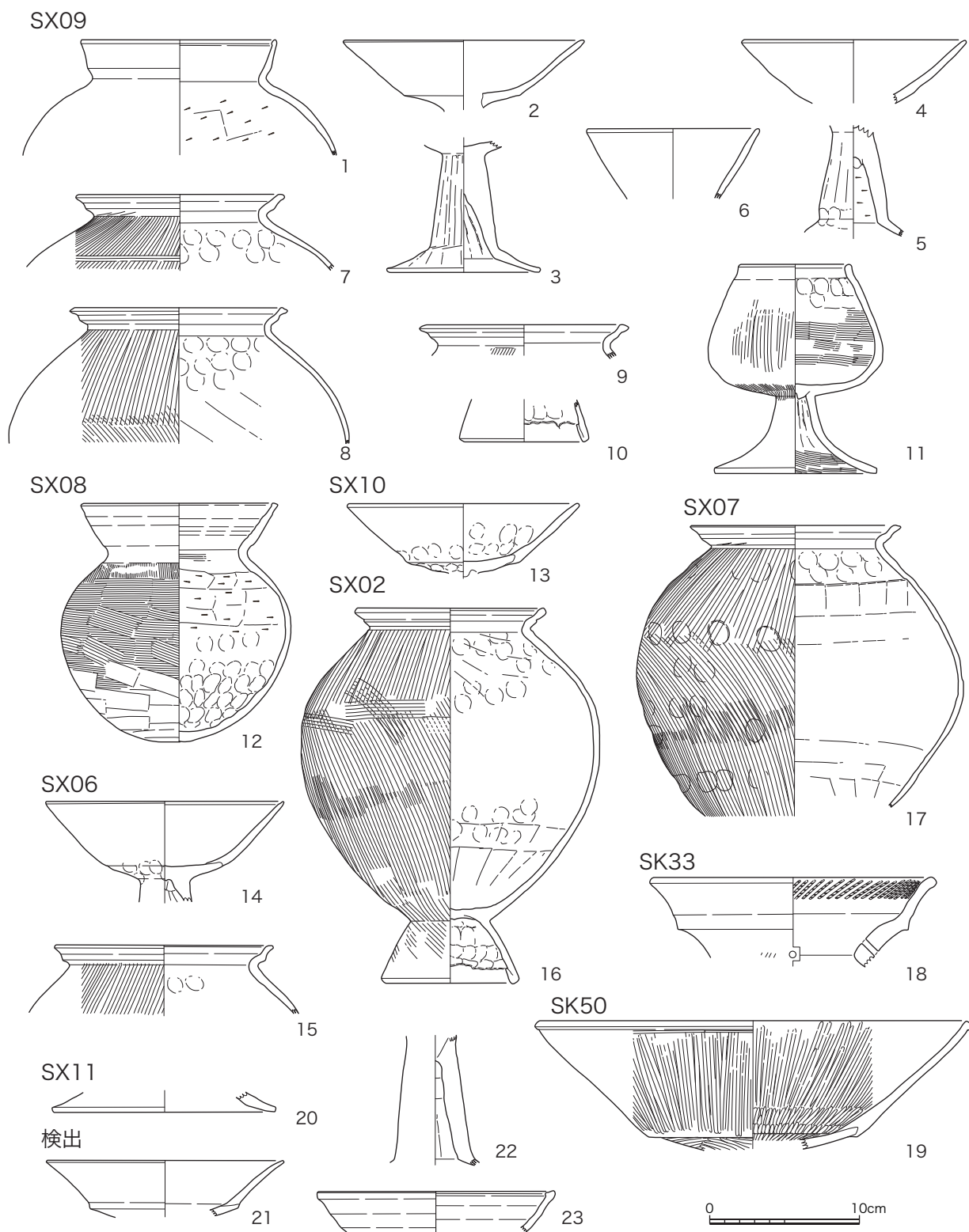
S B 04 出土遺物（第79図28～35） 須恵器類は概ね鳴海32号窯式に属し、土師器甕は伊勢型甕（35）が存在する。

S B 05 出土遺物（第79図36～46） 須恵器杯身は高蔵寺2号窯式に位置づけられるが、その他の須恵器類は概ね鳴海32号窯式に属する。組成からみると、須恵器鉄鉢（43・44）と鳥形硯蓋（45）を伴う点が特徴的である。38は底部外面に刻紋が残るが判読はできない。41は合子身で体部下半の一部に別製品の破片が融着していた。45は須恵器鳥形硯蓋の口縁部片で、表面に波状紋による羽紋が表現されその上に灰釉がかかっていた。原始灰釉陶器と呼ばれるもので8世紀代に位置づけられる。

S B 06 出土遺物（第79図47～70） 須恵器杯類は岩崎17号窯式から折戸10号窯式までに属するものがあり、時期に長い幅が認められる。52は底部に「岡」の異体字が刻書された須恵器無台杯身である。57はフラスコ形瓶の脚部で、自然釉がかかり透かしが認められる。59は9世紀前半の有台碗である。土師器甕は濃尾型甕（70）がある。

S B 07 出土遺物（第79図71～81） 須恵器は高蔵寺2号窯式から鳴海32号窯式に属する資料ばかりである。81は体部外面がヘラケズリ調整された鉢である。

S B 08 出土遺物（第80図82～85） 85は底部に刻書が残る須恵器碗で、体部外面下半には手持ちヘラケズリ調整がなされていた。



第 78 図 古墳時代の土器

遺 物

S B 09 出土遺物（第 80 図 86～128） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式に属するものと折戸 10 号窯式に属するものの 2 者が多い。須恵器は杯類のみではなく、薬壺タイプの短頸壺（114）、甗（115）、甗（116）、大形深鉢（117）、灰釉陶器水瓶（119）などさまざまな器種が認められる。114 は黒笹 14 号窯式、123 は黒笹 14 号窯式に属する。111 は畿内系土師器皿の口縁部で、体部は直立ぎみに立ち上がっている。土師器甗は濃尾型甗（121・122）がある。本資料には混入と推測される山茶碗類（124～128）なども一定量が含まれている。

S B 10 出土遺物（第 80 図 129～158） 須恵器杯蓋は 134 を除き概ね高蔵寺 2 号窯式に位置づけられるが、須恵器杯身は折戸 10 号窯式の資料（153）が認められる。須恵器高杯（139～142）は東山 15 号窯式に属するもので、別遺構の資料が混入したものであろう。土師器甗は 7 世紀代の伊勢型甗（156）があるが、系譜が不明のもの（154・155）も含まれる。本資料群にも山茶碗（158）が混入していた。

S B 11 出土遺物（第 81 図 159～177） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式または鳴海 32 号窯式と思われる資料である。170 は猿投窯産ではないものと思われる。土師器杯身（168）は内面にススが付着する畿内系土師器で、ミガキなどの調整痕は不明瞭である。土師器甗は濃尾型甗（174）がある。

S B 12 出土遺物（第 81 図 178～189） 須恵器杯類は概ね鳴海 32 号窯式に属し、須恵器鉢（185）が高蔵寺 2 号窯式に、須恵器無蓋高杯（186）が東山 44 号窯式に位置づけられやや古くなっている。180 は猿投窯産ではないと考えられる。土師器甗は濃尾型甗（187・188）である。山茶碗（189）が混入している。

S B 13 出土遺物（第 81 図 190～198） 須恵器はさまざまな器種が認められ、そのうち平瓶（194）が折戸 10 号窯式に属する。191 は猿投窯産とは言いがたい。尾張型山茶碗（196・197）や中国産白磁皿（198）も含むことから、良好な一括資料とは評価できない。

S B 14 出土遺物（第 81 図 199～211） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式から折戸 10 号窯式までに属するものである。土師器甗は 209 が著しく古いものと思われるが、その他は濃尾型甗に属し、207 は 7 世紀代、208 は 8 世紀前半に位置づけられる。

S B 17 出土遺物（第 82 図 212～214） 須恵器杯身は口縁部のみが確認されたが、詳細な時期は特定できない。土師器甗（214）は濃尾型甗に属するかもしれない。

S B 19 出土遺物（第 82 図 215～229） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式から鳴海 32 号窯式に位置づけられるが、長頸瓶（224）のみが折戸 10 号窯式に属し灰釉が施されている。鉄鉢（222）は外面の自然釉が剥離しており、フラスコ形瓶（223）はやや古く東山 50 号窯式に属する。土師器甗（225～229）は伊勢型甗で 7 世紀以降に位置づけられる。

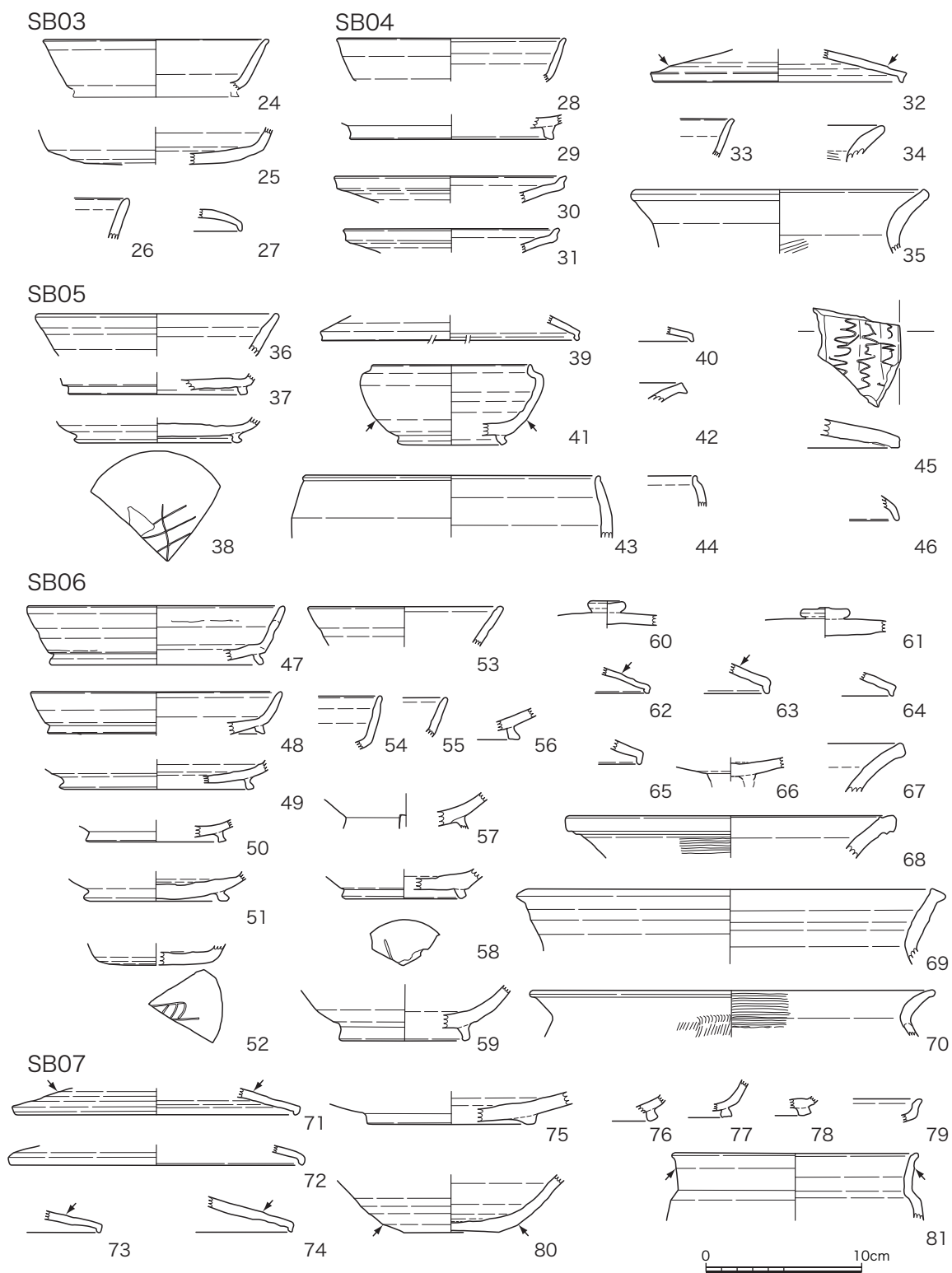
S B 20 出土遺物（第 82 図 230～239） 須恵器は東山 50 号窯式から鳴海 32 号窯式まで分布し時期にまともには認められない。土師器には製塩土器の脚部（239）が存在する。

S B 21 出土遺物（第 82 図 240～248） 須恵器杯類・平瓶（245）・鉢（246）は岩崎 41 号窯式から高蔵寺 2 号窯式に位置づけられるものが多数を占める。245 はカマドから出土した瓶類で、平瓶かもしれない。土師器甗は伊勢型（247）と濃尾型（248）の両者が存在する。

S B 22 出土遺物（第 82 図 249～258） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式から鳴海 32 号窯式に位置づけられる。須恵器高杯（257）と須恵器甗（258）は岩崎 17 号窯式に属する。

S B 23 出土遺物（第 83 図 259～262） 須恵器杯身（259）は高蔵寺 2 号窯式に、盤は折戸 10 号窯式に、甗は岩崎 17 号窯式に属し、時期はバラバラである。土師器杯身（260）は畿内系土師器と思われるが、表面は剥離していて残存状況は不良である。

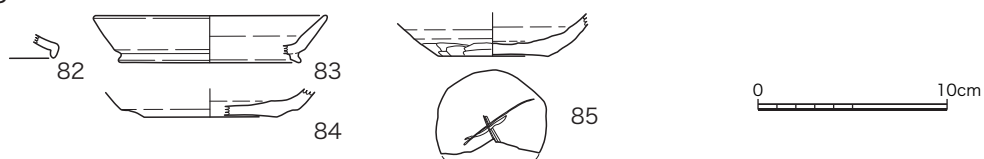
S B 24 出土遺物（第 83 図 263～279） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式から鳴海 32 号窯式に属



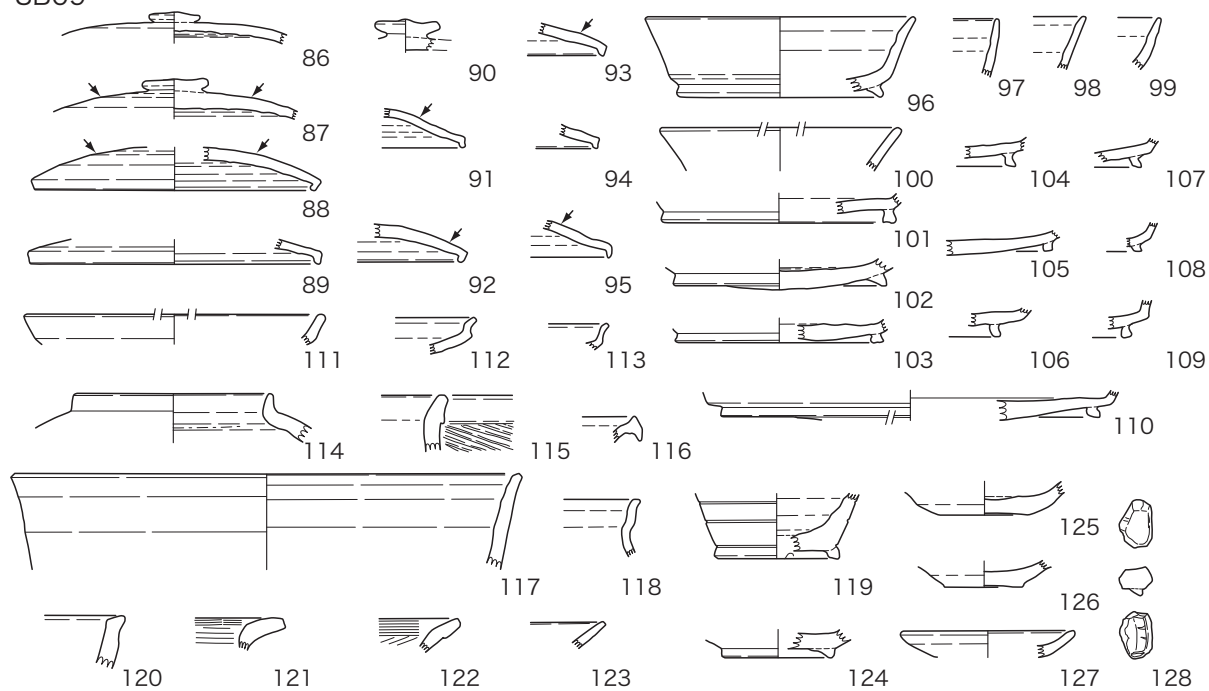
第 79 図 竪穴建物跡出土遺物 (1)

遺物

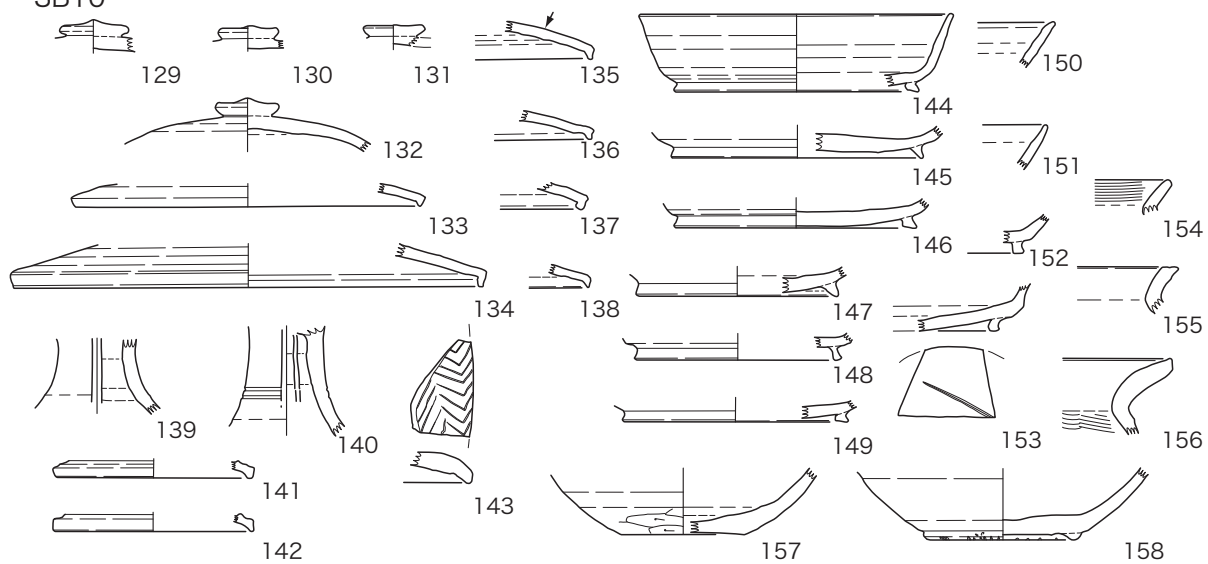
SB08



SB09



SB10



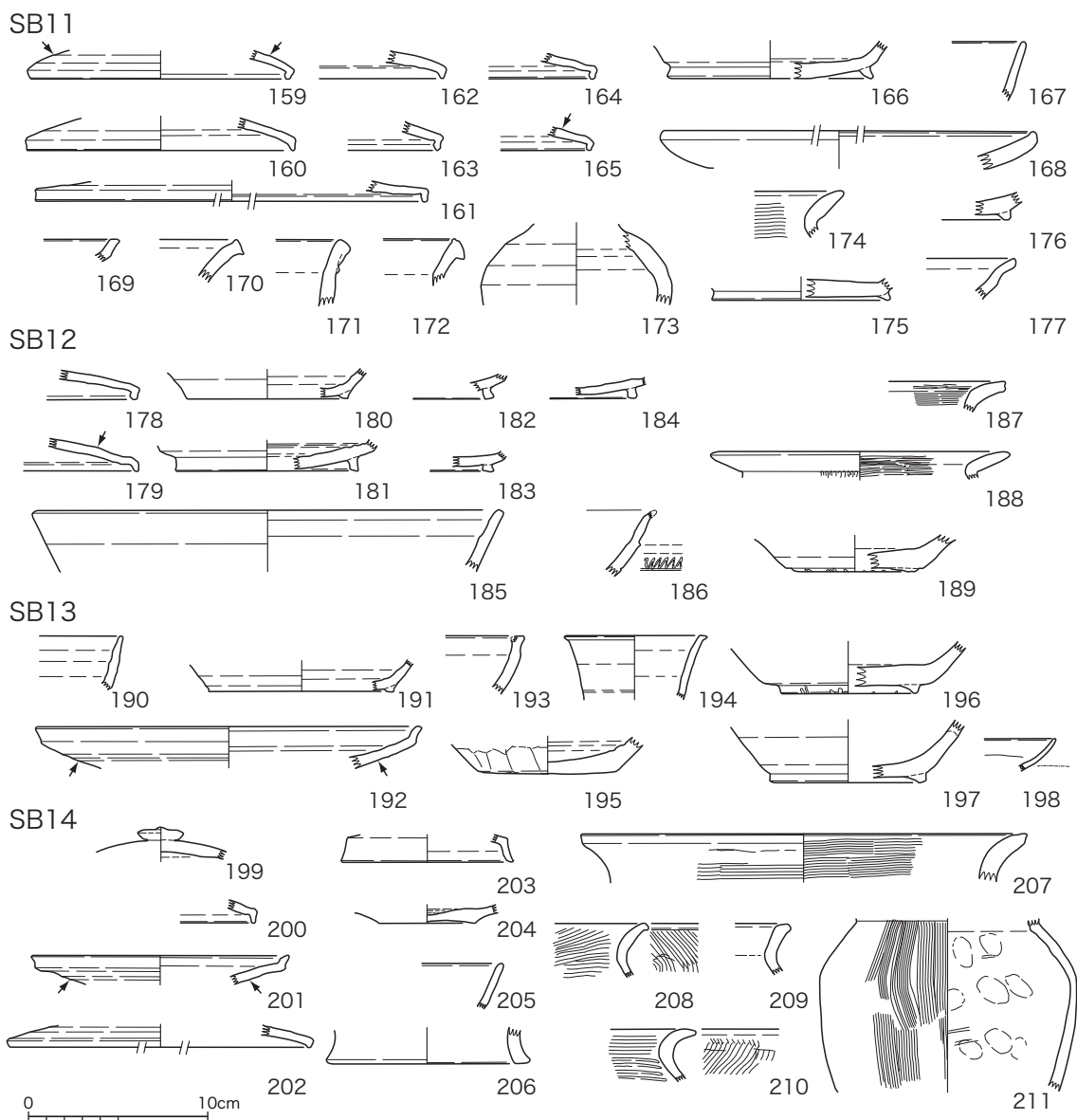
第 80 図 竪穴建物跡出土遺物 (2)

する。折戸 10 号窯式に位置づけられる資料もあるが、これらは建物跡内の遺構 S K 01 や P 5 から出土したものであり、これらの遺構は S B 24 の内部施設ではない可能性も考えられる。土師器甕は伊勢型 (279) と濃尾型 (278) の両者が存在する。

S B 25 出土遺物 (第 83 図 280 ~ 298) 須恵器は杯蓋がやや多く出土し、多くは高蔵寺 2 号窯式に属するが、鳴海 32 号窯式と思われるもの (286 ~ 288) があり、杯身は折戸 10 号窯式に位置づ

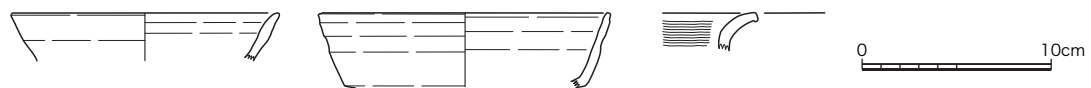
けられるもの (292) が混じる。293 は底部外面に「十」と記された刻書が存在する。土師器甕 (298) の底部外面には木葉痕が残存している。

S B 26 出土遺物 (第 83 図 299 ~ 313) 須恵器杯身 (301・304) と杯蓋 (299・300) などは折戸 10 号窯式に属するが、他の須恵器には東山 44 号窯式から岩崎 17 号窯式に位置づけられるものが多い。土師器には三河型甕 (313) の他に蓋が存在する。312 は蓋の口縁部、311 は蓋の摘みであり、両者は完全には接合しなかったが同一個

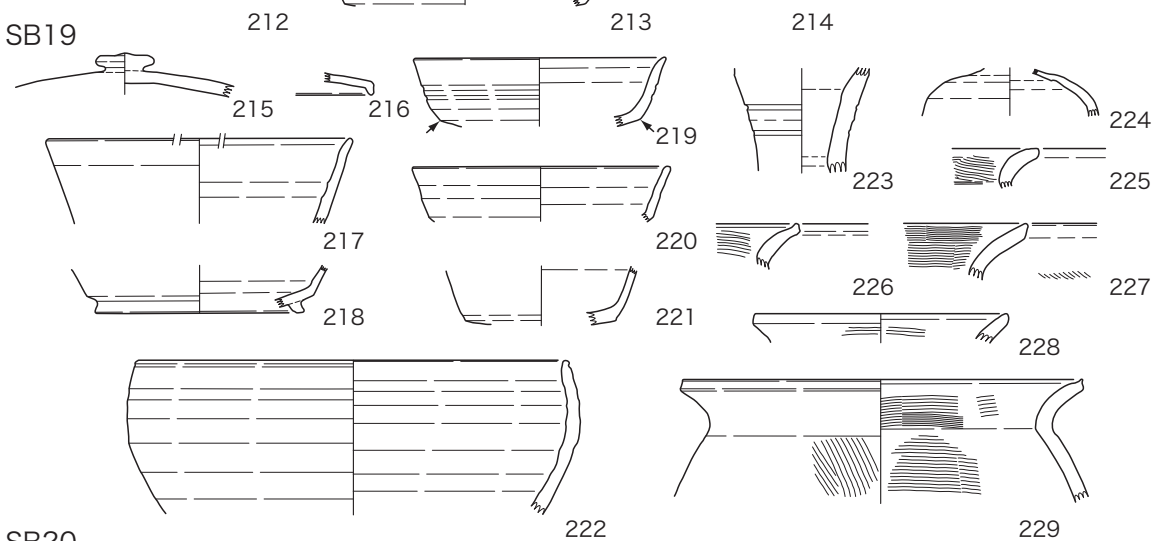


第 81 図 縦穴建物跡出土遺物 (3)

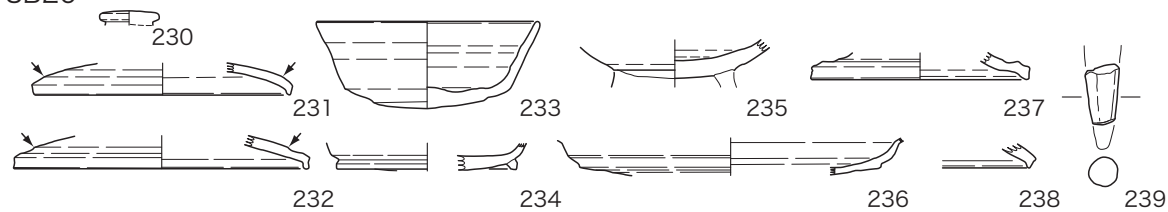
SB17



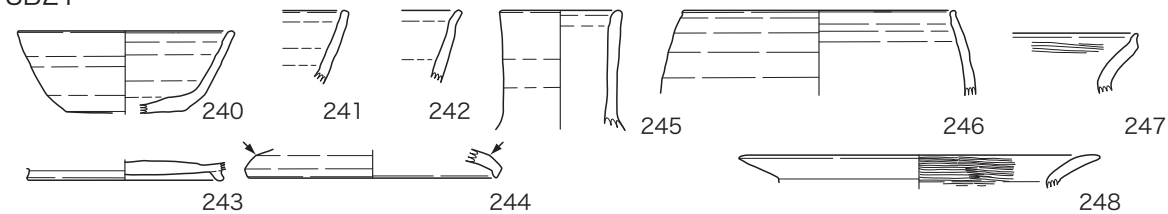
SB19



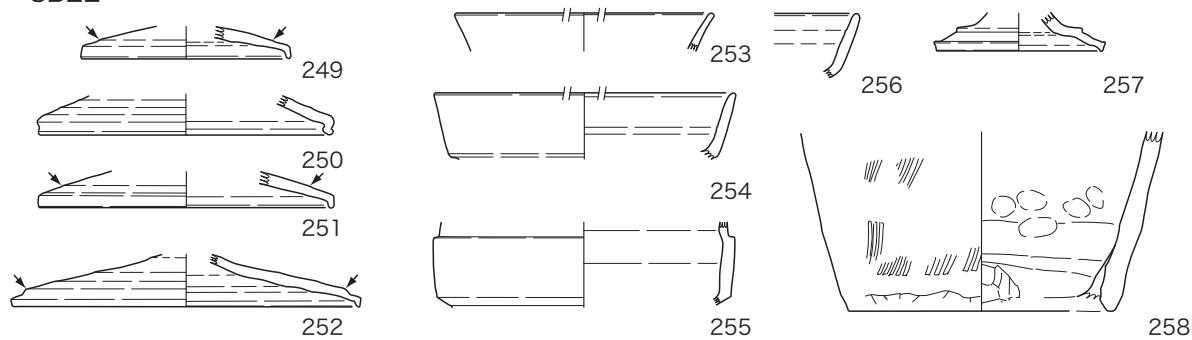
SB20



SB21

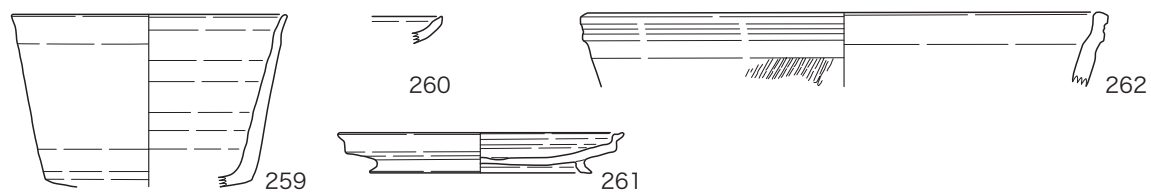


SB22

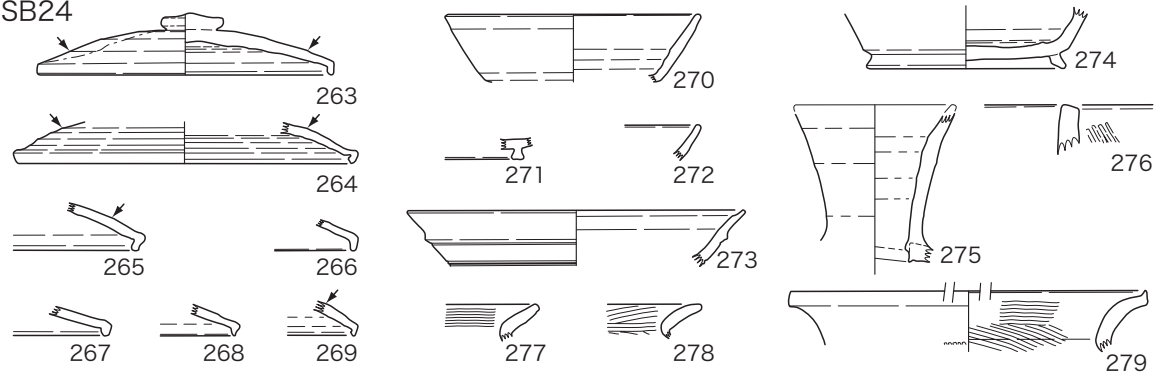


第 82 図 竪穴建物跡出土遺物 (4)

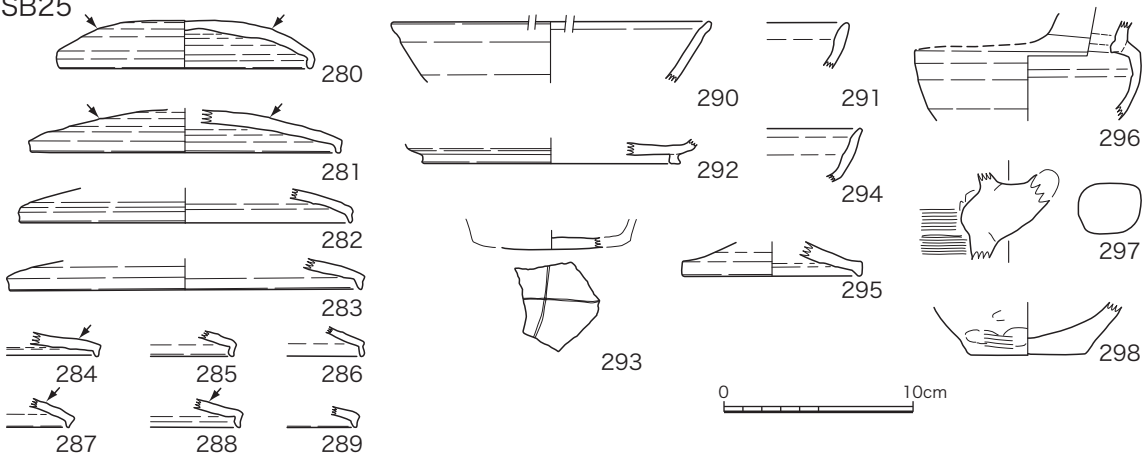
SB23



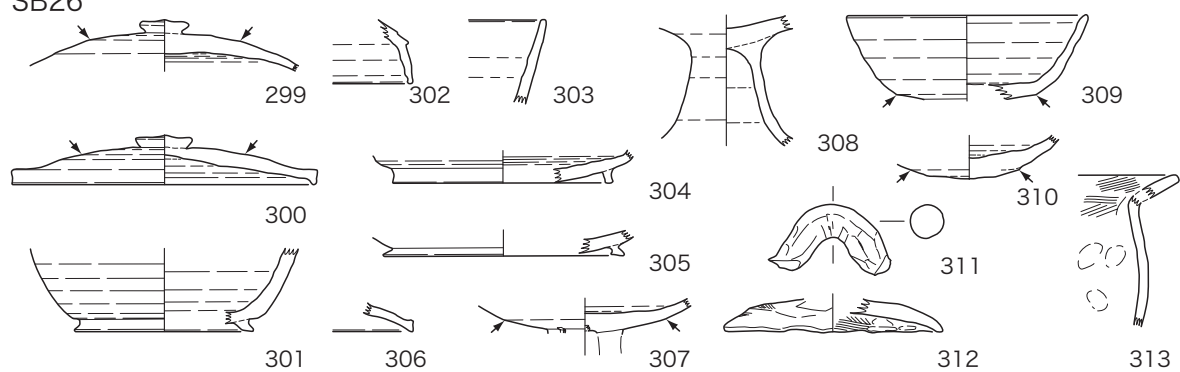
SB24



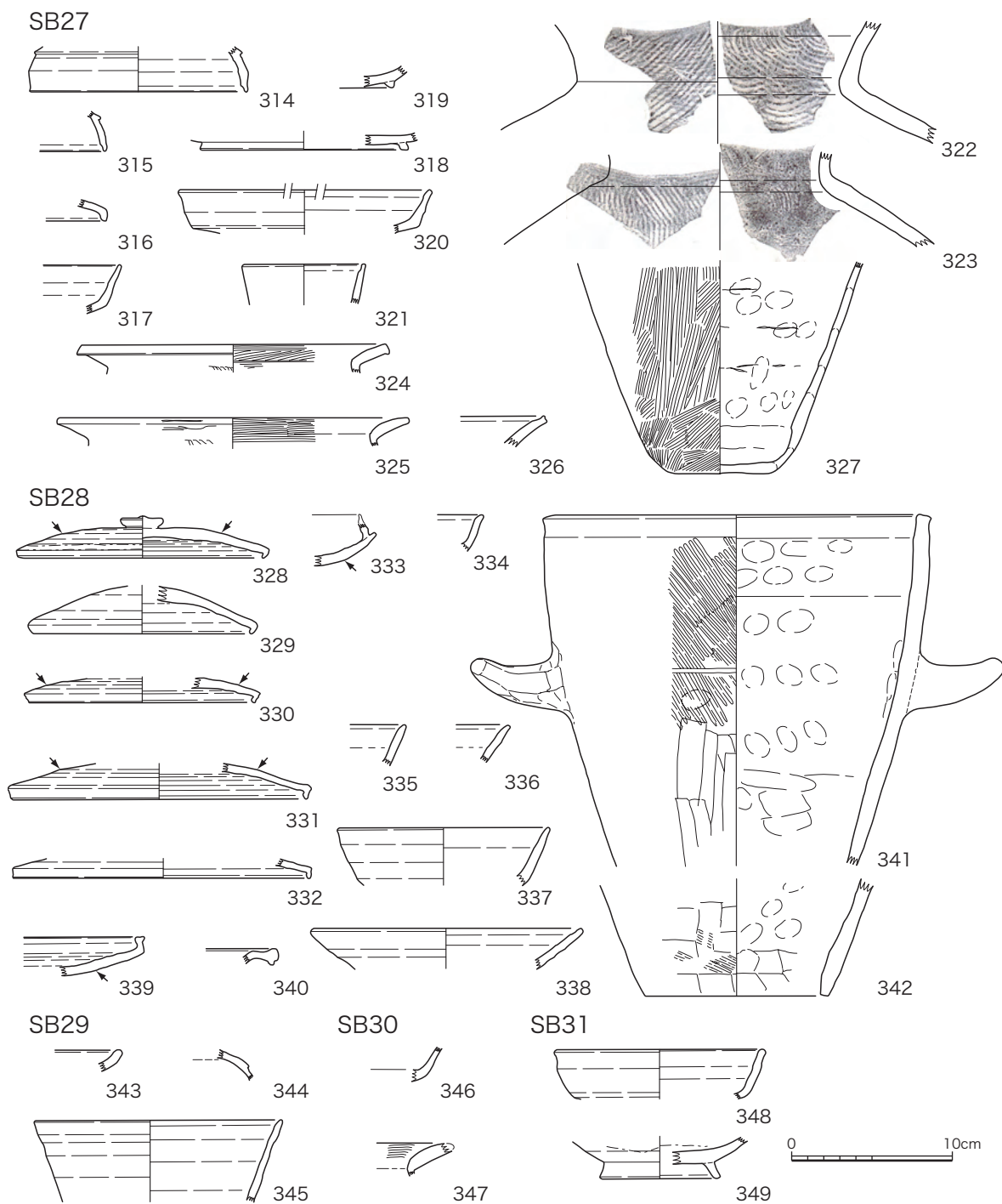
SB25



SB26



第 83 図 竪穴建物跡出土遺物 (5)



第 84 図 竪穴建物跡出土遺物（6）

体と考えられる。手づくねで製作され胎土は黒ずんだ色を呈している。

S B 27 出土遺物（第 84 図 314～327） 須恵器は時期的にバラバラで鳴海 32 号窯式に属するものが最も新しく、平瓶（321）や甕頸部（322・323）などの器種もある。323 は美濃須衛窯産のものと思われる。カマドから出土した土師器甕（324・325・327）はいずれも濃尾型甕である。

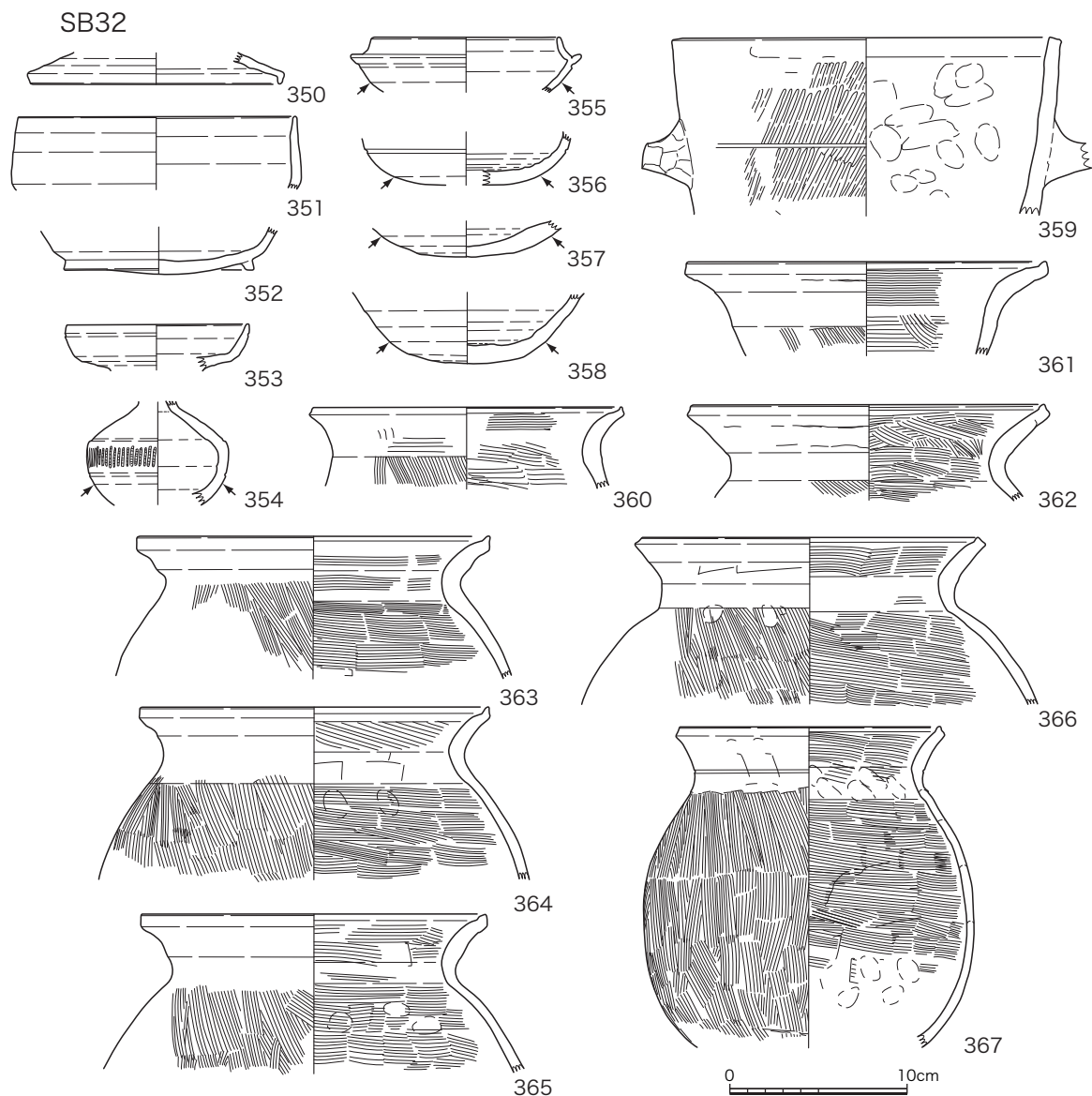
S B 28 出土遺物（第 84 図 328～342） 須恵器杯蓋と盤は概ね高蔵寺 2 号窯式から鳴海 32 号窯式に位置づけられる。328 と 329 は建物跡北西

部から出土した。須恵器甕（341・342）は岩崎 17 号窯式に属し建物跡南西部から出土した。

S B 29 出土遺物（第 84 図 343～345） 出土遺物は少ない。須恵器無蓋杯身（345）が高蔵寺 2 号窯式に属する。

S B 30 出土遺物（第 84 図 346～347） 出土遺物は少ない。土師器甕は濃尾型のみが認められ、所属時期は 8 世紀台と思われる。

S B 31 出土遺物（第 84 図 348～349） 出土遺物は少ない。百代寺窯式に属する灰釉陶器碗（349）が存在する。



第 85 図 縦穴建物跡出土遺物（7）

遺物

S B 32 出土遺物（第 85 図 350～367） 高蔵寺 2 号窯式に属する須恵器杯身（350）と杯蓋（352）が存在するが、それ以外の大部分の須恵器は東山 44 号窯式前後に位置づけられる。土師器甕（360～367）は口縁端部を上方に摘み上げる伊勢型のみが認められた。頸部から口縁部が肥厚する特徴を持ち、内面に横方向のハケ調整、外面に縦方向のハケ調整が残存しており、所属時期は 7 世紀後半から 8 世紀初頭までと思われる。口縁端部の摘み上げが強いもの（360～365）と弱いもの（366・367）に分けることができる。

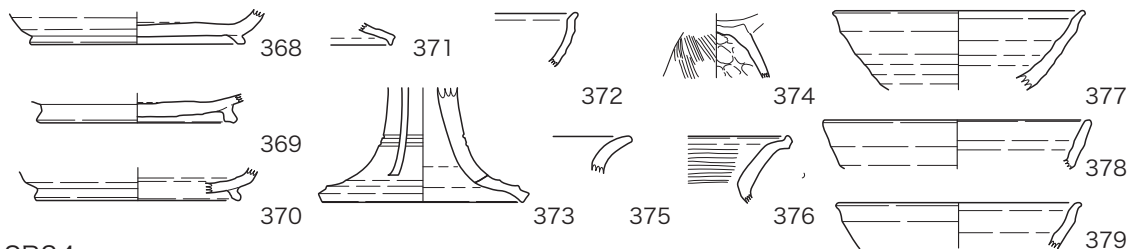
S B 33 出土遺物（第 86 図 368～379） 須恵器杯類は概ね高蔵寺 2 号窯式に属する。350 は東山 44 号窯式前後に位置づけられる高杯、351 は

古墳時代に属する台付甕であり、明らかに古い混入遺物である。土師器甕は伊勢型（376）と濃尾型（375）の両者が存在する。

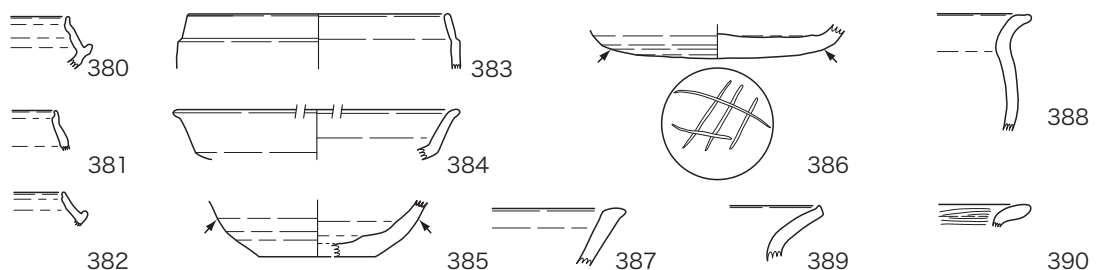
S B 34 出土遺物（第 86 図 380～390） 須恵器杯身は東山 44 号窯式に属し、その他の器種も 7 世紀代に位置づけられる。386 は須恵器壺類で、底部外面に刻書が施されている。土師器甕は伊勢型（389）と濃尾型（390）の両者が存在する。388 は宇田型甕の新しい時期のものと思われる。

S B 35 出土遺物（第 86 図 391～406） 須恵器杯身と杯蓋の多くは高蔵寺 2 号窯式に属するが、内部施設出土資料を中心に東山 44 号窯式のものなども含まれる。土師器甕は伊勢型（406）であり、東山 44 号窯式に伴う資料と考えられる。

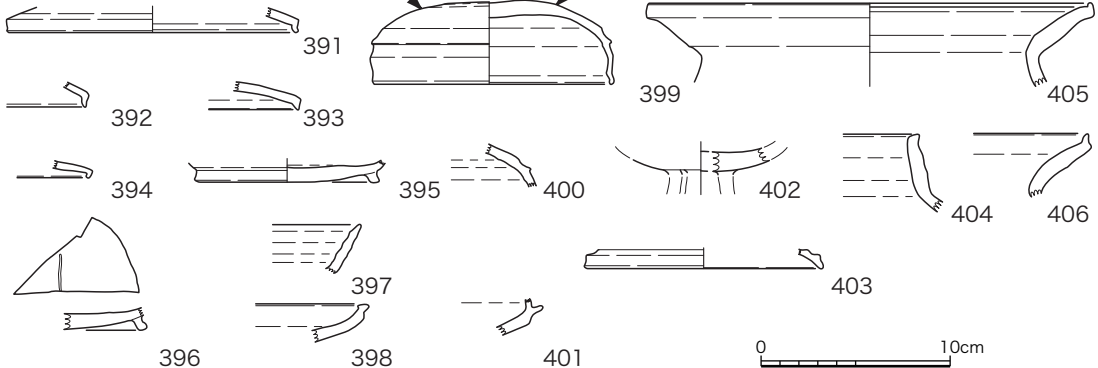
SB33



SB34



SB35



第 86 図 竪穴建物跡出土遺物（8）

S B 36 出土遺物（第 87 図 407 ～ 423） 須恵器は多くが岩崎 17 号窯式と高蔵寺 2 号窯式に属する。杯類の他に高杯（418）や平瓶（422）などがある。土師器甕は 8 世紀後半に位置づけられる濃尾型（421）と伊勢型の可能性があるもの（420）がある。

S B 37 出土遺物（第 87 図 424 ～ 427） 須恵器は東山 15 号窯式の杯蓋（424）と東山 44 号窯式の杯蓋（425）および東山 15 号窯式の杯身（426）と東山 44 号窯式の杯身（427）がある。この他にカマドに使用された土師器甕の体部片が存在するが、図示できなかった。

S B 40 出土遺物（第 87 図 428 ～ 429） 出土遺物は少ないが、須恵器杯蓋は折戸 10 号窯式に属するものである。

S B 47 出土遺物（第 87 図 434 ～ 438） 434 ～ 436 はカマドから出土した資料で 6 世紀後半に位置づけられる須恵器杯身と杯蓋である。437 と 438 は覆土から出土した資料で、438 は 8 世紀代の畿内系土師器杯身である。

S B 48 出土遺物（第 87 図 430 ～ 433） 須恵器杯蓋は高蔵寺 2 号窯式（430・431）や鳴海 32 号窯式（435）に属するが、土師器甕は伊勢型で 6 世紀台に位置づけられる。

S B 49 出土遺物（第 87 図 439 ～ 442） 内部施設 S K 01 からは東山 44 号窯式に属する須恵器杯蓋（439）が出土したが、他の須恵器杯蓋（440）は鳴海 32 号窯式に、須恵器杯身（441）は高蔵寺 2 号窯式に属する。

S B 50 出土遺物（第 87 図 443 ～ 453） 須恵器杯類は大半が東山 44 号窯式に属し、一部に混入遺物と思われる新しいもの（447）がある。土師器碗（450）は、同種の遺物にしては大きく遺存するものである。焼成が甘く、底部外面はヘラケズリ調整と思われるがはっきりしない。土師器甕は（452・453）は伊勢型甕である。

S B 51 出土遺物（第 87 図 454 ～ 455） 須恵器杯身（454）と伊勢型の土師器甕（455）があり、両者とも 6 世紀後半に位置づけられる。

S B 56 出土遺物（第 88 図 456 ～ 464） 須恵器杯身（458）は岩崎 41 号窯式に、杯蓋（456）は高蔵寺 2 号窯式に属する。須恵器は杯類以外の製品がやや多く、すり鉢（459）や甑（463）などがある。土師器甕は伊勢型（461・462）と濃尾型（464）の両者が存在し、前者は 7 世紀代、後者は 8 世紀初頭に位置づけられる。

S B 57 出土遺物（第 88 図 465 ～ 473） 須恵器には杯蓋と長頸瓶などがあり、多くは折戸 10 号窯式に属する。土師器甕は濃尾型（472・473）のもののみである

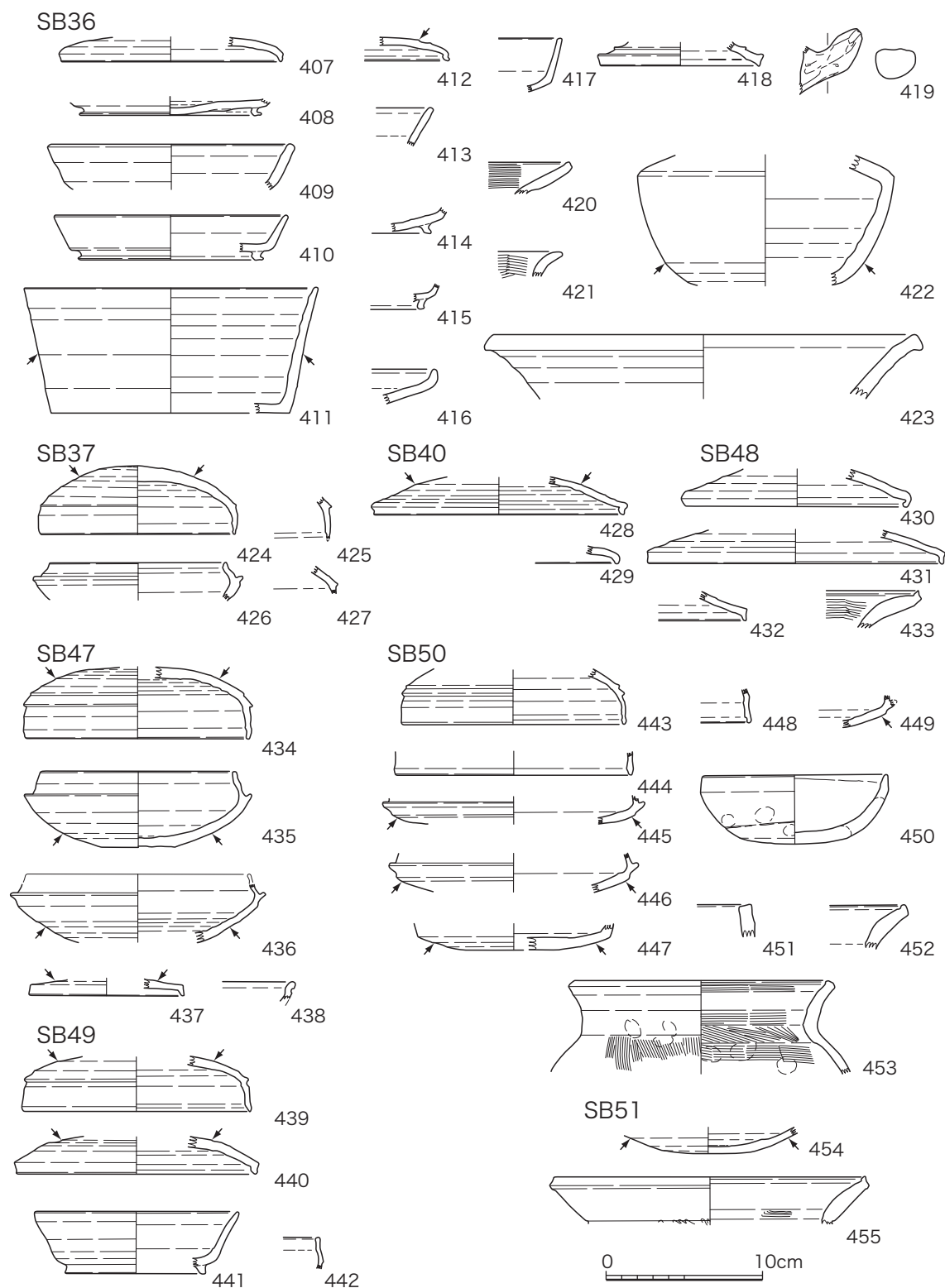
S B 58 出土遺物（第 88 図 474 ～ 491） 出土遺物には須恵器杯類が多く、詳細な時期の判別ができるものは大半が高蔵寺 2 号窯式に属するものである。この他に須恵器平瓶（486）、須恵器直口壺（489）、畿内系土師器皿（487）、濃尾型土師器甕（490・491）などがある。須恵器甕（488）は表面に縄蓆紋、裏面に円弧紋のタタキ調整が残存している。

S B 59 出土遺物（第 88 図 492 ～ 504） 須恵器杯身（493 ～ 495）は 8 世紀前半に、須恵器杯蓋（492）は美濃須衛窯産のもので 7 世紀後半に位置づけられる。須恵器短頸壺（496）は口縁端部に自然釉がかかる。498 は表面がやや摩耗しススが付着した須恵器口縁部で、6 世紀頃の高杯などと思われる。土師器甕は伊勢型（501・503・504）と濃尾型（502）の両者が存在し、前者は 7 世紀代、後者は 8 世紀代に位置づけられる。

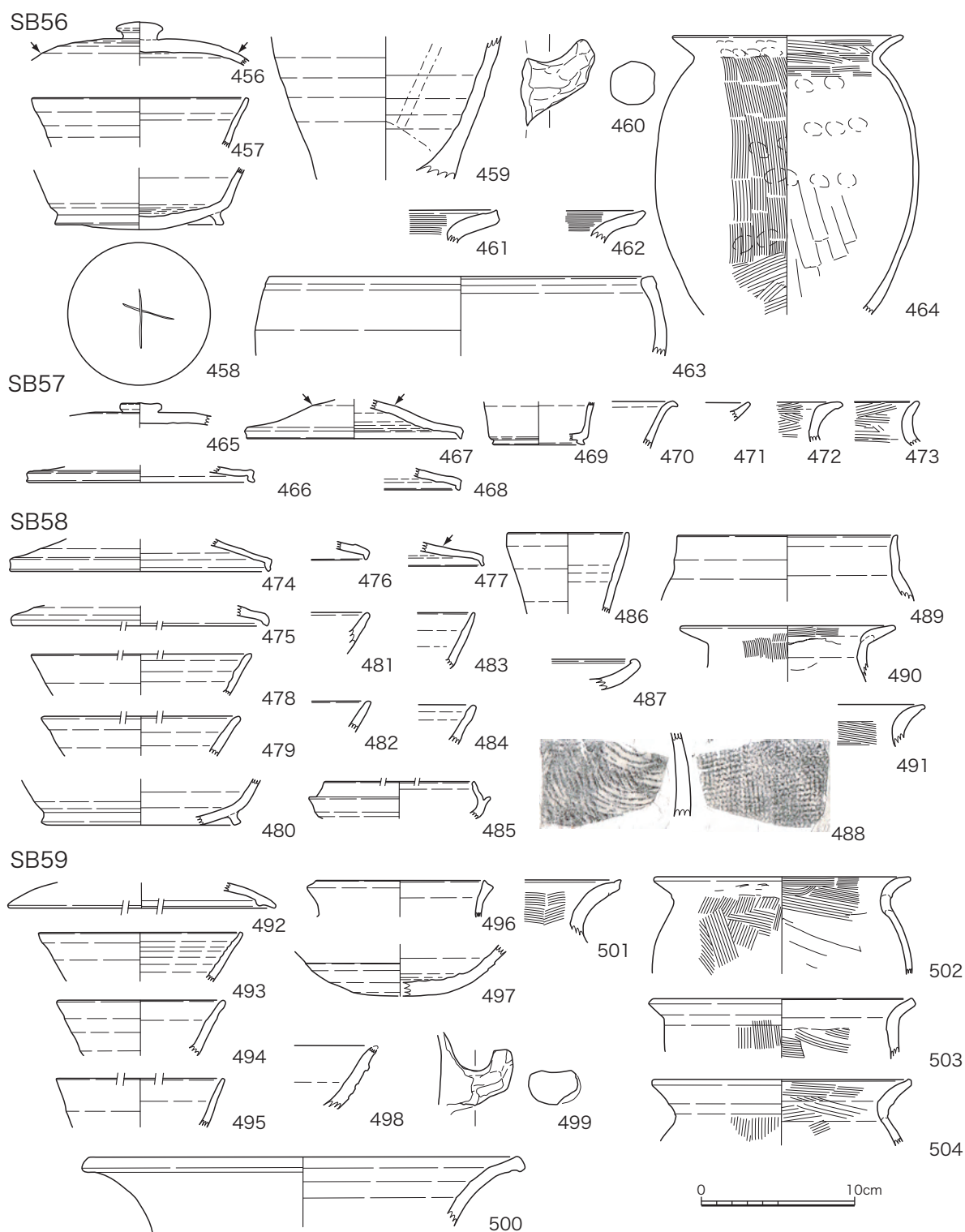
S B 60 出土遺物（第 89 図 505 ～ 519） 須恵器杯類は高蔵寺 2 号窯式と鳴海 32 号窯式に属するものであり、その他の須恵器にははそう（513）、横瓶（516）、短頸壺（518）、壺（517）が存在する。土師器甕（514・515・519）は伊勢型に属するもののみで、概ね 7 世紀代に位置づけられよう。

S B 61 出土遺物（第 89 図 520） 須恵器杯身が出土しているが、詳細な時期は不明である。

S B 62 出土遺物（第 89 図 521 ～ 523） 須恵器杯身（521）は東山 50 号窯式に属し、土師器甕（523）は伊勢型に属する。

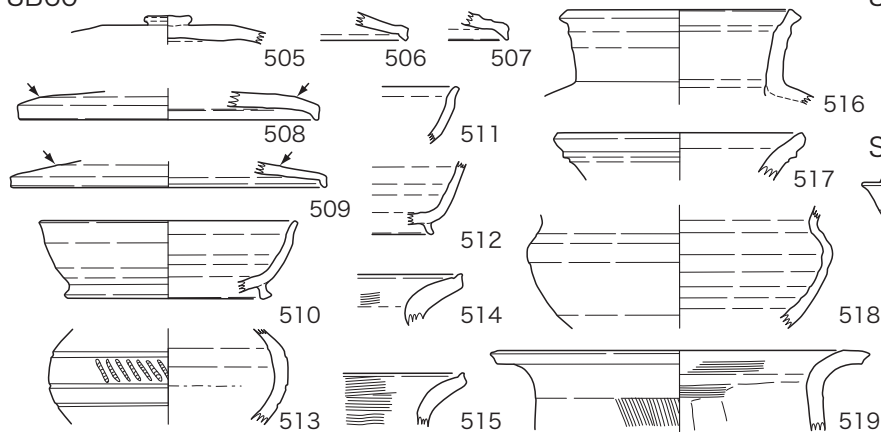


第 87 図 竪穴建物跡出土遺物 (9)

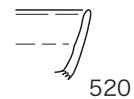


第 88 図 竪穴建物跡出土遺物 (10)

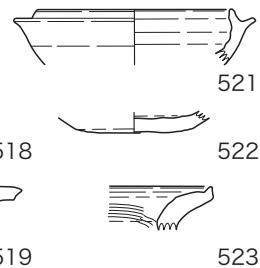
SB60



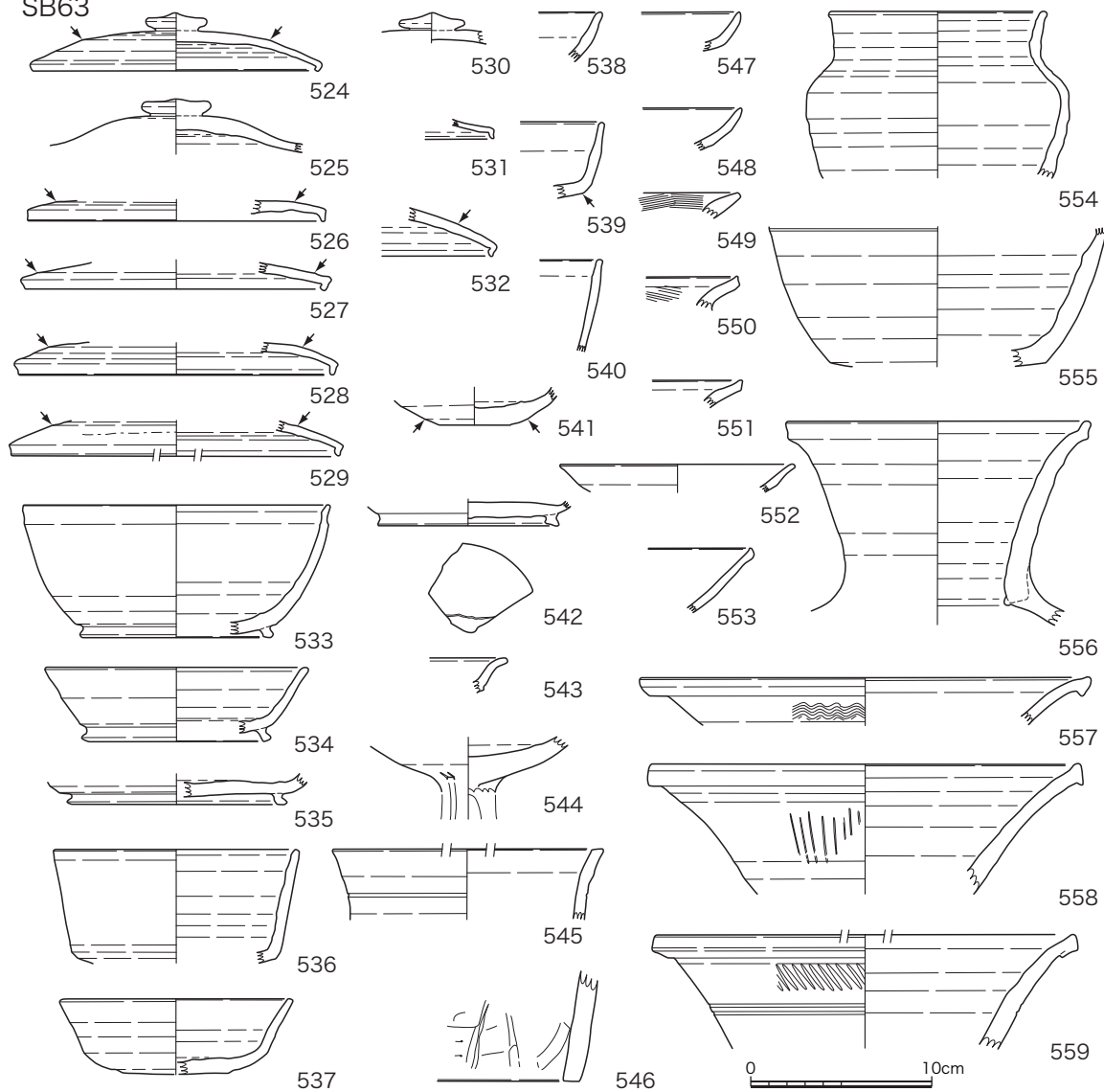
SB61



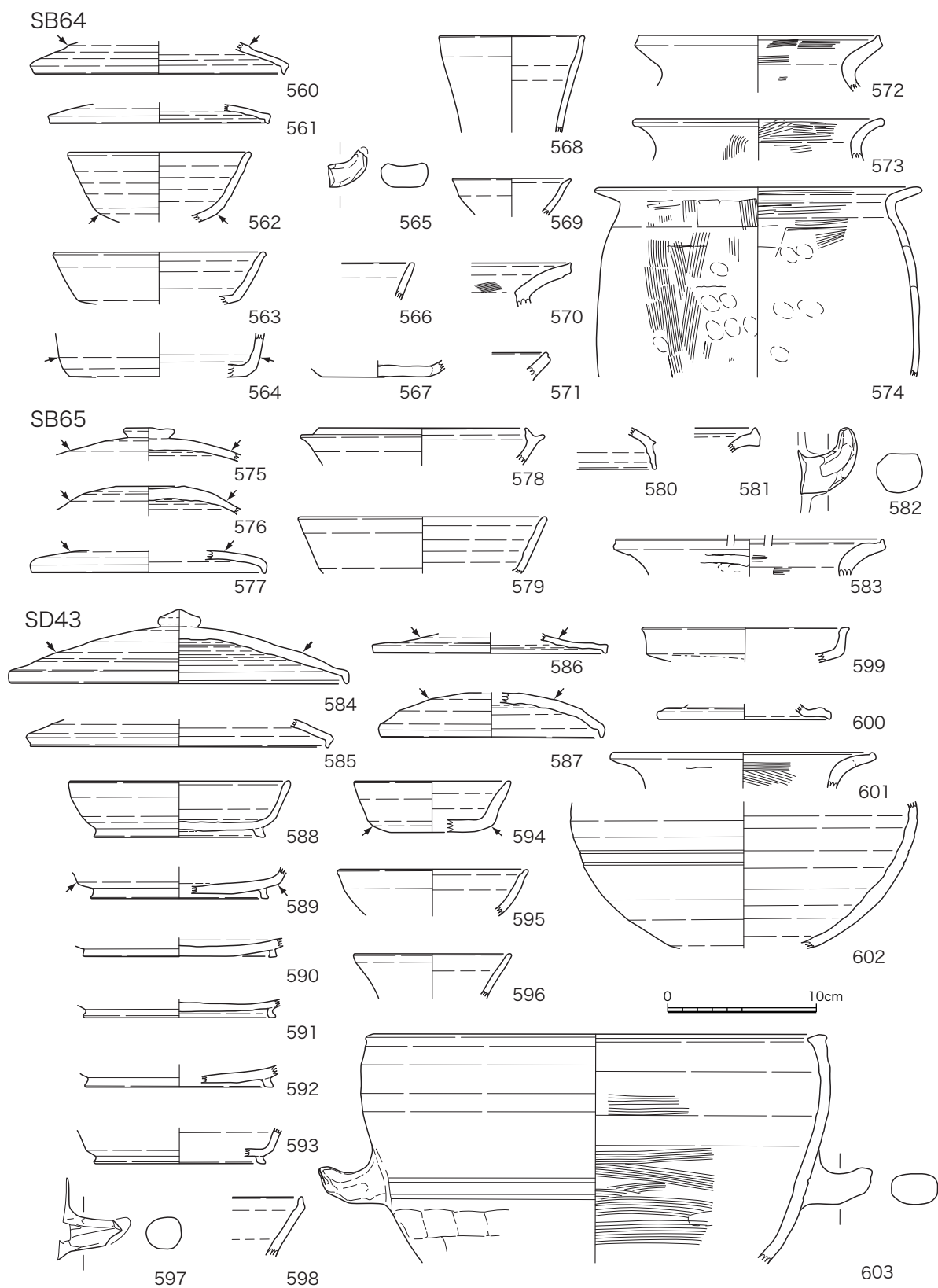
SB62



SB63



第 89 図 竪穴建物跡出土遺物 (11)



第 90 図 竪穴建物跡・溝 S D 43 出土遺物

遺 物

S B 63 出土遺物（第 89 図 524 ～ 559） 須恵器がやや多く出土している。杯類は大半が高蔵寺 2 号窯式に属するが、一部に岩崎 41 号窯式と思われるもの（535・537）がある。この他に須恵器は高杯（543・544）、壺（554）、甕（546）、平瓶（555）、提瓶（556）、甕（557 ～ 559）などがある。土師器には、畿内系土師器杯身（547・548）と濃尾型甕（549）および伊勢型甕（550・551）がある。

S B 64 出土遺物（第 90 図 560 ～ 574） 須恵器は高蔵寺 2 号窯式前後に位置づけられる杯類の他に甕（565）や平瓶（568）などがある。他の遺構に比べ土師器が多く、甕は伊勢型（570・572）と三河型（573・574）の両者が存在する。

S B 65 出土遺物（第 90 図 575 ～ 583） 須恵器には杯身・杯蓋・甕などがあるが、その所属時期はバラバラである。土師器甕（583）は伊勢型に属する。

S D 43 出土遺物（第 90 図 584 ～ 603） 須恵器が比較的多量に出土しており、概ね高蔵寺 2 号窯式から鳴海 32 号窯式の範囲に属している。602 は須恵器鉄鉢で 8 世紀に、603 は表面に黄土が塗布された鍋か鉢で 7 世紀後半にそれぞれ位置づけられる。

S K 66 出土遺物（第 91 図 604 ～ 623） 須恵器には杯身（606 ～ 610・612・613）と杯蓋（604・605）と碗（611）があり、大半は高蔵寺 2 号窯式に属し時期的によくまとまっている。土師器には製塩土器の杯部と甕（618 ～ 623）がある。製塩土器は器壁が非常に薄く被熱しており、わずかに外反するもの（614）と内彎気味に立ち上がるもの（615 ～ 617）がある。土師器甕は 618 が伊勢型に属する他は濃尾型であり、623 の底部は平底となっている。

S K 67 出土遺物（第 91 図 624 ～ 633） 須恵器杯身と杯蓋は全て鳴海 32 号窯式に属するが、土師器甕は全て 8 世紀代に位置づけられ、伊勢型（628）と濃尾型（629 ～ 631）の両者が存在する。製塩土器の杯部（633）も確認されている。

S K 64 出土遺物（第 91 図 634 ～ 635） 須恵器杯身（635）と杯蓋（634）があり、高蔵寺 2 号窯式に属する。

S K 20 出土遺物（第 91 図 636 ～ 637） 須恵器甕のみが存在する。636 と 637 は黄土が塗布され、タタキ調整されているが、両者は接合しない。遺構外出土遺物（第 92 図 638 ～ 648） ここでは、古代に位置づけられる遺構以外から出土した古代の遺物の中で特徴的な資料を紹介する。須恵器には口径が 40cm を超える鉢（642）、脚部に透かしを持つ円面硯の小片（643）、錘（644）などが存在する。639 は図示していないが内面に「十」と記された刻書を持つ須恵器杯蓋である。一方、土師器には置きカマド片（645）、清郷型鍋（646）、脚部片（647）などがある。

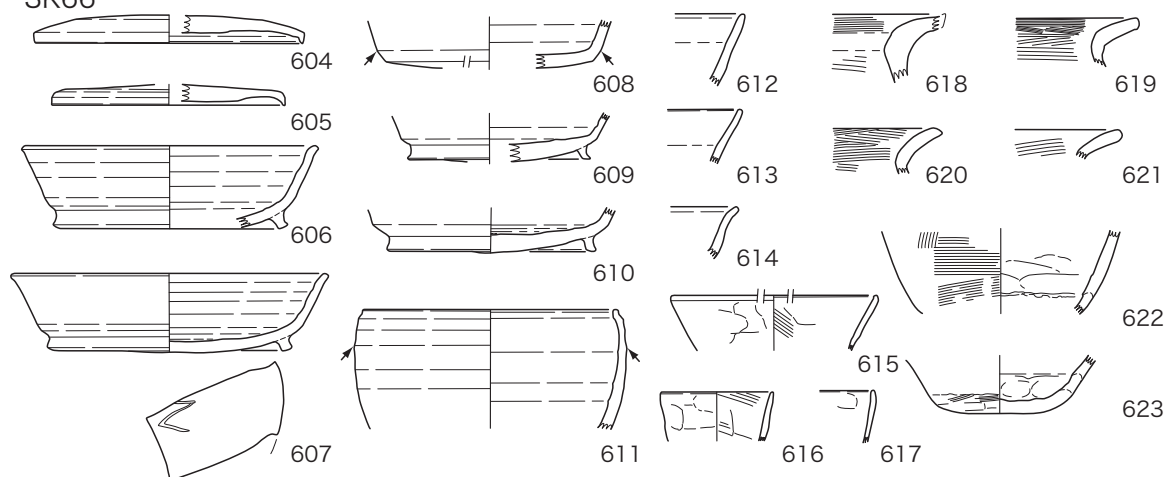
（3）中世

中世の焼物には陶磁器と土器が存在する。陶器は無釉陶器である山茶碗類と瀬戸窯産の施釉陶器（古瀬戸）と常滑窯産陶器などがあり、磁器は中国産の輸入品のみである。山茶碗類は尾張型と東濃型の二者が大多数を占め、わずかに渥美湖西型が存在する程度である。器種は山茶碗、小皿が多く、片口鉢・羽釜・陶丸・子持器台なども認められる。土師器は皿と鍋類が最も多く、皿は底部に回転糸切痕が残るロクロ調整皿と残らない非ロクロ調整皿、鍋類は甕形の体部に口縁端部を内側に折り返す南伊勢系鍋と内彎型羽釜に分けることができる。

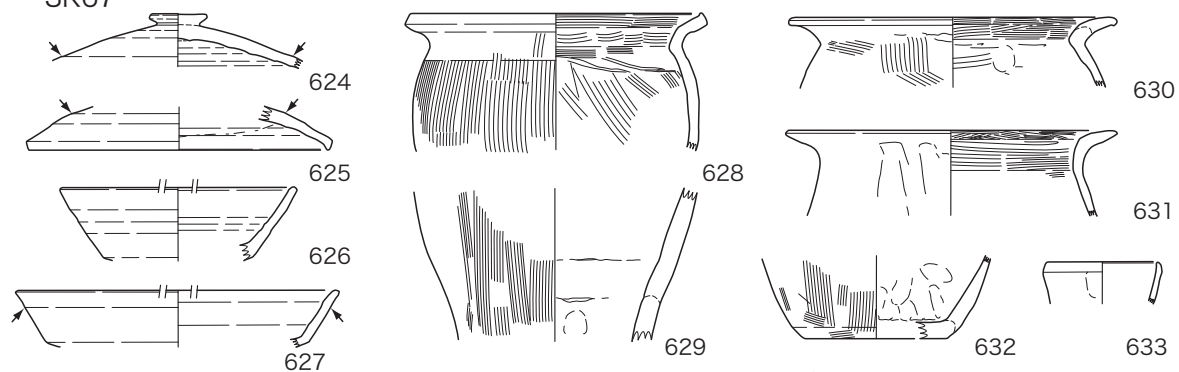
S D 11 出土遺物（第 93 図 676 ～ 735） 遺物は上層から中層にかけて多く出土した。山茶碗類が大半を占め、土師器は小片が存在するのみで図化できない程度であった。山茶碗類には山茶碗・小皿・片口鉢・羽釜・陶丸・子持器台などがあり、その多くは尾張型に属する。大部分は藤澤編年の第 4 型式～第 6 型式に位置づけられ、特に第 5 型式の資料が多い。山茶碗は口径 15.2cm ～ 16.4cm に分布し、口縁部が緩やかに外反するものが多い。677 は尾張型第 6 型式、685 と 703 は東濃型第 5 型式古段階、692 は渥美・湖西型第 5 型式、693 と 694 は東濃型に属すると思われる。

遺物

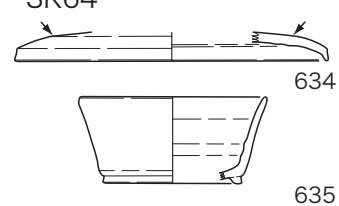
SK66



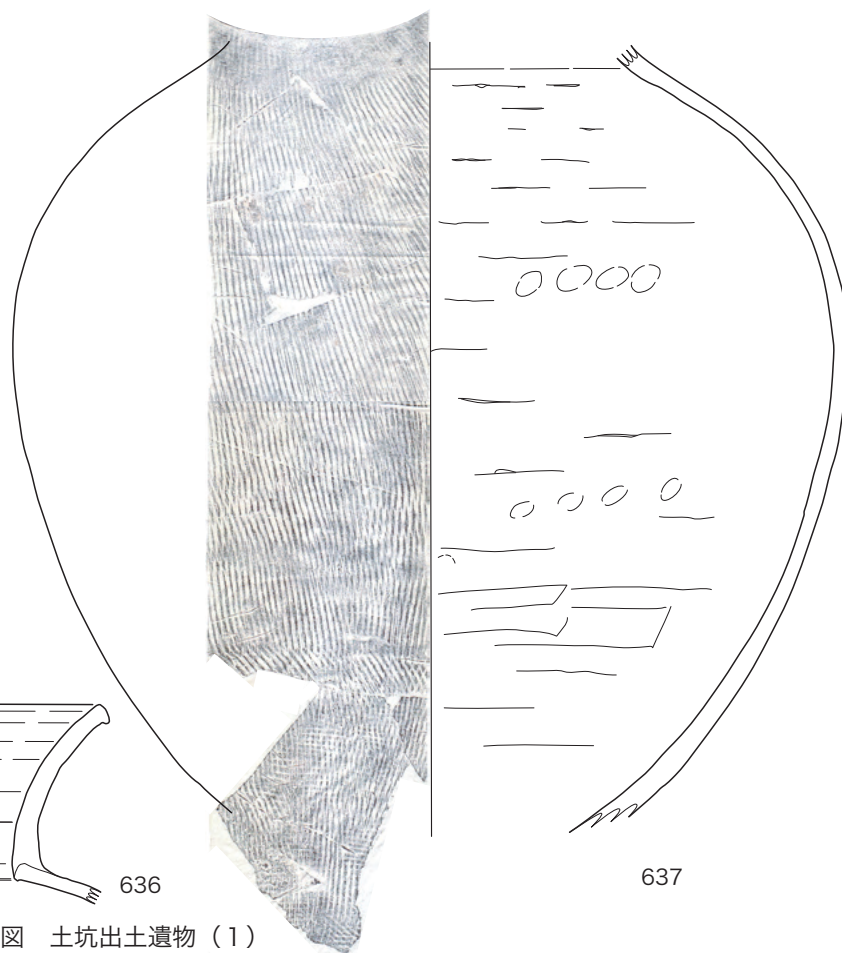
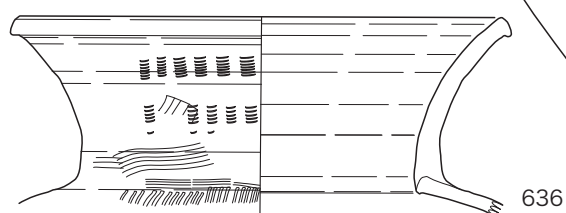
SK67



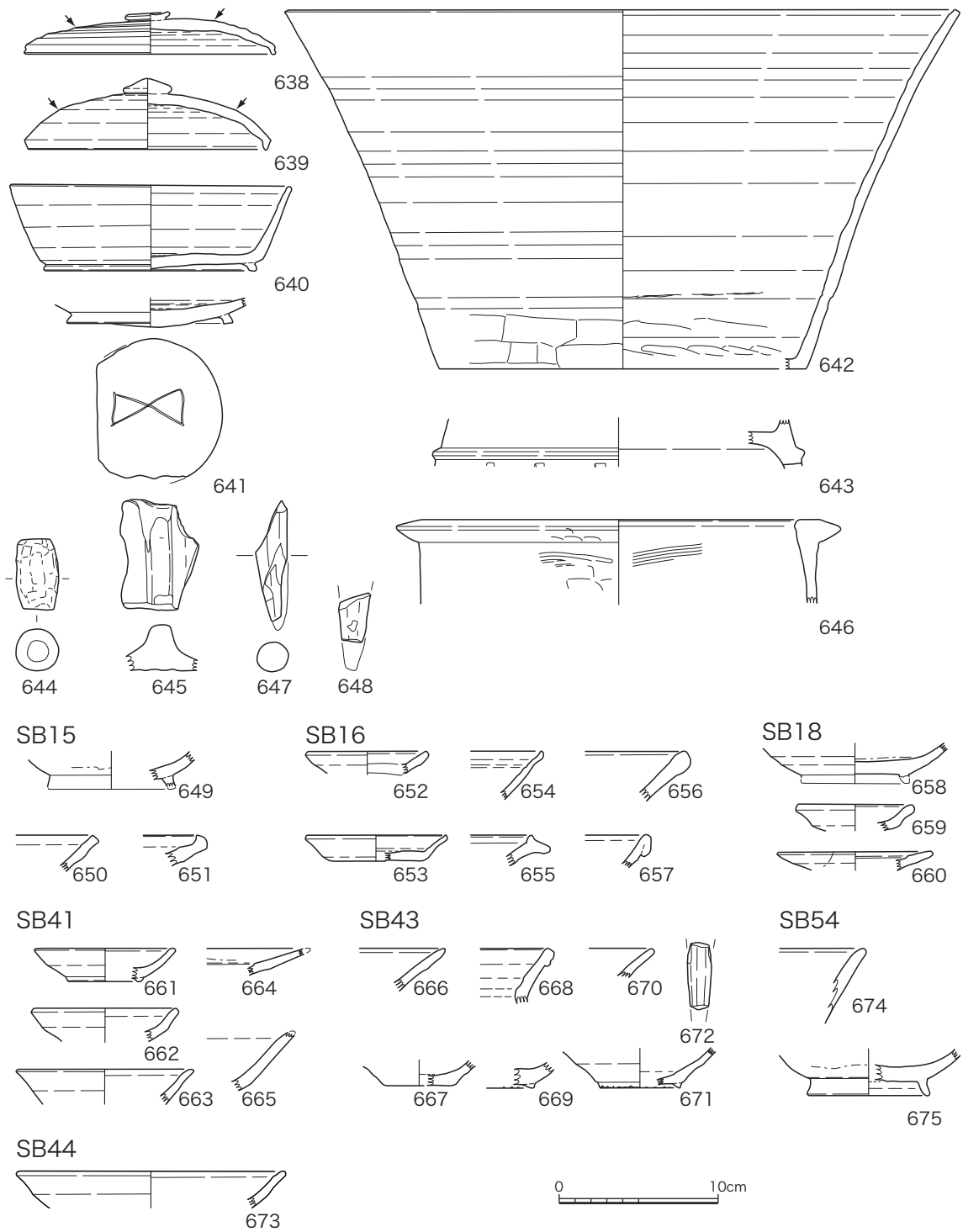
SK64



SK20



第91図 土坑出土遺物(1)



第 92 図 土坑・竪穴建物跡出土遺物

二次的に被熱し煤けたもの（694・706など）、判読できない墨痕が底部に残るもの（710）もある。小碗（711）は東山72号窯式、小皿（712～715）は第5型式～第6型式に位置づけられる。716は藤澤編年第4型式に位置づけられる子持器台で、台上の小杯は2個存在したと思われ、自然釉がたっぷりとかかる。底面は上部に対して斜めに切断され、回転糸切痕が認められる。片口鉢は口縁端部に面を持つもの（729・731）と丸くおさめるもの（730・732）がある。常滑窯産陶器の甕（719・720）、羽釜（732）は中野編年の2型式に属する。陶磁器類はこの他に常滑窯産陶器？の三筋壺（725）などの瓶類、平瓦（728）、龍泉窯系青磁皿（718）、灰釉陶器（707～709）などがある。

S D 12 出土遺物（第94図736～764） 山茶碗とその小皿が大半を占めており、磁器や土師器は小片が存在するのみで図化できない。山茶碗（736～756）は渥美・湖西型と推測されるもの（747）を除き尾張型で概ね藤澤編年の第5型式に位置づけられ、S D 11 出土遺物と比べれば時期的にまとまった資料である。山茶碗は口径14.4cm～16.2cmに分布し、口縁部は外反するもの（738など）と直線的に開くもの（736など）に区分できる。756は底部外面に「は」と記された墨書が認められる。小皿（757～760）も尾張型第5型式に属し、この他に丸瓦（764）と混入遺物と思われる須恵器などがある。

S D 33 出土遺物（第94図765～800） 山茶碗とその小皿が大半を占めており、磁器や土師器は極めて少ない。山茶碗（765～792）は東濃型のもの（777）と渥美・湖西型である可能性があるもの（786）を除き尾張型である。概ね藤澤編年の第5型式から第6型式に位置づけられ、口縁部を外反させ緩いS字状にするものが多い。この他に小皿（793～796）・片口鉢（797・799・800）などがある。

S D 56 出土遺物（第95図801～839） 山茶碗類が大多数を占めるが、土師器皿や中国産白磁

なども少量含まれる資料群である。山茶碗（801～820）は東濃型のもの（810）を除き尾張型で、概ね藤澤編年の第5型式に位置づけられるが、第6型式に属するものもある。805は上部にススが付着している。山茶碗の破片を円盤状もしくは球状に打ち欠いた加工円盤（831～833）も認められる。小皿（821～828）尾張型で第5型式に属し、823は内面に自然釉がかかる。常滑窯産陶器には甕（834・835）、短頸壺（837）、三筋壺（838）羽釜（839）などがあり、中野編年の2型式に属する。土師器皿（829）は口縁端部が内彎気味に立ち上がるロクロ調整のもので、胎土は赤色系（明褐色）である。非ロクロ調整皿が出現する前の段階のもので12世紀後半に位置づけられよう。土師器鍋には南伊勢系鍋（836）があり、これは北村分類の鍋A4a類に相当すると思われる。

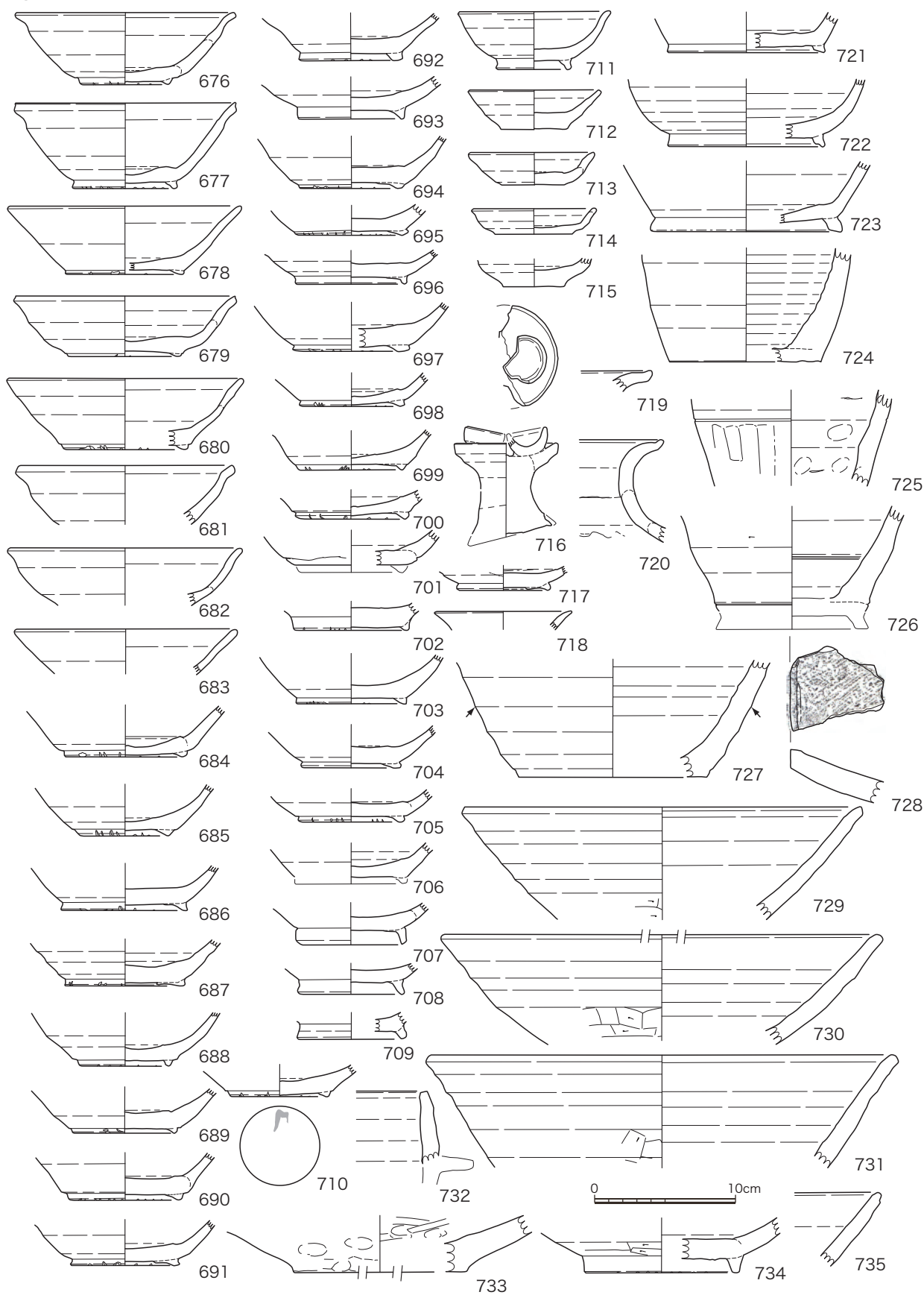
S D 04 出土遺物（第96図840～857） 東濃型山茶碗、瀬戸窯産施釉陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、土師器などが存在する。東濃型山茶碗（840～843）は大畑大洞窯式から脇ノ島窯式に属するものである。施釉陶器は天目茶碗・灰釉緑釉小皿・直縁大皿・折縁深皿などがあり、概ね古瀬戸後Ⅲ期から古瀬戸後Ⅳ期に位置づけられるものである。中国産磁器には龍泉窯系青磁（852・854・856）があり、土師器には非ロクロ調整皿（853・855）と内彎型羽釜（857）がある。

S D 05 出土遺物（第96図858～863） 尾張型山茶碗（858・860）、東濃型山茶碗（859）、尾張型小皿（861）、瀬戸窯産陶器天目茶碗（862）・柄付片口（863）などがあり、遺物の時期はバラバラであるが、最新資料は古瀬戸後Ⅳ期古段階に位置づけられる天目茶碗である。

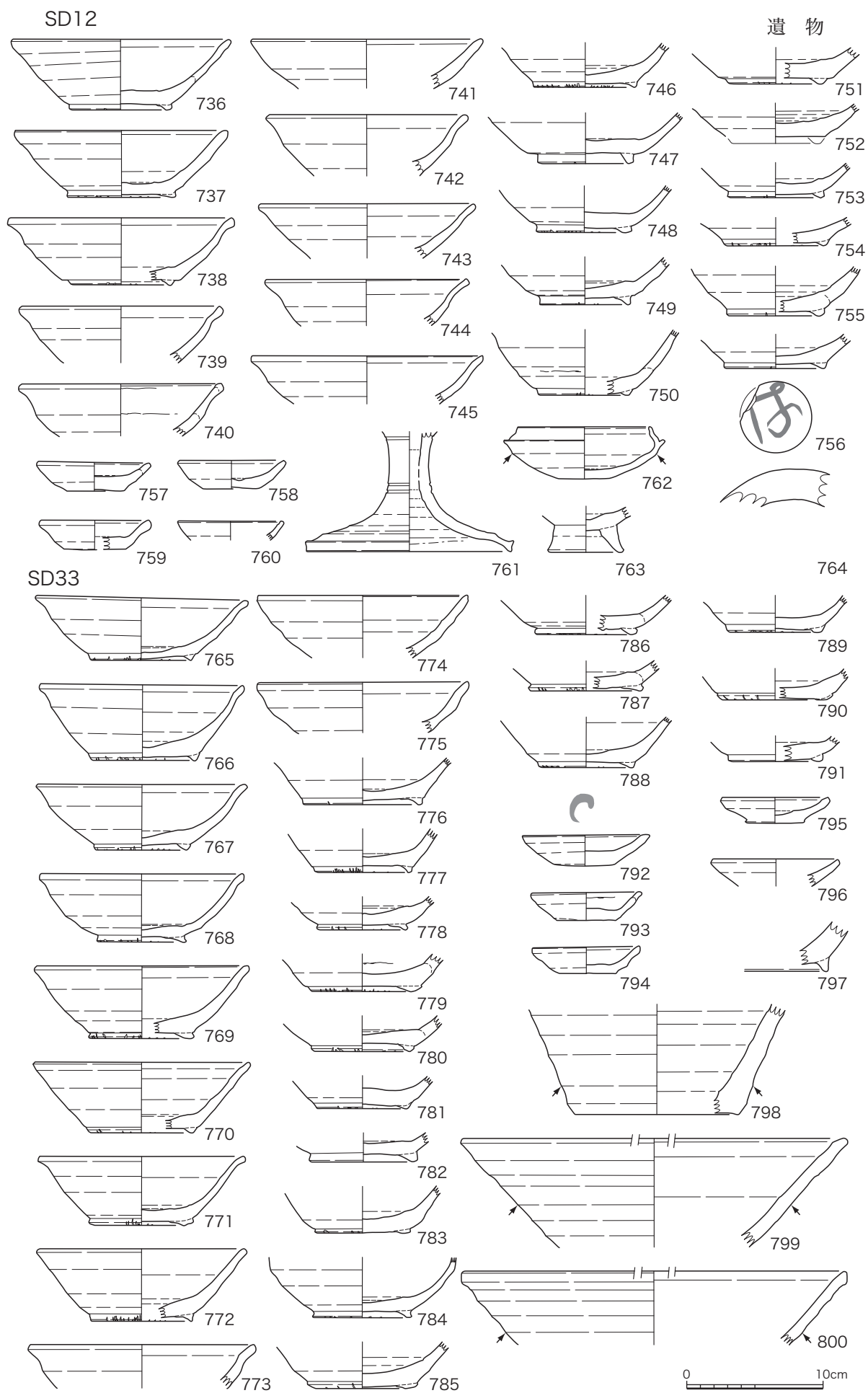
S D 07 出土遺物（第96図864～866） 尾張型山茶碗と第4型式に属する小皿があるが、古瀬戸後Ⅳ期古段階に位置づけられる瀬戸窯産陶器灰釉緑釉小皿が最新資料となる。

S D 08 出土遺物（第96図867～890） S D 08は古代の遺構を大きく壊しているためか、須恵器などを多く含む多量の遺物が出土している。

SD11



第 93 図 溝出土遺物 (1)



第 94 図 溝出土遺物 (2)

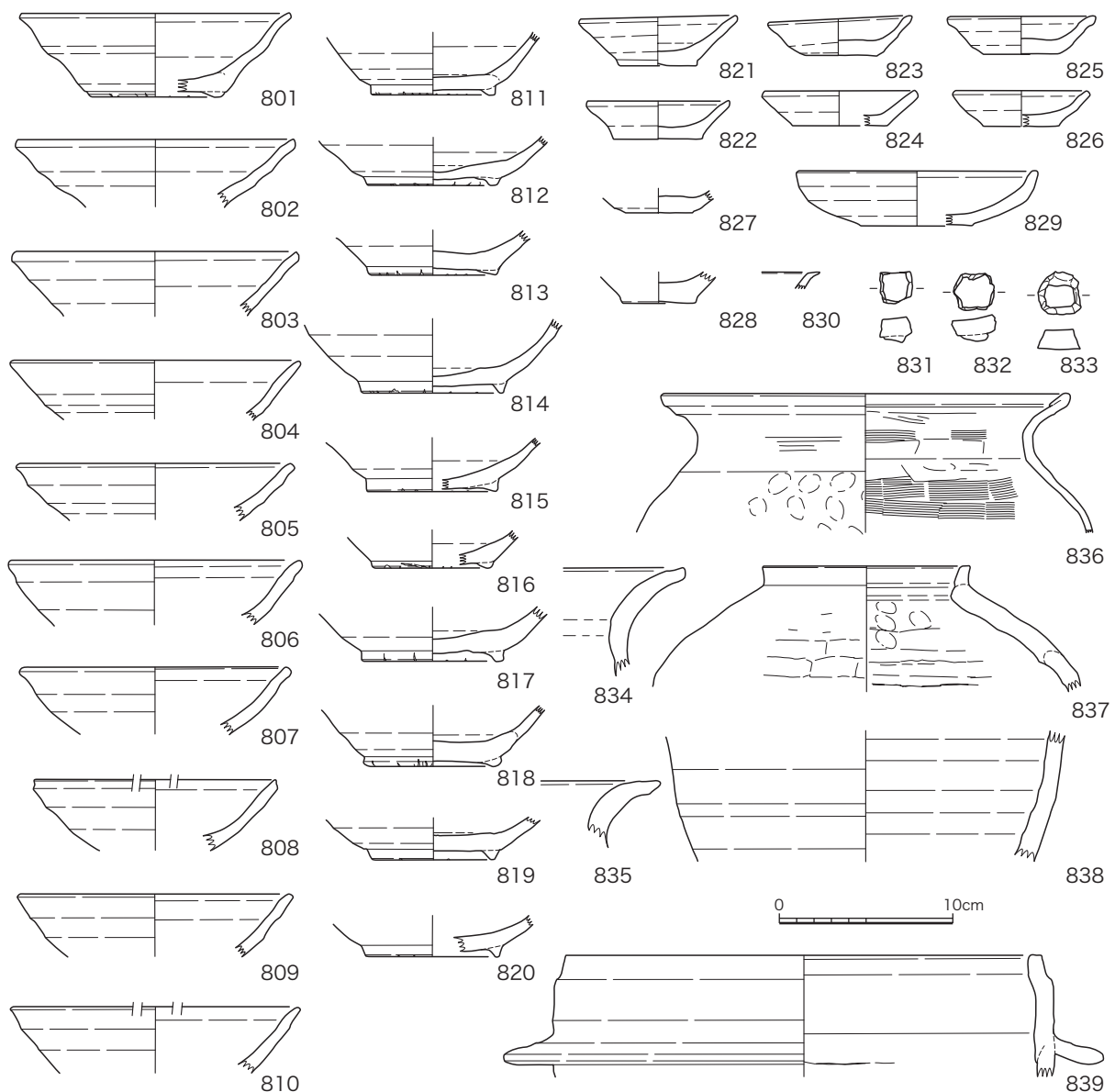
遺物

ここでは代表的な遺物を紹介する。山茶碗類には第6型式前後の尾張型山茶碗(867～869)、大畑大洞窯式の東濃型山茶碗(871～873)、尾張型小皿(870)などがあり、瀬戸窯産陶器には平碗(874)、天目茶碗(875・876)、縁釉小皿(877)、縁釉卸皿(878)、香炉(884・885)、釜か土瓶(886)などが存在し、古瀬戸中IV期(縁釉卸皿)から古瀬戸後IV期古段階(平碗)までの各時期にわたっている。この他に中国産白磁玉縁碗(887)や常滑窯産陶器羽釜(882)なども出土した。

SD 10 出土遺物(第96図891～897) 本遺構は近世に属すると推測したが、出土遺物には中世に属するものが多くなっている。古瀬戸後IV期古段階の折縁深皿(895)や土師器内彎型羽釜(896)がみられる。

SD 14 出土遺物(第97図898～907) 第4型式から第5型式に属する尾張型山茶碗と小碗が主体を占め、この他に白磁皿(906)と軟質白色土器碗(907)がある。

SD56



第95図 溝出土遺物(3)

S D 18 出土遺物（第 97 図 912～914） 第 5 型式前後に属する尾張型山茶碗（912・914）と白磁端反碗（913）がある。

S D 17 出土遺物（第 97 図 915～921） 第 5 型式前後に属する尾張型山茶碗と尾張型小皿があり、919 の底部には墨書が認められる。

S D 19 出土遺物（第 97 図 922～935） S D 17 出土遺物と同様、第 5 型式前後に属する山茶碗類が多数を占め、この他に灰釉陶器碗（926～928）や中国産白磁玉縁碗（935）などが存在する。

S D 29 出土遺物（第 97 図 937～940） 近世の遺構と考えられるが、中世の遺物が若干量出土した。尾張型山茶碗（937）と東濃型山茶碗（938）の他に瀬戸窯産陶器祖母懷茶壺の耳部（940）と土師器南伊勢系鍋（939）がある。

S D 32 出土遺物（第 97 図 944～953） 尾張型山茶碗と東濃型山茶碗の両者が存在するが、時期にまともは認められない。土師器には内彎型羽釜（953）南伊勢系鍋（950）の両者がある。

S D 39 出土遺物（第 97 図 957～963） 山茶碗類には、尾張型山茶碗と小皿と東濃型山茶碗があり、958 は高台が無い第 8 型式に属するものと思われる。962 は非ロクロ調整土師器皿で器壁は非常に薄く、口縁部が屈曲し受口状になっている。尾張地域では類例が認められないタイプで伊勢地域の影響を受けたものと推測される。963 は瀬戸窯産陶器盤類で古瀬戸後期前半に位置づけられよう。

S D 30（S D 40）出土遺物（第 97 図 941・967～969） 出土遺物は少量である。第 5 型式前後に属する尾張型小皿（967）、北村分類の鍋 A 3 類に属する土師器南伊勢系鍋（968）、古瀬戸前 I a 期に位置づけられる瀬戸窯産灰釉四（三）耳壺（969）が存在する。古瀬戸前 I a 期の遺物が出土するのは珍しいといえる。

S X 04 出土遺物（第 98 図 977～979） 山茶碗や小皿など多量に陶器類が出土しているが、ここでは片口鉢のみを紹介する。口径が 30cm 前後を測るもので、口縁端部に面取りが認められ、中

野編年の 2 型式に属するものと思われる。

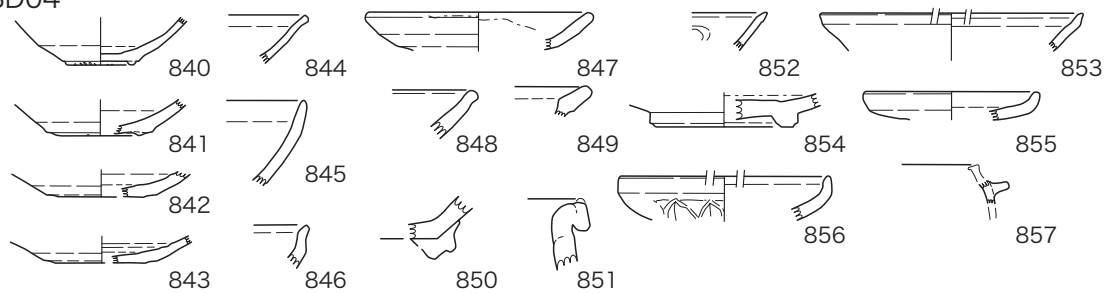
S X 05 出土遺物（第 98 図 980～986） ロクロ調整土師器皿 2 点（980・981）と常滑窯産陶器片を利用した加工円盤（982）とガラス小玉 4 点（983～986）が存在する。土師器皿は体部が短く立ち上がる小型のもので、胎土は赤色系（明褐色）である。尾張地域で非ロクロ調整皿が出現する以前の 12 世紀代のものと思われる。ガラス小玉は大半が S X 05 内の焼土を含む覆土を篩別して抽出した資料で、明るい青色を呈している。その他の遺構出土遺物（第 98・99 図 987～1038） 柱穴などの遺構から少量出土した資料を一括して紹介する。須恵器、灰釉陶器、山茶碗類、瀬戸窯産施釉陶器、土師器など多種多様なものが存在する。987 は古瀬戸中Ⅲ期に属する灰釉折縁深皿、993 は中国産白磁皿、1033 は常滑窯産陶器三筋壺体部、1034 は白色軟質陶器碗であり、1036 の尾張型小皿と 1038 の東濃型小皿の底部外面には墨書が存在する。

（4）近世

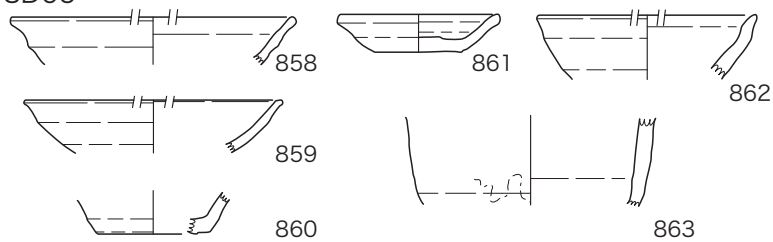
近世の焼物には陶磁器と土器および瓦類が存在する。陶器は瀬戸・美濃・常滑の各窯で産出されたもの、磁器には肥前・瀬戸・関西系の各窯産のものが出土しており、器種は多様である。土師器は中世と同様に皿と鍋類が主体となる。

S K 37 出土遺物（第 100・101 図 1039～1061） 陶器には肥前窯産灰釉丸碗（1039・1040）、瀬戸窯産染付丸碗（1041）、美濃窯産染付広東茶碗（1042）、瀬戸窯産再興織部蓋（1047）、瀬戸窯産徳利（1050）、瀬戸窯産搦鉢（1051・1052）、瀬戸窯産こね鉢（1053）、瀬戸窯産火鉢（1054）などがある。磁器には肥前窯産白磁丸碗（1045）、肥前窯産染付丸碗（1046）、関西系窯産？染付広東茶碗（1043・1044）、瀬戸窯産染付小碗（1048）などがある。これらを瀬戸美濃窯産の製品でみると、陶器染付丸碗がやや古く位置づけられるが、その他の製品は概ね第 9 小期から第 11 小期に属するものである。瓦には棧瓦（1056・

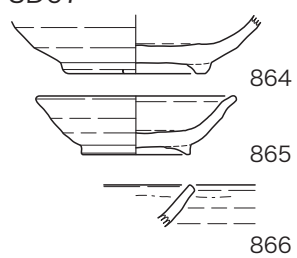
SD04



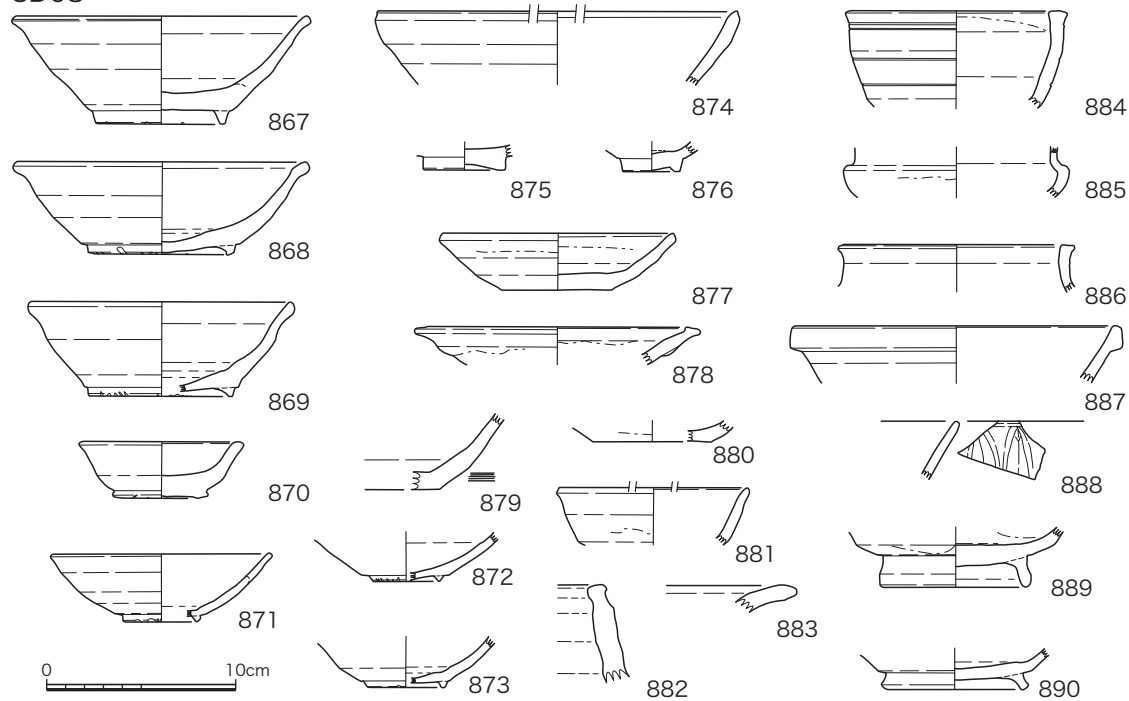
SD05



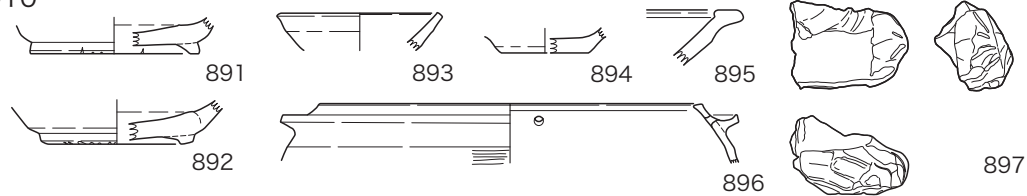
SD07



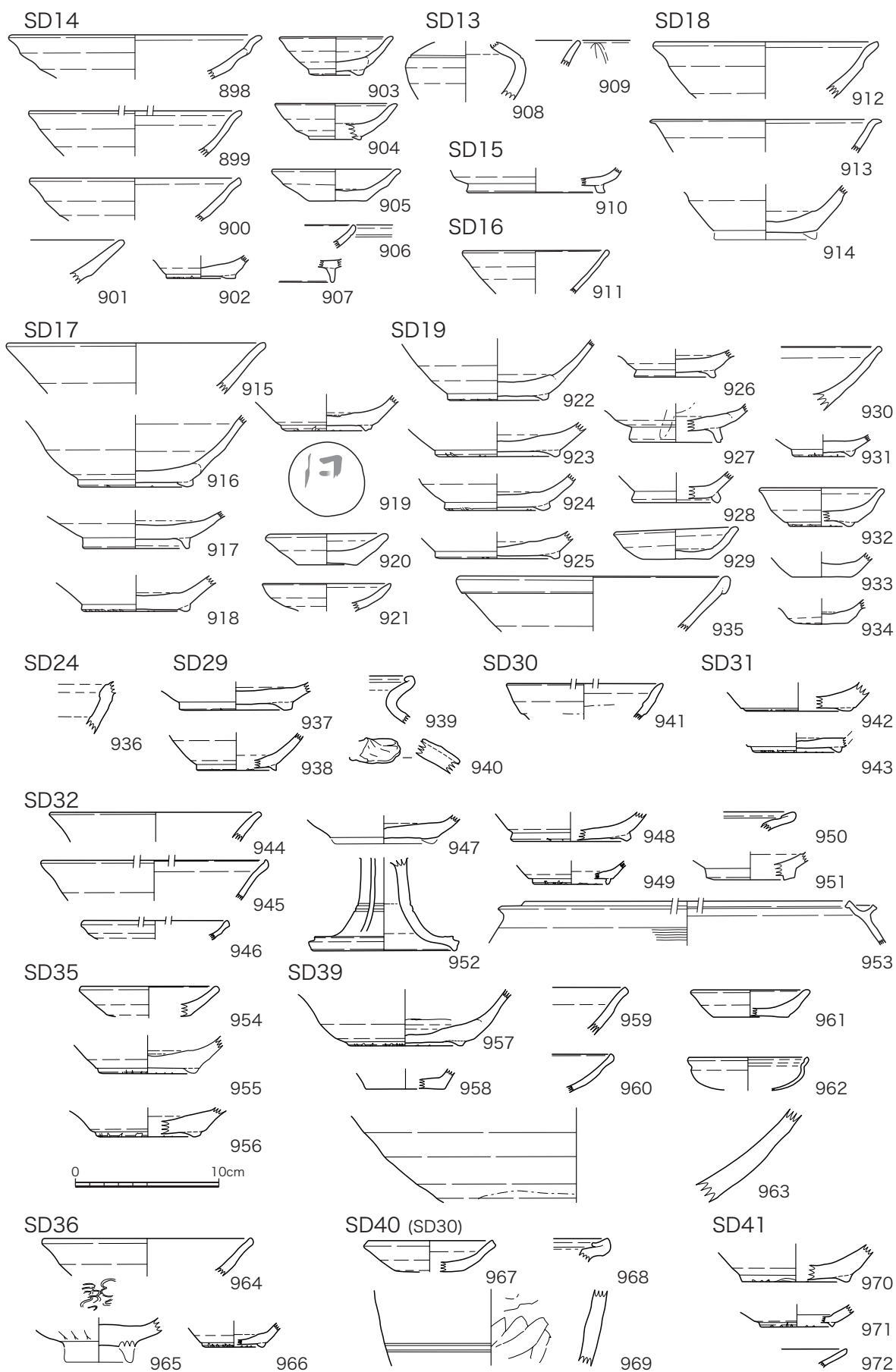
SD08



SD10

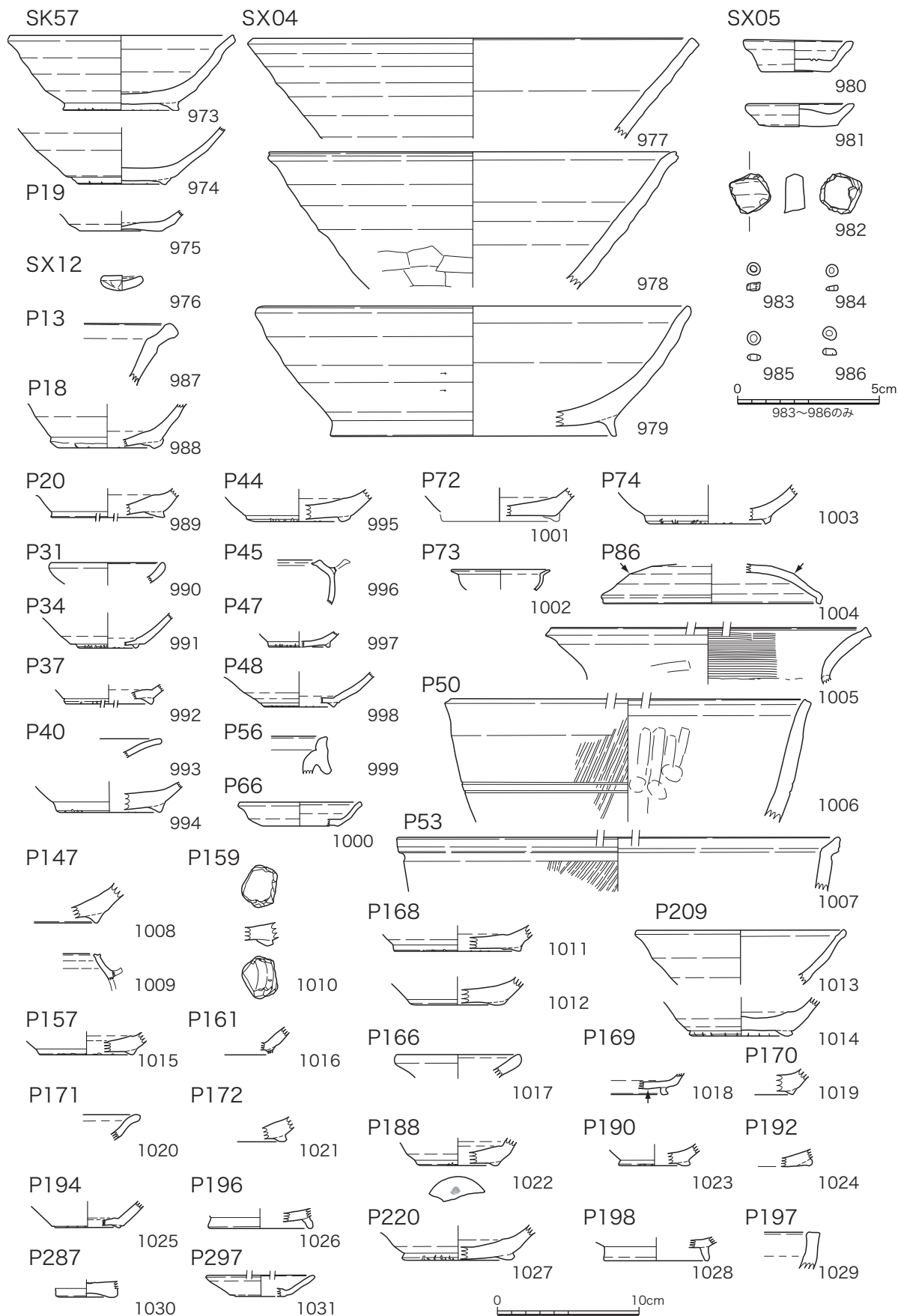


第 96 図 溝出土遺物 (4)



第 97 図 溝出土遺物 (5)

遺物



第 98 図 柱穴等出土遺物

1057) と熨斗瓦 (1055) があり、19 世紀代のものと思われる。常滑窯産陶器としては井筒が 4 個体分出土した。1058 ～ 1060 は体部がまっすぐ直線的に立ち、口縁部が L 字状に屈曲して終わるものである。外面にはケズリ調整の痕跡が残る他に施紋などは認められない。一方、1061 は口縁部が遺存しないが体部上方でややふくらみを持つもので結物の籐を模倣した紋様が刻線で施されている。両者とも赤物と呼ばれる焼成が甘い製品であるが、後者はやや焼成が良い製品である。1058 ～ 1061 が S K 37 の井戸側に設置されたものと仮定すると、1061 は補修などで追加されたものか、別の井戸の製品が投棄されたものと推測されよう。

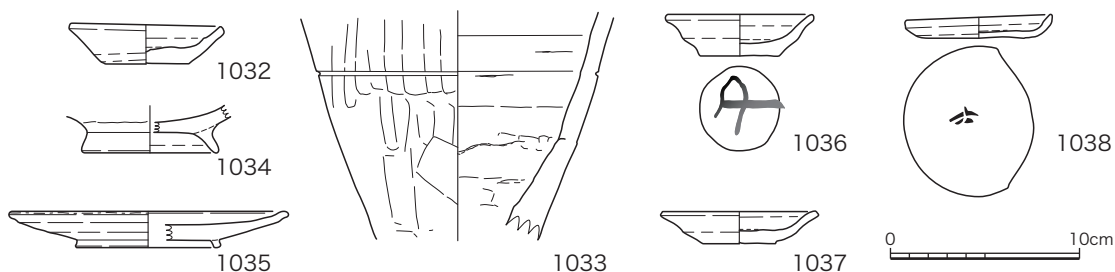
S K 39 出土遺物 (第 101 図 1062 ～ 1065)
美濃窯産陶器徳利 (1063)、瀬戸窯産陶器と推測される行平鍋 (1064)、常滑窯産赤物甕 (1065) などが存在する。

S D 01 出土遺物 (第 102 図 1066 ～ 1080)
瀬戸美濃窯産陶器と土師器が多く認められた。瀬戸美濃窯産陶器には半胴 (1072・1077)、志野大皿 (1075)、搦鉢 (1076) などが存在し、この中で最も新しいと位置づけられるのは藤澤編年登窯第 8 ～ 9 小期に属する半胴 (1072) である。陶

磁器碗類の底部を円盤状に打ち欠いた加工円盤 (1066 ～ 1068) も存在する。輸入陶磁器としては龍泉窯系青磁蓮弁紋碗 (1073) と白磁碗 (1078) がある。土師器には皿と内耳鍋と焙烙がある。土師器皿には口縁部にタールが付着したロクロ調整皿 (1069) と非ロクロ調整皿 (1070・1071) がある。土師器内耳鍋 (1079) は体部がやや直立しながら立ち上がるもので、口縁端部が斜めに面を持ち、体部下半にヘラケズリ調整されたものである。18 世紀後半以降に位置づけられよう。土師器焙烙 (1080) は内耳部が折損しており、その代わりに同じ部分に焼成後に穿たれた孔が 1 個存在するものである。

S K 58 出土遺物 (第 102 図 1081 ～ 1093)

瀬戸窯産陶器腰鎗碗 (1081・1082)・染付丸碗 (1083・1084)・搦鉢 (1091)・半胴 (1092)、美濃窯産陶器黄瀬戸鉢 (1089・1090)、常滑窯産陶器井筒 (1093)、土師器皿 (1085 ～ 1087)・鍋 (1088) などがある。搦鉢と黄瀬戸鉢が藤澤編年登窯第 7 小期前後、碗類が登窯第 8 ～ 9 小期に位置づけられる。土師器皿は肌色 (淡黄褐色) の胎土を持つ非ロクロ調整皿 (1085)、赤色 (明褐色) の胎土を持ち体部が直線的に開くロクロ調整皿 (1086) および白色 (灰白色) の胎土を持ち体部が内彎するロクロ調整皿 (1087) がある。



第 99 図 土坑出土遺物 (2)

第3節 石製品（第103図1094～1099）

本遺跡から出土した石製品には砥石や石臼、石製模造品などがあるが、その出土量は少ない。ここでは石製品を一括して報告したい。

S B 26 からは滑石製模造品（1094）が1点出土した。半分が欠損し全形は不明だが、平面形が多角形状を呈し円形の孔が穿たれているものである。砥石（1095～1098）は中世の遺構から出土したものが多く、凝灰岩かそれに近似する石材が

使用され、形状から平面形が長方形を呈するもの（1095）、バチ形を呈するもの（1096・1097）、隅丸長方形を呈するもの（1098）に分けることができる。1098は粗砥、1095～1097は仕上砥に近いと考えられる。挽臼の上臼（1099）は表土から出土した花崗岩製のもので、時期は特定できないため新しいものである可能性も残っている。

第4節 木製品

本遺跡では多くの木製品は腐食などして残存しなかったものと考えられ、出土した木製品は限られた遺構から出土したもののみである。具体的には、古代の掘立柱建物跡の柱穴から出土した柱根と近世の井戸から出土した木製品だけが確認された。ここでは遺構ごとに記述を進めていきたい。

（1）古代（第105図1119～1120）

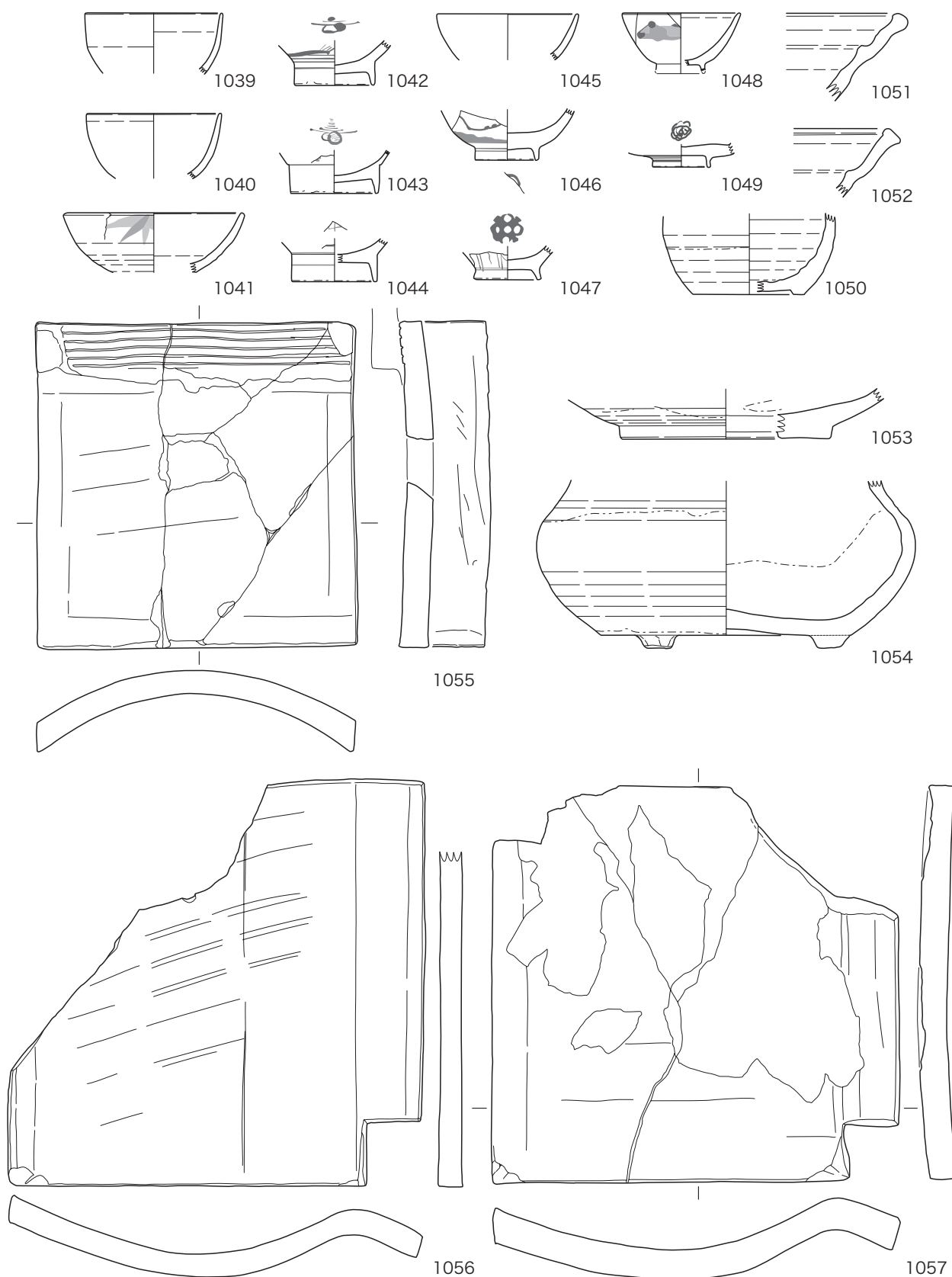
古代の木製品には掘立柱建物跡 S B 52 の柱穴から出土した柱材のみが存在する。S B 52 の柱穴 12 基の中で P 223、P 224、P 225、P 226、P 230、P 231、P 234 の 7 基の柱穴から柱根が出土した。これは柱材が抜き取られることなく現地に残されたものであり、上位は腐食したため結果的に先端が尖る形に変形しているが、下部は本来の形状を維持して残存している。1119 は P 224 から出土した柱根で、下端は先端を尖らせている。側面はチョウナのような工具で加工されたと思われるが、はっきりとは特定できない。1120 は P 231 から出土した柱根で、下端は平坦に切断されたままの状態となっている。木材の芯部は腐食して残存していない。

（2）近世

近世の木製品には井戸 S K 37 と S K 58 から出土した資料のみが存在する。この遺構ごとに説明を加える。

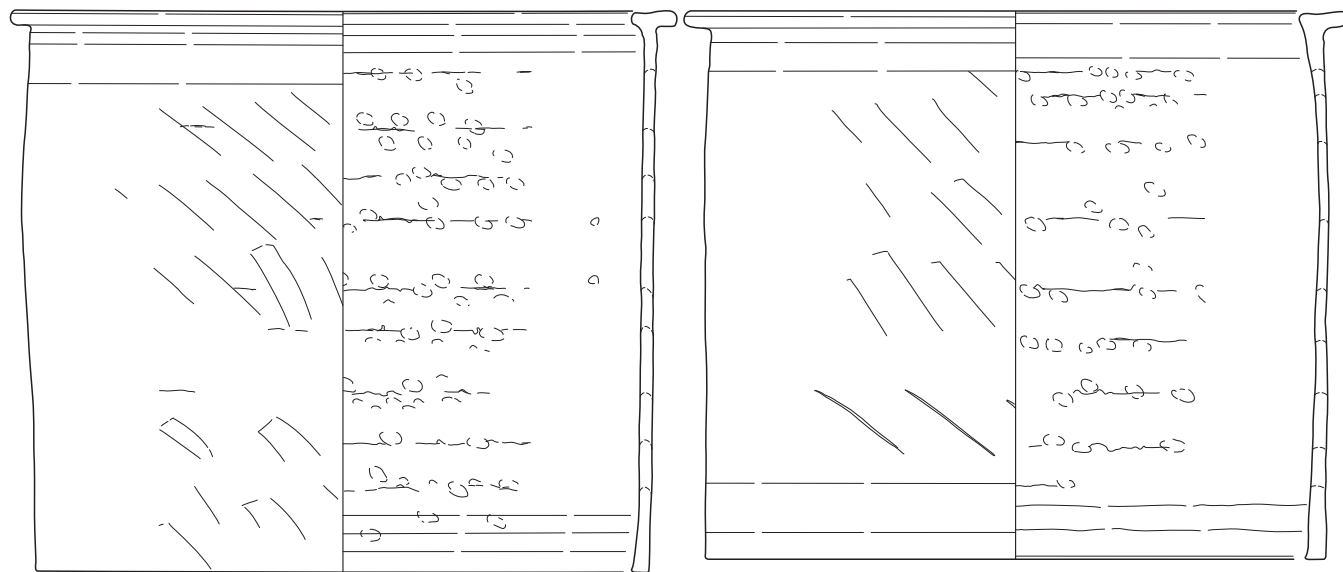
S K 58 出土遺物（第104・105図1100～1110・1112～1114） 横櫓、曲物桶、結物桶、楔、折敷、竹筒、刀子柄、結物井筒などがある。横櫓（1100）は、体部が下地に赤色漆、上塗に黒色漆が塗布され、歯部には金色の彩色が施されていた。桶底板（1101～1104）は板材を接ぎ合わせるための釘穴が存在するもので、これを重視すれば全て結物桶の底板と考えられる。ただし、1102は周縁に近い部分に桜皮を綴じ合わせた痕跡が残っており、これについては曲物桶の底板である可能性が高い。1102は板材を接ぎ合わせる面の釘穴部分に目印の傷が残存している。楔（1105）は表面が荒く削られたままの状態であり、結物井筒に使用されたものと想定される。折敷底板（1106）は一部のみが残存しており、かろうじて側板を固定するための孔が存在していた。竹筒（1107）は井戸底に突き刺されたもので、人工的に節の部分が打ち抜かれている。刀子柄（1108）は中子が入る部分の加工が認められないため、やや疑問が残る製品である。1109は円筒形に作られた製品で中央部に凹みが存在する。1110は常滑窯産陶器井筒の下位に円形に並べられた板材の一部である。裏面の調整痕は不明だが、表面には縦挽鋸で切断された痕跡が残存している。結物井筒は3点存在し、1112は上段、1113は中段、1114は下段に据えられたものである。いずれも腐食のため

SK37



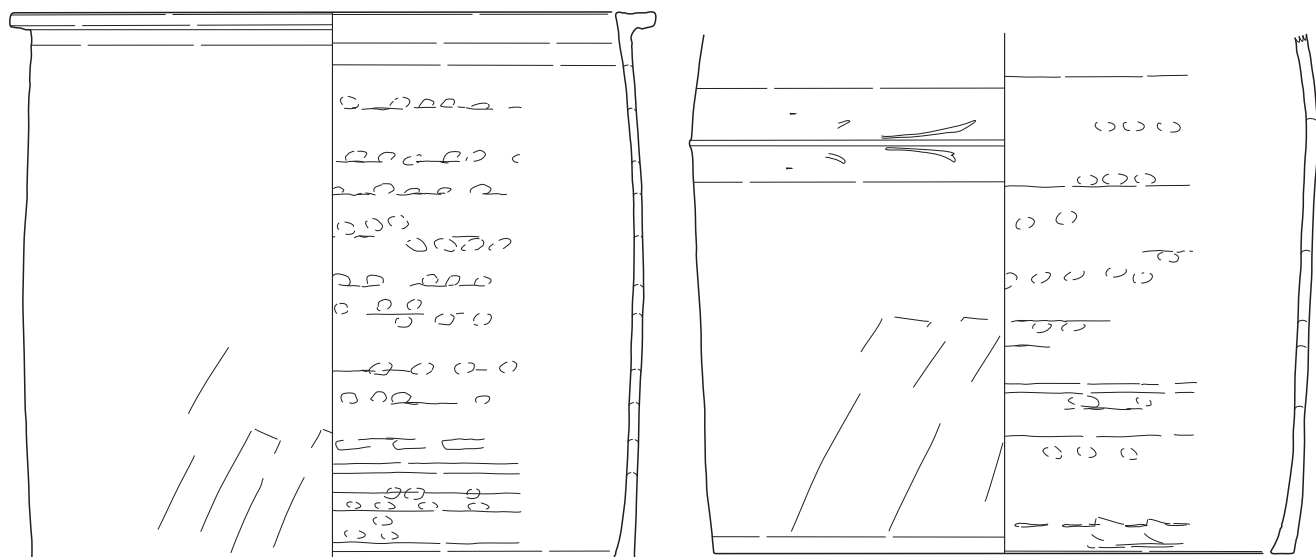
第 100 図 井戸出土遺物 (1)

SK37



1058

1059

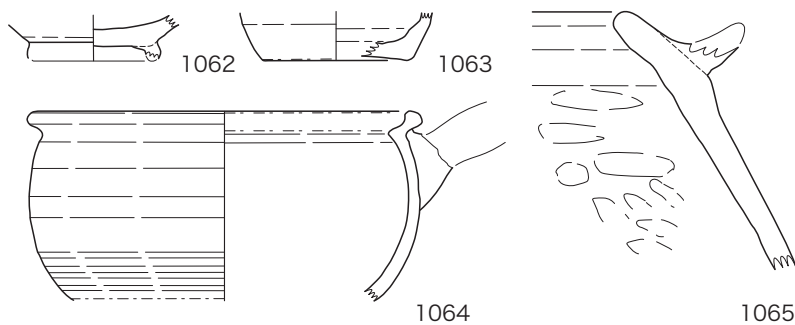


1060

1061

0 20cm
1058~1061のみ

SK39



1062

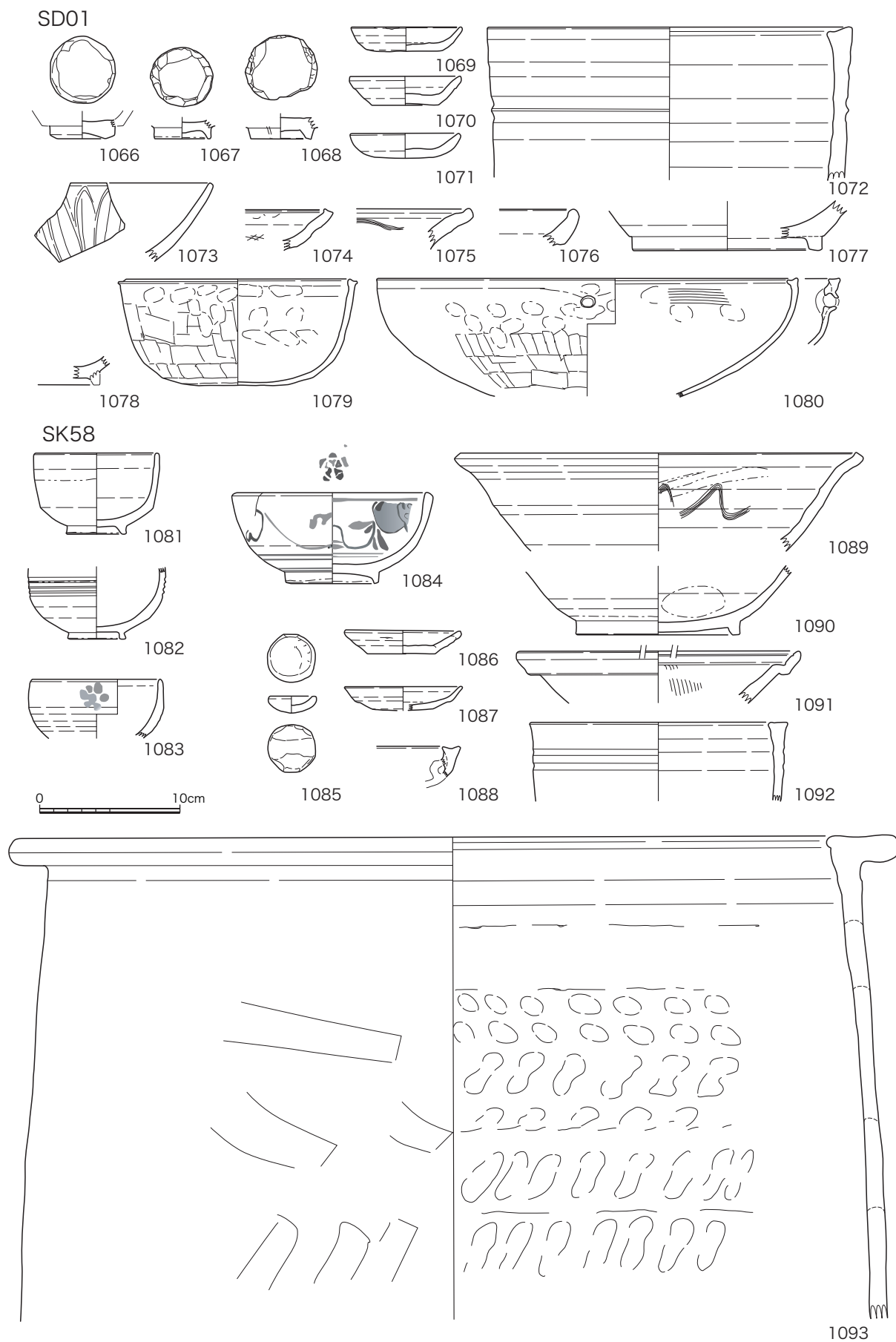
1063

1064

1065

0 10cm

第 101 図 井戸出土遺物 (2)



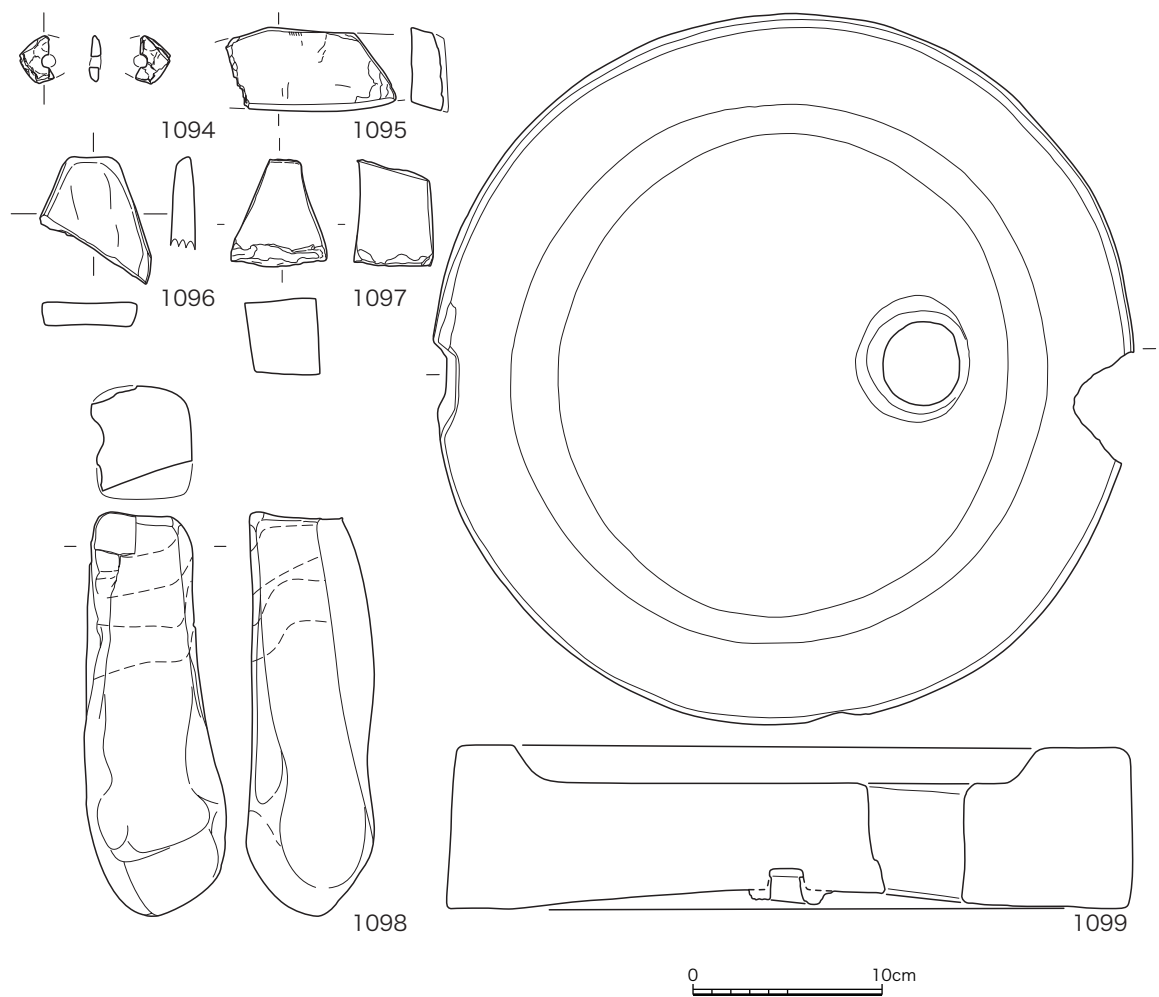
第 102 図 溝・井戸出土遺物

遺 物

内面の加工痕は観察することが難しい。1112は14枚の側板で構成され、上部が腐食などによって欠損する。内外面はヤリガンナ状工具でやや丁寧に削られ、内面下端部は井筒を重ねるために薄く削られていた。1113も14枚の側板で構成され、内外面はヤリガンナ状工具でやや丁寧に削られているが、内面下端部には特別な削りは認められない。1114は20枚の側板で構成され、内外面はヤリガンナ状工具でやや丁寧に削られるのみであった。こ

の他に木製品ではないが、布の破片が数点出土した(写真図版)。

S K 37 出土 遺 物 (第 104・105 図 1111・1115～1118) 横櫛、楔 (1115)、板材 (1111) などがある。横櫛は3点確認され、1116と1118は白木造り、1117は体部が下地に黒色漆、上塗に赤色漆が塗布され、部分的に金色の彩色が残存していた。



第 103 図 石製品

第5節 金属製品・金属関連遺物（第106図1121～1137）

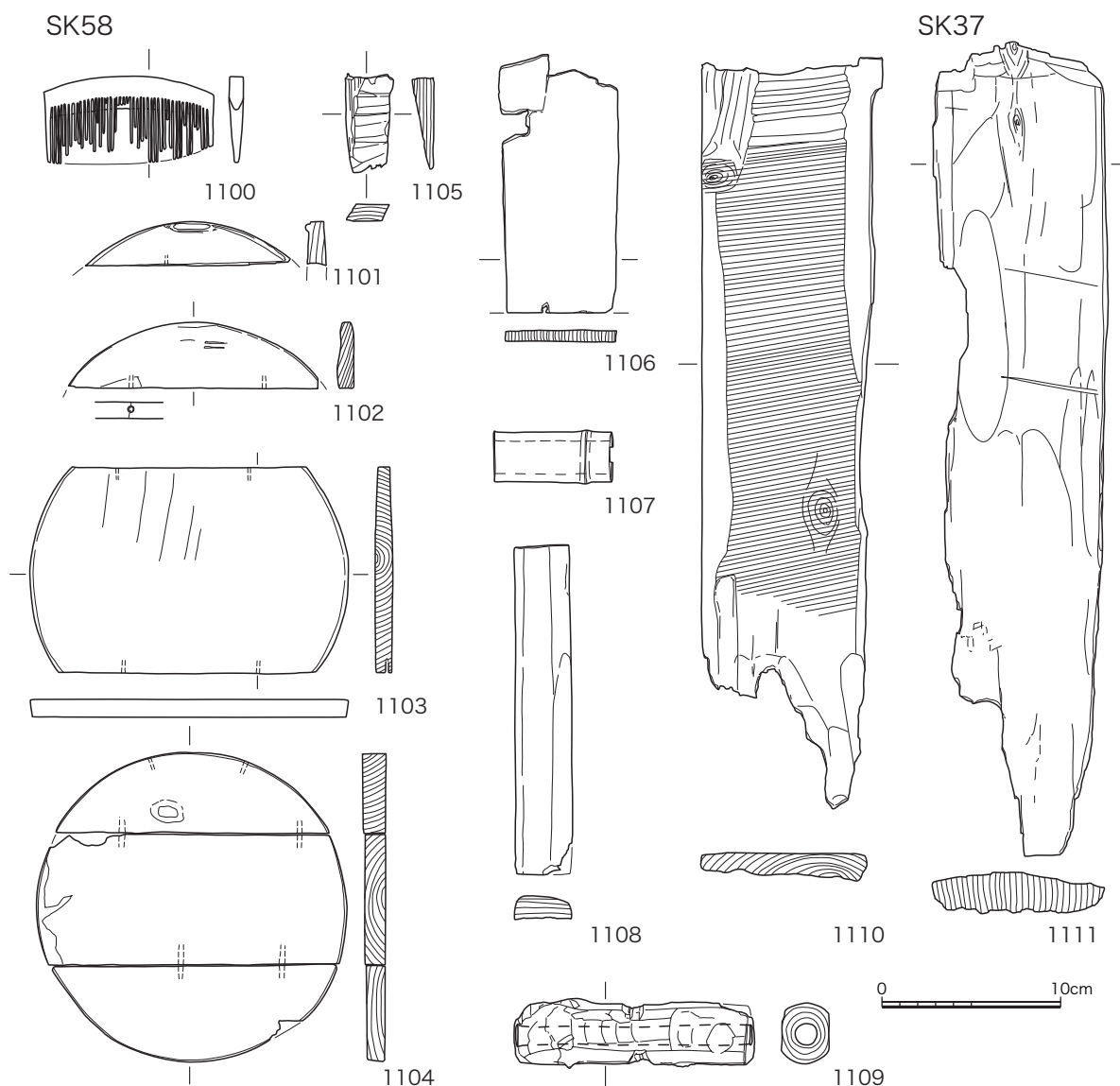
本遺跡では金属製品・金属関連遺物が257点出土しており、遺構から出土した資料も多い。ここでは遺構ごとに代表的な資料を紹介することで記述を進めていきたい。

（1）古代

古代の竪穴建物跡から鉄製品および鉄生産関連遺物がいくつか出土している。残念ながら、発掘調査を実施している時点で明瞭にこれらの資料を確認することができていないこと、一部の竪穴建物跡でサンプルを採取し鍛造剥片などの微細遺

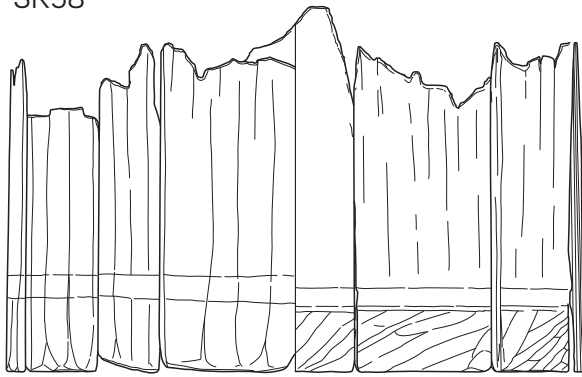
物を搜索したものの発見されなかったことなどから、篩別による遺物の採取は一切実施していない。

S B 05からは流動滓（1136）が1点出土し、上部が白色を呈し一部欠損している。S B 14からは流動滓（1133・1134）が2点出土し、両者とも欠損し気泡が少ない。S B 19からは鉄釘（1126）が1点出土している。頭部の折り返しの痕跡が認められるが、頭部そのものはほとんど残存しないようである。S B 24からは鉄釘の頭部（1129）が1点認められる。S B 54 P 1からは

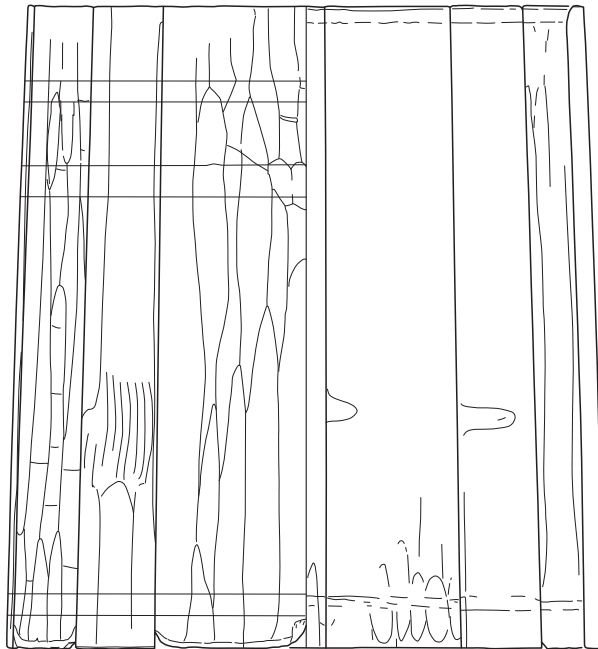


第104図 木製品（1）

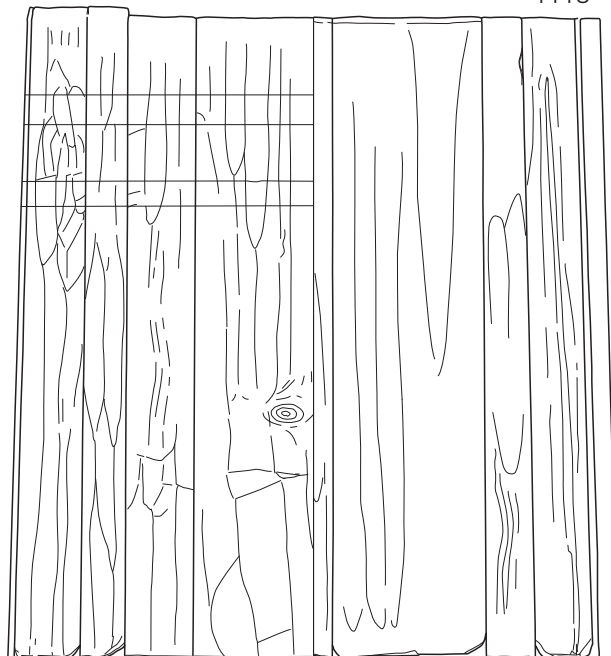
SK58



1112



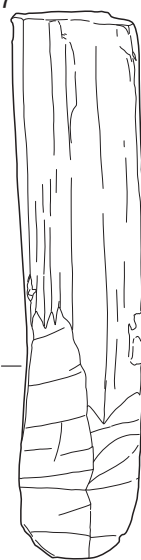
1113



1114

0 1112~1114のみ 20cm

SK37



1115



1116

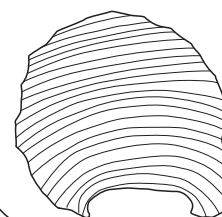
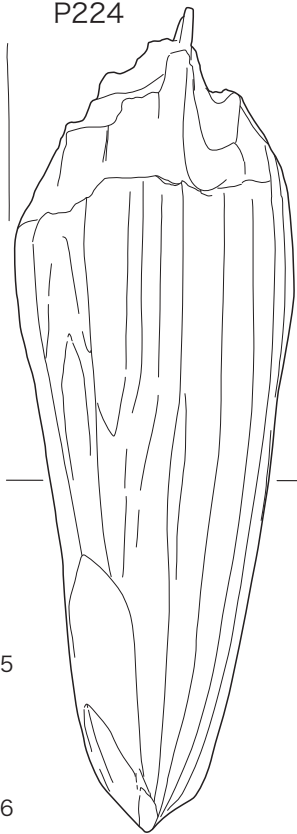


1117



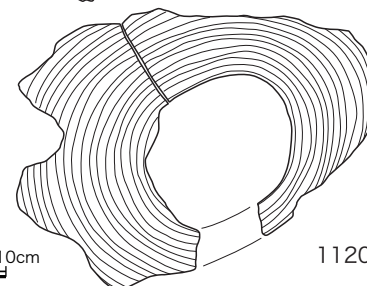
1118

P224



1119

P231



1120

0 10cm

第 105 図 木製品 (2)

鉄釘片と思われる鉄製品 (1130) が 1 点出土した。
S B 60 からは鉄釘片と思われる鉄製品 (1127)
が 1 点確認された。S B 63 からは 4 分の 1 割
腕型鉄滓 (1132) が 1 点出土した。中央部がわ
ずかに凹むが表面は比較的平滑で気泡は少ないも
のである。

(2) 中世

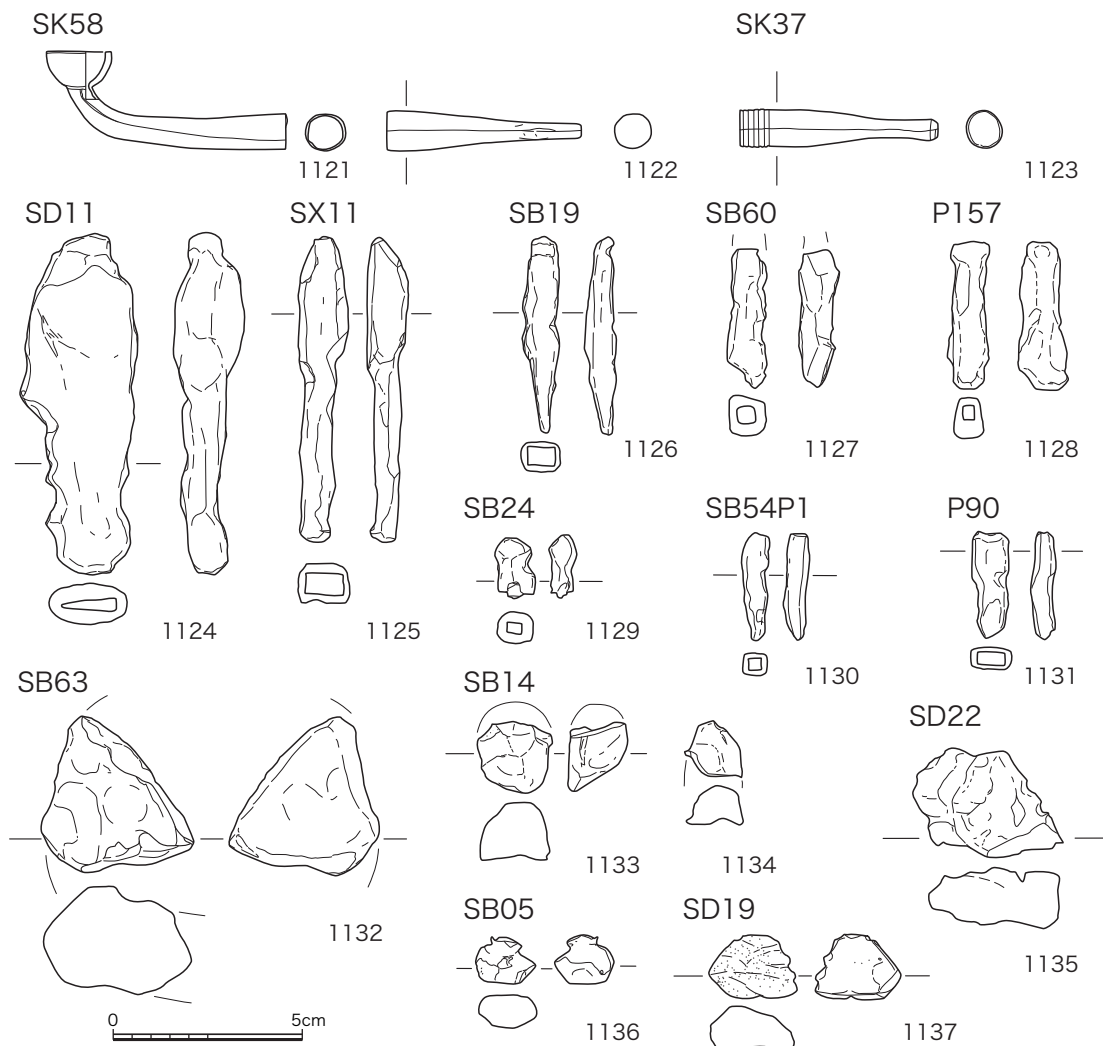
中世の溝および柱穴から鉄製品および鉄生産関
連遺物が出土している。

S D 11 からは鉄製刀子 (1124) などが出土し
た。1124 は錆膨れがひどく全形は不明であるが、
柄部は欠損している。S D 19 からは白色付着物
が認められる流動滓 (1137) などが出土した。表
面に細かい気泡が多数みられる。P 90 と P 157
からは鉄釘の破片 (1131・1128) が出土している。

(3) 近世

近世の溝および井戸などから鉄製品、銅製品お
よび鉄生産関連遺物が出土した。

S K 58 からは煙管などが出土した。1121 は真
鍮製煙管の羅字部で、表面は金色に発色しており、
側面に接合痕が存在する。1122 は銅製煙管の吸
口部で特別な装飾は認められない。S K 37 でも
煙管などが確認された。1123 は真鍮製煙管の吸
口部で、表面は金色に発色しており、先端に条線
が存在している。S D 22 からは 8 分の 1 分割重
複腕型鉄滓 (1135) が 1 点出土した。上面に凹
凸が認められ、気泡がやや多いものである。S X
11 からは刀子と思われる鉄製品 (1125) が出土
している。
(鈴木正貴)



第 106 図 金属製品・金属関連遺物

第4章 自然科学分析

第1節 下津新町遺跡における地下層序と表層地形解析

鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）

（1）はじめに

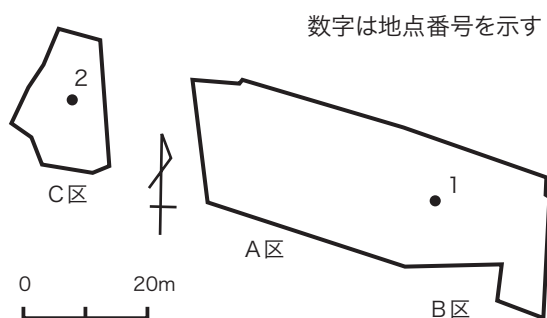
濃尾平野中央部、稲沢市下津新町の下津新町遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

（2）試料および分析方法

地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μm の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため



第107図 下津新町遺跡における深掘調査地点

等高線図を作成した。作成には愛知県稲沢市発行の「稲沢市基本図（1/2500）」にプロットされた標高値を用いた。

（3）分析結果

深掘層序

地点1（05B区）で1地点、地点2（05C区）で1地点の計2地点でバックホーによる掘削を実施した（第107図）。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

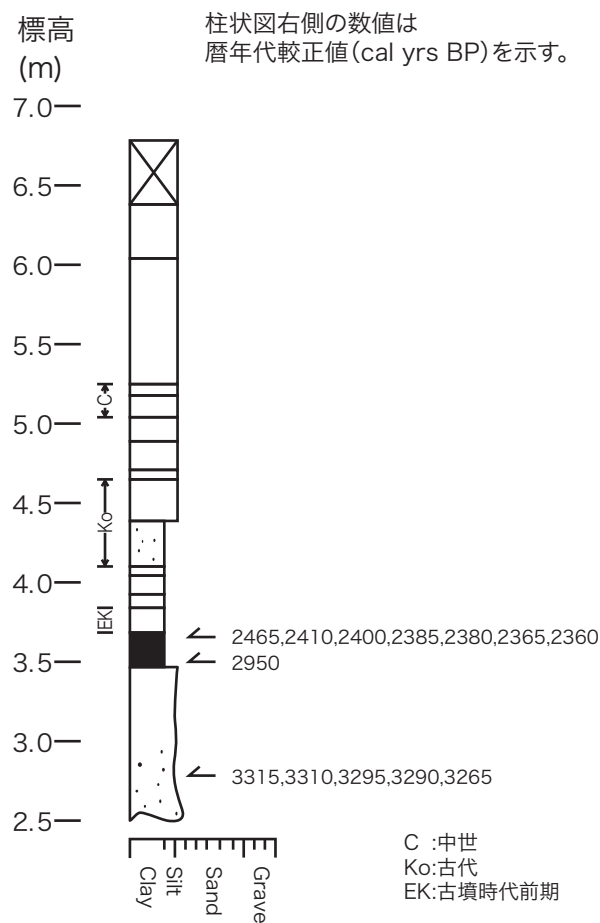
地点1（05B区）では深度約4.2mの層序断面を得た（第108図）。下位層より、標高2.50～3.48mは全体に緑灰色を呈する砂質シルト層であった。堆積構造は不明瞭であり、下部では砂が多く含まれる。標高3.48～3.69mは黒褐色の粘土層で、下部においてより黒色の色調がつよい。地層全体に塊状・均質で堆積構造は不明瞭である。標高3.69～4.10mは褐灰色の粘土層からなり、考古学的に下部層（標高3.48～3.69m）からは古墳時代前期の遺物が出土する。標高4.10～4.39mは灰褐色の極細粒砂の混じる粘土層からなる。標高4.39～6.36mは灰褐色シルト層からなる。堆積構造はみられない。本層のうち下部層（標高4.39～4.65m）とそのさらに下位層にあたる標高4.10～4.39mの砂混じり粘土層を加えて古代の遺物が出土する。また、標高5.04～5.25mの層準からは中世の遺物が出土している。標高6.36～6.77mは褐色シルト層からなるが、現在の瀬戸物や塩化ビニール製の管などが含まれる現代の盛り土である。

地点2（05C区）では深度約7.0mの層序断面を得た。下位層より標高-0.67～2.70mは塊状・均質で灰白色を呈する粘土層からなる。最上部（標高2.60～2.70m）のみ淡褐色を呈する。標高2.70mから標高3.55mまでは粘土層からなり、

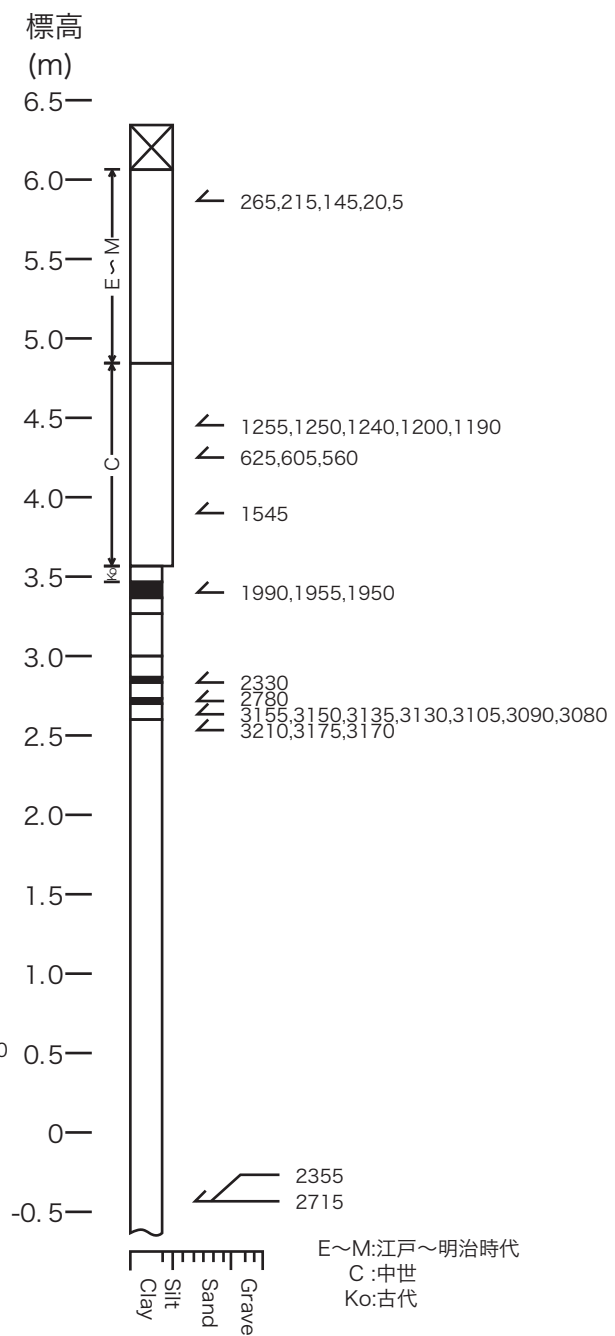
色調によりつぎのように区分される。標高 2.70 ～ 2.74m は黒色粘土層、標高 2.74 ～ 2.83m は淡褐灰色粘土層、標高 2.83 ～ 2.87m は黒色粘土層、標高 2.87 ～ 3.37m は灰色～淡褐灰色を呈する粘土層、標高 3.37 ～ 3.45m は黒褐色を呈する粘土層、標高 3.45 ～ 3.55m は灰色粘土層である。上位層の灰色粘土層（標高 3.45 ～ 3.55m）からは考古学的に古代の遺物が出土する。標高 3.55 ～ 4.86m は褐色砂質シルト層からなり、12 ～ 15 世紀の中世の遺物が出土する。標高 4.86 ～ 6.06m も褐色を呈する砂質シルト層からなり、本層からは 17 ～ 18 世紀の遺物が出土する。標高 6.06 ～ 6.37m は人工的な盛り土である。本層の上面が地表である。

放射性炭素年代測定

地点 1 と地点 2 で合計 14 試料の放射性炭素年代値を得た（第 1・2 表）。古い値では地点 1（05B 区）の砂質シルト層中から採取した炭化材（標高



2.76m) が 3315, 3310, 3295, 3290, 3265 cal yrs BP (BC 1370, 1360, 1350, 1345, 1315) (PLD-8026)、地点 2（05C 区）の灰白色粘土層の標高 2.54m の植物遺体が 3210, 3175, 3170 cal yrs BP (BC 1260, 1225, 1220) (PLD-5365)、最上部の標高 2.67m の炭化物が 3155, 3150, 3135, 3130, 3105, 3090, 3080 cal yrs BP (BC 1205, 1200, 1190, 1180, 1155, 1140, 1130) (PLD-5361) と約 3000 年前代を示した。このう



第 108 図 地点 1（05 B 区）における深掘層序断面、第 109 図 地点 2（05 C 区）における深掘層序断面

ち、地点2の最下部標高-0.46mの同じ標高をもつ層準から採取された植物遺体と木材片の2試料において、植物遺体が2715 cal yrs BP (BC 765) (PLD-5367)、木材片が2355 cal yrs BP (BC 405) (PLD-8031)と約2000年前代を示し、先に述べた約3000年前代の試料に対して年代値の逆転が起きている。いっぽう、新しい値では約2000年前代から約1000年前代の値が多くみられる。さらに、地点2 (05C区)の褐色砂質シルト層中の標高4.23mから採取した炭化した植物遺体が625, 605, 560 cal yrs BP (AD 1325, 1345, 1390) (PLD-8030)、褐色砂質シルト層中の標高5.87mから採取した炭化した植物遺体が265, 215, 145, 20, 5 cal yrs BP (AD 1685, 1735, 1805, 1930, 1945) (PLD-5366)とたいへん新しい年代値を示した。

遺跡周辺の表層地形解析

東西約1.5km、南北約2.0kmの範囲全体では標高4.2mから標高7.2mまでの等高線が描かれ、北および北東方向で標高が高く、南ないし南西方向で標高が低い傾向がある(第110図)。本地域の等高線を概観すると、地形の谷状を呈する部分や閉曲線で表され周りよりも低い凹地状の部分が認められる。

さらに詳しく地形要素をみると、標高が高いのは解析範囲北側の稲沢市下津光明寺町から一宮市丹陽町の九日市場から五日市場にかけてである。それらの地域よりも南側にかけては北東から南西方向へ、あるいは東から西へ開口した谷状地形が認められる。谷地形を北から順に列記すれば、東の稲沢市下津住吉町から西の同市下津北山町にかけて東西約0.94km、南北約0.19kmの大きさのもの、東の稲沢市下津本郷町から南西の同市下津森町にいたる北東-南西方向約0.83kmの谷地形、北東の稲沢市下津本郷町から南の下津下町にいたる北東-南西方向約1.22kmの谷地形がある。また、閉曲線により周りよりも低い凹地状の地形は、解析図の北側に稲沢市下津蛇池町に標高5.6～6.0mまでの南北約0.52km、東西約0.28kmの

ものが明瞭に認められる。また、下津森町から下津下町には標高4.8m以下の凹地地形がある。なお、調査地点から約0.75km南西方向に隔たった、現在のJR東海道本線の稲沢駅は標高が低い場所にあたる。加えて、現在の青木川の流路は地表面の起伏を切るところがみられるなど非調和的であり、明らかに古地形が形成されて後に現在の流路を通るようになったことが読み取れ、時代をさかのぼる議論の際には現在の流路は意味をなさないことがわかる。

(4) 考察

下津新町遺跡の地下層序

下津新町遺跡において深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、地層全体にシルトや粘土といった細粒な粒子が卓越した(第108・109図)。中でも標高3.5mないし標高4.5mを境にしてそれよりも標高の低い層準では粘土層が、標高の高い層準ではシルト層が卓越する傾向にある。特に標高の低い層準では有機物の集積を示す黒褐色を呈する粘土層が挟まれることが特徴的である。それらの堆積年代について、地点1 (05B区)で標高3.48～3.69mの黒褐色粘土層の標高3.50mから採取した土壌で2950 cal yrs BP (BC 1000) (PLD-8024)、同じ黒褐色粘土層の標高3.65mから採取した土壌が2465, 2410, 2400, 2385, 2380, 2365, 2360 cal yrs BP (BC 515, 460, 455, 435, 430, 420, 415) (PLD-8025)の数値年代であった。地点2 (05C区)では、標高2.70～2.74mの黒褐色粘土層の標高2.74mから採取した有機質粘土が2780 cal yrs BP (BC 835) (PLD-5362)、標高2.83～2.87mの黒褐色粘土層の標高2.87mから採取した有機質粘土が2330 cal yrs BP (BC 380) (PLD-5363)、標高3.37～3.45mの黒褐色粘土層の標高3.37mから採取した有機質粘土が1990, 1955, 1950 cal yrs BP (BC 40, 5, AD 1) (PLD-5364)であった。このように標高3.5mないし標高4.5mを境として、その下位層にあたる粘土層の数値年代が概ね約3000年前代～約2000年前代前後を示す

ことがわかった。ところで、今回の調査区の南西約0.3kmに下津北山遺跡がある。下津北山遺跡では標高約4.1m付近に12世紀の遺構面が検出されており、その下には下位層より標高1.41～2.73mに灰色を呈するシルト質砂層、標高2.73～3.34mに黒褐色粘土層、標高3.34～3.57mにシルト質砂層、標高3.57～3.74mに灰褐色のシルト質粘土層、標高3.74～4.11mに赤褐色の粘土層が堆積していた（鬼頭ほか，2000）。これらの地層のうち標高2.73～3.34mにみられる黒褐色粘土層で放射性炭素年代測定を行なっ

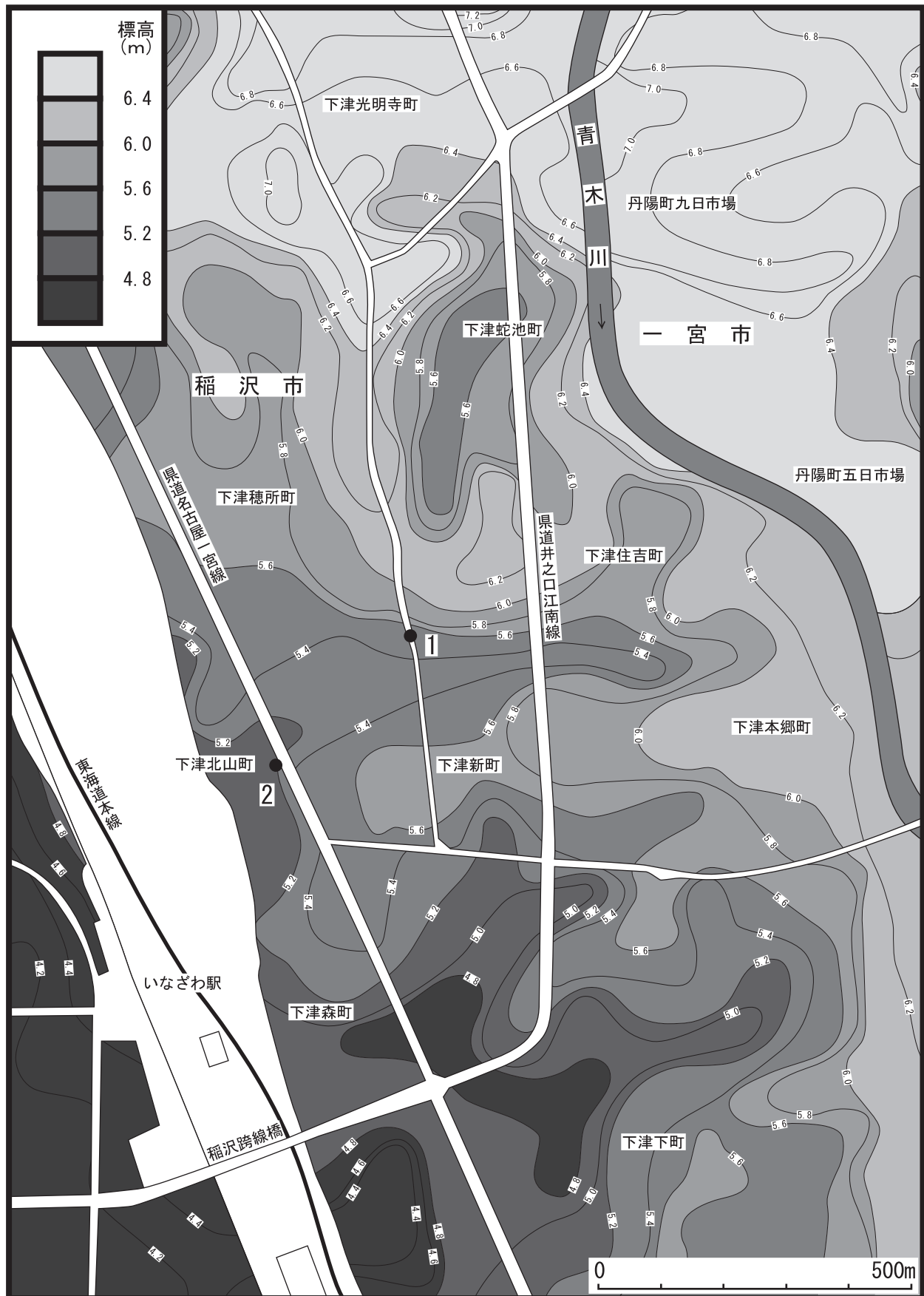
ている。最下位層のシルト質砂層の直上を覆う黒褐色粘土層の標高2.737mの土壤が3350±90 yrs BP（Beta-105386）、同じ黒褐色粘土層の中部、標高3.007mの土壤が2750±60 yrs BP（Beta-105385）を示した。この値をCALIB4.3を用いて暦年代に較正すると、標高2.737mの土壤が3630, 3620, 3605, 3600, 3585（BC 1680, 1670, 1655, 1650, 1635）（Beta-105386）、標高3.007mの土壤が2845（BC 900）（Beta-105385）となる。このように今回の調査区から南西方向に離れた下津北山遺跡調査地点でも黒褐色粘土層は

第1表 地点1（05 B区）における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , AD/BC)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
2.76	緑灰色砂質シルト層	炭化材	3051±23	-26.30±0.13	BC 1370, 1360, 1350, 1345, 1315	3315, 3310, 3295, 3290, 3265	BC 1375-1335(49.3%) BC 1320-1290(34.3%) BC 1275-1260(16.4%)	3325-3285(49.8%) 3270-3240(34.3%) 3225-3210(16.4%)	PLD-8026(AMS)
3.50	黒褐色粘土層	土壌	2847±23	-21.59±0.11	BC 1000	2950	BC 1020-970(71.5%) BC 955-940(23.9%)	2970-2920(71.5%) 2905-2885(23.9%)	PLD-8024(AMS)
3.65	黒褐色粘土層	土壌	2439±23	-18.95±0.15	BC 515, 460, 455, 435, 430, 420, 415	2465, 2410, 2400, 2385, 2380, 2365, 2360	BC 525-480(31.6%) BC 445-410(23.2%) BC 755-720(20.6%) BC 470-445(17.6%)	2470-2425(31.6%) 2395-2360(23.2%) 2705-2670(20.6%) 2420-2395(17.6%)	PLD-8025(AMS)

第2表 地点2（05 C区）における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , AD/BC)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
-0.46	灰白色粘土層	植物遺体	2532±26	-28.87±0.12	BC 765	2715	BC 790-760(38.2%) BC 615-590(22.8%) BC 680-665(15.1%) BC 575-560(13.4%) BC 630-615(10.5%)	2740-2710(38.2%) 2565-2540(22.8%) 2630-2615(15.1%) 2525-2510(13.4%) 2580-2565(10.5%)	PLD-5367(AMS)
-0.46	灰白色粘土層	木材片	2392±29	-28.11±0.24	BC 405	2355	BC 485-465(30.3%) BC 510-485(23.8%) BC 415-400(23.8%) BC 450-440(13.7%)	2435-2410(30.3%) 2455-2435(23.8%) 2365-2350(23.8%) 2400-2385(13.7%)	PLD-8031(AMS)
2.54	灰白色粘土層	植物遺体 (茎部)	3007±24	-12.05±0.11	BC 1260, 1225, 1220	3210, 3175, 3170	BC 1310-1255(52.1%) BC 1245-1210(36.7%)	3260-3205(52.1%) 3195-3160(36.7%)	PLD-5365(AMS)
2.67	淡褐灰色粘土層	炭化物	2948±25	-26.88±0.16	BC 1205, 1200, 1190, 1180, 1155, 1140, 1130	3155, 3150, 3135, 3130, 3105, 3090, 3080	BC 1195-1135(58.1%) BC 1215-1195(17.2%) BC 1255-1240(14.0%)	3145-3085(58.1%) 3165-3145(17.2%) 3205-3185(14.0%)	PLD-5361(AMS)
2.74	黒褐色粘土層	有機質粘土	2712±25	-25.22±0.20	BC 835	2780	BC 895-875(40.7%) BC 845-825(33.3%) BC 865-845(26.1%)	2845-2825(40.7%) 2795-2775(33.3%) 2810-2795(26.1%)	PLD-5362(AMS)
2.87	黒褐色粘土層	有機質粘土	2269±21	-24.56±0.13	BC 380	2330	BC 390-355(68.7%) BC 275-260(29.0%)	2340-2305(68.7%) 2225-2205(29.0%)	PLD-5363(AMS)
3.37	黒褐色粘土層	有機質粘土	2038±22	-16.41±0.14	BC 40, 5, AD 1	1990, 1955, 1950	BC 55-35(33.8%) BC 35-15(31.2%) BC 15-AD 1(28.9%)	2000-1985(33.8%) 1985-1965(31.2%) 1965-1950(28.9%)	PLD-5364(AMS)
3.91	褐色砂質シルト層	炭化植物遺体	1664±32	-33.97±0.25	AD 405	1545	AD 380-420(67.4%) AD 345-370(32.6%)	1570-1525(67.4%) 1605-1580(32.6%)	PLD-8028(AMS)
4.23	褐色砂質シルト層	炭化植物遺体	603±23	-23.20±0.12	AD 1325, 1345, 1390	625, 605, 560	AD 1305-1330(48.0%) AD 1340-1355(25.9%) AD 1385-1395(20.1%)	645-620(48.0%) 610-595(25.9%) 565-550(20.1%)	PLD-8030(AMS)
4.47	褐色砂質シルト層	炭化植物遺体	1287±22	-28.30±0.24	AD 690, 700, 710, 750, 760	1255, 1250, 1240, 1200, 1190	AD 685-720(55.6%) AD 745-770(44.4%)	1260-1230(55.6%) 1205-1180(44.4%)	PLD-8029(AMS)
5.87	褐色砂質シルト層	炭化植物遺体	147±21	-28.55±0.12	AD 1685, 1735, 1805, 1930, 1945	265, 215, 145, 20, 5	AD 1725-1775(46.4%) AD 1920-1940(22.0%) AD 1675-1695(17.3%) AD 1800-1810(11.1%)	225-175(46.4%) 30-10(22.0%) 275-255(17.3%) 150-135(11.1%)	PLD-5366(AMS)



第 110 図 下津新町遺跡周辺の等高線図

(稲沢市発行の「稲沢市基本図 (1/2500)」の標高値を基に鬼頭が作成) (等高線間隔は 0.2m、数字 1～2 は調査地点と周辺の主な遺跡を示す)

1. 下津新町遺跡、2. 下津北山遺跡

約 3000 ～ 2000 年前を示し、下津新町遺跡周辺にはその年代を示すところに細粒な堆積物をためるような低エネルギー環境であったことがわかった。

いっぽう、標高 3.5m ないし標高 4.5m を境としたその上位にはシルト層が卓越した。それらの堆積年代について、地点 1 (05B 区) では残念ながら数値年代の得られる試料を採取できなかったが、地点 2 (05C 区) で試料を得ることができた。その結果から、標高 3.55 ～ 4.86m の褐色砂質シルト層の標高 3.91m から採取した炭化植物遺体は 1545 cal yrs BP (AD 405) (PLD-8028)、同じ地層の標高 4.23m から採取した炭化植物遺体は 625, 605, 560 cal yrs BP (AD 1325, 1345, 1390) (PLD-8030)、同じ地層の標高 4.47m から採取した炭化植物遺体は 1255, 1250, 1240, 1200, 1190 cal yrs BP (AD 690, 700, 710, 750, 760) (PLD-8029) と約 1500 ～ 1200 年前代や約 600 ～ 500 年前代の値であった。また、シルト層が卓越するようになって考古遺物も出土するようになる。

以上のように、下津新町遺跡の地下層序では標高 3.5 ～ 4.5m を境として粘土層からシルト層へとその層相が変化し、堆積年代も下位の粘土層で約 3000 年前代～約 2000 年前代前後を、上位のシルト層で約 1500 ～ 1200 年前代や約 600 ～ 500 年前代の値を取り、この粘土層とシルト層との境界で堆積システムが変化したことがわかる。

下津新町遺跡周辺の表層地形解析

現在の表層地形解析から、調査地点周辺には北東 - 南西方向、あるいは東西方向の谷状地形が認められた。これらの存在は現在の表層地形が形成される際に北東 - 南西方向や東西方向の河川流路が当地に存在したことを示すものである。また、解析範囲よりもさらに広範囲をみた場合、標高は全体に北東方向で高く、南西方向に低い傾向があり、当時の河川流路も北東から南西方向へ、または東から西へ向かって流下していたものと予想される。これらの谷状地形のうち稲沢市下津住吉町から同市下津北山町にかけて東西約 0.94km、南北約 0.19km にいたる、東から西側に開いた谷状地形の北側縁辺にあたっている。下津新町遺跡の

立地に関して鈴木 (2006) はいわゆる「鎌倉街道」との関係に言及しており、鎌倉街道は現在の青木川に並行して通っていたと推定され、鎌倉街道が通る自然堤防と下津新町遺跡の立地する自然堤防とは異なる可能性を指摘したが、表層地形解析においても明らかに立地する地形環境は異なっており、鈴木 (2006) の指摘とも矛盾しない。

また、今回の調査地点で最も西側に位置する調査区 (05C 区) のさらに西側には、明治 17 年作成の地籍図により現在の青木川から分流した河川が流下していた可能性が指摘されている (鈴木, 2006)。この推定に関して、今回の調査区北側、稲沢市蛇池町には表層地形解析によって南北距離最大約 0.52km、東西距離最大約 0.28km の標高 5.6 ～ 6.0m までの閉曲線で囲まれた凹地が存在している。このような地形は河川流路の流下方向の変化により取り残された放棄河道に特有の形態を持っており、下津蛇池町を通る北東から南西方向に流下する河川流路の存在を示唆させ、鈴木 (2006) の推定とも調和的である。

謝辞

本論を作成するにあたり、稲沢市役所には都市基本図の入手で便宜を図っていただいた。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・廣田正史氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の鈴木正貴氏には遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美, 2000, 下津北山遺跡における古環境解析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 88 集「下津北山遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 70-81.
- 鈴木正貴, 2006, 鎌倉街道周辺遺跡, 平成 17 年度愛知県埋蔵文化財センター「年報」, 愛知県埋蔵文化財センター, 38-42.

第2節 下津新町遺跡出土木製品の樹種同定

藤根 久・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

下津新町遺跡は、稲沢市下津新町地内の青木川右岸に位置する古墳時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が確認される遺跡である。調査では、古墳時代末～平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡など、平安時代末～鎌倉時代の溝に囲まれた屋敷跡などが検出されている。また、江戸時代の区画溝や井戸あるいは畑跡などが検出され、結筒などの木製品が多く出土している。ここでは、これら木製品の樹種同定を行った。

（2）資料と方法

試料は、木製品から材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）について、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、ガムクロールで封入し、永久プレパラートを作成した。各プレパラートは、光学顕微鏡で40～400倍下で観察・同定した。なお、木材プレパラートは、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

（3）結果および考察

木製品の樹種同定を行った結果、常緑針葉樹のコウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、常緑広葉樹のカナメモチ属、ツゲ、落葉広葉樹のウツギ、常緑広葉樹または落葉広葉樹のモチノキ属の8分類群が検出された（第3・4表）。

時期別の木製品樹種を見ると（第4表）、8世紀と思われる柱穴から出土した柱根は、いずれもコウヤマキであった。また、13世紀と思われるS K 14から出土した加工材は、ヒノキとサワラであった。

19世紀では、井戸S K 37およびS K 58から出土した横櫓が、カナメモチ属、モチノキ属、ツゲであった。加工材はいずれも針葉樹のスギ、ヒノキ、サワラであった。S K 58から出土した曲物桶底板はスギであり、結筒底板はスギとサワラであった。S K 58などから出土した結筒側板は、スギとサワラであり、サワラの利用が多い。また、

楔はサワラであった。

なお、時期不明の加工材はサワラであった。

以下に、各樹種の木材組織の特徴を記載する。

1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. Et Zucc. コウヤマキ科

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状である。放射組織は5細胞高以下が多い。

コウヤマキは、日本特産の1属1種の常緑高木である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の本曾、和歌山県の高野山に多い。木材は、耐久性・耐水性・耐蟻性に優れ、風呂桶や井戸側など水に関わる用具によく使われる。

2) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に2個ある。

スギは、本州以南の暖帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。材はやや軽軟で加工は容易である。

3) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl. ヒノキ科

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪の後半に分布する。分野壁孔は大きく、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で1分野に2～4個あり、おもに2個が水平に整然と配列する。

ヒノキは、本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性に優れ、建築材や曲物などによく使われる。

4) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. Et Zucc.) Endl. ヒノキ科

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪の後半に接線状に配列する。分野壁孔は、やや開いたヒノキ型で、1分野に2～4個ある。孔口の開口がヒノキより大きい。

サワラは、ヒノキよりも分布域は狭く、主な分布域は東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣るといわれる。

5) ウツギ *Deutzia-crenata* Sieb. et Zucc. ユキノシタ科

非常に小型の管孔が均一に散在し、径の大きな細胞からなる幅の広い放射組織が特徴的な散孔材である。道管の壁孔は交互状に密在し、穿孔は横棒の数が多い階段穿孔である。放射組織は異性1～3細胞幅で背は非常に高い。放射柔細胞は大きいので細胞幅が広く、放射組織の縁には鞘細胞が見られる。

ウツギは、暖帯～温帯下部の北海道以南の山野の日当りの良い所に生育する普通の落葉低木である。

6) カナメモチ属 *photinia* バラ科

薄壁のやや丸い管孔が単独で散在する散孔材である。管孔の穿孔は単一である。放射組織は異性で1～3細胞幅、2～40細胞高、単列部と多列部の縁辺部1細胞は直立細胞からなる。

カナメモチ属は、静岡県以西の暖温帯に分布する常緑広葉樹のカナメモチなどがある。カナメモチの木材は、極めて硬く農具の柄や車輪・車軸な

どに用いられるほか、庭木として栽培される。

7) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

非常に小型の管孔が年輪幅いっぱいに連続して放射方向またはやや斜状に複合して配列する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は30本前後の階段穿孔であり、内腔には水平のらせん肥厚がある。放射組織は異性、おもに3細胞幅の紡錘形で上下端に方形・直立細胞がある。

モチノキ属は、温帯～暖帯の山地に生育する常緑または落葉性の高木または低木で、約15種がある。山間の湿地に普通の落葉低木のウメモドキ、関東地方以西の山地に生育するソヨゴ、茨城県・福井県以西の山野に普通のクロガネモチ、海岸に近い山地に生育するモチノキなど、暖帯に分布する種類が多い。モチノキは、やや重硬で収縮と狂いが少なく、ツゲの模擬材として櫛に用いられるほか、一般的な器具材（そろばん玉や数珠など）に用いられる。

8) ツゲ *Buxus microphylla* Sieb. Et Zucc. var. *japonica* Rehder et Wilson ツゲ科

年輪の始めにやや大型の管孔が並び、径を減じて散在する散孔材である。管孔の穿孔は20本程度の横棒からなる階段状である。放射組織は異性1～3細胞幅、2～30細胞高であり、単列部と多列部の縁辺部1細胞は直立細胞である。

ツゲは、宮城県以南の暖帯に分布する常緑の低木ないし小高木である。木材は、極めて割れにくく硬い。木材は、櫛、彫刻材、そろばん玉などに用いられる。

第3-1 表 木製品の樹種一覧表

図版番号	保存番号	調査区	グリッド	遺構	遺構の時期	種別	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	取り上げ番号など
—	1	05A	IV A6c	SB52	8世紀?	柱根	16.9	6.7	4.2	芯材	コウヤマキ	P223
1119	2	05A	IV A7c	SB52	8世紀?	柱根	17.6	15.1	高 25.5	芯材	コウヤマキ	P224
—	3	05A		SB52	8世紀?	柱根	22.5	20.1	高 46.5	芯材	コウヤマキ	P225
—	4	05A	IV A7c	SB52	8世紀?	柱根	23.2	21.0	52.5	芯材	コウヤマキ	P226
—	5	05A	IV A7c	SB52	8世紀?	柱根	21.5	20.5	40.0	芯材	コウヤマキ	P230
1120	6	05A	IV A6d	SB52	8世紀?	柱根	14.8	13.5	45.0	芯材	コウヤマキ	P231
—	7	05A	IV A7c	SB52	8世紀?	柱根	20.4	12.8	45.5	芯材	コウヤマキ	P234
—	11	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.0	12.3	1.8	桁目	スギ	枠 1
—	12	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.0	11.6	1.7	桁目	スギ	枠 2
—	13	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.9	12.5	1.7	桁目	スギ	枠 3
—	14	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	81.1	12.0	1.8	桁目	スギ	枠 4
—	15	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.3	11.8	1.6	桁目	スギ	枠 5
—	16	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	81.2	10.2	1.8	桁目	スギ	枠 6
—	17	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.6	12.3	1.7	桁目	スギ	枠 7
—	18	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.8	8.2	2.1	桁目	スギ	枠 8
—	19	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	79.5	9.9	1.6	桁目	スギ	枠 9
—	20	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.7	11.7	1.5	桁目	スギ	枠 10
—	21	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.1	12.5	1.7	桁目	スギ	枠 11
—	22	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	71.0	15.2	2.1	板目	スギ	枠 12
—	23	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	78.6	9.4	1.8	追桁目	スギ	枠 13
—	24	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.7	12.8	1.5	桁目	スギ	枠 14
—	25	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.9	12.2	2.0	追桁目	スギ	枠 15
—	26	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	80.3	12.3	1.8	追桁目	スギ	枠 16
—	27	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	79.8	7.8	1.8	追桁目	スギ	枠 17
—	28	05A	IV A8e	SK32	19世紀	結筒側板	77.8	9.0	1.8	追桁目	スギ	枠 18
1115	29	05A	IV A8c	SK37	19世紀	加工材	45.7	9.8	2.2	芯持桁目	スギ	枠材 1
—	30	05A	IV A8c	SK37	19世紀	加工材	31.8	8.0	2.3	板目	スギ	枠材 2
—	33	05A	IV A8c	SK37	19世紀	加工材	37.9	11.2	1.7	板目	サワラ	枠材 5
1118	36	05A	IV A8c	SK37	19世紀	横櫓	6.3	4.2	0.8	板目	モチノキ属	No.12、他多数
1116	37	05A	IV A8c	SK37	19世紀	横櫓	5.5	4.7	0.8	板目	モチノキ属	No.14、他 2 点
1117	38	05A	IV A9c	SK37	19世紀	横櫓	4.1	2.6	0.6	板目	カナメモチ属	枠内、他 3 点、漆片
—	40	05A	IV A9c	SK37	19世紀	加工材	37.3	10.3	1.9	板目	ヒノキ	枠内、他 1 点
—	42	05A	IV A9c	SK37	19世紀	加工材	13.2	3.2	1.3	桁目	ヒノキ	枠内
—	44	05A	IV A9c	SK37	19世紀	加工材	12.4	5.2	2.0	板目	ヒノキ	
—	45	05A	IV A--	SK37	19世紀	加工材	14.7	6.7	0.5	追桁目	ヒノキ	他多数
1111	46	05A	IV A9c	SK37	19世紀	加工材	29.1	6.7	1.7	桁目	サワラ	下部枠材、他多数
—	48	05B	IV A--	SK14	13世紀?	加工材	7.4	3.1	0.3	追桁目	ヒノキ	遺物 1、他 3 点
—	49	05B	IV A--	SK14	13世紀?	加工材	20.3	3.4	0.5	追桁目	サワラ	遺物 5
—	50	05B	IV A--	SK14	13世紀?	加工材	13.5	3.4	2.6	芯材	ウツギ属	遺物 7
1112	51	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.3	15.0	2.0	追桁目	サワラ	桶材 1
1112	52	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.6	8.3	2.1	追桁目	サワラ	桶材 2
1112	53	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	29.8	13.3	1.3	板目	サワラ	桶材 3
1112	54	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	33.0	15.8	1.6	追桁目	サワラ	桶材 4
1112	55	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	33.6	9.8	1.5	板目	サワラ	桶材 5
1112	56	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	35.2	15.9	1.8	追桁目	サワラ	桶材 6
1112	57	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	38.0	11.5	1.9	板目	サワラ	桶材 7
1112	58	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	38.3	14.9	1.5	板目	サワラ	桶材 8
1112	59	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.6	16.2	1.3	板目	サワラ	桶材 9
1112	60	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.7	15.0	1.1	板目	サワラ	桶材 10
1112	61	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.8	15.3	1.4	板目	サワラ	桶材 11
1112	62	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	36.6	15.0	1.5	板目	サワラ	桶材 12
1112	63	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	33.3	15.8	1.8	板目	サワラ	桶材 13
1112	64	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	34.1	10.3	1.7	板目	サワラ	桶材 14
1100	66	05C	IV J6r	SK58	19世紀	横櫓	9.7	5.0	0.8	板目	ツゲ	3 段枠内、漆つき
1104	67-1	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結桶底板	17.3	16.3	1.1	追桁目	サワラ	3 段枠内
1104	67-2	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結桶底板	-	-	-	板目	スギ	3 段枠内
1104	67-3	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結桶底板	-	-	-	板目	スギ	3 段枠内
1101	67-4	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結桶底板	-	-	-	板目	スギ	3 段枠内
1102	67-5	05C	IV J6r	SK58	19世紀	曲物桶底板	-	-	-	板目	スギ	3 段枠内
1106	67-6	05C	IV J6r	SK58	19世紀	加工板材	-	-	-	桁目	スギ	3 段枠内
1103	71	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結桶底板	17.6	11.5	0.8	板目	スギ	遺物 1
—	72	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	28.4	8.1	2.6	板目	スギ	井戸枠 No.1
—	73	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	17.5	1.5	0.8	板目	スギ	井戸枠 No.2
—	74	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	46.5	9.5	1.8	板目	スギ	井戸枠 No.3
—	75	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	41.2	10.3	1.7	板目	スギ	井戸枠 No.4
—	76	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	51.5	8.6	1.8	板目	スギ	井戸枠 No.5
—	77	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	11.0	6.7	1.3	板目	スギ	井戸枠 No.6
—	78	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	26.7	4.6	1.6	追桁目	スギ	井戸枠 No.7
—	79	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	18.5	7.5	1.8	板目	スギ	井戸枠 No.8
1110	80	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	42.4	10.0	2.3	板目	スギ	井戸枠 No.9
—	81	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	9.5	8.1	1.7	板目	スギ	井戸枠 No.10
1105	85-1	05C	IV J6r	SK58	19世紀	楔	11.5	1.5	0.3	板目	サワラ	枠内
1113	86	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	68.9	16.5	2.0	板目	サワラ	枠材 2-1

第3-2表 木製品の樹種一覧表

図版番号	保存番号	調査区	グリッド	遺構	遺構の時期	種別	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	取り上げ番号など
1113	87	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	10.8	2.1	追柱目	サワラ	枠材 2-2
1113	88	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	68.0	16.8	2.3	板目	サワラ	枠材 2-3
1113	89	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.8	12.5	1.8	板目	サワラ	枠材 2-4
1113	90	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.8	14.2	1.9	板目	サワラ	枠材 2-5
1113	91	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.3	21.6	2.4	追柱目	サワラ	枠材 2-6
1113	92	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	66.8	9.5	2.3	柱目	サワラ	枠材 2-7
1113	93	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.2	15.4	2.4	柱目	サワラ	枠材 2-8
1113	94	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	11.4	2.1	柱目	サワラ	枠材 2-9
1113	95	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.0	16.2	1.9	板目	サワラ	枠材 2-10
1113	96	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.7	19.5	2.0	板目	サワラ	枠材 2-11
1113	97	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.8	8.2	2.0	柱目	サワラ	枠材 2-12
1113	98	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	68.0	12.3	1.9	柱目	サワラ	枠材 2-13
1113	99	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	68.3	13.1	2.0	柱目	サワラ	枠材 2-14
1114	103	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.2	13.3	2.2	柱目	サワラ	桶枠 3-1
1114	104	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.3	9.5	2.4	追柱目	サワラ	桶枠 3-2
1114	105	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	70.5	6.8	2.2	柱目	サワラ	桶枠 3-3
1114	106	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	70.2	15.3	2.0	板目	サワラ	桶枠 3-4
1114	107	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	70.7	10.9	2.1	板目	サワラ	桶枠 3-5
1114	108	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	8.9	2.3	追柱目	サワラ	桶枠 3-6
1114	109	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	12.1	5.1	追柱目	サワラ	桶枠 3-7
1114	110	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	69.9	14.0	2.0	板目	サワラ	桶枠 3-8
1114	111	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	9.6	2.2	追柱目	サワラ	桶枠 3-9
1114	112	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	66.7	9.1	2.3	柱目	サワラ	桶枠 3-10-1
1114	113	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	17.3	1.9	板目	サワラ	桶枠 3-10-2
1114	114	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	66.6	7.2	2.0	追柱目	サワラ	桶枠 3-11-1
1114	115	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.9	11.0	2.4	板目	サワラ	桶枠 3-11-2
1114	116	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	67.2	8.6	2.6	柱目	サワラ	桶枠 3-11-3
1114	117	05C	IV J-	SK58	19世紀	結筒側板	66.8	8.0	2.2	柱目	サワラ	桶枠 3-11-4
1114	118	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	9.1	3.2	追柱目	サワラ	桶枠 3-12-1
1114	119	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.2	9.4	3.9	追柱目	サワラ	桶枠 3-12-2
1114	120	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.6	15.3	2.1	板目	サワラ	桶枠 3-13
1114	121	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	67.1	9.2	2.8	柱目	サワラ	桶枠 3-14
1114	122	05C	IV J6r	SK58	19世紀	結筒側板	68.2	10.3	2.0	板目	サワラ	桶枠 3-15
-	132	05C	IV J-	検出1		加工材	4.9	4.8	0.8	板目	サワラ	
-	134	05C	IV J7r	SX12	19世紀	加工材	55.4	9.3	2.0	板目	サワラ	

第4表 木製品の樹種組成表

時 期	遺 構	種 別	針 葉 樹				広 葉 樹				合 計
			コウヤマキ	スギ	ヒノキ	サワラ	ウツギ	カナメモチ属	モチノキ属	ツゲ	
8世紀	S B 52	柱根	7								7
13世紀	S K 14	加工材			1	1	1				3
19世紀	S K 37・S K 58	横櫓						1	2	1	4
	S K 37 他	加工材		3	4	3					10
	S K 58	曲物桶底板		1							1
	S K 58	結桶底板		4		1					5
	S K 58 他	結筒側板		28		48					76
	S K 58	楔				1					1
不明	検出1	加工材				1					1
合 計			7	36	5	55	1	1	2	1	108

第5章 考察・まとめ

第1節 地籍図・村絵図による河道の検討

明治17年(1884)作成の「地籍字分全図」(以後地籍図)から近代初期の土地利用状況が把握できる。その稲沢市下津地区をトレースしたものが第111図である。天保12年(1841)に描かれた村絵図(第112図)を参考にしながら、地籍図から今回の調査区周辺を検討したい。

地籍図を見ると、調査区北西をかすめるように水田地帯が蛇行しながら連なっていることがわかる。ここには現在、宮田用水(多加木井筋)が流れており、蛇池と呼ばれる地区があるなど、周辺と比較して標高は低い。

この蛇行する水田地帯が、旧河道と考えられる。今回の調査範囲ではこの推定河道は確認されていないが、下津北山遺跡では96区・97区の北で検出されたNR01があるので、この自然流路に連なると考えられる。下津北山遺跡の調査成果からすると、15世紀末以降の河川活動が活発化し下津北山遺跡は終焉を迎えるので、15世紀末以降、この推定河道には多くの河水・土砂が流れたと思われる。

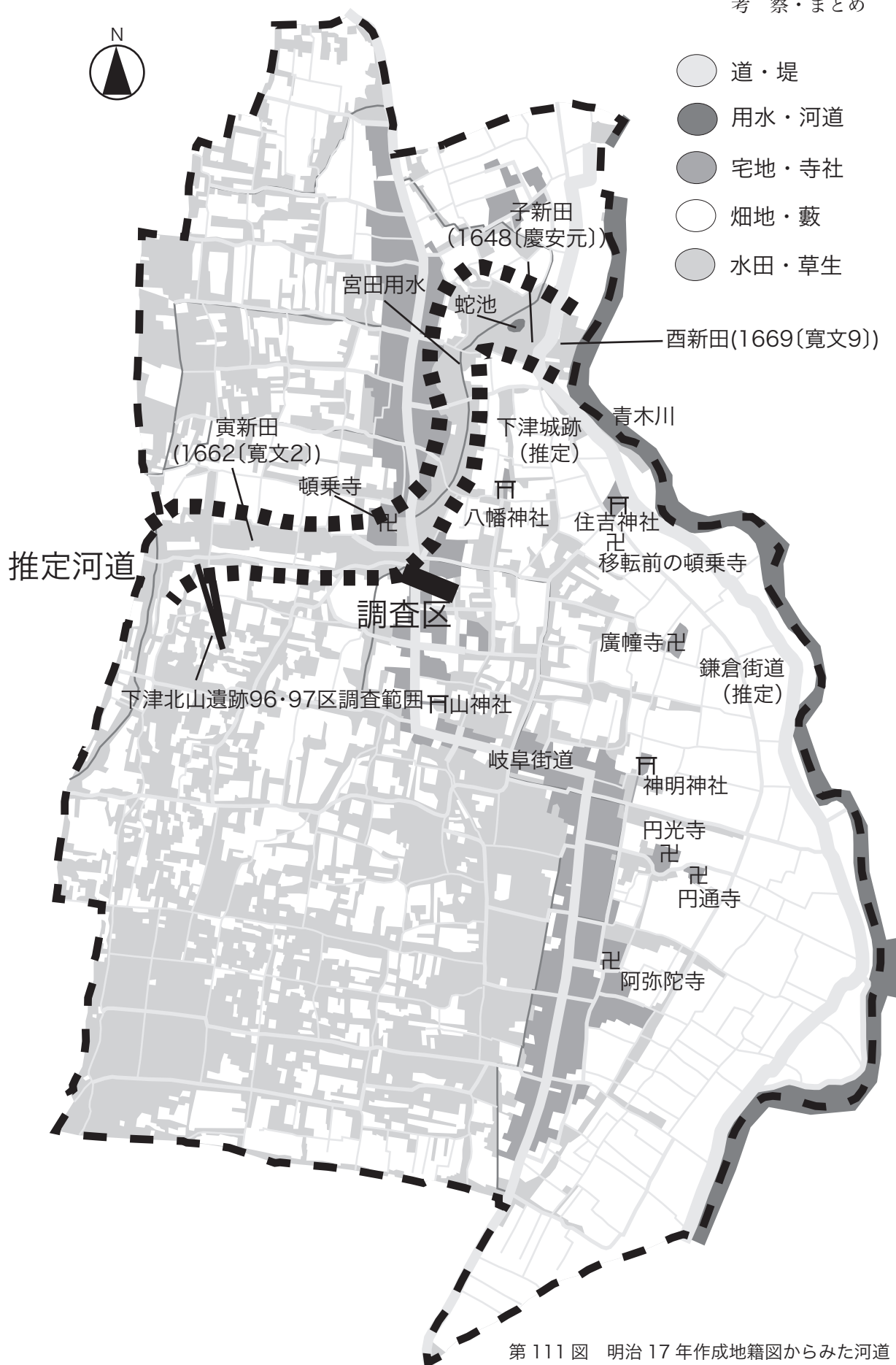
そして、天保村絵図に見える推定河道内に描かれている子新田・寅新田・酉新田のうち、最も古いのは慶安元年(1648)検地の子新田であること(『寛文村々覚書』に記述による)、今回の調査区北西の近隣にある頓乗寺が享保2年(1717)に現在地に移転してきたことから、青木川から分断され、近世初期には乾燥化によって旧河道の土地利用が進んだと考えられる。15世紀末以降の河川活動によって急速に埋没し河道の役割を失ったものと思われる。

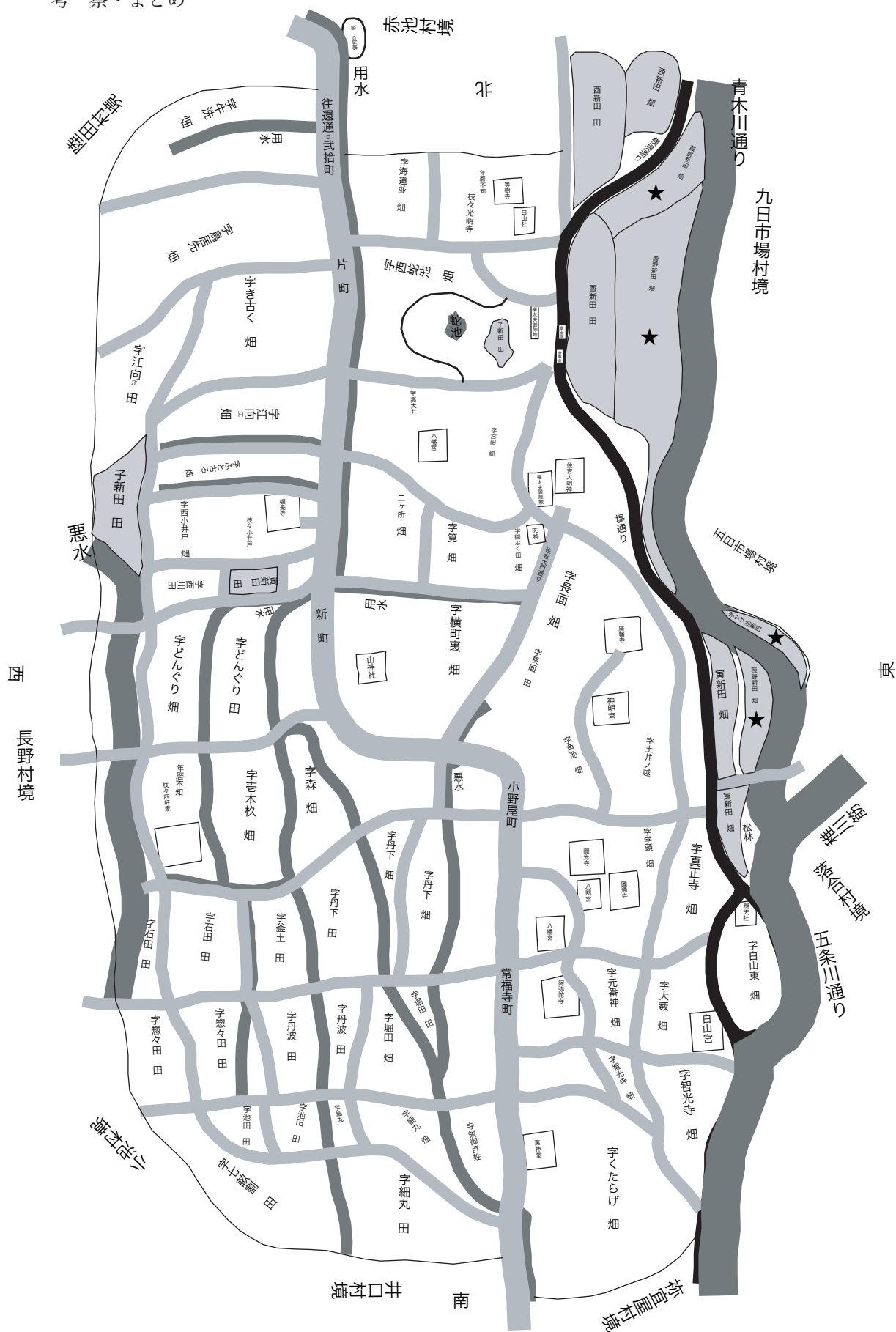
ただし地籍図を見ると、推定河道と青木川の分流点は堤があるのみで水田が広がっているのが、最終的に河水の流入がなくなったのは、堤の建設という人為的な遮断によると思われる。

さて、堤の建設時期であるが、文献では管見できず、不明である。しかし、推定河道には新田が多い、すなわち伊奈忠次による検地を受けた慶長13年(1608)段階では湿地として検地対象外の土地が多いことから、慶長13年(1608)よりあまりさかのぼることはないと考えられる。織田信忠・信雄支配期に稲沢市域での築堤工事に関する史料が散見されることから、16世紀後半が想像される。

また、堤の建設者を考えると、青木川と推定河道を分ける堤の上に描かれた富士塚が「権太夫御除地」として記載されている。「権太夫」は、「住吉大明神」の西に居屋敷を構える人物で、この絵図中に記載された唯一の人名で、『蓬州旧勝録』(安永8年(1779)刊)にも、「社人牧野権太夫」として宮司として唯一名前が見える。ここから、「権太夫」が近世中期以降の下津村内の神社に強い力をもったことが推測される。また、『寛文村々覚書』には村内の神社7社は「当村祢宜兵部大夫」の持内だとあるので、「兵部大夫」「(牧野)権太夫」は、近世を通じて下津村内の神社を支配する一族だとも考えることもできる。そうすれば、彼らは中世土豪の末裔とも想像され、堤を建設した土豪の末裔として堤に設けられた富士塚を除地として代々認められたと考えられるだろう。

以上から、16世紀後半の下津村において大きな変化があったと推測される。(加藤博紀)





第112図 天保12年作成村絵図（トレース図）

第2節 遺構の変遷

ここでは、今回の下津新町遺跡の発掘調査で検出された遺構の変遷を整理しておく。確認された遺構には竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑などがあるが、これらを、検出された遺構面と現場で認識できた遺構の前後関係および遺構の覆土から出土した遺物の年代観を総合的に検討し、時期別に整理する方法を採用した。ただし、この方法にはいくつかの問題がある。遺構面の認識については、例えば、掘立柱建物跡S B 52・S B 53などのように、本来検出しなければならない面をよりも下位の面で検出された場合がある。遺構の前後関係についても、遺構検出が難しい状況であったため前後関係の全部を正しく認識できたという保証は無く、遺物の年代観からみる前後関係と逆転することも少なからず発生した。また、出土遺物に関しても、遺構検出や掘削が必ずしも精緻に行われなかったために、本来遺構が持つ時期より新しいものなどが混入したと考えられる事例があり、確実なものとは言えない。加えて、掘立柱建物跡など一部の遺構では遺物が全く出土しないあるいは非常に少ない場合も多く、時期の決定には多くの困難が伴っているといえよう。こうした諸条件を考慮すると、ここで提示した遺構変遷も確定的なものとはいえず、仮説に過ぎないことを認めざるを得ない。このことをあらかじめ断っておきたい。

(1) 古墳時代(第113図)

古墳時代の遺構としては、緩やかな落ち込みと土坑・溝および土手状遺構などがある。落ち込み

や土坑からは遺物が出土しており、これらは廻間Ⅰ・Ⅱ式期に遡るものがあるものの、主体は廻間Ⅲ式期から松河戸Ⅰ式期(3～4世紀)に属するものである。したがって、正しくは古墳時代の遺構変遷を検討しなければならないと思われるが、大きく西側に落ち込む緩やかな斜面に遺物を含む土坑や落ち込みがあるという遺構構成は変わらないと考えられ、ここで個別の遺構変遷を論ずる意義は薄いと思われる。これらの遺構がほぼ同時期に存在したと理解しておきたい。

(2) 古代(第114図)

古代の遺構としては、竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝・土坑などがある。これらは8段階に区分することができる。

古代1段階(東山44号窯式期頃:6世紀末～7世紀初頭頃)

この時期の遺構には竪穴建物跡S B 32・S B 34・S B 37・S B 50がある。この段階はA区からB区にかけての微高地上に竪穴建物跡が展開しているといえる。C区からA区に存在する南北方向の谷状の落ち込み部分に遺構は拡がっておらず、古墳時代前期の緩やかな落ち込みは埋没しながらもまだ引き続いており、遺構を展開させるには至っていなかったものと思われる。

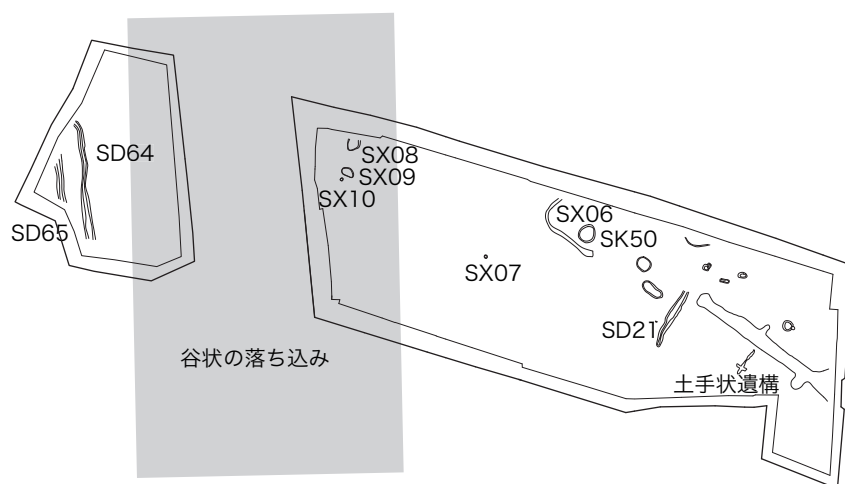
古代2段階(東山50号窯式期頃:7世紀前半頃)

古代2段階の遺構には竪穴建物跡S B 62・S B 51があるが、全体として遺構は希薄である。この段階はA区からC区にかけての谷状の落ち込みに相当する部分で竪穴建物跡が展開しており、

前代にあった微高地上には遺構が展開していないようである。古墳時代から続いていた落ち込み部が、竪穴建物が構築されるようになる程度にまで乾燥化してきたことを示しているかもしれない。

古代3段階(岩崎17号窯式期頃:7世紀後半頃)

この時期の遺構には



第113図 古墳時代の遺構配置図

竪穴建物跡 S B 22・S B 26・S B 36・S B 59 がある。この段階は B 区と C 区の東西両端部に竪穴建物跡が展開している。A 区で遺構が希薄になっていることからみて、詳細な時期を判別することが難しい掘立柱建物跡 S B 52・S B 53 などの遺構がこの段階に属している可能性は否定できない。古代 4 段階（高蔵寺 2 号窯式期頃：8 世紀初頭頃）

本遺跡で出土した須恵器は高蔵寺 2 号窯式と鳴海 32 号窯式に属する資料が多くなっている。このため、出土遺物によって遺構変遷をそのまま考察すると、この両窯式期の遺構が非常に多くなってしまい、そのまま時期別の遺構配置図を作成しても重複が激しくて適切な状態とはいえないものになる。そこでここでは、須恵器の窯式別出土量比と検出した時点での遺構の前後関係から、この間を古代 4 段階から古代 6 段階の 3 つに分けて整理することとした。古代 4 段階は、須恵器が高蔵寺 2 号窯式を主体としほとんど鳴海 32 号窯式を含まない時期を指している。この時期の遺構には、竪穴建物跡 S B 21・S B 23・S B 25・S B 29・S B 30・S B 33・S B 35・S B 48・S B 49・S B 58、S B 63・S B 64 や土坑 S K 66 などがある。この古代 4 段階とした中でもわずかに遺構が重複して検出されるものがあることから、建物の建替えは頻繁に行われ本来はさらに時期を細分すべきであろう。古代 4 段階は全ての調査区で竪穴建物跡が展開している段階といえる。

古代 5 段階（高蔵寺 2 号窯式期～鳴海 32 号窯式期頃：8 世紀前葉頃）

古代 5 段階には、須恵器が高蔵寺 2 号窯式と鳴海 32 号窯式の両者を含む時期を指している。この時期の遺構は、竪穴建物跡 S B 19・S B 20・S B 24・S B 27・S B 28・S B 46・S B 56、S B 60、S B 65、掘立柱建物跡 S B 53・S B 66、溝 S D 43・S D 46 などがある。竪穴建物跡が B 区と C 区に分かれ分布し、掘立柱建物跡が中央の A 区に展開するという遺構構成となっている。掘立柱建物跡が出現する点に大きな画期を見いだすことが可能であるが、古代 4 段階以前にたまたま調査範囲内で掘立柱建物跡が検出されなかったに過ぎない可能性も考えられる。

古代 6 段階（鳴海 32 号窯式期頃：8 世紀中葉頃）

古代 6 段階は、須恵器が鳴海 32 号窯式を主体

としほとんど高蔵寺 2 号窯式を含まない時期を指している。この時期の遺構には、竪穴建物跡 S B 04・S B 05・S B 07・S B 11・S B 12・S B 14・S B 61、掘立柱建物跡 S B 52、溝 S D 43、柵列 S A 01・S A 02、土坑 S K 67 などがある。竪穴建物跡が B 区と C 区に分かれ分布し、掘立柱建物跡が中央の A 区に展開するという遺構構成は、古代 5 段階と同様であると思われる。古代 5 段階に比べると遺構の数が減少しているようにみられる。古代 7 段階（折戸 10 号窯式期頃：8 世紀後葉～9 世紀初頭頃）

この時期の遺構には、竪穴建物跡 S B 03・S B 06・S B 10・S B 13・S B 17・S B 40・S B 41・S B 42・S B 47・S B 57 などがある。C 区では竪穴建物跡が 1 棟しか確認されておらず、全体として遺構は減少傾向にあると思われる。加えて掘立柱建物跡は調査区内ではみられなくなり、どこか別の場所に移動したものと想定される。古代 8 段階（黒笹 14 号窯式期以降：9 世紀前葉頃以降）

黒笹 14 号窯式期以降の遺構には、竪穴建物跡 S B 31 と掘立柱建物跡 S B 02 などがある。遺構の数は激減し、遺構の詳細な時期も特定しにくい状況となっている。この段階で、長らく続いて来た竪穴建物跡を中心とした遺構のあり方は終焉を迎えると思われる。

（3）中世（第 115 図）

古代から中世への過渡期の状況は、灰釉陶器や土師器清郷型鍋などの良好な資料が見られないことから、問題は多いもののこの段階の遺構はあまり存在しなかったと評価される。次に遺物が一定量認められるのは山茶碗第 4 型式の段階であり、以降遺物出土量の増減は存在するものの古瀬戸末期まで遺構・遺物は継続するようである。この中世の遺構としては、掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑などがある。一部の竪穴建物跡が中世の遺構である可能性は否定できないが、総体として建物遺構は竪穴建物から掘立柱建物に切り替わり、溝で土地が区画される段階と評価できよう。これらの遺構は 5 段階に区分して整理することができた。

中世 1 段階（山茶碗第 4・5 型式期頃：12 世紀後半頃）

この時期の遺構には、溝 S D 12・S D 14・S



第114図 古代の遺構変遷図

D 17・S D 18・S D 19・S D 56・S D 57・S D 59、火葬施設 S X 05 などがある。確実にこの段階に位置づけられる掘立柱建物跡を確認することができなかったが、本来は存在していた可能性が考えられる。また、竪穴建物跡 S B 15・S B 16・S B 44・S B 45 がこの段階の遺構に属すると考えることはできるが、ここでは確実なものではないと判断し除外した。

さて、中世 1 段階の遺構は A 区から B 区にかけて展開しており、C 区には拡がっていない。遺構の中で特筆すべきものは S D 14・S D 17・S D 19 で構成される方形の区画 01 であろう。内部施設を確認することができないために屋敷跡と特定することはできないが、区画の東西幅が約 12m であるので屋敷としてみた場合それほど大規模とはいえないものである。また、区画 01 の西には S D 12 が存在し、さらにその西側には区画 03 が展開する。区画 03 には火葬施設 S X 05 が点在する他は明瞭な遺構は存在せず、居住域であった可能性は低いものと想定される。

中世 2 段階（山茶碗第 5・6 型式期頃：13 世紀前半頃）

中世 2 段階の遺構には、溝 S D 11・S D 31・S D 33・S D 35・S D 38・S D 62、井戸 S K 14 などがある。建物跡は明瞭には確認できなかったが、S K 14 の西側に存在する柱穴群が掘立柱建物跡 S B 67 を構成していた可能性が指摘されよう。また、S D 11 の状況からみて、S D 08 南北溝の部分にもこの段階の溝が存在したことが予測される。

これらの想定が正しいとすれば、中世 2 段階では、S D 33 と S D 62 の北側の区画（区画 04）、S D 33 と S D 62 と S D 31 で囲まれた区画（区画 05）、S D 33 と S D 11 と S D 31 と S D 08 で囲まれた区画（区画 06）、S D 08 の東側の区画（区画 07）の 4 つの区画を設定することができる。区画 04 は規模を特定することはできないが、S D 33 の北側で柱穴群が存在することから、内部に掘立柱建物跡が存在したと思われる。区画 06 は南北約 22m、東西約 25m の規模を持つ方形区画であるが、内部施設は明らかではない。区画 07 には井戸 S K 14 があり、その西側で掘立柱建物跡 S B 67 の存在が想定される。こうした遺構配

置からみて、区画 07 は屋敷であったと評価できる。中世 3 段階（古瀬戸後 I・II 期頃：14 世紀後半～15 世紀前葉頃）

この時期の遺構には、溝 S D 13・S D 15・S D 16・S D 24・S D 32・S D 37・S D 39・S D 52・S D 63 などがある。建物跡は明瞭には確認できなかったが、S D 39 の北側で柱穴群が拡がり掘立柱建物跡 S B 68・S B 69 が建っていた可能性がある。また、S D 08 南北溝の部分にもこの段階の溝が存在したことが予測される。

上記の遺構の組み合わせを検討すると、中世 3 段階では平行する溝 5 条とこれに直交する溝群で細長い長方形区画が形成されていたと考えられる。具体的には、S D 63 以西の区画（区画 08）、S D 63 と S D 52 と S D 32 で囲まれた区画（区画 09）、S D 63 と S D 52 と S D 37 で囲まれた区画（区画 10）、S D 32 と S D 39 で囲まれた区画（区画 11）、S D 37 と S D 39 と S D 24 で囲まれた区画（区画 12）、S D 24 と S D 20 と S D 08 で囲まれた北側の区画（区画 13）、S D 08 と S D 16 と S D 13 で囲まれた北側の区画（区画 14）、同じく南側の区画（区画 15）、S D 13 よりも東側の区画（区画 16）の 9 つの区画を設定することができる。区画 08 と区画 16 は調査区両端部に所在しており、それぞれ外側に対応する溝が検出されていないため、細長い長方形区画ではないと思われる。この他の長方形区画については、その幅は区画 09 が約 26m、区画 12 が約 12m、区画 14 が約 12m、区画 15 が約 12m を測る。区画 09 は未調査部分に溝が存在した可能性が考えられ、S D 63 と S D 32 の中央に溝があったと仮定すると幅が 12～13m の規模を持つ長方形区画が並ぶ形が想定される。これらの長方形区画のうち区画 09 と区画 11 にはそれぞれ掘立柱建物跡 S B 68 および S B 69 の存在が推測でき、この時期の区画のいくつかは屋敷であったことが窺い知れる。中世 4 段階（古瀬戸後 III・IV 期古段階頃：15 世紀中葉頃）

中世 4 段階の遺構には、溝 S D 04・S D 05・S D 08・S D 30、掘立柱建物跡 S B 39、柵列などがある。C 区では遺構が明瞭には確認されていない。溝の組み合わせからみて、この時期では 5 つの区画を設定することができる。

具体的には、S D 30 以西の区画（区画 17）、S D 08 以北の区画（区画 18）、S D 08 以南の区画（区画 19）、S D 08 と S D 04 で挟まれた区画（区画 20）、S D 04 以東の区画（区画 21）の 5 つの区画である。このうち区画 20 は幅が狭く内部に柵列と S D 05 などが存在することから居住域とは考えにくい。区画 19 ではこの段階に属すると思われる掘立柱建物跡 S B 39 があり、屋敷であったと考えられる。区画 19 の東西幅は溝端間の距離で約 21m を測る。その他の区画では、その性格を推定し得る遺構を発見することができないが、区画 18 は区画 19 と同様の遺構配置を呈している可能性がある。

中世 5 段階（古瀬戸後Ⅳ期新段階頃：15 世紀後葉頃）

この段階の遺構には、溝 S D 07・S D 23、掘立柱建物跡 S B 01・S B 38 などがある。中世 1 段階から中世 4 段階までの溝は方位がほぼ正方位を示しているのに対し、中世 5 段階の溝は正方位を示していないという特徴がある。このことから掘立柱建物跡の中で正方位を示さないもの（S B 01・S B 38）がこの段階に属する遺構と推測され、S D 07 の南に分布する柱穴群が掘立柱建物跡 S B 70 および S B 71 を構成する可能性も考えられる。

中世 5 段階では、S D 23 以西の区画（区画 22）、S D 07 以北の区画（区画 24）、S D 07 以南の区画（区画 23）の 3 つの区画を設定することが可能である。このうち区画 22 には掘立柱建物跡 S B 38、区画 23 には掘立柱建物跡 S B 01・S B 70・S B 71 が存在し、それぞれ屋敷であったことが推測されよう。

（4）近世（第 115 図）

今回の調査で検出された遺構群の中で、中世後期から近世前半に属するものはほとんど確認することができなかった。つまり、瀬戸美濃窯産陶器では大窯期全体および連房式登窯の第 1 小期から第 5 小期までの遺物は全く存在しないに等しい状況であり、土師器についても内耳鍋・羽付鍋・釜がセットになって出土する段階の遺物は皆無である。近世の遺構として認められるようになるのは連房式登窯の第 8 小期以降のことである。

近世後半に認められる遺構としては、溝・井戸・土坑などがある。建物跡は発掘調査の際に遺構面を掘り下げてしまったこともあり、具体的な遺構を確認することができなかったが、掘立柱建物か

礎石建物が展開したものと想像される。この段階の遺構は 2 段階に区分することができ、特に近世 2 段階はその後の近代へ引き続いていくものと考えられよう。なお、この時期では名古屋から岐阜を結ぶ「岐阜街道」が A 区と C 区の間を通っており、今回の調査区はその岐阜街道に面した一角に相当している。

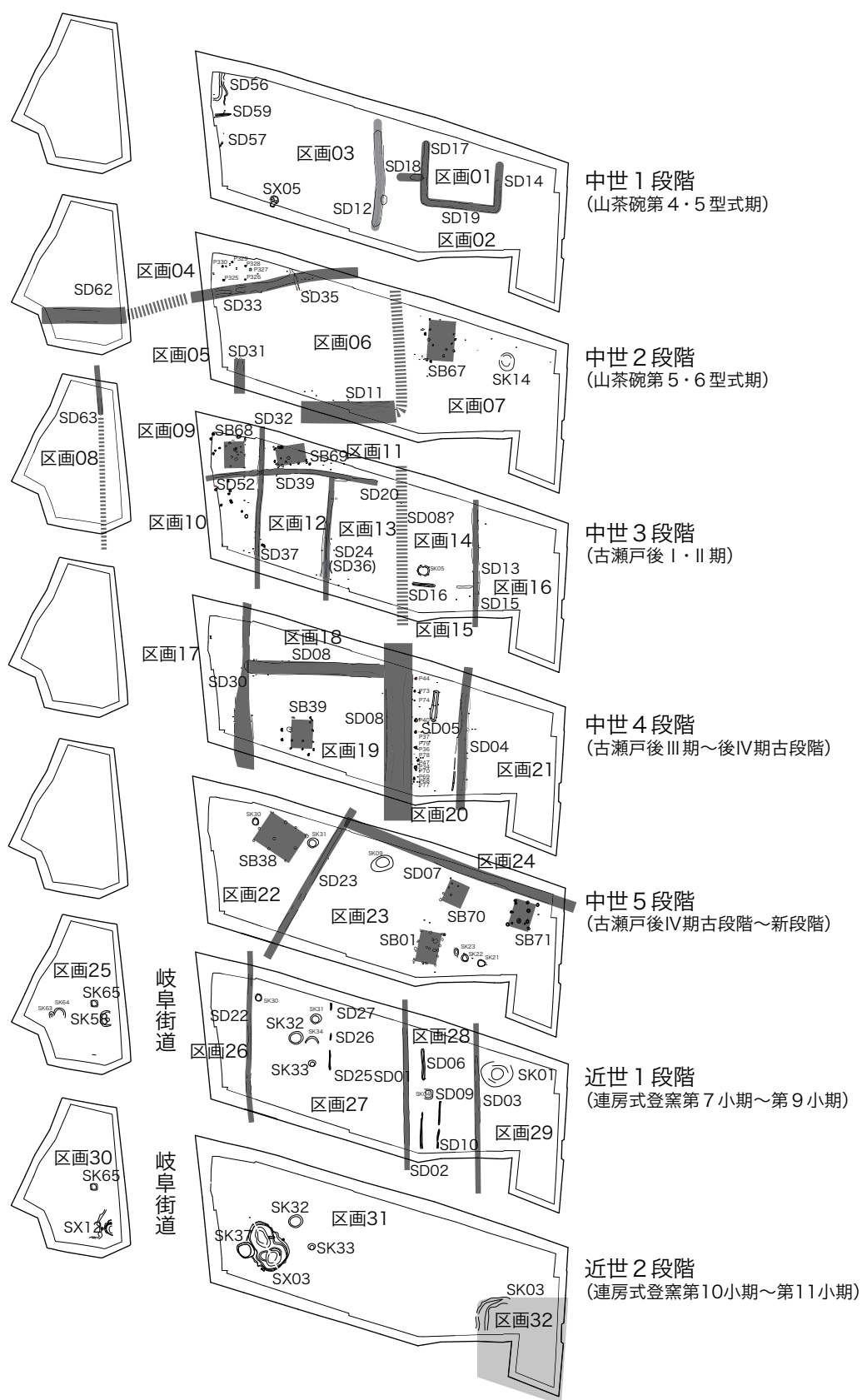
近世 1 段階（連房式登窯第 8・9 小期頃：18 世紀後葉頃）

この時期の遺構には、溝 S D 01・S D 02・S D 03・S D 06・S D 09・S D 10・S D 22・S D 25～S D 27、井戸 S K 32・S K 33・S K 58 などがある。溝は規模からみて 2 種に区分でき、S D 02 などの小規模なものは耕作痕の可能性が、S D 01 と S D 03 と S D 22 は区画施設になる可能性が考えられる。そして、この溝や街道によって画された区画として、岐阜街道以西の区画（区画 25）、岐阜街道と S D 22 の間の区画（区画 26）、S D 22 と S D 01 の間の区画（区画 27）、S D 01 と S D 03 の間の区画（区画 28）、S D 03 以東の区画（区画 29）の 5 つの区画が設定される。

区画 25 は井戸 S K 58 が存在し街道に面した位置にあることから屋敷である可能性が高い。区画 26 は性格不明であるが、その位置と遺構が存在しないことから現在の道路になる以前の岐阜街道であった可能性も考えられる。この場合、S D 22 は岐阜街道の東側溝に位置づけられる。区画 27 は井戸 S K 32・S K 33 が存在し街道に面していることから、区画 25 と同様に屋敷である可能性が高い。区画 28 と区画 29 は小規模な溝以外の遺構はあまり存在しないことから、畑などの耕作地であったと思われる。なお、調査区の東側には、現在水田が広がっており、おそらくこの段階にまでは遡るものと推測される。

近世 2 段階（連房式登窯第 10・11 小期頃：19 世紀前半頃）

この時期の遺構には、井戸 S K 37、だるま状遺構 S X 03、不明遺構 S X 12 などがある。溝などの区画施設は確認されなくなり、屋敷割りなどの具体像は明らかにできない。水回りに関連する遺構と考えられる S X 03 と S X 12 が現岐阜街道を挟んで対となって存在していることから、現岐阜街道に面した形で屋敷が展開した可能性を指摘できる。



第 115 図 中世～近世の遺構変遷図

第3節 下津新町遺跡における古代土師器甕について

(1) はじめに

下津新町遺跡では古墳時代後期から平安時代までに属する竪穴建物跡が約50棟検出された。各竪穴建物跡からは、出土点数はそれほど多くはないものの、遺物（特に土師器甕）は全くないわけではなく少なからず認められる。ここでは、下津新町遺跡における竪穴建物跡から出土した土師器甕について、その動態を検討してみたい。

さて、尾張の古代土師器甕について、最初に注目したのは城ヶ谷和広であった（城ヶ谷1990）。城ヶ谷は古代（6世紀後半～11世紀中葉）の土師器をⅣ期9小期に区分し、Ⅰ期（6世紀後半～7世紀末）は伊勢型甕が広がる時期、Ⅱ期（7世紀末～9世紀）は尾張で尾張型長胴甕が認められる時期、Ⅲ期（9世紀～11世紀中頃）は尾張型長胴甕が発展する時期、Ⅳ期（11世紀）中葉以降は尾張型長胴甕が終焉を迎え清郷型甕が広がる時期と整理した。その後、尾張型と称していたものは資料の増加に伴い濃尾型と称されるようになり、永井宏幸らの考察（永井1996）などが提示されて編年研究は精緻になったが、おおよその土師器甕の変遷の骨格は変わっていないといえるだろう。このような状況の中、下津新町遺跡の竪穴建物跡は上記の区分では概ねⅠ期からⅡ期に属していることから、ここでは伊勢型甕が濃尾型甕に切り替わっていく様相を明らかにすることを主眼に置き、検討を進めたい。

(2) 竪穴建物跡から出土した土師器甕

下津新町遺跡から出土した古代の土師器甕は、概ね口縁端部をつまみあげる伊勢型甕と、口縁部が肥厚し頸部内面に荒いハケ調整が残る濃尾型に分けることができる。この2分法に基づき各段階別に整理してみたい。

古代1段階（東山44号窯式期頃）

この時期の竪穴建物跡にはS B 32・S B 34・S B 37・S B 50がある。このうちS B 32・S B 34・S B 50では土師器甕は伊勢型甕のみが確認

された。S B 37では土師器甕の口縁部が出土していないが、体部破片からみると伊勢型甕と思われる土師器片が存在する。したがって、この段階では伊勢型甕のみが分布する時期と評価できる。

古代2段階（東山50号窯式期頃）

古代2段階の竪穴建物跡S B 62・S B 51があるが、両者とも土師器甕は伊勢型甕のみが確認された。この段階も伊勢型甕のみが分布する時期といえる。

古代3段階（岩崎17号窯式期頃）

この段階ではS B 22・S B 26・S B 36・S B 59があり、S B 36・S B 59では土師器甕は伊勢型甕と濃尾型甕の両者が確認された。特にS B 59では古い形状の濃尾型甕が確認されており、この段階から濃尾型甕が出現していると考えることができよう。

古代4段階（高蔵寺2号窯式期頃）

この時期の竪穴建物跡にはS B 21・S B 23・S B 25・S B 29・S B 30・S B 33・S B 35・S B 48・S B 49・S B 58、S B 63・S B 64がある。このうち、S B 35とS B 48では伊勢型甕のみが、S B 21とS B 33とS B 63とS B 64および土坑S K 66では伊勢型甕と濃尾型甕の両者が、S B 30とS B 58では濃尾型甕のみがそれぞれ出土している。この段階では、土師器甕は伊勢型甕と濃尾型甕の両者が拮抗した分布状態で確認されており、両者が共存する時期といえる。

古代5段階（高蔵寺2号窯式期～鳴海32号窯式期頃）

古代5段階の竪穴建物跡にはS B 19・S B 20・S B 24・S B 27・S B 28・S B 46・S B 56・S B 60・S B 65がある。このうち、S B 19とS B 60とS B 65および溝S D 43では伊勢型甕のみが、S B 24とS B 56では伊勢型甕と濃尾型甕の両者が、S B 27では濃尾型甕のみがそれぞれ出土している。この段階は、数量的にはやや伊勢型甕の方が多いものの、伊勢型甕と濃尾型甕

の両者が共存している時期と評価できそうである。

古代6段階（鳴海 32 号窯式期頃）

この時期の竪穴建物跡には、S B 04・S B 05・S B 07・S B 11・S B 12・S B 14・S B 61 がある。このうち、S B 04 と土坑 S K 67 では伊勢型甕と濃尾型甕の両者が、S B 11 と S B 12 と S B 14 では濃尾型甕のみが出土している。伊勢型甕のみが確認された竪穴建物跡はなくなり、古代5段階に比べると伊勢型甕の割合が減じているように考えられるが、依然として伊勢型甕と濃尾型甕の両者が共存している時期と評価しておきたい。

古代7段階（折戸 10 号窯式期頃）

竪穴建物跡には S B 03・S B 06・S B 10・S B 13・S B 17・S B 40・S B 41・S B 42・S B 47・S B 57 などがあるが、S B 10 で伊勢型甕らしき遺物が確認されたものの、S B 06 と S B 17 と S B 57 では濃尾型甕のみが確認されている。したがってこの段階で伊勢型甕は概ね消滅し、濃尾型甕のみが展開したといえる。

古代8段階（黒笹 14 号窯式期以降）

この時期の竪穴建物跡には S B 08・S B 09・S B 31 があるが、土師器甕が出土したものは S B 09 のみで、濃尾型甕であった。古代7段階と同様、濃尾型甕のみが展開したといえる。

（3）下津新町遺跡の土師器甕の動向

上記の検討の結果、下津新町遺跡から出土した古代の土師器甕の出土状況は大きく3期に整理することができる。

1期：伊勢型甕のみが分布する時期である。古代1段階から古代2段階まで（東山 44 号窯式期頃～東山 50 号窯式期頃）が該当する。

2期：伊勢型甕と濃尾型甕の両者が共存している時期である。古代3段階から古代6段階まで（岩崎 17 号窯式期頃～鳴海 32 号窯式期頃）が該当する。古代3段階では濃尾型甕がわずかに認められ、古代6段階では伊勢型甕がわずかに残存している状況が確認された。2期は、伊勢型甕が濃尾型甕に切り替わっていく段階であるが、その変化は漸移的なものであったと理解されよう。

3期：濃尾型甕のみが展開した時期である。古代7段階から古代8段階まで（折戸 10 号窯式期頃以降）が該当する。

このようにみると、城ヶ谷が指摘した尾張での土師器甕の動態は、下津新町遺跡でも概ね当てはまることが確認されよう。土師器甕が伊勢型甕から濃尾型甕に切り替わっていく過程は1世紀以上の時間をかけて変化する緩やかなものであったことが追認されたといえる。

第4節 総 括

(1) 下津新町遺跡における歴史の素描

今回の下津新町遺跡の発掘調査で明らかになったことを箇条書きに整理しておきたい。

1) 標高 3.5m から 4.5m に約 2000 年から約 3000 年前に堆積した黒褐色粘土層が存在していたが、この層位には遺構や遺物は確認されなかった。この時期には、後背湿地状の地形で人々が活動できるような状況ではなく、遺跡は展開していないと評価できる。この層位よりも上位にシルトの堆積が認められ、付近に河川が流れるなどの堆積環境が大きく変化したものと考えられる。

2) 古墳時代前期（3 世紀～4 世紀）には、現岐阜街道の部分で南北方向に伸びる谷状地形が展開しており、その斜面に土器が廃棄された土坑や落ち込みが確認された。また、明確な形で遺構を検出することはできなかったが、水田など耕作に関連する遺構とも推測できる土手状遺構も発見されている。これらの状況から、本遺跡の周辺に古墳時代前期を中心とする集落遺跡があったと予測され、今回の調査地点はその周縁部に該当するのではないかとと思われる。

3) 古墳時代中期から後期（5 世紀～6 世紀後葉）にかけては、全く遺物が出土しておらず、人々の営みを確認することができなかった。

4) 今回の調査地点で初めて人々の居住が認められるのは、古墳時代後期の 6 世紀末以降である。この段階は、調査区の中で最も標高が高い部分に竪穴建物跡が展開し居住域となっていたことが判明した。この居住域の西側と東側では地形が緩やかに傾斜して下がっているが、現況地形や地籍図などから解析して復元された古流路を検討した結果、居住域の西側と北側で旧河川が、居住域の東側と南側で後背湿地が広がっていたのではないかと想定したい。この今回の調査区の北西に流れていた旧河川は、本章第 1 節で検討したとおり、現青木川が下津蛇池付近で西向きから南向きに蛇行し、さらに今回の調査区の北西で西に蛇行し、最

終的に下津北山遺跡北端部に向かう形で流路が復元される。この河川は下津北山遺跡の調査成果から 15 世紀には埋没していくことが明らかになっている（早野 2000）が、河川の起源がどこまで遡ることができるかはこれまでのところ不明のままであった。しかし、後述するように 6 世紀末以降 15 世紀末まで多少の断絶は存在するものの集落はほぼ同じような形で継続していることからみて、今回確認された集落跡はこの旧河川の左岸に形成された自然堤防上に立地していると考えることが妥当であろう（第 116 図）。よって、この旧河川は 6 世紀末頃まで遡るものではないかと推測しておきたい。さて、このように推測を重ねると、この段階の居住域の範囲は旧河川によって左岸に形成された自然堤防上の範囲に広がっていることが予測される。したがって、居住域は今回の調査区の北東側と西南西側に拡大していた可能性が高いと考えておきたい。

5) 7 世紀では、竪穴建物による集落が引き続き営まれていたが、遺構は散漫・散発的である。調査区であった場所は集落の周縁部に相当するの、あるいは規模の小さな集落が存在していたものと思われる。

6) 8 世紀前半～中葉までについては、竪穴建物跡が多数重複しながら存在しており、遺物量と遺構量の面で最盛期を迎えていると評価できる。竪穴建物を主体とし、やや地形が低い部分に溝を伴って総柱掘立柱建物が存在する形で展開した集落であると復元される。竪穴建物を居住施設、総柱掘立柱建物を倉庫と推定すると、倉庫の周辺に居住域が分布するという集落の姿が見えてくるだろう。

7) 8 世紀後葉～9 世紀前半では、調査区内では集落の規模がやや小さくなり、遺構や遺物の量が共に減少する。総柱ではないものの掘立柱建物もわずかに認められたが、基本は竪穴建物による集落が継続していたといえる。



第 116 図 下津新町遺跡周辺の旧河川と自然堤防の想定 (明治 17 年作成地籍図を下図とした)

8) 9世紀後半～12世紀前半には、人々の営みの痕跡は急激にみられなくなる。わずかに遺物が認められるものの、明確に遺構に伴うものはなく、遺跡の構造を知りうる情報を見いだすことは難しい。中世の遺物が混入しており相対的に新しいと評価される竪穴建物跡S B 15・S B 16・S B 44・S B 45がこの頃の遺構の可能性も考えられるが、論拠は乏し過ぎる。

9) 12世紀後半になると、ほぼ正方位の溝で区画された空間が展開するようになる。東西幅が約12mの区画01とその西側を画する溝S D 12があり、溝S D 12の西側(区画03)には火葬施設が存在する。区画01は、それを画する溝の規模が大きい割に区画の規模が小さいという特徴があり、一般的な屋敷としてみた場合やや特殊な形状に思われる。火葬施設の存在と合わせて考慮すると、宗教的な施設の一端を検出した可能性が考えられよう。

10) 13世紀前半では、区画01が埋没して新たな形で区画溝が展開している。溝の方位は前代と同様にほぼ正方位であるが、おおよそ方形の区画が展開したと推測され、区画06の規模は約22m×約25mであった。ただし、区画溝は正しく格子状に方格地割を形成しておらず、溝もやや蛇行する傾向がある。区画内には掘立柱建物が展開するものもあることから、この段階は屋敷が広がっていたのではないかと想定されよう。

11) 13世紀後半～14世紀前半では、遺物の出土量が少なく、明確に遺構に伴うものが見いだされなかったため、遺構の展開状況を復元することができなかった。おそらく13世紀前半とあまり変わらない区画割りを呈していたのではないかと想像できる。

12) 14世紀後半～15世紀前葉には、やや規模の小さな溝で囲まれた長方形区画が並ぶ形が出現している。区画幅は12～13mの規模であり、内部には掘立柱建物を想定できる状況であることから、小規模な屋敷であった可能性が考えられる。道路遺構などの施設が発見されていないことから

即断はできないが、町屋的な遺構配置を読み取ることもできるものである。この時期で注目されるのは、守護所下津と下津五日市場の存在であろう。下津にあったといわれる守護所は現在の下津城跡を当てる考えが主流で、それとは別に青木川と五条川の合流する部分の左岸自然堤防上に想定する案も浮上している(鈴木2007)。また、下津五日市場は現地名と名刹正眼寺の推定位置から現在の五日市場に比定するのが有力である。これらの比定は青木川とその左岸に想定されている推定鎌倉街道を強く意識して考察されたものであり、筆者もこの案を否定することはできない。しかし、これとは別に旧河川の左岸自然堤防上に町場を想定し得る小規模な屋敷が並ぶ状況は無視できない問題であり、その意義付けは今後の大きな課題となるに相違ないだろう。

13) 15世紀中葉になると、やや大型の区画溝S D 08が出現して区画19などが形成される。区画19の東西幅は溝端間の距離で約21mを測り、溝の規模の割には区画の規模は大きくない。建物跡は不明であるが、おそらくは屋敷であっただろう。溝の方位は前代とほぼ同じといえるが、位置は微妙にずれて存在している。

14) 15世紀後葉では、区画溝の方位がほぼ正方位ではなくなり、全く異なる方位が現出する。この溝によって3区画が画されるが、これまでの区画割に比べると区画の規模が大きくなっているという特徴も認められる。区画内には掘立柱建物も想定され、屋敷跡と評価されよう。この段階で区画の方位が大きく変更されることは注目に値する。当初の発掘調査時点ではこの方位の変更の画期が15世紀初頭にあったと考察していたが、遺構の切り合い関係と遺物の詳細な検討の結果、15世紀後葉であることが判明したのである。これはちょうど守護所下津が焼亡した時期にあたり、その事件の前後(のいずれか)に一時的に区画の方位が変更になったものと考えられよう。この方位変更の意義付けも今後の大きな課題である。

15) 15世紀末～18世紀中頃までは、再び遺物の出土がなくなり、これに伴う遺構が構築されなくなったものと考えられる。これは6世紀末以降長く遺跡の立地の基盤となった旧河川が埋没していったことが大きく影響しているものと考えられる。これに加えて、先に指摘した守護所下津の焼亡と守護所が清須に移転したことも無関係ではないと思われる。埋没後の旧河川は、16世紀後半頃に実施されたと想定される一連の築堤工事により乾燥化が進み、江戸時代に入ると新田開発が進められたと考察される。一方、17世紀前半になると、稲沢市井之口を起点として下津・赤池・妙興寺・一宮・黒田・笠松を経由して加納で中山道に至る岐阜街道（御鯨街道）が整備される。今回の調査区においては、A区とC区間の現道がほぼ岐阜街道に相当すると思われるが、詳細にみるとSD22が岐阜街道の東側溝である可能性が指摘される。ただし、調査区内においては17世紀前半に街道が敷設された画期に伴う遺構の変遷を確認することができていない。

16) 18世紀中頃になると、街道に面した屋敷が成立するようになる。街道に面した区画では井戸などを伴う建物群が想定され、その奥の区画で畑、さらに奥の区画で水田が営まれていた様子が復元できよう。この結果、当地でのこのような街道に面した町屋の形状を持つ屋敷の成立が、近接する下津下町や下津片町に比べてやや遅れ18世紀中頃であることが確認できたといえる。18世紀中頃になってようやく「下津新町」ができたと評価できるだろう。

17) 19世紀前半では、岐阜街道はやや西側に移動し現在の道路部分に存在したと思われる、その街道に近い部分で水回り？に関連する遺構が展開するようになる。建物跡を確認することができなかったが、おそらく街道に面して礎石建物などが存在したと思われる。このような遺構配置がそのまま引き継がれて、現在の下津新町の集落が展開したものといえよう。

（2）下津新町遺跡について

今回の発掘調査は、当初「鎌倉街道周辺遺跡」として実施されたものである。調査の結果、本調査区が「下津新町遺跡」として「鎌倉街道周辺遺跡」から分離して称することになったのであるが、ここでその経緯を概説しておきたい。

今回の発掘調査では古墳時代から江戸時代までの遺構と遺物が確認され、多くの成果が得られている。古代と中世（6世紀末から15世紀まで）においては連綿と集落が営まれ続いており、特に古代の遺構は濃密に展開していることが明らかとなった。前項（4）で検討したように、この古代と中世の遺構群は、調査区北西を流れていたと推測される旧河川によって左岸に形成された自然堤防上に展開しており、その遺跡（居住域）の範囲は自然堤防上の範囲に拡がっていることが予測される。

一方、もともとの「鎌倉街道周辺遺跡」は現青木川の右岸に形成された自然堤防上に立地する遺跡である。分布調査や部分的な発掘調査の結果、古代から近世までの遺構や遺物が確認されているが、中心となる遺構・遺物は尾張守護所が存在したといわれる下津城跡と遺跡名にもある幹線道路となる鎌倉街道に伴う集落跡であろう。

したがって、本来の「鎌倉街道周辺遺跡」と今回の調査区は、確認された遺構や遺物の時期はほぼ共通しているものの、（1）遺跡が立地する自然堤防とその由来する河川が異なること、（2）主体となる遺構群の評価が前者は下津城跡と鎌倉街道であるのに対して後者は古代集落が主体であることなど、遺跡の根幹に関わる部分で異なっていることが判明した。この状況を受け、今回の調査区が「鎌倉街道周辺遺跡」の一部と理解する妥当性に問題が生じたため、新たに「下津新町遺跡」を設定することとなったのである。

「下津新町遺跡」の範囲は、上記の見解を受け、旧河川の左岸自然堤防に展開すると推定されるので、第117図のように範囲を設定した。これに伴い、「下津新町遺跡」の範囲にかかる既存の「鎌



第117図 下津新町遺跡の範囲図
(国土地理院発行 1:25000「名古屋北部」「一宮」を一部改変した)

倉街道周辺遺跡」と「下津北山遺跡」の範囲も変更することとなった。

1 下津新町遺跡（新規）：古墳時代～近世：稲沢市下津新町143番地ほか

2 下津北山遺跡（範囲変更）：古墳時代～近世：稲沢市下津北山町

3 鎌倉街道周辺遺跡（範囲変更）：古墳時代～中世：下津住吉町ほか

（3）さいごに

発掘調査は、地質学的なものであれ考古学的なものであれ、その土地の履歴を明らかにする作業といえる。今回の下津新町遺跡の発掘調査では、最終的に4期16段階の遺構変遷を整理することができ、約2000年間にわたる土地利用のあり方や人々の営みの変遷を少なからず明らかにすることができたといえる。ただし、16段階に分けられる遺構変遷を持つ遺跡をわずかに4つの遺構面のみで把握したことによく示されるように、その調査精度は十分であったとはいえないものであった。各段階の様相を逐一現地で明らかにしていく作業は、現実的にはその実現が難しいが、ここで明らかになった成果を踏まえ今後の調査精度の向上を目指して努力していかなければならないと感じている。

（鈴木正貴）

主要参考・引用文献

- 井口喜晴 1984『新修稲沢市史資料編6 考古』稲沢市
北村和宏 1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報平成7年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1986「中世土師器研究ノート（1）」『年報昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
城ヶ谷和広 1990「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報平成2年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
城ヶ谷和広 2008「猿投窯・尾北窯における窯業生産体制」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会
鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集
鈴木正貴 2006「織田信長の都市づくりの源流—尾張守護所の景観復元研究から考える—」『守護所と戦国城下町』高志書院
永井宏幸 1995「奈良・平安時代の土師器甕について」『年報平成6年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸 1996「尾張平野を中心とした古代煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
中野晴久 1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
植崎彰一・斉藤孝正 1983『愛知県古窯跡分布調査報告書（Ⅲ）』愛知県教育委員会
早野浩二編 2000『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集
日野幸治他編 1985～1988『下津城跡発掘調査報告書（Ⅰ）～（Ⅳ）』稲沢市教育委員会
北條献示編 2003『下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市教育委員会
藤澤良祐 2007「総論」『愛知県史 別編窯業2 中世・近世瀬戸系』愛知県

報告書抄録

ふりがな		おりづしんまちいせき						
書 名		下津新町遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第159集						
編著者名		鈴木正貴、加藤博紀、鬼頭剛、藤根久、中村賢太郎						
編集機関		財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24						
発行年月日		西暦 2009年 3月 31日					TEL0567(67)4161	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
おりづしんまちいせき 下津新町遺跡	いなざわし おりづしんまち 稲沢市下津新町	23220	090270	35度 15分 27秒	136度 49分 34秒	20050418～ 20050916、 20051006～ 20051111	2278㎡	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下津新町遺跡	集落	古墳時代 前期	落ち込み、土坑 など	土師器		古墳時代後期から 古代の集落		
	城郭	古墳時代 後期～ 平安時代	竪穴建物跡、 掘立柱建物跡、 溝、土坑など	須恵器、土師器 灰釉陶器など				
		鎌倉時代 ～ 室町時代	掘立柱建物跡、 柵列、溝、井戸、 火葬施設、土坑 など	山茶碗類、 瀬戸美濃窯産陶器、 石器・石製品、 木製品、木材、 金属製品および その関連遺物など		下津城周辺の遺 構群を検出		
		江戸時代	溝、井戸、土坑 など			岐阜街道沿いの 集落		
文書番号		発掘届出(16埋セ第115号・2005.3.8、17埋セ第48号・2005.9.1) 通知(16教生第2253号・2005.3.31、17教生第1239号・2005.9.29) 終了届・保管証・発見届(17埋セ第56号・2005.9.26、17埋セ第77号・2005.11.15)						
要約	今回の調査で確認された遺構や遺物は4期に大別される。古墳時代前期では谷に向かう斜面に遺構や遺物が検出された。古墳時代後期から平安時代では竪穴建物と掘立柱建物を中心とした一般的な集落が確認された。鎌倉時代から平安時代では5段階に遺構変遷が把握され、宗教施設・屋敷・町場的な小区画の屋敷などが展開したと想定された。これらの遺構群は守護所下津との関連が注目されよう。戦国時代から江戸時代前半までは集落は途絶えるが、江戸時代後期では岐阜街道に面した屋敷が確認され、これが現在の下津新町につながるものと推定された。調査は当初「鎌倉街道周辺遺跡」として開始されたが、今回の調査区は推定鎌倉街道が通る自然堤防とは異なる河川による自然堤防上に立地しており、遺跡の内容も考慮した結果、「下津新町遺跡」という別遺跡として評価すべきと判断された。							

付表の凡例

- ・ 付表として遺構一覧表と遺物一覧表を掲載したが、遺物一覧表のみを印刷し、遺構一覧表は CD にデータを収めている。
- ・ 遺構一覧表は、発掘調査の過程で検出されたものを全て掲載した。このため欠番になっているものも含まれている。「グリッド」では 5m グリッドの下 2 桁のみを表記した。「遺構面」は発掘調査で最初に検出された遺構面を表記したもので、遺構本来の遺構面を表現しているものではない。
- ・ 遺物一覧表は、本書に実測図を掲載したもののみ記述した。「口径」などの数値は cm 単位で表記し、残存値には「残」、推定値には「推」の文字を数値の前に記入した。「内面」と「外面」には観察される調整痕や使用痕を上位から順に記載した。

遺構図版の凡例

- ・ 発掘調査は第 1 面から第 4 面までの各遺構面に分けて実施されたが、ここに掲載する遺構図は発掘調査の際に作成した遺構図をそのまま使用している。したがって、各面における遺構の同時代性は保証されていない。なお、05 C 区のみは第 1 面から第 3 面までの遺構面しか存在しない。
- ・ 遺構図の縮尺は 200 分の 1 である。各遺構面とも 2 頁分の遺構図で全体が表現されている。
- ・ 遺構は原則として上場線（太線）と下場線（細線）で表現し、必要に応じ中場線を挿入した。等高線は 10cm 間隔で表現した。

遺物一覧表（1）

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
1	B	4A5b	SX09	遺物1群	推13.0	-	残7.7	4	土師器	布留蓋		横ナテ	横ナテ、ケズリ、ナテ、有機物付着	
2	Ab	4A5b	SX09	遺物1群	-	-		1	土師器	高坏		全体に横ナテ、ナテ	-	
3	Ab	4A5b	SX09	遺物1群	-	推10.2	残8.65	2	土師器	高坏		ナテ、横ナテ	絞リ	
4	Ab	4A5b	SX09	遺物1群	-	-		1	土師器	高坏		横ナテが調整不明	-	
5	Ab	4A5b	SX09	遺物1群	-	-	残7.9	1	土師器	高坏		横ナテ	粘土貼付け、ナテ、ケズリ	
6	Ab	4A5b	SX09	遺物1群	-	-		1	土師器	直口葺		横ナテ	横ナテ	
7	Ab	4A5b	SX09	遺物4	推7.4	-	残5.1	16	土師器	S字甕		横ナテ、有機物付着	横ナテ、指押庄	
8	Ab	4A5b	SX09	遺物4	推14.0	-	残9.1	15	土師器	S字甕		横ナテ	横ナテ、指押庄、板ナテ	
9	Ab	4A6b	SX09	遺物4	推14.0	-	残2.3	1	土師器	S字甕		横ナテ、ナテ	横ナテ	
10	Ab	4A6b	SX09	遺物3群	-	推8.0	残2.8	3	土師器	S字甕		-	指押庄、ナテ	
11	Ab	4A5b	SX09	遺物2	推7.2	推10.8	残14.0	23	土師器	高坏	週間Ⅱ式以前	横ナテ	横ナテ、ハケ、絞リ、ナテ、ハケ	
12	Ab	4A5c	SX08	遺物1	-	-		1	土師器	蓋		横ナテ	横ナテ、ハケ、ケズリ、ナテ	
13	Ab	4A6b	SX10	遺物1	推15.3	-	残4.9	6	土師器	高坏		横ナテ、指押庄、ナテ	横ナテ、指押庄、ナテ	
14	A	4A6g	SX06	遺物1	推15.8	-	残6.7	2	土師器	高坏		横ナテ	ナテ、ヘラナテ、絞リ	
15	A	4A6g	SX06	遺物1	推14.5	-	残4.5	6	土師器	S字甕		横ナテ	横ナテ、指オサエ	
16	B	4A	SX02	遺2～15	推12.3	推8.6	25.1	46	土師器	S字甕		横ナテ、指押庄	板ナテ、輪状に有機物付着、指押庄、ナテ	
17	A	4A8e	SX07		14.0	-	残19.5	1	土師器	S字甕		横ナテ	横ナテ、指押庄、板ナテ	
18	A	4A9e	SK33		推19.2	-	残5.7	5	土師器	太頭蓋		イタナテ、刺突、焼成前穿孔	横ナテ、ナテ	
19	A	4A7g	SK60		推18.6	-	残8.6	4	土師器	高坏		横ナテ	ミガキ	
20	A		SX11		推14.6	-	残1.4	1	土師器	高坏	週間Ⅱ式以前	横ナテ	横ナテ	
21	A		検出Ⅳ		推15.6	-	残4.0	1	土師器	高坏		横ナテ	横ナテ	
22	B	4A			-	-	残8.7	9	土師器	高坏		接合痕	ナテ	
23	B	4A		遺2、遺3	推16.0	-	残2.5	3	土師器	鉢		全体に横ナテor 回転ナテ	横ナテ	
24	B	4A8.9i	SB03		推14.2	-	残3.2	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ	
25	B	4A8.9i	SB03		-	推10.2	残2.4	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	回転ヘラケズリ、回転糸切痕	
26	B	4A8i	SB03	P1	-	-	残2.6	1	須恵器	平皿	7世紀後半～8世紀前	横ナテ	横ナテ	
27	B	4A9i	SB03		-	-	残1.4	1	須恵器	杯蓋	岩崎41号窯式期	横ナテ	横ナテ、自然釉	
28	B	4A9i	SB04		推14.6	-	残2.8	1	須恵器	杯身	8世紀代	横ナテ	横ナテ	
29	B	4A9i	SB04		-	推13.0	残1.6	1	須恵器	杯身	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
30	B	4A9i	SB04		推14.8	-	残1.7	1	須恵器	蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ	
31	B	4A9i	SB04		推13.8	-	残1.5	1	須恵器	蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ	
32	B	4A8i	SB04	P2	推15.8	-	残2.1	1	須恵器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	回転ヘラケズリ、横ナテ	
33	B	4A9i	SB04		-	-	残2.4	1	須恵器	杯身	不明	横ナテ	横ナテ	
34	B	4A9i	SB04		-	-	残2.4	1	土師器	甕	不明	横ナテ、横ハケ	横ナテ	
35	B	4A8i	SB03.04		推18.4	-	残4.1	1	土師器	甕	7世紀代	横ナテ	横ナテ	
36	B	4A8i.k	SB05		推15.3	-	残2.7	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期？	横ナテ	横ナテ	
37	B	4A7i	SB05		-	推11.2	残1.4	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
38	B	4A8i.k	SB05		-	推10.5	残1.6	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ、刻畫	
39	B	4A8i.k	SB05		推16.2	-	残1.6	1	須恵器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、自然釉	
40	B	4A8i.k	SB05		-	-	残0.9	1	須恵器	杯蓋	高蔵寺2～鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ	
41	B	4A8i.k	SB05		推10.1	推6.4	5.1	1	須恵器	台子	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、自然釉、回転ヘラケズリ、別焼片融着	
42	B	4A8i.k	SB05		-	-	残1.2	1	須恵器	甕	鳴海32号窯式期	横ナテ、自然釉	横ナテ	
43	B	4A8i.k	SB05		推18.8	-	残4.0	1	須恵器	胴鉢	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、自然釉	
44	B	4A7i	SB05		-	-	残2.0	1	須恵器	胴鉢	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、自然釉	
45	B	4A8i.k	SB05		-	-	残1.8	1	須恵器	高形視蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ、灰釉、刻紋	
46	B	4A8k	SB05	P2	-	-	残1.6	1	須恵器	蓋？	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ	
47	B	4A7i	SB06	遺物2	推17.0	推14.0	4.0	2	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ	
48	B	4A8j	SB06		推16.0	推13.8	2.6	2	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
49	B	4A8j	SB06		-	推11.6	残1.9	2	須恵器	杯身	岩崎17号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
50	B	4A8j	SB06		-	推8.0	残1.4	1	須恵器	杯身	鳴海32～折戸10号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
51	B	4A8j	SB06		9.0	推6.0	残1.9	2	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ	
52	B	4A8j	SB06		-	-	残1.4	1	須恵器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナテ	横ナテ、回転ヘラケズリ、刻畫「間」？	
53	B	4A8i	SB06		推12.6	-	残2.5	1	須恵器	杯身	8世紀	横ナテ	横ナテ	
54	B	4A8i	SB06		-	-	残3.4	1	須恵器	杯身	8世紀	横ナテ	横ナテ	
55	B	4A8i	SB06		-	-	残2.5	1	須恵器	杯身	8世紀	横ナテ	横ナテ	
56	B	4A8i	SB06		-	-	残2.3	1	須恵器	蓋	鳴海32号窯式期	横ナテ	横ナテ	

遺物一覧表（2）

番号	区	グリッド	遺構	取上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
57	B	4A8j	SB06	-	-	-	残2.3	1	須臾器	フラスコ形瓶	岩崎 41 ～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉、透かし	
58	B	4A8i	SB06	-	推 7.2	-	残1.9	1	須臾器	合子？	鳴海32号窯式期？	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻畫	
59	B	4A8i	SB06	-	推 7.6	-	残3.6	1	須臾器	有台碗	9世紀前半	横ナデ	横ナデ	
60	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
61	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.8	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期？	横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
62	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
63	B	4A8j	SB06	北壁溝	-	-	残2.0	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、回転糸切痕	
64	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
65	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ、透かし	横ナデ	
66	B	4A8i	SB06	-	-	-	残1.4	1	須臾器	高杯	東山50号窯式期	横ナデ、焼灰	横ナデ	
67	B	4A8i	SB06	-	-	-	残3.1	1	須臾器	蓋	7世紀？	横ナデ	横ナデ、ハケ？	
68	B	4A8i	SB06	-	推 21.8	-	残2.7	1	須臾器	蓋	6世紀？	横ナデ	横ナデ	
69	B	4A8i	SB06	-	推 26.0	-	残4.8	1	須臾器	覆か壺	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
70	B	4A8j	SB06	-	推 25.8	-	残3.0	1	土師器	甕	8世紀前半	横ハケ	横ナデ、線ハケ	
71	B	4A7i	SB07	-	推 18.0	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
72	B	4A7i	SB07	-	推 18.6	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
73	B	4A7i	SB07	-	-	-	残1.4	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
74	B	4A7i	SB07	-	-	-	残2.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
75	B	4A7i	SB07	-	推 10.6	-	残2.1	3	須臾器	杯身	横ナデ、焼成不良	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
76	B	4A7i	SB07	-	-	-	残1.7	1	須臾器	杯身	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
77	B	4A7i	SB07	-	-	-	残2.3	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
78	B	4A7i	SB07	-	-	-	残1.2	1	須臾器	杯身	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
79	B	4A7i	SB07	-	-	-	残1.5	1	須臾器	甕	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
80	B	4A7i	SB07	-	推 6.0	-	残3.7	1	須臾器	鉢	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、体部下端回転ヘラケズリ、 回転糸切痕	
81	B	4A7i	SB07	-	推 15.4	-	残4.3	1	須臾器	鉢	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
82	B	4A7h	SB08	-	-	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
83	B	4A7h	SB08	-	推 12.3	-	2.5	1	須臾器	杯身	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
84	B	4A7h	SB08	-	推 7.0	-	1.5	1	須臾器	碗A	鳴海32号窯式期以降	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
85	B	4A7h	SB08	遺物 1	-	5.8	残2.3	1	須臾器	碗	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、体部下半手持ちヘラケズリ、 底部回転糸切痕、刻畫「十」	
86	B	4A7h	SB09	-	-	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
87	B	4A7h	SB09	-	-	-	残2.2	2	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
88	B	4A7i	SB09	-	推 14.6	-	残2.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
89	B	4A8h	SB09	-	推 15.4	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
90	B	4A7i	SB09	P4	-	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、自然釉	
91	B	4A7h	SB09	-	-	-	残2.0	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、回転ヘラケズリ	
92	B	4A7i	SB09	-	-	-	残2.0	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
93	B	4A8h	SB09	-	-	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
94	B	4A7i	SB09	-	-	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ	
95	B	4A8h	SB09	-	-	-	残1.9	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
96	B	4A7i	SB09	-	推 14.0	-	4.2	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕？	
97	B	4A8i	SB09	-	-	-	残3.1	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
98	B	4A8j	SB09	西壁溝	-	-	残2.8	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
99	B	4A7i	SB09	P1	-	-	残2.7	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
100	B	4A7i	SB09	-	推 12.6	-	残2.3	2	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
101	B	4A8j	SB09	西壁溝	-	推 11.2	残1.6	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
102	B	4A7h	SB09	-	-	-	残1.6	3	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
103	B	4A7h	SB09	-	推 10.8	-	残1.3	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、回転糸切痕	
104	B	4A7i	SB09	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
105	B	4A8i	SB09	-	-	-	残1.8	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
106	B	4A8i	SB09	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
107	B	4A7i	SB09	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
108	B	4A8i	SB09	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
109	B	4A7i	SB09	-	-	-	残2.0	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ	
110	B	4A8h	SB09	P3	-	推 20.0	残1.6	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
111	B	4A7i	SB09	-	推 15.6	-	残1.6	1	土師器	甕	蔵内米	横ナデ	横ナデ	
112	B	4A7h	SB09	-	-	-	残1.9	1	須臾器	甕	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
113	B	4A7h	SB09	-	-	-	残1.4	1	須臾器	甕	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
114	B	4A7i	SB09		推 10.2	-	残 2.6	1	須臾器	短頸壺	黒埴 14 号窯式期	灰釉、横ナデ	灰釉、横ナデ	
115	B	4A7i	SB09		-	-	残 2.9	1	須臾器	甌	岩崎 17 号窯式期	横ナデ	横ナデ、タタキ	
116	B	4A8j	SB09	西屋溝	-	-	残 1.4	1	須臾器	甌	8 世紀後半	横ナデ、自然釉	横ナデ	
117	B	4A7h	SB09		推 26.6	-	残 5.1	1	須臾器	大形深鉢	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
118	B	4A8i	SB09		-	-	残 3.0	1	須臾器	甌	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
119	B	4A8h	SB09		-	推 6.4	残 3.4	1	灰釉陶器	水瓶	折戸 10 号窯式期	横ナデ、灰釉	灰釉、横ナデ、回転ヘラケズリ	
120	B	4A7h	SB09		-	-	残 2.8	1	須臾器	鉢?	8 世紀	横ナデ	横ナデ	
121	B	4A8i	SB09		-	-	残 1.7	1	土師器	甌	8 世紀中～	横ハケ	横ナデ	
122	B	4A7h	SB09		-	-	残 1.7	1	土師器	甌	8 世紀中～	横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
123	B	4A7i	SB09		-	-	残 1.4	1	灰釉陶器	皿	黒埴 90 号窯式期	灰釉	灰釉	
124	B	4A8h	SB09		-	推 5.6	残 1.5	1	尾張型	小碗		横ナデ、回転糸切痕	横ナデ、回転糸切痕	
125	B	4A8h	SB09		-	推 4.7	残 1.8	1	尾張型	小皿		横ナデ、一方方向ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
126	B	4A8h	SB09		-	推 4.2	残 1.4	1	尾張型	小皿		横ナデ、一方方向ナデ	横ナデ、自然釉	
127	B	4A7i	SB09	P5	推 9.0	-	残 1.4	1	尾張型	小皿		横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
128	B	4A7i	SB09		-	-	残 1.5	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
129	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.7	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ	
130	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.2	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、自然釉	
131	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.1	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ	
132	B	4A9j	SB10		-	-	残 2.8	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
133	B	4A9j	SB10		推 18.2	-	残 1.2	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
134	B	4A9j	SB10		推 24.6	-	残 2.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
135	B	4A9j	SB10		-	-	残 2.0	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
136	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
137	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.4	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
138	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.2	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ	
139	B	4A8j	SB10		-	-	残 3.9	1	高杯	高杯	東山 15 号窯式期	横ナデ	横ナデ、透かし 4 単位	
140	B	4A9j	SB10		-	-	残 5.8	1	須臾器	高杯	東山 15 号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉、透かし 3 単位	
141	B	4A9j	SB10		推 10.4	-	残 0.9	1	須臾器	高杯	東山 15 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
142	B	4A9j	SB10		推 10.6	-	残 0.9	1	須臾器	高杯	東山 15 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
143	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.6	1	須臾器	鳥形規蓋	鳴海 32 号窯式期	ヘラケズリ	横ナデ、刻紋	
144	B	4A9j	SB10	P4	推 16.4	-	4.1	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
145	B	4A9j	SB10		推 13.2	-	残 1.7	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、回転糸切痕	
146	B	4A9j	SB10		推 12.4	-	残 1.6	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
147	B	4A9j	SB10		推 10.4	-	残 1.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
148	B	4A9j	SB10		推 10.4	-	残 1.4	1	須臾器	杯身	岩崎 41 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
149	B	4A8j	SB10		推 11.8	-	残 1.1	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
150	B	4A9j	SB10		-	-	残 2.4	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
151	B	4A9j	SB10		-	-	残 2.4	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
152	B	4A9j	SB10		-	-	残 2.0	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
153	B	4A8j	SB10		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻書	
154	B	4A9j	SB10		-	-	残 1.8	1	土師器	甌		横ハケ	横ナデ	
155	B	4A9j	SB10	P4	-	-	残 2.3	1	土師器	甌	不明	横ナデ	横ナデ	
156	B	4A9j	SB10		-	-	残 4.0	1	土師器	甌	7 世紀代	横ナデ、横ハケ	横ナデ、体部下半手持ちヘラケズリ、	
157	B	4A9j	SB10		-	推 6.6	残 3.5	1	須臾器	鉢?	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
158	B	4A8j	SB10		-	-	残 3.8	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、一方方向ナデ	横ナデ、回転糸切痕、モミ銀	
159	B	4A10j	SB11		推 14.4	-	残 1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
160	B	4A10i	SB11		推 14.8	-	残 1.8	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
161	B	4A10i	SB11		推 21.6	-	残 1.1	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
162	B	4A10j	SB11		-	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
163	B	4A10i	SB11		-	-	残 1.6	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
164	B	4A10j	SB11		-	-	残 1.4	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
165	B	4A10i	SB11		-	-	残 1.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
166	B	4A10i	SB11		推 11.4	-	残 2.1	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
167	B	4A10i	SB11		-	-	残 3.3	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
168	B	4A10j	SB11		推 21.6	-	残 2.1	1	土師器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
169	B	4A10i	SB11		-	-	残 1.2	1	須臾器	甌	調終不明、スズ付蓋	横ナデ	横ナデ	
170	B	4A10i	SB11		-	-	残 2.3	1	須臾器	甌	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
171	B	4A10i	SB11		-	-	残 3.7	1	須臾器	甌	7 世紀	横ナデ	横ナデ	

遺物一覧表（4）

番 号	区	グリッド	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
172	B	4A10i	SB11	P3	-	-	残26	1	須臾器	壺	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
173	B	4A10i	SB11		-	-	残45	1	灰釉陶器	瓶類	黒埴90号窯式期	横ナデ	横ナデ	
174	B	4A10j	SB11		-	-	残26	1	土師器	甕		横ナデ、横ハケ	横ナデ	
175	B	4A10i	SB11		-	推 9.6	残 1.2	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
176	B	4A10j	SB11		-	-	残 1.3	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
177	B	4A10i	SB11		-	-	残 2.3	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
178	B	4A10i	SB12		-	-	残 1.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
179	B	4A10i	SB12		-	-	残 1.8	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
180	B	4A10k	SB12		-	推 9.0	残 1.7	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕?	
181	B	4A10i	SB12		-	推 10.0	残 1.7	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
182	B	4A10k	SB12		-	-	残 1.4	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ	
183	B	4A10j	SB12		-	-	残 1.1	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
184	B	4A10j	SB12		-	-	残 1.2	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
185	B	4A10k	SB12		推 26.0	-	残 3.4	1	須臾器	鉢	高蔵寺2号窯式期	横ナデ、端部自然釉	横ナデ	
186	B	4A10i	SB12		-	-	残 3.6	1	須臾器	無蓋高杯	東山44号窯式期	横ナデ、スス付蓋	横ナデ、波状紋	
187	B	4A10j	SB12	P1	-	-	残 1.7	1	土師器	甕	8世紀中～	横ナデ、スス付蓋	横ナデ	
188	B	4A10k	SB12		推 16.2	-	残 1.5	2	土師器	甕		短い横ハケ	横ナデ、粗い縦ハケ	
189	B	4A10i	SB12		-	推 6.4	残 2.0	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、モミ痕	
190	B	4A9k	SB13		-	-	残 3.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
191	B	4A9k	SB13		-	推 10.2	残 1.7	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ	
192	B	4A9k	SB13		推 21.6	-	残 2.3	1	須臾器	高皿	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
193	B	4A9k	SB13	P1	-	-	残 3.2	1	須臾器	鉢?	不明	横ナデ	横ナデ	
194	B	4A9k	SB13		推 7.8	-	残 3.6	2	須臾器	平皿	折戸10号窯式期～	横ナデ、自然釉	横ナデ	
195	B	4A9k	SB13		-	推 7.6	残 2.1	2	須臾器	壺	7世紀～8世紀	横ナデ	下半静止ヘラケズリ、黄土	
196	B	4A9k	SB13		-	推 7.4	残 2.9	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、モミ痕	
197	B	4A9k	SB13		-	推 7.8	残 3.5	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
198	B	4A9k	SB13		-	-	残 1.8	1	中国産磁器	白磁玉縁口		白磁釉	白磁釉	
199	B	4A9k	SB14		-	-	残 1.8	1	須臾器	縁碗	不明	横ナデ、自然釉	横ナデ、回転ヘラケズリ	
200	B	4A9k	SB14		-	-	残 1.3	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ	
201	B	4A9k	SB14		推 14.4	-	残 1.6	1	須臾器	甕	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
202	B	4A9k	SB14		推 16.6	-	残 1.2	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
203	B	4A9k	SB14		推 9.4	-	残 1.5	1	須臾器	尊蓋?	鳴海32～折戸10号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
204	B	4A9k	SB14		-	推 5.4	残 1.0	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
205	B	4A9k	SB14		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
206	B	4A9k	SB14		-	推 10.8	残 2.0	1	須臾器	袋物脚部	7世紀代	横ナデ、自然釉	横ナデ	
207	B	4A9k	SB14		推 24.6	-	残 2.7	1	土師器	甕	7世紀代	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	
208	B	4A9k	SB14		-	-	残 3.0	1	土師器	甕	8世紀前半	横ハケ	横ナデ、斜めハケ	
209	B	4A9k	SB14		-	-	残 2.8	2	土師器	甕	古墳時代	横ナデ	横ナデ	
210	B	4A9k	SB14		-	-	残 2.9	1	土師器	甕		短い横ハケ	横ナデ、斜めハケ	
211	B	4A9k	SB14		-	-	残 9.7	3	土師器	甕		指オサエ、横ナデ	横ナデ	
212	B	4A7.8g	SB17		推 14.2	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
213	B	4A7.8g	SB17		推 15.2	-	残 3.9	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
214	B	4A7.8g	SB17		-	-	残 2.0	1	土師器	甕		横ハケ	横ナデ	
215	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 2.3	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、自然釉	
216	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 1.2	2	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
217	B	4A8.9i	SB19		推 15.8	-	残 4.5	2	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ?	
218	B	4A8.9i	SB19		-	推 11.0	残 2.5	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
219	B	4A8i	SB19	炉跡	推 13.2	-	残 3.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
220	B	4A8.9i	SB19		推 15.4	-	残 2.9	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
221	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 3.0	1	須臾器	不明		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
222	B	4A8.9i	SB19		推 22.4	-	残 8.1	1	灰釉陶器	鉢鉢	鳴海32号窯式期	灰釉、横ナデ	灰釉割縁、横ナデ	
223	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 5.5	1	須臾器	フラスコ形瓶	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ、沈線	
224	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 2.5	1	須臾器	長頸瓶	折戸10号窯式期～	横ナデ	灰釉、横ナデ	
225	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 2.1	1	土師器	甕		横ハケ、スス付蓋	横ナデ	
226	B	4A9i	SB19		-	-	残 2.4	1	土師器	甕		横ハケ	横ナデ	
227	B	4A8.9i	SB19		-	-	残 3.0	1	土師器	甕	7世紀	横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
228	B	4A8i	SB19	炉跡	推 13.4	-	残 1.5	2	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
229	B	4A8.9i	SB19		推 21.2	-	残 6.5	1	土師器	甕	7世紀～	横ハケ	横ナデ、縦ハケ	

遺物一覧表（5）

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
230	B	4A9k1	SB20		-	-	残0.8	1	須臾器	杯蓋	不明	-	横ナデ	
231	B	4A8k	SB20	カマド	推13.5	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
232	B	4A9k	SB20	カマド	推15.6	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ、スス付着	横ナデ、回転ヘラケズリ	
233	B	4A10k	SB20	遺物1.2	11.8	6.0	4.6	3	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切底後にヘラケズリ	
234	B	4A9k1	SB20		-	推9.4	残1.4	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
235	B	4A9k	SB20	遺物1	-	-	残2.0	1	須臾器	有台身	7世紀代	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
236	B	4A9k1	SB20		-	-	残2.0	1	須臾器	高杯?	不明	横ナデ	横ナデ	
237	B	4A9k1	SB20		-	推11.4	残1.4	1	須臾器	高杯	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ	
238	B	4A9k1	SB20		-	-	残1.3	1	須臾器	蓋	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
239	B	4A9k1	SB20		-	-	残3.2	1	土師器	梨堀土器	-	-	横ナデ	
240	B	4A9l	SB21		推11.2	推6.2	4.3	1	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切底後に静止ヘラケズリ	
241	B	4A9l	SB21		-	-	残3.9	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
242	B	4A9l	SB21		-	-	残3.8	1	須臾器	杯身	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
243	B	4A8l	SB21	遺物1	-	10.4	残1.0	1	須臾器	杯身	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
244	B	4A9l	SB21		推13.2	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
245	B	4A8l	SB21	カマド	推6.2	-	残6.3	1	須臾器	平皿?	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
246	B	4A9l	SB21		推14.0	-	残4.5	1	須臾器	鉢	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
247	B	4A10l	SB21		-	-	残3.2	2	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
248	B	4A9l	SB21		推19.0	-	残1.7	1	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
249	B	4A8k	SB22		推11.0	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
250	B	4A8k	SB22		推15.2	-	残2.1	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
251	B	4A8k	SB22		推15.4	-	残1.9	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
252	A	4A8k	SB22		推18.2	-	残2.7	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、横ナデ	
253	B	4A8k	SB22	遺物1	推13.6	-	残2.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、自然釉	
254	B	4A8k	SB22		推15.8	-	残3.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
255	B	4A8k	SB22		-	-	残4.5	1	須臾器	合子身	鳴海32号窯式期?	横ナデ	横ナデ、自然釉	
256	B	4A8k	SB22		-	-	残3.4	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
257	B	4A8k	SB22		推8.8	-	残2.0	1	須臾器	高杯	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ	
258	B	4A8l	SB22		-	推14.0	残9.5	1	須臾器	甕	岩崎17号窯式期	指オヤエ、横ナデ	タタキ後横ナデ	
259	B	4A8l	SB23		推14.4	推11.0	残9.1	3	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
260	B	4A8l	SB23		-	-	残1.4	1	土師器	杯身	不明	横ナデ、表面剥離	横ナデ	
261	B	4A8k	SB23	カマド	推15.2	推11.8	2.1	2	須臾器	甕	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
262	B	4A8l	SB23		推27.2	-	残3.9	1	須臾器	甕	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ、タタキ	
263	B	4A8l	SB24	遺物4	15.6	-	3.3	3	須臾器	杯蓋	横ナデ	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
264	B	4A7l	SB24	P5	推17.8	-	残2.1	1	須臾器	杯蓋	横ナデ、自然釉	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
265	B	4A7l	SB24	遺物7	-	-	残2.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、回転ヘラケズリ	
266	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
267	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
268	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
269	B	4A8l	SB24	SK01	-	-	残1.8	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
270	B	4A7.8j	SB24		推13.2	-	残3.6	2	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
271	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.1	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ	
272	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.9	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
273	B	4A7.8j	SB24		推17.8	-	残2.9	1	須臾器	無蓋高杯	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
274	B	4A8l	SB24	SK01	-	推10.4	残3.3	1	須臾器	長頸瓶	横ナデ、自然釉	横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
275	B	4A8l	SB24		-	-	残7.9	1	須臾器	平皿	岩崎41～高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
276	B	4A7.8j	SB24		-	-	残2.6	1	須臾器	甕	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ、タタキ	
277	B	4A7.8j	SB24		-	-	残2.0	1	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
278	B	4A7.8j	SB24		-	-	残1.8	1	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
279	B	4A7.8j	SB24		推18.8	-	残3.3	1	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
280	B	4A10j	SB25	遺物2	推13.4	-	2.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
281	B	4A10l	SB25		推16.4	-	残2.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
282	B	4A10l	SB25		推17.4	-	残1.8	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
283	B	4A10l	SB25		推18.6	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
284	B	4A10j	SB25		-	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
285	B	4A10j	SB25		-	-	残1.4	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
286	B	4A910j	SB25		-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
287	B	4A10j	SB25		-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	

遺物一覧表（6）

番号	区	グリッド	遺構	取上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
288	B	4A10j	SB25		-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
289	B	4A10i	SB25	トレンチ	-	-	残1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
290	B	4A10j	SB25		推16.8	-	残3.2	1	灰釉陶器	碗		灰釉、横ナデ		
291	B	4A10j	SB25		-	-	残2.4	1	須臾器	杯身		横ナデ		
292	B	4A10i	SB25		-	推13.6	残1.3	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
293	B	4A10i	SB25		-	-	残0.6	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	回転ヘラケズリ、刻畫「十」	
294	B	4A10i	SB25		-	-	残2.8	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
295	B	4A10i	SB25		-	推9.2	残1.8	1	須臾器	高杯	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
296	B	4A10i	SB25	遺物1	-	-	残6.1	1	須臾器	平瓶	岩崎41号窯式期	横ナデ		
297	B	4A10j	SB25		-	-	残4.6	1	土師器	甕	7世紀	横ハケ、指オサエ	横ハケ、指オサエ、底部木葉痕	
298	B	4A10j	SB25		-	推6.2	残2.8	1	土師器	甕		横ハケ		
299	B	4A10i	SB26	遺物4	-	-	残2.5	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ、自然釉		
300	B	4A10i	SB26	遺物1	推16.0	-	残2.4	1	須臾器	杯蓋	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
301	B	4A9i	SB26		-	推9.2	残4.4	1	須臾器	登壇	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
302	B	4A10i	SB26		-	-	残3.4	1	須臾器	杯蓋	6世紀後半	横ナデ		
303	B	4A9i	SB26		-	-	残4.5	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ		
304	B	4A9i	SB26		-	推11.6	残1.7	1	須臾器	杯身	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
305	B	4A9i	SB26		-	推12.6	残1.3	1	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
306	B	4A9i	SB26		-	-	残1.5	1	須臾器	高杯	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
307	B	4A10i	SB26		-	-	残1.8	1	須臾器	高杯	東山44～50号窯式期	横ナデ		
308	B	4A10j	SB26		-	-	残6.9	1	須臾器	高杯	7世紀前半	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
309	B	4A10i	SB26		推12.6	-	残4.4	1	須臾器	高杯		横ナデ		
310	B	4A9i	SB26	遺物5	-	-	残2.3	1	須臾器	登壇	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
311	B	4A10j	SB26		-	-	残3.8	1	土師器	蓋	岩崎17か41号窯式期	横ナデ		
312	B	4A10j	SB26		推11.6	-	残1.7	9	土師器	蓋		ナデ、ハケ		
313	B	4A10j	SB26		-	-	残7.9	24	土師器	甕		横ナデ、横ハケ、指オサエ		
314	B	4A9j	SB27		推13.6	-	残2.8	1	須臾器	杯蓋	6世紀後半	横ナデ	横ナデ	
315	B	4A10j	SB27		-	-	残2.5	1	須臾器	杯蓋	6世紀後半	横ナデ		
316	B	4A10j	SB27		-	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ		
317	B	4A10j	SB27		-	-	残3.1	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
318	B	4A10j	SB27		-	推12.8	残1.1	1	須臾器	杯身	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
319	B	4A10j	SB27		-	-	残1.3	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ		
320	B	4A9j	SB27		推15.4	-	残2.7	2	須臾器	高杯	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
321	B	4A10j	SB27		推7.4	-	残2.7	1	須臾器	平瓶	不明	横ナデ、自然釉		
322	B	4A10j	SB27		-	-	残7.6	1	須臾器	甕	不明	横ナデ、タタキ	横ナデ、タタキ、自然釉	
323	B	4A10j	SB27		-	-	残5.1	1	須臾器	甕	不明	横ナデ、タタキ	横ナデ、タタキ	
324	B	4A10j	SB27	カマド	推19.0	-	残1.8	1	土師器	甕		横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	
325	B	4A10j	SB27	カマド	推21.6	-	残1.8	1	土師器	甕		横ナデ、横ハケ		
326	B	4A10j	SB27		-	-	残1.9	1	土師器	甕		横ナデ		
327	B	4A10j	SB27	カマド、遺物2	-	6.3	残13.1	12	土師器	甕		横ナデ、指オサエ	横ナデ、横ハケ、斜めハケ	
328	B	4A7i	SB28	遺物1	推15.0	-	2.6	3	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
329	B	4A7i	SB28	遺物2	推13.7	-	残3.0	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
330	B	4A7i	SB28		推14.0	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
331	B	4A7i	SB28		推18.2	-	残2.2	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
332	B	4A7i	SB28		推18.2	-	残1.2	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ		
333	B	4A7i	SB28		-	-	残2.6	1	須臾器	杯身	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
334	B	4A7i	SB28		-	-	残2.3	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
335	B	4A7i	SB28		-	-	残2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
336	B	4A7i	SB28		-	-	残2.3	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
337	B	4A8i	SB28		推13.0	-	残3.6	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
338	B	4A7i	SB28		推16.8	-	残2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ		
339	B	4A7i	SB28		-	-	残2.4	1	須臾器	甕	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
340	B	4A7i	SB28		-	-	残1.0	1	須臾器	蓋?	不明	横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
341	B	4A8i	SB28	遺物5	推23.0	-	残21.9	3	須臾器	甕		横ナデ、指オサエ	横ナデ、タタキ、下半線ヘラケズリ	
342	B	4A7i	SB28	遺物3	-	推11.6	残6.3	1	須臾器	甕	岩崎17号窯式期	横ナデ、指オサエ	横ナデ、タタキ	
343	B	4A7h	SB29		-	-	残1.3	1	須臾器	甕?	岩崎17号窯式期	指オサエ、横ナデ、ヘラケズリ	タタキ後焼ナデ	
344	B	4A7h	SB29		-	-	残1.9	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ		
345	B	4A7h	SB29		推16.2	-	残5.1	1	須臾器	無蓋杯身	古墳時代	横ナデ		
346	B	4A10f	SB30		-	-	残2.1	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
347	B	4A10f	SB30		-	-	残2.0	1	土師器	甕	不明	横ナデ		

遺物一覧表（7）

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
348	B	4A9f	SB31		推 12.8	-	残 3.1	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
349	B	4A9g	SB31		推 7.2	-	残 2.6	1	灰地陶器	碗	百代寺窯式期	灰釉、横ナデ	灰釉、横ナデ、回転ヘラケズリ	
350	B	4A9g	SB32		推 14.0	-	残 1.9	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
351	B	4A9g	SB32		推 15.8	-	残 4.1	1	須臾器	盆	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ	
352	B	4A9g	SB32		-	推 10.8	残 2.6	2	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
353	B	4A9g	SB32		推 10.2	-	残 2.6	2	須臾器	高杯	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ	
354	B	4A9g	SB32		-	-	残 5.8	3	須臾器	ハソウ	東山44号窯式期前後	横ナデ	横ナデ、刺突紋、回転ヘラケズリ	
355	B	4A9g	SB32		推 10.4	-	残 3.1	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期以前	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
356	B	4A9g	SB32		-	-	残 3.0	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期前後	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
357	B	4A9g	SB32		-	-	残 2.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
358	B	4A9g	SB32		-	-	残 4.0	1	須臾器	蓋か瓶頸	東山44号窯式期前後	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
359	B	4A9g	SB32		推 20.0	-	残 10.0	1	須臾器	皿	東山44号窯式期	横ナデ、指オサエ	横ナデ、タタキ	
360	B	4A9g	SB32		推 17.6	-	残 4.6	2	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
361	B	4A9g	SB32		推 20.2	-	残 3.3	3	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、斜めハケ	
362	B	4A9g	SB32	遺物 8	推 19.8	-	残 5.4	1	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、斜めハケ	
363	B	4A7g	SB32	遺物 1.2	推 19.8	-	残 8.0	2	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
364	B	4A9g	SB32、SE32	遺物 A、遺物 14	19.0 ~ 19.8	-	残 9.8	5	土師器	皿	横ナデ、ハケ、ケズリ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
365	B	4A7g	SE32	カマド	推 19.6	-	残 8.9	2	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ、スズ付着	
366	B	4A9g	SB32	遺物 15	19.0	-	残 9.4	5	土師器	皿	横ナデ、横ハケ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
367	B	4A9g	SB32	遺物 9	14.5 ~ 5.0	-	残 18.1	14	土師器	皿	横ナデ、指オサエ	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
368	B	4A7g	SE33		-	推 11.4	残 1.8	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
369	B	4A7g	SE33		-	推 10.2	残 1.5	2	須臾器	杯身	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
370	B	4A7g	SE33		-	推 10.6	残 1.7	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
371	B	4A7g	SE33		-	-	残 1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
372	B	4A7f、g	SE33		-	-	残 2.8	1	須臾器	碗	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
373	B	4A9g	SE33		-	推 10.6	残 6.2	1	須臾器	高杯	横ナデ	横ナデ	横ナデ、自然釉	
374	B	4A9g	SE33		-	-	残 2.9	1	土師器	台付皿	横ナデ	横ナデ	斜めハケ	
375	B	4A7g	SE33		-	-	残 2.0	1	土師器	皿	指オサエ	横ナデ	横ナデ、スズ付着	
376	B	4A7g	SE33		-	-	残 3.6	1	土師器	皿	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
377	B	4A7g	SE33		推 13.0	-	残 4.2	2	須臾器	無台碗	8世紀後半	横ナデ	横ナデ	
378	B	4A7g	SE33		推 14.0	-	残 2.6	1	須臾器	杯身	8世紀後半	横ナデ	横ナデ	
379	B	4A7f、g	SE33		推 12.6	-	残 2.4	1	須臾器	無台碗	8世紀後半	横ナデ	横ナデ	
380	B	4A8i	SE34		-	-	残 2.8	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
381	B	4A8i	SE34		-	-	残 2.1	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
382	B	4A8i	SE34		-	-	残 1.8	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
383	B	4A8i	SE34		推 13.7	-	残 2.9	1	須臾器	鉢	東山44号窯式期？	横ナデ	横ナデ	
384	B	4A8i	SE34		推 14.8	-	残 2.7	1	須臾器	高杯	7世紀初	横ナデ	横ナデ	
385	B	4A8i	SE34		-	推 6.2	残 3.0	1	須臾器	短頸壺？	7世紀代	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
386	B	4A8i	SE34		-	7.5	残 1.7	1	須臾器	壺？	7世紀代	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻書	
387	B	4A8i	SE34		-	-	残 3.0	1	須臾器	鉢	7世紀代	横ナデ	横ナデ	
388	B	4A8i	SE34		-	-	残 6.2	6	土師器	皿	調整不明	横ナデ	調整不明	
389	B	4A8i	SE34		-	-	残 2.9	1	土師器	皿	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
390	B	4A8i	SE34		-	-	残 1.2	1	土師器	皿	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
391	B	4A8k	SE35		推 11.2	-	残 1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
392	B	4A9j	SE35		-	-	残 1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
393	B	4A8k	SE35		-	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
394	B	4A9j	SE35		-	-	残 0.9	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
395	B	4A8k	SE35		-	推 9.2	残 1.2	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
396	B	4A9j	SE35		-	-	残 1.2	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
397	B	4A8j	SE35		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
398	B	4A8j	SE35		-	-	残 2.0	1	須臾器	皿	7世紀後半	横ナデ	横ナデ	
399	B	4A9j	SE35	SK1	13.1	-	4.5	1	須臾器	杯蓋	6世紀後半まで	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
400	B	4A8j	SE35	P2	-	-	残 2.2	1	須臾器	杯蓋	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
401	B	4A8k	SE35	P3	-	-	残 2.0	1	須臾器	杯身	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
402	B	4A8k	SE35		-	-	残 1.3	1	須臾器	高杯	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
403	B	4A9j	SE35		推 12.4	-	残 1.0	1	須臾器	高杯	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
404	B	4A9j	SE35	SK1	-	-	残 4.1	1	須臾器	蓋か瓶	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
405	B	4A9j	SE35		推 29.4	-	残 4.4	2	土師器	皿	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、縦ハケ	
406	B	4A8j	SE35		-	-	残 3.4	1	土師器	皿	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
407	B	4A9k	SE36		推 14.0	-	残 1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	

遺物一覧表（8）

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
408	B	4A9K	SB36			推 11.4	残 1.1	1	須臾器	杯身	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切り痕	
409	B	4A9K	SB36		推 15.2	推 11.6	残 2.9	1	須臾器	無台碗	8 世紀後半	横ナデ	横ナデ	
410	B	4A9K	SB36		推 14.8		2.9	2	須臾器	杯身	岩崎 17 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
411	B	4A9K	SB36		推 18.4	推 15.2	8.1	2	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
412	B	4A9K	SB36		-	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
413	B	4A9K	SB36		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
414	B	4A9K	SB36		-	-	残 1.6	1	須臾器	杯身	岩崎 17 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
415	B	4A9K	SB36		-	-	残 1.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
416	B	4A9K	SB36		-	-	残 2.2	1	須臾器	蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
417	B	4A9K	SB36		-	-	残 3.4	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
418	B	4A9K	SB36		-	推 10.2	残 1.5	1	須臾器	高杯	岩崎 17 号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
419	B	4A9K	SB36		-	-	残 4.2	1	須臾器	皿	7 世紀代	-	ナデ	
420	B	4A9K	SB36		-	-	残 2.0	1	土師器	甕	8 世紀後半	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
421	B	4A9K	SB36		-	-	残 1.6	1	土師器	甕	8 世紀後半	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
422	B	4A9K	SB36		-	-	残 8.3	1	須臾器	平皿	8 世紀後半	横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
423	B	4A9K	SB36		推 27.2	-	残 4.1	7	須臾器	杯蓋	東山 15 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
424	B	4A10g	SB37		12.4	-	4.4	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
425	B	4A10g	SB37		-	-	残 2.6	1	須臾器	杯身	東山 15 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
426	B	4A10g	SB37		推 11.2	-	残 2.4	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
427	B	4A10g	SB37		-	-	残 1.7	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
428	A	4A8e	SB40		推 16.0	-	残 2.4	1	須臾器	杯蓋	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	
429	A	4A8e	SB40		-	-	残 1.1	1	須臾器	杯蓋	横ナデ	横ナデ	横ナデ	
430	A	4A8f	SB48		-	-	残 2.4	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、調整不明	
431	A	4A8f	SB48		推 18.8	-	残 2.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
432	A	4A7f	SB48		-	-	残 1.8	1	須臾器	杯蓋	鳴瀬 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
433	A	4A8f	SB48		-	-	残 2.4	1	土師器	甕	6 世紀代	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
434	A	4A7d	SB47	カマド	推 14.2	-	残 4.6	1	須臾器	杯蓋	6 世紀後半	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
435	A	4A7d	SB47	カマド	推 12.4	4.8	4.9	1	須臾器	杯身	6 世紀後半	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
436	A	4A7c	SB47	カマド	-	-	残 3.7	2	須臾器	杯身	6 世紀後半	横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
437	A	4A7d	SB47		-	推 9.8	残 1.0	1	須臾器	高杯？	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
438	A	4A7d	SB47		-	-	残 1.2	1	土師器	杯？	慶内末 8 世紀代	横ナデ？	横ナデ？	
439	A	4A9f	SB49	SK1	推 14.4	-	残 3.5	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
440	A	4A7f	SB49		推 15.2	-	残 2.4	1	須臾器	杯蓋	鳴瀬 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
441	A	4A7f	SB49		推 13.0	推 8.8	4.0	4	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
442	A	4A9f	SB49	SK1	-	-	残 2.0	1	須臾器	鉢	不明	横ナデ	横ナデ	
443	A	4A9c	SB50	カマド	推 14.2	-	残 3.5	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
444	A	4A9d	SB50	SK1	推 15.2	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
445	A	4A9d	SB50		-	-	残 1.8	1	須臾器	杯身	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
446	A	4A9e	SB50		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
447	A	4A9e	SB50		-	推 6.0	残 1.7	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
448	A	4A9d	SB50	南トレンヂ	-	-	残 2.2	1	須臾器	杯蓋	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
449	A	4A9e	SB50		-	-	残 2.2	1	須臾器	杯身	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
450	A	4A9e	SB50		11.8	-	4.5	8	土師器	碗	調整不明、横ナデ？	横ナデ	横ナデ、タタキ？	
451	A	4A9d	SB50	南トレンヂ	-	-	残 2.0	1	須臾器	皿	7 世紀代	横ナデ	横ナデ	
452	A	4A9e	SB50		-	-	残 2.8	1	土師器	甕		横ナデ	横ナデ	
453	A	4A9d	SB50	南トレンヂ	推 16.4	-	残 6.0	1	土師器	甕	7 世紀代	横ナデ	横ナデ	
454	A	4A9d	SB51	遺物 1	-	-	残 1.7	1	須臾器	杯身	6C 後半	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
455	A	4A9c	SB51		推 20.0	-	残 3.0	2	土師器	甕	6C 後半	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
456	C	4J5q	SB56		-	-	残 2.8	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
457	C	4J6q	SB56	一括土器	推 14.0	-	残 3.2	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
458	C	4J5q	SB56		-	推 10.6	残 4.0	1	須臾器	杯身	岩崎 41 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻書「十」	
459	C	4J5q	SB56		-	-	残 9.3	1	須臾器	すり鉢		横ナデ、自然釉	横ナデ、回転ヘラケズリ、横ナデ	
460	C	4J6q	SB56		-	-	残 5.7	1	土師器	皿		-	指オサエ	
461	C	4J5q	SB56		-	-	残 2.1	1	土師器	甕	7 世紀代	横ナデ	横ナデ、横ハケ	
462	C	4J6q	SB56		-	-	残 2.2	1	土師器	甕	7 世紀代	横ナデ	横ナデ、横ハケ	
463	C	4J5q	SB56		-	-	残 5.2	43	須臾器	皿		横ナデ	横ナデ、スス付蓋、ヘラケズリ	
464	C	4J6q	SB56	一括土器	15.0	-	残 18.2	43	土師器	甕	8 世紀初	横ナデ、指オサエ、縦ヘラケズリ	指オサエ、縦ハケ、スス付蓋、斜ハケ	
465	C	4J4q	SB57		-	-	残 1.6	1	須臾器	杯蓋	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉、ヘラケズリ	
466	C	4J4q	SB57		推 14.8	-	残 1.0	1	須臾器	杯蓋	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
467	C	4J4q	SB57		推 14.0	-	残 2.5	1	須臾器	杯蓋	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、横ナデ	

遺物一覧表（9）

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
468	C	4J4q	SB57	-	-	-	残1.4	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
469	C	4J4q	SB57	-	-	推5.9	残2.8	1	須臾器	長頸瓶	折戸10号窯式期	横ナデ	横ナデ	
470	C	4J4q	SB57	-	-	-	残3.0	1	須臾器	長頸壺	折戸10号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ	
471	C	4J4q	SB57	-	-	-	残1.2	1	土師器	皿か碗	8世紀	横ナデ	横ナデ	
472	C	4J4q	SB57	-	-	-	残2.5	1	土師器	甕	8世紀	横ナデ	横ナデ?	
473	C	4J4q	SB57	-	-	-	残2.9	1	土師器	甕	高蔵寺2号窯式期	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
474	C	4J6q	SB58	-	推16.6	-	残2.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
475	C	4J6q	SB58	-	推16.4	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
476	C	4J6q	SB58	-	-	-	残1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
477	C	4J6q	SB58	-	-	-	残1.6	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉、ヘラケズリ	
478	C	4J6q	SB58	-	推14.2	-	残2.7	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
479	C	4J6q	SB58	-	推12.6	-	残2.6	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
480	C	4J5q	SB58	-	-	推12.2	残3.0	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
481	C	4J5q	SB58	-	-	-	残2.7	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、自然釉	
482	C	4J6q	SB58	-	-	-	残2.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
483	C	4J5q	SB58	-	-	-	残3.6	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
484	C	4J6q	SB58	-	-	-	残2.6	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
485	C	4J6q	SB58	-	推11.6	-	残2.4	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
486	C	4J6q	SB58	-	推7.8	-	残5.3	1	須臾器	平瓶	東山50号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ	
487	C	4J6q	SB58	-	-	-	残2.0	1	土師器	皿	7世紀代	横ナデ?	横ナデ?	
488	C	4J6q	SB58	-	-	-	残5.4	1	須臾器	甕	畿内系	円弧文タタキ	横ナデ	
489	C	4J6q	SB58	-	推14.2	-	残4.3	1	須臾器	直口壺	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
490	C	4J6q	SB58	-	推13.8	-	残3.7	1	土師器	甕	8世紀前	横ナデ、横ハケ、スス付着	横ナデ、縦ハケ、スス付着	
491	C	4J6q	SB58	-	-	-	残2.7	1	土師器	甕	8世紀前	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
492	C	4J5q6q	SB59	-	推10.8	-	残1.7	1	須臾器	杯蓋	7世紀後半	横ナデ	調整不明、自然釉	
493	C	4J5q	SB59	-	推13.2	-	残3.2	3	須臾器	杯身	8世紀前半	横ナデ	横ナデ	
494	C	4J6r	SB59	-	推10.8	-	残3.6	1	須臾器	杯身	8世紀前半	横ナデ	横ナデ	
495	C	4J5q	SB59	-	推10.8	-	残3.2	1	須臾器	杯身	8世紀前半	横ナデ	横ナデ	
496	C	4J6q	SB59	-	推11.0	-	残2.4	1	須臾器	短頸甕	8世紀前半	横ナデ、自然釉	端面自然釉、横ナデ	
497	C	4J5q	SB59	-	-	-	残3.4	1	須臾器	壺瓶類	不明	横ナデ、自然釉	回転ヘラケズリ、スス付着	
498	C	4J6r	SB59	-	-	-	残4.0	1	須臾器	高杯?	6世紀代?	横ナデ	横ナデ、表面磨滅	
499	C	4J5r	SB59	-	-	-	残4.7	1	土師器	甕	-	-	指オサエ	
500	C	4J5r	SB59	-	推28.0	-	残4.5	1	須臾器	甕	8世紀代	横ナデ	横ナデ、自然釉	
501	C	4J5r	SB59	-	-	-	残4.1	1	土師器	甕	7世紀	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
502	C	4J5q	SB59	-	推16.8	-	残6.3	3	土師器	甕	8世紀前半	横ハケ、ケズリ	横ナデ、ハケ	
503	C	4J5q	SB59	-	推17.0	-	残3.9	1	土師器	甕	7世紀後半	横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
504	C	4J5q6q	SB59	-	推16.8	-	残4.3	1	土師器	甕	7世紀後半	横ハケ、斜めハケ	横ナデ、縦ハケ	
505	C	4J6q	SB60	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
506	C	4J6q	SB60	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
507	C	4J6r	SB60	-	-	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ	
508	C	4J6q	SB60	-	推15.8	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
509	C	4J6q	SB60	-	推16.4	-	残1.3	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
510	C	4J6r	SB60	-	推13.4	-	4.1	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
511	C	4J6q	SB60	-	-	-	残3.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
512	C	4J6r	SB60	-	-	-	残4.0	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
513	C	4J6r	SB60	-	-	-	残5.0	2	須臾器	ハソウ	6世紀前半	横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉、削突文	
514	C	4J6r	SB60	-	-	-	残2.7	1	土師器	甕	6世紀前半	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
515	C	4J6q	SB60	-	-	-	残2.8	1	土師器	甕	7世紀代	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
516	C	4J6r	SB60	-	推11.8	-	残5.0	1	須臾器	横瓶	7世紀代	横ナデ、全面自然釉	横ナデ、自然釉	
517	C	4J6r	SB60	-	推13.0	-	残2.5	1	須臾器	壺	6世紀代	横ナデ	横ナデ	
518	C	4J6q	SB60	-	-	-	残6.5	1	須臾器	短頸壺	7世紀代	横ナデ、ヘラケズリ?	横ナデ	
519	C	4J6q	SB60	-	推19.2	-	残4.2	1	土師器	甕	7世紀中	横ナデ、ケズリ	横ナデ、縦ハケ	
520	C	4J4r	SB61	-	-	-	残3.7	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
521	C	4J56r	SB62	-	推10.2	-	残2.9	1	須臾器	杯身	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ	
522	C	4J5r	SB62	-	-	推3.0	残1.1	1	須臾器	杯身?	不明	横ナデ	回転ヘラケズリ	
523	C	4J5r	SB62	-	-	-	残2.3	1	土師器	甕	不明	横ナデ、横ハケ	横ナデ	
524	C	4J7q	SB63	-	推15.8	-	3.2	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
525	C	4J7r	SB63	-	-	-	残2.9	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
526	C	4J7q	SB63	-	推16.2	-	残1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
527	C	4J7r	SB63	-	推16.2	-	残1.5	3	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、自然釉、横ナデ	

遺物一覧表 (10)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
528	C	4J7q	SB63		推17.2	-	残1.8	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ	
529	C	4J7r	SB63		推18.0	-	残1.9	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ、自然釉	
530	C	4J7r	SB63		-	-	残1.7	2	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
531	C	4J7r-7q	SB63		-	-	残1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
532	C	4J7q	SB63		-	-	残2.6	2	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ	
533	C	4J7q	SB63		推16.8	推10.4	7.3	2	須臾器	碗	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ	
534	C	4J7q	SB63		推14.4	推9.8	4.1	4	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
535	C	4J7r-7q	SB63		-	推11.8	残1.7	2	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
536	C	4J7r	SB63		推13.2	-	残6.3	2	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
537	C	4J7q	SB63		推12.6	推5.8	4.2	1	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕?	
538	C	4J7r	SB63		-	-	残2.7	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
539	C	4J7q	SB63		-	-	残4.2	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
540	C	4J7r	SB63		-	-	残5.1	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
541	C	4J7r-7q	SB63		-	4.1	残2.1	1	須臾器	杯身?	7世紀代	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
542	C	4J7q	SB63		-	推10.0	残1.3	2	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻畫	
543	C	4J7q	SB63		-	-	残3.0	1	須臾器	高杯?	7世紀	横ナデ	横ナデ、自然釉	
544	C	4J7q	SB63		-	-	残3.0	1	須臾器	高杯	東山44号窯式期	横ナデ	横ナデ	
545	C	4J7r	SB63		推14.8	-	残3.9	1	須臾器	蓋?		横ナデ	横ナデ	
546	C	4J7q	SB63		-	-	残6.1	2	須臾器	皿	7世紀	横ナデ	縦方向ヘラケズリ	
547	C	4J7r-7q	SB63		-	-	残2.1	1	土師器	杯身	畿内系	横ナデ	横ナデ (ミカキ?)	
548	C	4J7r	SB63	カマド	-	-	残2.3	1	土師器	杯身	畿内系	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ?	
549	C	4J7r	SB63		-	-	残1.4	1	土師器	蓋		横ハケ	横ナデ	
550	C	4J7q	SB63		-	-	残1.8	1	土師器	蓋		横ナデ	横ナデ	
551	C	4J7r	SB63		-	-	残1.4	1	須臾器?	蓋?		横ナデ	横ナデ	
552	C	4J7r	SB63		推12.8	-	残1.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
553	C	4J7r	SB63		-	-	残3.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
554	C	4J7r	SB63		推12.8	-	残9.2	3	須臾器	蓋	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、一部自然釉	
555	C	4J7r	SB63		-	-	残7.7	1	須臾器	平瓶	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	ヘラケズリ (のち横ナデ?)	
556	C	4J7r	SB63		推16.6	-	残11.2	4	須臾器	据瓶	6世紀末	横ナデ	横ナデ	
557	C	4J7r-7q	SB63		推24.8	-	残2.6	1	須臾器	蓋	岩崎17号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉、筋抽波状文	
558	C	4J7q	SB63		推23.6	-	残7.2	1	須臾器	蓋	岩崎41号窯式期	横ナデ、自然釉	横ナデ、タタキ	
559	C	4J7q	SB63		推23.0	-	残6.3	2 (1+1)	須臾器	蓋	東山50号窯式期	横ナデ + 自然釉波状文	横ナデ + 自然釉波状文	
560	C	4J4q	SB64	SK1	推16.8	-	残2.1	3	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
561	C	4J4q	SB64		推14.6	-	残1.2	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ	
562	C	4J5q	SB64		推12.0	-	残4.7	2	須臾器	杯身	岩崎41号窯式期	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
563	C	4J4q	SB64	カマド	推14.0	-	残3.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
564	C	4J5q	SB64		-	-	残2.9	1	須臾器	杯身	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
565	C	4J4q-4r	SB64		-	-	残2.5	1	土師器	皿	-	-	指オサエ	
566	C	4J-	SB64	カマド	-	-	残2.5	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
567	C	4J4q	SB64	カマド	-	推6.8	残1.2	1	土師器	蓋	飯炊圧痕	指オサエ	指オサエ	
568	C	4J4q	SB64	カマド	推9.6	-	残6.5	1	須臾器	平瓶	7世紀	横ナデ、自然釉	横ナデ	
569	C	4J4q	SB64		推8.0	-	残2.5	1	須臾器	杯?		横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
570	C	4J-	SB64	カマド	-	-	残2.9	1	土師器	蓋		横ナデ	横ナデ	
571	C	4J4q	SB64		-	-	残1.8	1	土師器	蓋?	畿内系?	横ナデ	横ナデ スス付着	
572	C	4J5q	SB64		推16.2	-	残3.7	1	土師器	蓋		横ナデ、横ハケ	横ナデ、調整不明	
573	C	4J4q	SB64	カマド	推16.6	-	残2.8	1	土師器	蓋		横ナデ、横ハケ	横ナデ、スス付着	
574	C	4J4q	SB64	SK1	21.6	-	残12.8	13	土師器	蓋		横ナデ、横ハケ	横ナデ、縦ハケ	
575	C	4J4-5r	SB65		-	-	残2.2	1	須臾器	杯蓋	不明	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、横ナデ	
576	C	4J4-5r	SB65		-	-	残1.9	2	須臾器	杯蓋?	6世紀代	横ナデ	横ナデ	
577	C	4J4-5r	SB65		推15.6	-	残1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ	
578	C	4J4-5r	SB65		推14.0	-	残2.5	1	須臾器	杯身	東山50号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
579	C	4J4-5r	SB65		推16.4	-	残3.8	3	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
580	C	4J4-5r	SB65		-	-	残2.8	1	須臾器	杯蓋	東山44号窯式期	横ナデ	自然釉、横ナデ	
581	C	4J4-5r	SB65		-	-	残1.6	1	須臾器	蓋	不明	横ナデ	横ナデ	
582	C	4J4-5r	SB65		-	-	残4.4	1	土師器	皿	-	-	指オサエ	
583	C	4J4-5r	SB65		推18.0	-	残2.5	1	土師器	蓋		横ナデ、横ハケ	横ナデ	
584	A	4A7f	SD43	遺物1	推22.6	-	5.0	7	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
585	A	4A9e	SD43		推20.2	-	残1.8	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
586	A	4A9e	SD43		推15.6	-	残1.3	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺2号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
587	A	4A9e	SD43		推15.0	-	残3.0	1	須臾器	杯蓋	鳴海32号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、自然釉	

遺物一覧表 (11)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
588	A	4A7f	SD43	遺物 2	推 14.8	11.4	3.8	4	須臾器	杯身	折戸 10 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
589	A	4A9e	SD43		-	推 11.8	残 2.1	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
590	A	4A7f	SD43	遺物 1	-	推 12.4	残 1.2	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
591	A	4A9e	SD43		-	推 13.0	残 1.2	3	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
592	A	4A9e	SD43		-	推 12.6	残 1.5	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
593	A	4A9e	SD43		-	推 11.6	残 2.3	1	須臾器	杯身	岩崎 41 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
594	A	4A7f	SD43	遺物 1	推 10.2	推 5.6	3.4	1	須臾器	杯身	岩崎 41 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
595	A	4A8f	SD43		推 12.6	-	残 3.1	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
596	A	4A9e	SD43		推 10.4	-	残 3.0	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
597	A	4A9e	SD43		-	-	残 5.5	1	須臾器	皿	岩崎 17 号窯式期	-	タタキ、指オサエ	
598	A	4A9e	SD43		-	-	残 4.0	1	須臾器	不明		横ナデ	横ナデ	
599	A	4A9e	SD43		推 13.8	-	残 2.3	1	須臾器	杯頸?		横ナデ	横ナデ、自然釉	
600	A	4A9e	SD43		-	推 11.6	残 1.0	1	須臾器	高杯	東山 44 号窯式期	横ナデ	横ナデ、自然釉	
601	A	4A7f	SD43	遺物 1	推 17.4	-	残 2.4	1	土師器	甕	横ナデ、横ハケ、コグ付着	横ナデ、スス付着	横ナデ、スス付着	
602	A	4A7f	SD43	遺物 1	-	-	残 9.8	1	須臾器	鉢鉢	8 世紀	横ナデ	横ナデ	
603	A	4A7f	SD43	遺物 1	推 30.2	-	残 15.5	11	須臾器	銅か鉢	7 世紀後半	横ナデ、横ハケ	横ナデ、ヘラケズリ?、自然釉、黄土塗布	
604	C	4J6a	SK66		推 14.2	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
605	C	4J6a	SK66	遺物 12	推 12.2	-	残 1.1	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	ヘラケズリ、自然釉、横ナデ	
606	C	4J6a	SK66		推 15.6	推 11.6	残 4.4	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ、コグ付着	横ナデ、回転ヘラケズリ	
607	C	4J6a	SK66	遺物 10	推 16.4	推 12.0	4.2	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻書	
608	C	4J5a,q	SK66		-	-	残 2.5	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
609	C	4J6a	SK66	遺物 14	-	推 10.8	残 2.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
610	C	4J6a	SK66	遺物 8	-	推 11.0	残 2.4	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、スス付着	
611	C	4J5a,q	SK66		推 13.2	-	残 6.4	2	須臾器	碗	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
612	C	4J6a	SK66	遺物 4	-	-	残 3.8	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
613	C	4J5a,q	SK66		-	-	残 2.9	1	須臾器	杯身	不明	横ナデ	横ナデ	
614	C	4J5a	SK66		-	-	残 2.7	1	土師器	製塩土器		指オサエ?	指オサエ	
615	C	4J5a	SK66		推 10.8	-	残 2.9	1	土師器	製塩土器		横ナデ	指オサエ?	
616	C	4J6a	SK66		推 5.8	-	残 2.6	1	土師器	製塩土器		横ナデ	横ナデ	
617	C	4J6a	SK66		-	-	残 2.7	1	土師器	製塩土器		ヘラケズリ?	ケズリか指オサエ	
618	C	4J6a	SK66	遺物 2	-	-	残 3.5	1	土師器	甕	調整不明	横ハケ	ナデ?、指オサエ	
619	C	4J5a	SK66		-	-	残 2.5	1	土師器	甕		横ハケ	横ナデ、横ハケ	
620	C	4J5a	SK66		-	-	残 2.4	1	土師器	甕		横ハケ	横ナデ、横ハケ	
621	C	4J5a	SK66		-	-	残 1.6	1	土師器	甕		横ハケ	横ナデ、横ハケ	
622	C	4J5a,q	SK66		-	-	残 4.4	3	土師器	甕		横ナデ	横ナデ、横ハケ	
623	C	4J6a	SK66		-	-	残 3.1	3	土師器	甕		横ナデ、指オサエ	表面剥離後スス付着	
624	C	4J7f	SK67		-	-	残 2.9	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ、自然釉	
625	C	4J7f	SK67		推 16.0	-	残 2.3	1	須臾器	杯蓋	鳴海 32 号窯式期	横ナデ、自然釉	回転ヘラケズリ、横ナデ	
626	C	4J7f	SK67		推 12.4	-	残 3.9	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
627	C	4J7f	SK67		推 16.8	-	残 3.0	1	須臾器	杯身	鳴海 32 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
628	C	4J7f	SK67		推 15.4	-	残 7.2	3	土師器	甕	8 世紀	横ハケ、斜めハケ	横ナデ、横ハケ	
629	C	4F7f	SK67		-	-	残 8.0	1	土師器	甕		指オサエ、コグ付着	横ナデ、スス付着	
630	C	4J7f	SK67		推 17.0	-	残 2.7	3	土師器	甕	8 世紀中	横ハケ、指オサエ	横ナデ、横ハケ、スス付着	
631	C	4J7f	SK67		推 17.4	-	残 4.5	1	土師器	甕	8 世紀中	荒い横ハケ	横ナデ、横ハケズリ	
632	C	4J6a,7f	SK66,SK67		-	推 7.6	残 4.4	8	土師器	甕		指オサエ	横ナデ、ヘラケズリ	
633	C	4J7f	SK67		-	-	残 2.2	1	土師器	製塩土器		横ナデ	横ナデ、指オサエ	
634	C	4J7a	SK64		推 16.4	-	残 1.5	1	須臾器	杯蓋	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ、自然釉	
635	C	4J6a	SK64		推 9.8	推 7.2	4.6	1	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
636	B	4A9j	SK20	遺物 1 等	推 25.6	-	残 9.5	4	須臾器	甕		横ナデ、黄土塗布	横ナデ、タタキ、黄土塗布	
637	B	4A9j	SK20	遺物 1 等	-	-	残 41.8	45	須臾器	甕		指オサエ、横ナデ、黄土塗布	横ナデ、黄土塗布	
638	B	4A-	SD08		15.6	-	2.7	1	須臾器	杯蓋		横ナデ	回転ヘラケズリ、横ナデ	
639	B	4A10h	SD08		推 15.0	-	4.5	2	須臾器	杯蓋		横ナデ、刻書「十」	横ナデ、回転ヘラケズリ、横ナデ、自然釉	
640	B	4A8h,10h	SD08	トレンヂ	17.4	13.2	5.5	3	須臾器	杯身	高蔵寺 2 号窯式期	横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ	
641	B	4A11j	北トレンヂ		-	推 9.2	残 1.9	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ、刻書	
642	B	4A9m	東トレンヂ		推 42.0	推 23.2	22.6	6	須臾器	鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
643	Ab	4A6b	西トレンヂ		-	-	残 2.9	1	須臾器	面碗		自然釉、横ナデ	横ナデ、透かしあり	
644	B	4A9h	検出 3		-	-	-	-	1	須臾器		-	指オサエ	

遺物一覧表 (12)

番 号	区	グリッド	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
645	B	4A10h	SD08	トレンチ	-	-	残 7.0	1	土師器	匱カマド		指ナデ	指ナデ	
646	B	4A7g	SK09		推 25.4	-	残 5.2	1	土師器	浅鍋型鍋		横ナデ、ハケ	横ナデ、ケズリ	
647	A	4A-	検出2		-	-	残 7.5	1	土師器	不明脚部		-	指オサエ	
648	B	4A9m	東トレンチ		-	-	残 3.1	1	土師器	製塩土器		-	指オサエ	
649	B	4A10f	SB15		-	-	残 2.2	1	灰釉陶器	碗		灰釉、横ナデ	灰釉、横ナデ	
650	A	4A8e	SB15		-	-	残 2.3	1	灰釉陶器	灰釉和皿		灰釉、うすい灰釉	灰釉、うすい灰釉	
651	A	4A8e	SB15		-	-	残 1.9	1	古瀬戸	折縁深皿		灰釉	灰釉	
652	A	4A9f	SB16		推 7.4	-	残 1.4	1	小皿	小皿		横ナデ	横ナデ	
653	A	4A9f	SB16		推 8.8	推 5.6	1.7	1	尾張型	小皿		横ナデ、一方方向ナデ	横ナデ、一方方向ナデ	
654	A	4A9f	SB16		-	-	残 3.0	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
655	A	4A9f	SB16		-	-	残 1.9	1	尾張型	片口鉢		横ナデ	横ナデ	
656	A	4A6f	SB16		-	-	残 3.1	1	尾張型	片口鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ横方向	
657	A	4A6f	SB16		-	-	残 2.0	1	中国産磁器	白磁玉縁口		白磁釉	白磁釉	
658	B	4A9g	SB18		-	-	残 2.6	1	灰釉陶器	碗		灰釉、横ナデ	灰釉、横ナデ、回転糸切痕	
659	B	4A9g	SB18		推 7.4	-	残 1.6	2	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ	
660	B	4A9g	SB18		推 9.6	-	残 1.2	1	灰釉陶器	段皿		灰釉、横ナデ	灰釉、横ナデ	
661	A	4A9f	SB41		推 8.4	推 4.4	2.1	1	尾張型	小碗		横ナデ	横ナデ、自然釉、モミ銀	
662	A	4A9f	SB41		推 8.9	-	残 2.1	1	尾張型	小碗		横ナデ	横ナデ	
663	A	4A9d	SB41		推 11.0	-	残 2.2	2	須恵路	杯身		横ナデ	横ナデ	
664	A	4A8e	SB41	P3	-	-	残 1.6	1	灰釉陶器	段皿		灰釉、横ナデ	横ナデ	
665	B	4A9d	SB41	カマド	-	-	残 3.6	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、端部スけている	
666	A	4A8c	SB43		-	-	残 2.7	1	尾張型	山茶碗		自然釉、横ナデ	横ナデ	
667	A	4A8c	SB43		-	推 4.6	残 1.5	1	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切り痕	
668	A	4A8c	SB43		-	-	残 3.4	1	須恵路	壺		横ナデ	横ナデ	
669	A	4A8c	SB43		-	-	残 1.5	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
670	A	4A8e	SB44		-	-	残 1.8	1	尾張路	杯身		横ナデ	横ナデ	
671	A	4A8f	SB44	P1	-	推 5.0	残 2.5	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
672	A	4A8f	SB44	P1	-	-	残 4.2	1	土師器	製塩土器		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
673	A	4A6d	SB46	P3	推 16.8	-	残 2.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、自然釉？	
674	Ab	4A7b	SB54		-	-	残 4.7	1	須恵路	鉢？		横ナデ	横ナデ	
675	Ab	4A7bc	SB54		-	推 7.4	残 2.9	1	灰釉陶器	碗		横ナデ、灰釉	横ナデ	
676	B	4A-	SD11	遺物 46	推 15.4	6.2	5.1	1	尾張型	山茶碗		一方方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
677	B	4A-	SD11	遺物 29	推 15.6	7.2	6.1	2	尾張型	山茶碗		一方方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
678	B	4A-	SD11	遺物 13	推 16.4	推 8.2	4.8	1	尾張型	山茶碗		一方方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
679	B	4A10f	SD11		推 15.6	推 7.6	4.3	1	尾張型	山茶碗		一方方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ銀、高台ハガシ、回転糸切痕	
680	B	4A10f	SD11		推 16.4	推 8.4	5.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
681	B	4A10g	SD11		推 15.2	-	残 4.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
682	B	4A10f	SD11		推 16.4	-	残 4.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
683	B	4A10g	SD11		推 15.4	-	残 3.2	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
684	B	4A-	SD11	遺物 49	-	8.6	残 3.6	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
685	B	4A-	SD11	遺物 47	-	6.0	残 3.6	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
686	B	4A-	SD11	遺物 41	-	8.6	残 3.2	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、自然釉	
687	B	4A-	SD11	遺物 43	-	8.2	残 3.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
688	B	4A-	SD11	遺物 19	-	6.2	残 3.8	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
689	B	4A-	SD11	遺物 22	-	7.2	残 3.2	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
690	B	4A-	SD11	遺物 27	-	7.6	残 3.4	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
691	B	4A-	SD11	遺物 16	-	7.0	残 3.2	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
692	B	4A-	SD11	遺物 14	-	6.0	残 3.4	1	瀬田湖西型？	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
693	B	4A-	SD11	遺物 38	-	7.4	残 3.0	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ、ススけている	横ナデ、自然釉、回転糸切痕	
694	B	4A-	SD11	遺物 4	-	推 6.6	残 3.7	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ、ススけている	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕、ススけている	
695	B	4A-	SD11	遺物 7	-	7.4	残 2.2	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、ススけている	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
696	B	4A-	SD11	遺物 42	-	推 7.8	残 2.4	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
697	B	4A-	SD11	遺物 31	-	推 6.4	残 3.5	1	尾張型？	山茶碗		横ナデ、ススけている	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
698	B	4A-	SD11	遺物 56	-	推 7.2	残 2.4	1	尾張型	山茶碗		自然釉、一方方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
699	B	4A-	SD11	遺物11	-	推 7.2	残 2.8	1	尾張型	山茶碗		一方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
700	B	4A-	SD11	遺物 5	-	推 7.6	残 2.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
701	B	4A-	SD11	遺物 29	-	-	残 2.5	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
702	B	4A-	SD11	遺物 29	-	8.0	残 1.9	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
703	B	4A10g	SD11		-	7.8	残 3.5	1	東濃型	山茶碗		横ナデ、漆面?付着	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
704	B	4A10f	SD11		-	6.8	残 3.0	1	瀬峰湖西型?	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
705	B	4A10g	SD11	下層	-	推 7.0	残 2.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
706	B	4A10g	SD11	上層	-	-	残 2.5	3	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、高台部欠損、回転糸切痕、スス付着	
707	B	4A10g	SD11		-	推 7.2	残 3.0	1	反軸陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
708	B	4A10g	SD11	上層	-	推 7.6	残 2.2	1	反軸陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
709	B	4A-	SD11	遺物 20	-	推 7.2	残 1.9	1	反軸陶器	碗		横ナデ	横ナデ、軟質	
710	B	4A-	SD11	遺物 50	-	6.8	残 3.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、ススけている	横ナデ、回転糸切痕、モミ痕、墨書?	
711	B	4A-	SD11	遺物 39	推 10.5	4.8	4.1	1	反軸陶器	小碗	東山72号窯式	自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、回転糸切痕	
712	B	4A10g	SD11		推 9.2	4.6	2.8	1	尾張型	小皿		自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、回転糸切痕	
713	B	4A10g	SD11	上層	推 8.4	4.5	2.3	1	尾張型	小皿		自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、回転糸切痕	
714	B	4A10g	SD11		推 8.6	5.4	1.8	1	尾張型	小皿		一方向ナデ、横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
715	B	4A10f	SD11		-	4.5	残 2.0	1	尾張型	小皿		自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、回転糸切痕	
716	B	4A-	SD11		5.7~6.4	残 7.7	残 7.7	1	尾張型	子持器台	第4型式	自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、回転糸切痕	
717	B	4A10g	SD11	遺物 15	台部推 7.2	推 6.2	残 1.7	1	反軸陶器	皿		反釉、横ナデ	反釉、横ナデ、回転糸切痕	
718	B	4A10f	SD11		推 9.8	-	残 1.3	1	中国龍泉窯系磁器	青磁皿		青磁釉	青磁釉	
719	B	4A10f	SD11		-	-	残 1.5	1	常滑陶器	甕	2型式	横ナデ	横ナデ	
720	B	4A-	SD11	遺物 44	-	-	残 7.3	1	常滑陶器	甕	2型式	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
721	B	4A10f	SD11		-	推 11.0	残 2.9	4	反軸陶器	甕?		横ナデ、自然釉	回転ヘラケズリ、横ナデ、回転糸切痕	
722	B	4A10g	SD11		-	推 11.0	残 4.8	1	反軸陶器	甕?		横ナデ、自然釉	回転ヘラケズリ、横ナデ、回転糸切痕?	
723	B	4A10f	SD11		-	推 13.6	残 4.9	1	古瀬戸	四耳壺?		反釉、横ナデ	反釉、横ナデ、回転糸切痕?	
724	B	4A10f	SD11		-	推 10.6	残 8.1	2	尾張型	瓶類		横ナデ	回転ヘラケズリ、調整不明	
725	B	4A10f	SD11		-	-	残 6.8	1	常滑陶器	三筋壺		横ナデ、指オサエ	自然釉、沈線、タデケズリ、自然釉	
726	B	4A10f	SD11		-	-	残 7.4	1	古瀬戸	四耳壺		反釉	霏釉	
727	B	4A10g	SD11		-	推 13.4	残 8.3	1	尾張型	瓶類		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
728	B	4A10g	SD11	上層	-	-	残 3.8	1	陶器	平瓦		布目痕	タタキ	
729	B	4A-	SD11	遺物 26	推 28.2	-	残 8.0	1	尾張型	片口鉢		自然釉、横ナデ	自然釉、横ナデ、ヘラケズリ	
730	B	4A-	SD11	遺物 48,51	推 30.8	-	残 7.8	2	尾張型	片口鉢		自然釉、横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
731	B	4A-	SD11	遺物 32	推 32.8	-	残 8.0	1	尾張型	片口鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
732	B	4A10g	SD11		-	-	残 5.1	1	常滑陶器	羽釜		横ナデ	横ナデ	
733	B	4A10f	SD11		-	推 12.2	残 4.0	1	常滑陶器	甕		指ナデとケズリ	指オサエ、砂目	
734	B	4A-	SD11	遺物 6	-	推 10.8	残 3.9	1	尾張型	片口鉢		横ナデ	ヘラケズリ	
735	B	4A10g	SD11		-	-	残 5.2	1	尾張型	片口鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
736	B	4A7g	SD12	上層	15.6~16.5	6.6~7.0	5.1~5.3	11	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
737	B	4A7g	SD12		推 15.6	-	7.6	9	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
738	B	4A8g	SD12		推 16.2	推 7.0	4.9	1	尾張型	山茶碗		自然釉、横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
739	B	4A8g	SD17		推 14.4	-	残 4.2	3	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
740	B	4A7g	SD12		推 14.6	-	残 3.8	4	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
741	B	4A7g	SD12		推 16.6	-	残 3.6	2	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
742	B	4A7g	SD12		推 14.4	-	残 4.5	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
743	B	4A9g	SD12		推 15.6	-	残 4.0	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、自然釉	横ナデ	
744	B	4A7g	SD12		推 14.4	-	残 3.4	5	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
745	B	4A7g	SD12		推 16.8	-	残 3.5	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
746	B	4A9g	SD12		-	7.4	残 3.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、一方向ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
747	B	4A9g	SD12		-	6.0~6.5	残 3.7	1	瀬峰湖西型?	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
748	B	4A8g	SD12		-	6.2	残 3.4	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
749	B	4A8g	SD12		-	-	残 3.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
750	B	4A8g	SD12		-	推 6.4	残 4.8	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
751	B	4A8g	SD12		-	推 6.4	残 2.7	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
752	B	4A7g	SD12		-	-	残 2.4	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、高台剥離、回転糸切痕	
753	B	4A7g	SD12		-	推 6.6	残 2.6	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	
754	B	4A8g	SD12		-	推 7.0	残 2.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ痕、回転糸切痕	

遺物一覧表 (14)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
755	B	4A8g	SD12	-	-	推 6.6	残 3.6	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
756	B	4A8g	SD12	-	-	推 7.0	残 2.5	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、墨書	
757	B	4A8g/7g	SD12	-	8.0～8.2	4.2～4.3	2.2	2	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
758	B	4A7g	SD12	-	-	-	-	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
759	B	4A7g	SD12	-	8.0	4.6	2.1	3	尾車型	小皿		自然袖、横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
760	B	4A7g	SD12	-	推 7.6	-	残 1.4	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ	
761	B	4A7g	SD12	-	-	推 14.8	残 8.8	1	須臾器	高杯		横ナデ、自然袖	横ナデ	
762	B	4A8g	SD12	-	推 9.6	推 3.6	3.8	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ	
763	B	4A7g	SD12	-	推 5.2	5.2	残 3.4	1	須臾器	高杯	岩崎 17 号窯式期	横ナデ	横ナデ	
764	B	4A7g	SD12	-	-	-	残 2.7	1	陶器	丸瓦		布目痕	砂目?、ヘラケズリ	
765	A	4A-	SD33	北壁	15.3	7.4	4.8	2	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
766	A	4A6e	SD33	遺物 25	14.9	7.5	5.6	4	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
767	A	4A6e	SD33	遺物 28	15.0	6.5	4.8	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
768	A	4A6d	SD33	遺物 11	推 14.8	6.5	5.0	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
769	A	4A6e	SD33	遺物 24	推 15.4	推 7.4	5.3	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
770	A	4A6e	SD33	遺物 17	推 15.6	推 7.4	5.2	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
771	A	4A6e	SD33	遺物 14	推 15.0	推 6.2	5.1	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
772	A	4A6e	SD33	遺物 12	推 16.0	推 7.4	5.3	3	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
773	A	4A6e	SD33	遺物 38	推 16.4	-	残 3.2	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
774	A	4A6e	SD33	遺物 16	推 15.4	-	残 4.6	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
775	A	4A6e	SD33	-	推 15.4	-	残 3.7	3	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
776	A	4A6e	SD33	遺物 20	-	8.2	残 3.4	1	尾車型?	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
777	A	4A6e	SD33	遺物 33	-	6.6	残 3.2	1	東遷型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
778	A	4A6e	SD33	遺物 37	-	6.2	残 2.4	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
779	A	4A6e	SD33	遺物 21	-	7.3	残 2.7	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
780	A	4A6d	SD33	遺物 10	-	6.5	残 2.6	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
781	A	4A6e	SD33	遺物 29	-	6.5	残 2.4	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
782	A	4A6e	SD33	遺物 26	-	7.2	残 2.1	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
783	A	4A6e	SD33	遺物 36	-	6.8	残 3.4	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
784	A	4A6e	SD33	遺物 30	-	7.0	残 4.4	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
785	A	4A6e	SD33	遺物 25	-	推 6.4	残 3.4	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
786	A	4A6e	SD33	遺物 7	-	推 6.6	残 2.9	1	渾葉湖西型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
787	A	4A6e	SD33	遺物 31	-	8.0	残 2.2	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
788	A	4A6e	SD33	遺物 43	-	推 6.6	残 3.7	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
789	A	4A6e	SD33	遺物 40	-	推 6.4	残 2.7	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
790	A	4A6e	SD33	遺物 23	-	推 7.4	残 2.3	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
791	A	4A6e	SD33	遺物 43	-	推 6.6	残 1.8	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
792	A	4A6e	SD33	遺物 25	8.8～9.0	4.3～4.5	2.3	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕、墨書	
793	A	4A6e	SD33	遺物 5	7.8	4.4	2.1	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕のち板状丘痕	
794	A	4A6e	SD33	遺物 9	7.8	4.2	2.0	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
795	A	4A6e	SD33	-	推 7.8	推 4.4	1.9	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕のち板状丘痕	
796	A	4A6e	SD33	遺物 22	推 9.2	-	残 2.0	1	尾車型	小皿		横ナデ	横ナデ	
797	A	4A6e	SD33	遺物 5	-	-	残 3.6	1	尾車型?	片口鉢		横ナデ	横ナデ	
798	A	4A6e	SD33	遺物 3	推 12.0	-	残 8.1	1	尾車型?	蓋		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
799	A	4A6e	SD33	遺物 41	推 28.2	-	残 8.0	1	尾車型	片口鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
800	A	4A6e	SD33	遺物 3	推 28.2	-	残 5.4	1	尾車型	片口鉢		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
801	Ab	4A5b	SD56	遺物 4	推 15.6	-	残 4.8	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	
802	Ab	4A6b	SD56	-	推 16.0	-	残 3.9	2	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
803	Ab	4A6b	SD56	-	推 16.2	-	残 3.7	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
804	Ab	4A6b	SD56	-	推 15.8	-	残 3.4	2	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
805	Ab	4A6b	SD56	-	推 18.6	-	残 3.3	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
806	Ab	4A6b	SD56	遺物 2	推 16.8	-	残 3.7	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
807	Ab	4A6b	SD56	-	推 15.4	-	残 3.9	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
808	Ab	4A6b	SD56	-	推 14.0	-	残 4.1	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
809	Ab	4A6b	SD56	-	推 15.6	-	残 3.6	1	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
810	Ab	4A5b	SD56	-	推 16.4	-	残 3.8	1	東遷型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
811	Ab	4A6b	SD56	-	-	7.1	残 3.6	2	尾車型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切痕	

遺物一覧表 (15)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
812	Ab	4A6b	SD56		-	7.5	残2.8	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
813	Ab	4A6b	SD56		-	7.3	残2.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、破損後スス付着、モミミ痕、回転糸切痕	
814	Ab	4A5b	SD56		-	推8.0	残4.3	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
815	Ab	4A6b	SD56	遺物 9	-	推7.4	残3.1	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
816	Ab	4A6b	SD56	遺物 6	-	推6.4	残2.1	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
817	Ab	4A6b	SD56		-	7.4	残3.1	3	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
818	Ab	4A6b	SD56	遺物 14	-	7.2	残3.5	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
819	Ab	4A5b	SD56		-	推6.8	残2.4	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
820	Ab	4A6b	SD56		-	推7.2	残2.3	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
821	Ab	4A6b	SD56	遺物 5	9.0	4.5	2.9	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
822	Ab	4A6b	SD56		推8.0	推5.6	2.0	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
823	Ab	4A6b	SD56		8.2	4.1	2.3	1	尾環型	小皿		横ナデ、横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
824	Ab	4A6b	SD56		推8.8	推5.6	2.0	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
825	Ab	4A6b	SD56		推8.2	推4.5	2.2	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
826	Ab	4A6b	SD56		推7.6	推4.5	2.1	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
827	Ab	4A6b	SD56		-	4.0	残1.3	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
828	Ab	4A6b	SD56		-	推4.4	残1.8	1	土師器	ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	赤色系
829	Ab	4A6b	SD56		推13.6	推6.4	3.1	1	土師器	ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	白色系
830	Ab	4A6b	SD56		-	-	残0.9	1	中国産磁器	白磁碗		白磁釉	白磁釉	
831	Ab	4A6b	SD56		-	-	残1.5	1	尾環型	山茶碗		横ナデ?	横ナデ?	加工白盤
832	Ab	4A6b	SD56		-	-	残1.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ?	横ナデ?	加工白盤
833	Ab	4A6b	SD56		-	-	残1.1	1	尾環型	山茶碗		横ナデ?	横ナデ?	加工白盤
834	Ab	4A6b	SD56		-	-	残7.2	1	常滑陶器	甕	2型式	横ナデ、指オサエ	横ナデ	
835	Ab	4A6b	SD56		-	-	残3.8	1	常滑陶器	甕	2型式	横ナデ	横ナデ	
836	Ab	4A6b	SD56		推23.2	-	残7.7	15	土師器	南伊勢米鍋		横ナデ、ハケ	横ナデ、スス付着、指オサエ	
837	Ab	4A6b	SD56	遺物 11	推12.0	-	残7.3	1	常滑陶器	短頸壺	2型式	横ナデ、指ナデ	横ナデ、自然釉、ヘラケズリ	
838	Ab	4A5b	SD56		-	-	残7.5	1	常滑陶器	3筋壺	2型式	横ナデ	自然釉、横ナデ	
839	Ab	4A6b	SD56	遺物 1	推27.6	-	残7.0	1	常滑陶器	羽釜	2型式	横ナデ	自然釉、横ナデ	
840	B	4A10j	SD04		-	推3.6	残2.5	1	東瀬型	山茶碗		一方肩ナデ、横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
841	B	4A10j	SD04		-	推4.0	残1.9	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
842	B	4A10i	SD04		-	推4.6	残1.3	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
843	B	4A10j	SD04		-	推4.6	残1.4	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
844	B	4A10j	SD04		-	-	残2.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
845	B	4A10j	SD04		-	-	残4.5	2	古瀬戸	天目茶碗	後IV期新段階	灰釉	下半露胎	
846	B	4A10j	SD04		-	-	残2.3	1	古瀬戸	天目茶碗	後IV期新段階	灰釉、下半露胎	灰釉、下半露胎	
847	B	4A8j	SD04		推11.6	-	残2.0	1	古瀬戸	縁袖小皿	後IV期新段階	灰釉、下半露胎	灰釉、下半露胎	
848	B	4A8j	SD04		-	-	残2.6	1	古瀬戸	通縁大皿	後III期	灰釉	灰釉	
849	B	4A10j	SD04		-	-	残1.6	1	古瀬戸	折縁深皿	後III期	灰釉	灰釉	
850	B	4A8j	SD04		-	-	残3.3	1	古瀬戸	盤類	後IIかIII期	灰釉	下半露胎	
851	B	4A10j	SD04		-	-	残3.6	1	常滑陶器	甕		横ナデ	横ナデ	
852	B	4A7j	SD04		-	-	残2.0	1	中国産茶碗	青磁割花文碗		青磁釉	青磁釉	
853	B	4A10j	SD04		推13.8	-	残2.0	1	土師器	調整皿		横ナデ	横ナデ	
854	B	4A10j	SD04		-	推7.4	残1.8	1	中国産茶碗	青磁碗		青磁釉、輪売げ	下半露胎	
855	B	4A10j	SD04		推9.0	-	残1.5	2	土師器	非ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ	
856	B	4A7j	SD04		推11.0	-	残2.3	1	中国産茶碗	青磁瓶?		青磁釉	青磁釉	
857	B	4A10j	SD04		-	-	残1.2	1	土師器	内嚢型切差		横ナデ	横ナデ	
858	B	4A8i	SD05		推14.8	-	残2.5	1	尾環型	山茶碗		横ナデ、スス付着	横ナデ	
859	B	4A8i	SD05		推13.6	-	残2.8	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ、自然釉	横ナデ	
860	B	4A8i	SD05		-	推6.0	残2.2	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、高台はじめかなし	
861	B	4A8i	SD05		推8.4	推4.6	2.0～2.1	1	尾環型	小皿	後IV期古段階	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
862	B	4A8i	SD05		推11.6	-	残3.4	1	古瀬戸	天目茶碗		灰釉	灰釉	

遺物一覧表 (16)

番号	区	グリッド	遺構	取上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
863	B	4A8j	SD05		-	-	残 4.6	1	古瀬戸	柄付口	中期	灰釉	灰釉、うすい灰釉	
864	B	4A8j	SD07		-	-	残 3.1	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
865	B	4A8k	SD07		推 10.4	5.8	3.1	1	尾張型	山茶碗		重ね焼き痕、自然釉	横ナデ、回転系切痕	
866	B	4A8j	SD07		-	-	残 2.2	1	古瀬戸	縁袖皿	後Ⅳ附古段階	灰釉	下半露胎	
867	A	4A7e	SD08		推 15.4	6.8	5.7	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
868	B	4A7e	SD08		推 15.2	7.0	4.9	1	尾張型	山茶碗		横ナデ、モミ銀、回転系切痕	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
869	B	4A7g	SD08		推 13.8	7.6	5.0	4	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
870	B	4A8h	SD08		推 8.4	4.0	2.5	1	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
871	B	4A8h	SD08		推 11.4	推 3.8	3.6	4	東濃型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
872	B	4A7h	SD08		推 3.6	-	残 2.6	1	東濃型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
873	B	4A10h	SD08		推 4.0	-	残 2.7	1	東濃型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
874	A	4A9h	SB08		推 19.0	-	残 3.9	1	古瀬戸	平碗	後Ⅳ附古段階	灰釉	灰釉	
875	A	4A8h	SB08		-	4.5	残 1.3	1	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅱ期	灰釉	露胎	
876	A	4A8h	SB08		-	3.0	残 1.5	2	古瀬戸	小天目茶碗	後Ⅳ附古段階	灰釉、下半露胎袖ふきとり	灰釉、下半露胎、回転系切痕	
877	A	4A8h	SB08		推 12.4	5.9	3.0	2	古瀬戸	縁袖皿	後Ⅰ期	灰釉、下半露胎袖ふきとり	灰釉、下半露胎	
878	A	4A7d8d	SB08		推 13.4	-	残 2.0	1	古瀬戸	縁袖皿	中Ⅳ期	灰釉	灰釉、露胎	
879	A	4A9h	SB08		-	-	残 4.0	1	古瀬戸	瓶頸?		灰釉	灰釉、下半露胎、回転系切痕	
880	A	4A10h	SB08	南トレンチ	-	推 6.2	残 1.1	1	古瀬戸	小壺	中期	灰釉	灰釉、下半露胎、回転系切痕	
881	A	4A7h	SB08		推 10.0	-	残 3.0	1	古瀬戸	小鉢	後Ⅲ～Ⅳ期古段階	横ナデ	横ナデ	
882	A	4A7d	SD08		-	-	残 5.2	2	常滑陶器	羽釜	2型式	横ナデ、自然釉	横ナデ	
883	B	4A8h	SD08		-	-	残 1.5	1	常滑陶器	甕	2型式	横ナデ、自然釉	横ナデ	
884	A	4A-	SD08		推 11.0	-	残 5.2	1	古瀬戸	香炉	後Ⅰ～Ⅱ期	灰釉	灰釉、下半露胎	
885	A	4A8h	SB08		-	-	残 2.7	1	古瀬戸	香炉	後Ⅱ～Ⅲ期	露胎	露胎、下半露胎	
886	A	4A8h	SB08		推 11.4	-	残 2.5	1	古瀬戸	釜か土瓶	後Ⅲ～Ⅳ期	露胎	露胎	
887	A	4A-	SD08		推 17.0	-	残 3.0	1	中国産磁器	白磁玉轆口		白磁釉	白磁釉	
888	B	4A8h	SD08		-	-	残 3.1	1	中国産系窯系磁器	青磁蓮弁文碗		青磁釉	青磁釉	
889	B	4A8h	SD08		-	7.6	残 3.2	2	灰釉陶器	碗		灰釉	灰釉、下半露胎、回転系切痕	
890	B	4A8h	SD08		-	-	残 2.1	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
891	B	4A10i	SD10		-	推 9.0	残 1.9	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
892	B	4A10i	SD10		-	推 7.0	残 2.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
893	B	4A10i	SD10		推 8.2	-	残 2.0	1	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ	
894	B	4A10i	SD10		-	推 4.6	残 1.3	1	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転系切痕のちナデ	
895	B	4A7i	SD10		-	-	残 2.9	1	古瀬戸	折縁深皿	後Ⅳ附古段階	灰釉	灰釉	
896	B	4A7i	SD10		推 20.4	-	残 3.1	1	土師器	内轆型羽釜		横ナデ	横ナデ、スス、ハケ	
897	B	4A10i	SD10		-	-	残 4.2	1	土師器	甕		-	指オサエのみ	
898	B	4A8j	SD14		推 17.4	-	残 3.0	1	尾張型	山茶碗		スス付蓋、横ナデ	横ナデ	
899	B	4A8j	SD14		推 14.8	-	残 3.2	1	東濃型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
900	B	4A8j	SD14		推 14.6	-	残 3.0	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
901	B	4A9j	SD14		-	-	残 3.0	1	尾張型?	鉢		横ナデ	横ナデ	
902	B	4A8j	SD14		-	推 4.8	残 1.6	1	尾張型	小碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
903	B	4A8j	SD14		推 7.8	3.2	2.7	1	尾張型	小碗		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
904	B	4A9k	SD14		推 3.6	推 3.6	2.5	1	尾張型	小碗		横ナデ	横ナデ	
905	B	4A8j	SD14		8.8	4.1	2.2	1	尾張型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
906	B	4A9j	SD14		-	-	残 1.6	1	中国産磁器	白磁皿		白磁釉	白磁釉	
907	B	4A8k	SD14		-	-	残 1.6	1	白色軟質陶器	碗		横ナデ	横ナデ	
908	B	4A7i	SD13		-	-	残 4.0	1	古瀬戸	花瓶	後Ⅲ～Ⅳ期	露胎、ナデ	灰釉	
909	B	4A9i	SD13		-	-	残 1.8	1	中国産系窯系磁器	青磁蓮弁文鉢		青磁釉	青磁釉	
910	B	4A10j	SD15		-	-	残 1.7	1	須臾器	杯身		横ナデ	横ナデ	
911	B	4A10i	SD16		推 10.2	推 9.6	残 3.0	1	東濃型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
912	B	4A8h	SD18		推 15.8	-	残 3.9	3	尾張型	山茶碗		スス付蓋、横ナデ	横ナデ	
913	B	4A8h	SD18		推 16.0	-	残 2.3	1	中国産磁器	白磁碗		白磁釉	白磁釉	
914	B	4A8h	SD18		-	-	残 3.3	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転系切痕	
915	B	4A8i	SD17		推 17.8	-	残 3.5	2	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
916	B	4A8i	SD17	遺物 4	-	7.3	残 5.0	1	尾張型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	
917	B	4A9h	SD17		-	7.3	残 2.6	1	灰釉陶器	碗		灰釉	横ナデ、回転系切痕	
918	B	4A9h	SD17		-	7.2	残 2.5	1	尾張型	山茶碗		スス付蓋、横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転系切痕	

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
919	B	4A8i	SD17		-	5.5	残2.5	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕、墨書	
920	B	4A8i	SD17		推 8.2	4.2	2.2	1	尾環型	小皿		自然釉、横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
921	B	4A8i	SD17		推 8.8	-	残 1.9	1	尾環型	小皿		自然釉、横ナデ	横ナデ	
922	B	4A9i	SD19		-	6.3	残 4.2	1	尾環型	山茶碗		スス付着、横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
923	B	4A8j	SD19		-	8.2	残 2.4	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
924	B	4A8j	SD19		-	推 6.6	残 2.5	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
925	B	4A8k	SD19		-	推 7.8	残 1.9	1	尾環型	山茶碗		一方向ナデ、横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
926	B	4A9i	SD19		-	5.5	残 1.9	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕のち板状圧痕	
927	B	4A8k	SD19		-	推 6.2	残 2.7	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	灰釉、横ナデ	
928	B	4A9j	SD19		-	推 5.8	残 2.1	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ	
929	B	4A8j	SD19		8.6	4.6	2.3	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
930	B	4A9j	SD19		-	-	残 4.4	1	尾環型	山茶碗		自然釉、横ナデ	横ナデ	
931	B	4A9j	SD19		-	4.1	残 1.5	1	尾環型	小碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
932	B	4A8j	SD19		推 8.4	推 4.4	2.7	1	尾環型	小碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
933	B	4A8j	SD19		-	4.2	残 1.7	1	尾環型	小皿		自然釉、横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
934	B	4A9i	SD19		-	3.8	残 1.7	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕のち板状圧痕	
935	B	4A8k	SD19		推 18.8	-	残 3.8	1	中国産磁器	白磁玉縁口縁碗		白磁釉	白磁釉	
936	A	4A8e	SD24		-	-	残 3.6	1	古瀬戸	折縁深皿	後Ⅰ～Ⅱ期	灰釉	灰釉	
937	A	4A8c	SD29		-	6.8	残 1.9	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
938	A	4A6d	SD29		-	推 5.6	残 2.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
939	A	4A6c	SD29		-	-	残 3.3	1	土師器	南伊勢系鍋		横ナデ	横ナデ	
940	A	4A7c	SD29		-	-	残 2.4	1	古瀬戸	祖母尊等	後期	鉄釉	鉄釉	
941	A	4A8c	SD30		推 10.8	-	残 2.5	1	古瀬戸	縁釉小皿	後Ⅱ～Ⅲ期	鉄釉、下半露胎	鉄釉、下半露胎	
942	A	4A9c	SD31		-	推 7.2	残 2.0	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
943	A	4A9c	SD31		-	推 6.0	残 1.0	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
944	A	4A6c	SD32		推 14.6	-	残 2.0	1	尾環型	山茶碗		自然釉、横ナデ	横ナデ	
945	A	4A6c	SD32		推 15.6	-	残 2.8	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
946	A	4A7c	SD32		推 10.0	-	残 1.3	1	東瀬型	小皿		横ナデ	横ナデ	
947	A	4A7c	SD32		-	-	残 1.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
948	A	4A5c	SD32		-	推 7.8	残 2.0	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
949	A	4A6c	SD32		-	推 5.0	残 1.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
950	A	4A6c	SD32		-	-	残 1.3	1	土師器	南伊勢系鍋		横ナデ	横ナデ	
951	B	4A8c	SD32		-	推 4.8	残 1.9	1	中国産磁器	白磁碗		白磁釉	露胎ヘラケズリ	
952	A	4A6c	SD32		-	推 6.5	残 6.5	1	須重器	高杯		横ナデ	横ナデ	
953	A	4A6c	SD32		推 22.6	-	残 3.0	1	土師器	内髹型羽釜		横ナデ	横ナデ、横ハケ	
954	A	4A6e	SD35		推 9.4	-	残 2.1	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ	
955	A	4A6e	SD35		-	推 6.6	残 2.5	1	(瀬戸)			横ナデ、一方向ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
956	A	4A6e	SD35		-	推 6.6	残 2.0	1	尾環型	山茶碗		横ナデ、一方向ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
957	A	4A6d	SD39		-	7.8	残 3.9	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
958	A	4A6d	SD39		-	推 5.6	残 1.4	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
959	A	4A6d	SD39		-	-	残 3.2	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
960	A	4A6d	SD39		-	-	残 2.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
961	A	4A6c	SD39		推 8.0	推 5.2	1.9	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
962	A	4A6d	SD39		推 8.4	-	残 2.3	2	土師器	南伊勢系皿?		横ナデ、調整不明、スス付着	横ナデ、調整不明、スス付着	
963	A	4A6f	SD39		-	-	残 7.5	1	古瀬戸	盤類	後Ⅰ～Ⅱ期	灰釉	灰釉、下半露胎	
964	A	4A6c	SD36		推 14.6	-	残 2.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
965	A	4A8c	SD36		-	-	残 2.0	1	中国産紫砂系磁器	青磁碗		青磁釉	青磁釉、高台内露胎	
966	A	4A6c	SD36		-	推 4.0	残 1.6	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ、一方向ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
967	A	4A6c	SD40		推 8.6	推 5.0	残 2.2	1	尾環型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
968	A	4A7c	SD40		-	-	残 1.6	1	古瀬戸	折縁深皿	後Ⅰ期	灰釉	灰釉	
969	A	4A7c	SD40		-	-	残 5.2	1	古瀬戸	三(四)耳壺	後Ⅰ期 前Ⅰa期	横ナデ、灰釉	横ナデ、灰釉	
970	A	4A6d	SD41		-	推 7.2	残 2.6	1	尾環型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕、回転糸切痕	
971	A	4A6e	SD41		-	推 5.0	残 1.5	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミミ痕	
972	A	4A6e	SD41		-	-	残 1.3	1	土師器	皿		横ナデ	横ナデ、スス付着	

遺物一覧表 (18)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
973	Ab	4A6b	SK57	遺物 7	推 15.8	8.0	5.3	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀のち版	
974	Ab	4A6b	SK57	遺物 9	-	6.0	残 4.0	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ、自然釉	横ナデ、回転糸切銀	
975	B	4A10j	P19		-	推 5.8	残 1.4	1	土師器	ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀、一部黒色化	
976	C	4j	SX12		2.5	-	1.0	1	土師器	非ロクロ調整皿		未調整?	指オサエのみ	
977	Ab	4A-	SX04	第1層	推 31.0	-	残 7.1	1	常滑陶器	鉢	2 か 3 型式	自然釉	自然釉、横ナデ	
978	Ab	4A-	SX04	第1層	推 28.6	-	残 9.7	1	常滑陶器	鉢	2 型式	自然釉、横ナデ	横ナデ、スズ付着、ヘラケズリ	
979	Ab	4A-	SX04	第1層	推 30.4	推 20.0	9.2	1	常滑陶器	鉢	3 型式	自然釉	横ナデ、ヘラケズリ、横ナデ、砂目	
980	A	4A9d	SX05		7.4 ~ 7.6	4.8 ~ 4.9	2.3	1	土師器	ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
981	A	4A9d	SX05		7.4 ~ 7.5	5.5	1.6	1	土師器	ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
982	A	4A9d	SX05		-	-	残 1.4	1	常滑	転用加口戸皿		-	自然釉	
983	A	4A9d	SX05		-	-	0.3	1	ガラス	小玉		-	-	
984	A	4A9d	SX05		-	-	0.3	1	ガラス	小玉		-	-	
985	A	4A9d	SX06		-	-	0.3	1	ガラス	小玉		-	-	
986	A	4A9d	SX07		-	-	0.3	1	ガラス	小玉		-	-	
987	B	4A9k	P13		-	-	残 4.3	1	古瀬戸	折縁深皿	中川期	灰釉	-	
988	B	4A9j	P18		-	推 6.6	残 3.1	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
989	B	4A10j	P20		-	推 6.6	残 3.1	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
990	B	4A10j	P31		推 8.0	-	残 1.5	1	土師器	ロクロ調整皿?		横ナデ	横ナデ	
991	B	4A10h	P 34		-	推 4.0	残 2.5	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
992	B	4A9h	P 37		-	推 6.0	残 1.4	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
993	B	4A8h	P40		(推 14.0)	-	残 1.3	1	中国産磁器	白磁皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
994	B	4A8h	P40		-	推 7.0	残 2.1	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ、自然釉	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
995	B	4A7h	P44		-	推 6.0	残 2.3	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
996	B	4A8i	P45		-	-	残 3.2	1	土師器	内轆型羽釜		横ナデ、スズ付着	横ナデ、スズ付着	
997	B	4A9h	P47		-	推 4.4	残 1.1	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
998	B	4A9k	P48		-	推 5.0	残 2.4	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
999	B	4A8i	P56		-	-	残 2.7	1	常滑陶器	真鍮壺		横ナデ	横ナデ	
1000	B	4A10j	P66		推 8.6	推 5.4	1.6 ~ 1.7	1	東瀬型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
1001	B	4A9j	P72		-	-	残 1.9	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
1002	B	4A8h	P73		推 7.0	-	残 1.4	1	土師器	非ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ	
1003	B	4A8h	P74		-	推 8.0	残 2.7	1	尾翼型	調整皿		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀	
1004	B	4A8j	P86		推 15.2	-	残 2.8	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、自然釉、回転ヘラケズリ	
1005	B	4A8j	P86		推 22.2	-	残 4.0	1	須臾路	杯蓋		横ナデ、ハケ	横ナデ	
1006	B	4A9g	P50		推 25.0	-	残 8.7	1	土師器	鉢		横ナデ、指オサエ	横ナデ、タタキ、沈線	
1007	B	4A8i	P53		推 31.2	-	残 3.8	1	須臾路	瓶?		横ナデ、ヘラケズリ	横ナデ、タタキ	
1008	A	4A8c	P147		-	-	残 2.8	1	尾翼型	瓶?		横ナデ	ヘラケズリ、横ナデ	
1009	A	4A6c	P147		-	-	残 1.9	1	土師器	内轆型羽釜		横ナデ	横ナデ、スズ付着	
1010	A	4A6d	P159		-	-	残 1.6	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、スズ付着	加工戸蓋
1011	A	4A6e	P168		-	推 9.0	残 1.8	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
1012	A	4A6e	P168		-	推 6.2	残 2.0	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、磨減、回転糸切銀	
1013	A	4A6d	P206		推 14.6	-	残 3.8	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
1014	A	4A6d	P206		-	7.0	残 2.7	2	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、スズ付着、回転糸切銀	
1015	A	4A6d	P157		-	推 6.6	残 1.6	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ、一方方向ナデ	横ナデ、回転糸切銀、モミ銀	
1016	A	4A6d	P161		-	-	残 1.8	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
1017	A	4A6e	P166		推 8.8	-	残 1.6	1	尾翼型	小皿		横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
1018	A	4A6e	P169		-	-	残 1.5	1	須臾路	杯身		横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	
1019	A	4A6e	P170		-	-	残 1.8	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
1020	A	4A6e	P171		-	-	残 1.8	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ	
1021	A	4A6d	P172		-	-	残 1.7	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
1022	A	4A9f	P188		-	推 5.4	残 1.9	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀、回転糸切銀、墨書	
1023	A	4A9e	P190		-	推 4.8	残 1.5	1	尾翼型	小碗		横ナデ	横ナデ、モミ銀	
1024	A	4A9f	P192		-	-	残 1.2	1	須臾路	杯身?		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	
1025	A	4A9d	P194		-	推 4.6	残 1.8	1	東瀬型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀、モミ銀	
1026	A	4A9e	P196		-	推 7.2	残 1.4	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切銀	

遺物一覧表 (19)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 徑	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
1027	A	4A6c	P220		-	推 7.6	残 2.5	1	尾翼型	山茶碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、モミ痕、スス付着	
1028	A	4A9e	P198		-	推 7.4	残 1.7	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	スス付着	
1029	A	4A9e	P197		-	-	残 2.6	1	古瀬戸	香炉?		灰釉	灰釉	
1030	Ab	4A6c	P287		-	-	残 1.1	1	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅳ期新鋭舊古	鉄釉	鉄釉	
1031	B	4A8b	P297		推 7.4	推 3.4	1.5	1	東瀬型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1032	C	SK65		遺物 3	7.7 ~ 8.0	4.4 ~ 4.5	2.2	1	尾翼型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1033	Ab	4A6b	SK57		-	-	残 12.1	1	常滑陶器	三筋壺		横ナデ、自然釉	横ナデ、自然釉	
1034	A	4A-	南トレンチ		-	推 7.0	残 2.5	1	白釉乾餾器	碗?		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1035	A	4A7c	SK38		推 14.4	推 7.2	1.9	1	灰釉陶器	皿		灰釉	鉄釉、回転ヘラケズリ	
1036	B	4A-	SK14	遺物 8	7.8 ~ 8.2	4.2	2.1	1	尾翼型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、墨書	
1037	Ab	4A6b	西トレンチ		推 8.0	4.0	1.7	1	尾翼型	小皿	内面漆跡あり	横ナデ、回転糸切痕	横ナデ、回転糸切痕	
1038	C	4I6p	南トレンチ		7.7	4.8	7.7	2	東瀬型	小皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1039	A	4A9c	SK37		推 9.6	-	残 4.2	2	肥前陶器	丸碗		灰釉	灰釉	
1040	A	4A9c	SK37	枠内	推 9.2	-	残 4.5	1	肥前陶器	丸碗		灰釉	灰釉	
1041	A	4A9c	SK37	枠内	推 12.2	-	残 4.1	1	瀬戸陶器	丸碗	第 8・9 小期	透明釉	透明釉、呉須絵	生焼け
1042	A	4A-	SK37	枠内	-	5.4	残 3.1	1	瀬戸磁器	広東茶碗	第 10 小期	透明釉、呉須絵	透明釉、呉須絵	
1043	A	4A8c	SK37		-	6.0	残 2.9	3	瀬戸磁器	広東茶碗	第 10 小期	透明釉、呉須絵	透明釉、呉須絵、高台端部露胎	
1044	A	4A9e	SK37		-	5.9	残 3.0	1	瀬戸系磁器?	広東茶碗	第 9 小期	透明釉、呉須絵	透明釉、呉須絵、高台端部露胎	
1045	A	4A9c	SK37		推 9.8	-	残 3.2	1	肥前磁器	丸碗		白磁釉	口縁端部鉄釉、白磁釉	
1046	A	4A9c	SK37		-	推 4.4	残 3.6	1	肥前磁器	丸碗		透明釉	透明釉、呉須絵、高台端部露胎	
1047	A	4A9c	SK37	枠内	-	4.0	残 2.3	1	瀬戸陶器	再興龍記蓋	第 9 小期以降	長石釉鉄絵	長石釉鉄絵、高台端部露胎	
1048	A	4A8c	SK37	枠内	推 8.0	-	残 4.0	1	瀬戸陶器	小碗	第 10・11 小期	透明釉	透明釉、呉須絵	
1049	A	4A8c	SK37		-	4.0	残 1.6	1	関西系磁器	箱形湯呑?		透明釉、呉須絵	透明釉、呉須絵、高台端部露胎	
1050	A	4A9c	SK37	枠内	-	7.6	残 5.6	1	瀬戸陶器	徳利	第 1 ~ 4 小期	露胎	露胎、高台端部露胎	
1051	A	4A9c	SK37		-	-	残 6.1	1	瀬戸陶器	搦鉢	第 10 小期	鉄釉	鉄釉、ヘラケズリ、煎釉	
1052	A	4A9c	SK37		-	-	残 4.7	1	瀬戸陶器	搦鉢	第 9 小期	鉄釉	鉄釉	
1053	A	4A8c	SK37		-	推 14.4	残 3.4	1	瀬戸陶器	こね鉢	第 10 小期	灰釉、トチン痕	灰釉、露胎ヘラケズリ	
1054	A	4A9c	SK37	枠内	-	推 17.4	残 11.6	1	瀬戸陶器	火鉢	第 10・11 小期	鉄釉、錆釉、スス状付着物	うのふ釉、鉄釉、回転ヘラケズリ、下半露胎	
1055	A	4A9c	SK37		長 22.6	幅 22.2	厚 2.0	6	いぶし瓦	のし瓦		ハナレ砂、ヘラケズリ	ミガキ	
1056	A	4A9c	SK37	枠内	長 28.3	幅 29.0	厚 1.7	1	いぶし瓦	棧瓦		ハナレ砂、ヘラケズリ	ミガキ	
1057	A	4A9c	SK37	枠内	長 27.6	幅 28.3	厚 2.0	3	いぶし瓦	棧瓦		ハナレ砂、ヘラケズリ	ミガキ、ヘラケズリ、刻印	
1058	A	4A9c	SK37		70.8	65.0	69.4	84	常滑赤物	井筒		横ナデ、板ナデ、砂目	横ナデ、板ナデ、砂目	
1059	A	4A9c	SK37		70.0	推 66.0	58.0	103	常滑赤物	井筒		横ナデ、指オサエ	横ナデ、板ナデ、砂目	
1060	A	4A9c	SK37	枠内	66.6	推 64.0	58.0	55	常滑赤物	井筒		横ナデ、指オサエ	横ナデ、板ナデ、砂目	
1061	A	4A9c	SK37		-	推 62.0	55.0	22	常滑赤物	井筒		横ナデ、指オサエ	横ナデ、板ナデ、砂目	
1062	A	4A-	SK39	遺物 2	-	-	残 2.1	1	灰釉陶器	碗		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1063	A	4A-	SK39	遺物 3	-	推 7.6	残 2.5	1	美濃陶器	徳利		露胎	鉄釉、底面露胎袖ふきとり、回転ヘラケズリ	
1064	A	4A-	SK39	遺物 4	推 19.6	-	残 10.0	1	瀬戸陶器	土瓶		透明釉白化粧、口縁部端部露胎	透明釉白化粧、下半露胎、スス付着	
1065	A	4A-	SK39	遺物 5	-	-	-	1	常滑陶器	赤物壺		横ナデ、指オサエ	横ナデ	
1066	B	4A10h	SD01		-	-	残 4.0	1	古瀬戸	天目茶碗	後Ⅳ期古段陶	鉄釉	鉄釉、錆釉	加工戸盤
1067	B	4A10h	SD01		-	3.8	残 1.2	1	美濃陶器	小碗		灰釉	高台端部露胎	加工戸盤
1068	B	4A9h	SD01		-	4.4	残 1.5	1	中国産磁器	白磁碗		白磁釉	下半露胎	加工戸盤
1069	A	4A9h	SD01		7.8	5.2	残 1.7	6	土師器	ロクロ		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕のち板状圧痕、タール付着	
1070	B	4A10h	SD01		推 7.8	4.8	2.1	7	土師器	調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	
1071	B	4A10h	SD01		推 7.6	-	1.8	1	土師器	非ロクロ調整皿		横ナデ	横ナデ	
1072	B	4A10h	SD01		推 25.8	-	残 10.9	1	瀬戸陶器	半胴	第 8・9 小期	鉄釉	鉄釉	
1073	B	4A10h	SD01		-	-	残 5.6	1	中国龍泉窯	青磁碗		青磁釉	野花文	
1074	B	4A9h	SD01		-	-	残 2.9	1	古瀬戸	鉏皿	後Ⅰ期	灰釉、下半露胎	下半露胎	
1075	B	4A9h	SD01		-	-	残 2.9	1	瀬戸系陶器	大皿	第 3・4 小期	長石釉	長石釉	
1076	B	4A10h	SD01		-	-	残 2.6	1	瀬戸陶器	搦鉢	第 6 小期	鉄釉	鉄釉	
1077	B	4A9h	SD01		-	推 13.4	残 3.5	1	瀬戸陶器	半胴		鉄釉	下半露胎、横ナデ、回転糸切痕	

遺物一覧表 (20)

番 号	区	グリップ	遺 構	取 上	口 径	底 径	器 高	破片数	種 別	器 種	時 期	内 面	外 面	備 考
1078 B		4A9h	SD01		-	-	残 1.3	6	中国産磁器	白磁碗		白磁釉	露胎	
1079 B		4A9h	SD01	遺物 6	推 15.8	-	7.6	1	土師器	内耳罐		指ナデ	横ナデ、指オサエ、ヘラケズリ	
1080 B		4A10h	SD01		推 29.8	-	残 8.4	22	土師器	焙烙		ハケ、指オサエ	横ナデ、指オサエ、ヘラケズリ、スス付着	
1081 C		4I6r	SK58	枠内	推 8.6	4.0	5.8	1	瀬戸陶器	腰筒湯呑	第 8・9 小期	長石釉	長石釉、鉄釉、高台端部露胎	
1082 C		4I6r	SK58		-	4.3	残 5.1	1	瀬戸陶器	腰筒茶碗	第 9 小期	長石釉	長石釉、鉄釉、高台端部露胎、重ね焼き痕	
1083 C		4I6r	SK58		推 9.2	-	残 4.2	1	瀬戸陶器	丸碗	第 8・9 小期	灰釉、呉須絵	灰釉、呉須絵、高台端部露胎	
1084 C		4I6r	SK58	枠内	推 13.6	6.0	6.5	4	瀬戸陶器	丸碗	第 8 小期	灰釉、呉須絵	灰釉、呉須絵、型打後未調整	
1085 C		4I6r	SK58		2.9	-	1.2	1	土師器	平口クロ		指オサエ	指オサエ	肌色系
1086 C		4J	SK58	枠内	8.0～8.3	4.9	1.7	1	土師器	口口調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	赤色系
1087 C		4I6r	SK58		推 8.3	-	残 1.7	1	土師器	口口調整皿		横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	赤色系
1088 C		4I6r	SK58		推 4.4	-	残 2.2	1	土師器	焙烙		横ナデ	横ナデ	白色系
1089 C		4J	SK58	枠内	推 28.4	-	残 7.0	1	美濃陶器	黄瀬戸鉢	第 7 小期	灰釉、緑釉流し	黄瀬戸釉、緑釉流し	
1090 C		4I6r	SK58		推 11.6	-	残 4.9	1	美濃陶器	黄瀬戸鉢	第 7 小期	灰釉、トチン痕	灰釉、トチン痕	
1091 C		4I6r	SK58		推 20.0	-	残 3.7	1	瀬戸陶器	指鉢	第 6・7 小期	錆釉、指目	錆釉、指目	
1092 C		4I6r	SK58		推 9.4	-	残 5.7	1	瀬戸陶器	半胴	第 8・9 小期	鉄釉	鉄釉	
1093 C		4I6r	SK58		62.8	-	残 34.4	31	常滑赤物	井筒		横ナデ、指オサエ	横ナデ、指オサエ	
1094 A		4A9c	SB26		長 2.5	幅残 1.6	高 0.4	1	石製品	滑石製模造品		-	-	
1095 C		4J7b	SK60		長残 9.0	幅 4.3	高 1.7	1	石製品	砥石		-	-	
1096 A		4A8c	SK37		長残 6.8	幅残 5.8	高 1.3	1	石製品	砥石		-	-	
1097 C		4I6r	SK58	枠内	長 5.5	幅 5.0	高 4.0	1	石製品	砥石		-	-	
1098 C		4J4q	SB64	SK1	長 21.5	幅 7.4	高残 6.7	1	石製品	砥石		-	-	
1099 A		4A-	素土	枠内	長 37.7	幅 36.9	高 8.6	1	石製品	挽臼上臼		-	-	
1100 C		4I6r	SK58	枠内	長 9.7	幅 5.0	厚 0.8	1	木製品	横櫓		-	-	
1101 C		4I6r	SK58	枠内	長残 11.3	幅残 2.6	厚 1.2	1	木製品	結桶底板		-	-	
1102 C		4I6r	SK58	枠内	長残 13.8	幅残 3.5	厚 1.0	1	木製品	曲物桶底板		-	-	
1103 C		4I6r	SK58	遺物 1	長 17.6	幅残 11.5	厚 0.8	1	木製品	結桶底板		-	-	
1104 C		4I6r	SK58	枠内	長 17.4	幅 17.4	厚 1.3	1	木製品	結桶底板		-	-	
1105 C		4I6r	SK58	枠内	長 11.5	幅 1.5	厚 0.3	1	木製品	楔		-	-	
1106 C		4I6r	SK58	枠内	長残 14.7	幅残 6.7	厚 0.5	1	木製品	折敷底板		-	-	
1107 C		4I6r	SK58	枠内	2.6	2.7	6.6	1	竹製品	節板竹管		-	-	
1108 C		4I6r	SK58	枠内	長 18.3	幅 3.2	厚残 1.2	1	木製品	刀子柄部		-	-	
1109 C		4I6r	SK58	枠内	長 13.3	幅 3.7	厚 3.0	1	木製品	刀子柄部		-	-	
1110 C		4A6r	SK58	枠材 9	長残 42.4	幅 10.0	厚 2.3	1	木製品	板材		-	-	
1111 A		4A8c	SK37	枠材 1	長残 45.7	幅 9.8	厚 2.2	1	木製品	井戸側材		-	-	
1112 C		4I6r	SK58	1 段目	-	60.9	残 38.6	1	木製品	結物井筒		ヤリガンナ痕？	ヤリガンナ痕？	
1113 C		4I6r	SK58	2 段目	59.4	63.6	68.2	1	木製品	結物井筒		ヤリガンナ痕？	ヤリガンナ痕？	
1114 C		4I6r	SK58	3 段目	59.6	63.6	68.8	1	木製品	結物井筒		ヤリガンナ痕？	ヤリガンナ痕？	
1115 A		4A9c	SK37	枠材	長 29.1	幅 6.7	厚 1.7	1	木製品	板材		-	-	
1116 A		4A8c	SK37		長残 5.5	幅残 4.7	厚 0.8	1	木製品	横櫓		-	-	
1117 A		4A9e	SK37	遺物 1	長残 4.1	幅残 2.6	厚 0.6	1	木製品	横櫓		-	-	
1118 A		4A8c	SK37	遺物 12	長残 6.3	幅残 4.2	厚 0.8	1	木製品	横櫓		-	-	
1119 A		4A7c	P224		長残 17.6	幅 15.1	高 25.5	1	木製品	柱根		-	-	
1120 A		4A6d	P231		長残 14.8	幅 13.5	高 45.0	1	木製品	柱根		-	-	
1121 C		4J-	SK58	枠内	長 6.5	幅 1.7	高 2.4	1	真鍮製品	煙管		-	-	
1122 C		4J-	SK58	枠内	長 5.1	幅 1.1	高 1.1	1	銅製品	煙管		-	-	
1123 A		4A8c	SK37	遺物 2	長 5.2	幅 1.0	高 1.0	1	真鍮製品	煙管		-	-	
1124 B		4A10f	SD11		長 9.1	幅 3.1	高 1.9	1	鉄製品	刀子		-	-	
1125 C		4I5r	SK11		長 8.1	幅 1.3	高 1.1	1	鉄製品	刀子？		-	-	
1126 B		4A8I9I	SB19		長 5.3	幅 1.0	高 0.9	1	鉄製品	釘		-	-	
1127 C		4I6q	SB60		長残 3.7	幅 1.1	高 1.0	1	鉄製品	釘		-	-	
1128 A		4A6d	P157		長残 3.9	幅 1.3	高 1.1	1	鉄製品	釘		-	-	
1129 B		4A7.8I	SB24		長残 1.6	幅 1.0	高 0.6	1	鉄製品	釘		-	-	
1130 Ab		4A7b	SB54	P1	長残 2.8	幅 0.7	高 0.6	1	鉄製品	釘		-	-	
1131 B		4A9I	P90		長残 2.7	幅 1.0	高 0.7	1	鉄製品	釘		-	-	
1132 C		4I5r4r	SB63		長残 4.1	幅残 4.0	高 2.8	1	鉄滓	船型鉄滓		-	-	
1133 B		4A9K	SB14		長残 1.8	幅 1.9	高 1.5	1	鉄滓	流動滓		-	-	
1134 B		4A9K	SB14		長残 1.5	幅残 1.5	高 1.1	1	鉄滓	流動滓		-	-	
1135 A		4A9c	SD22		長残 4.1	幅残 2.8	高 1.6	1	鉄滓	船型鉄滓		-	-	
1136 B		4A7I	SB05		長 1.6	幅 1.2	高 0.9	1	鉄滓	流動滓		-	-	
1137 B		4A8I	SD19		長 2.3	幅 1.7	高 1.1	1	鉄滓	流動滓		-	-	

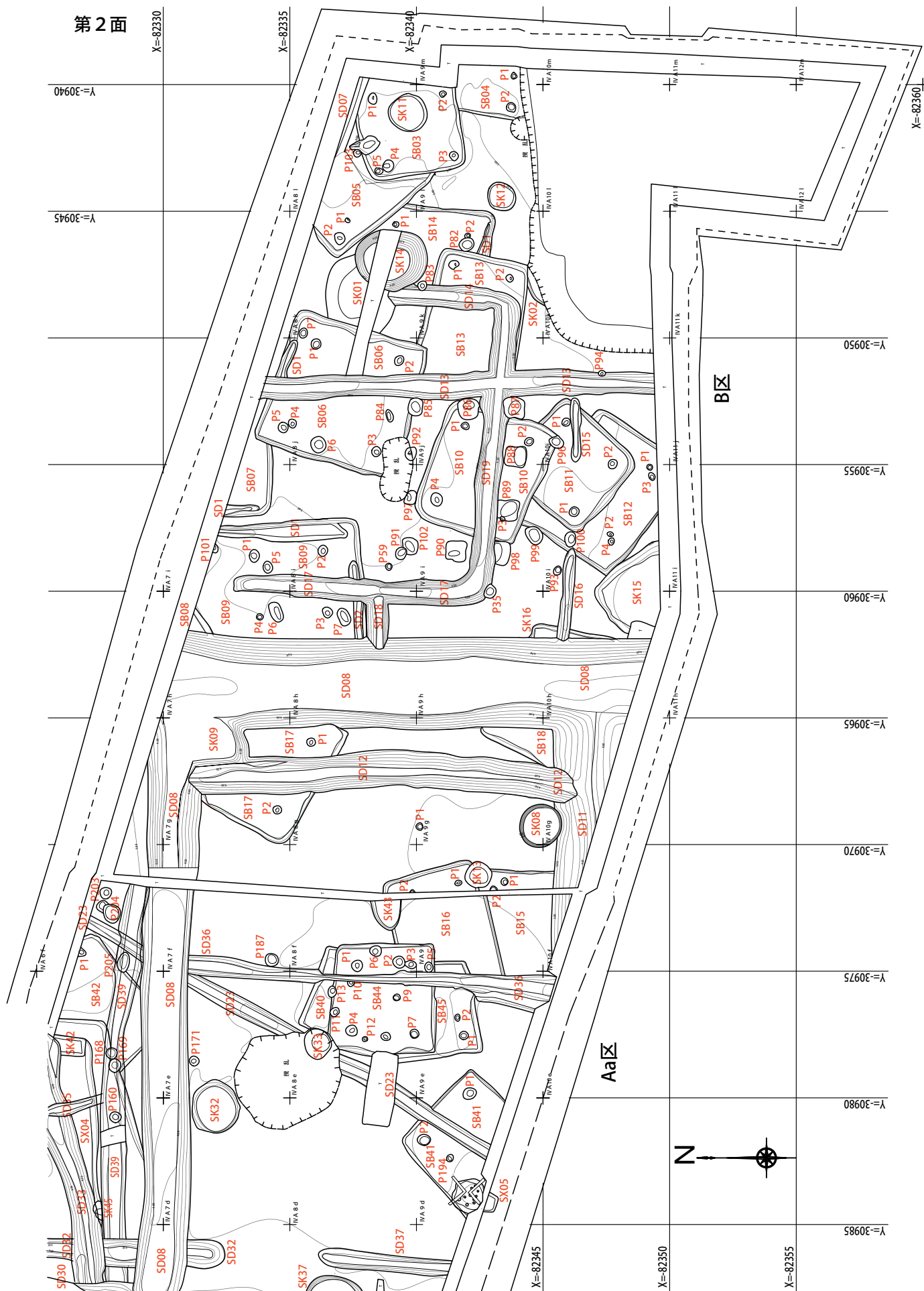


第1面

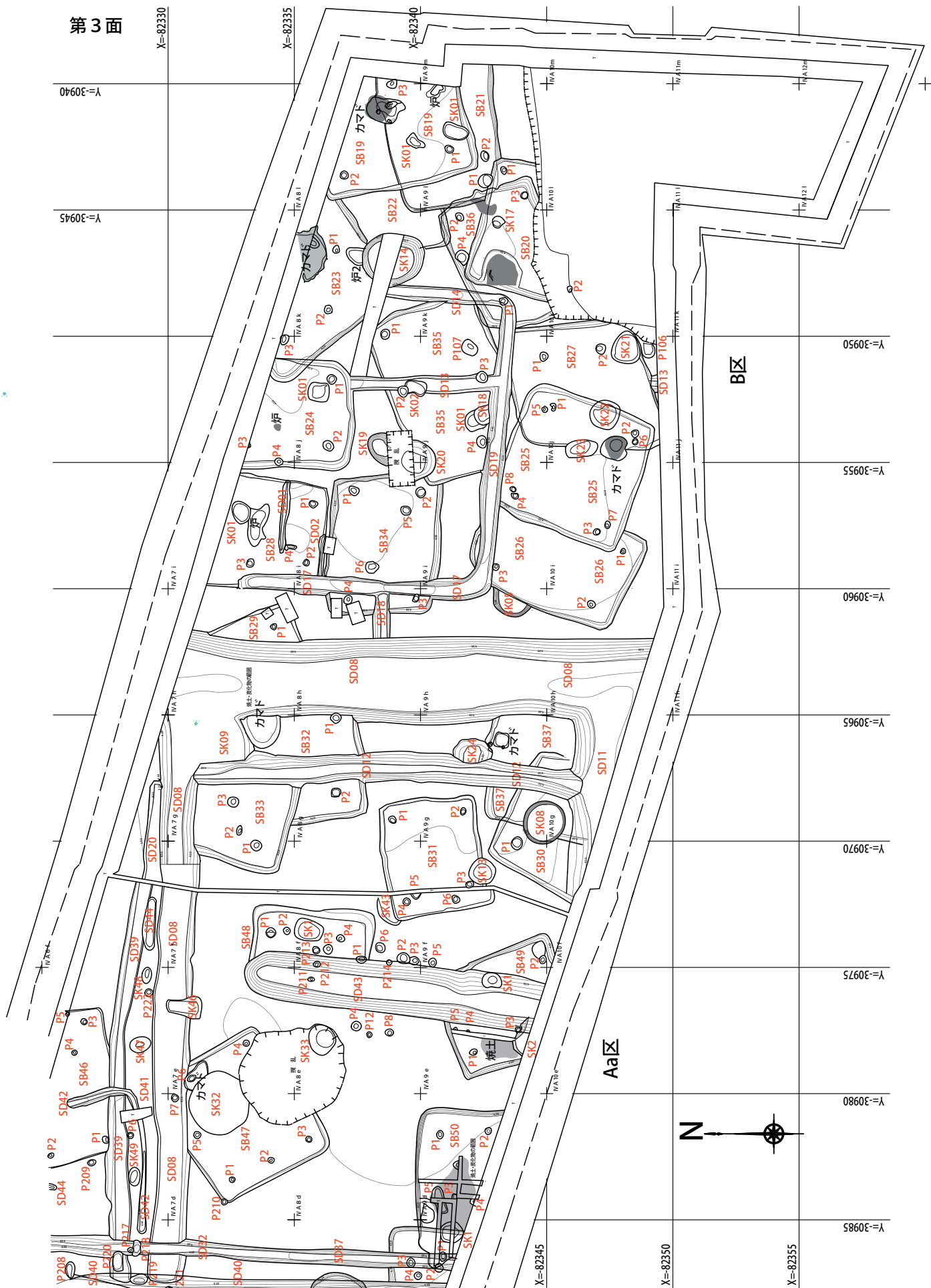




第2面

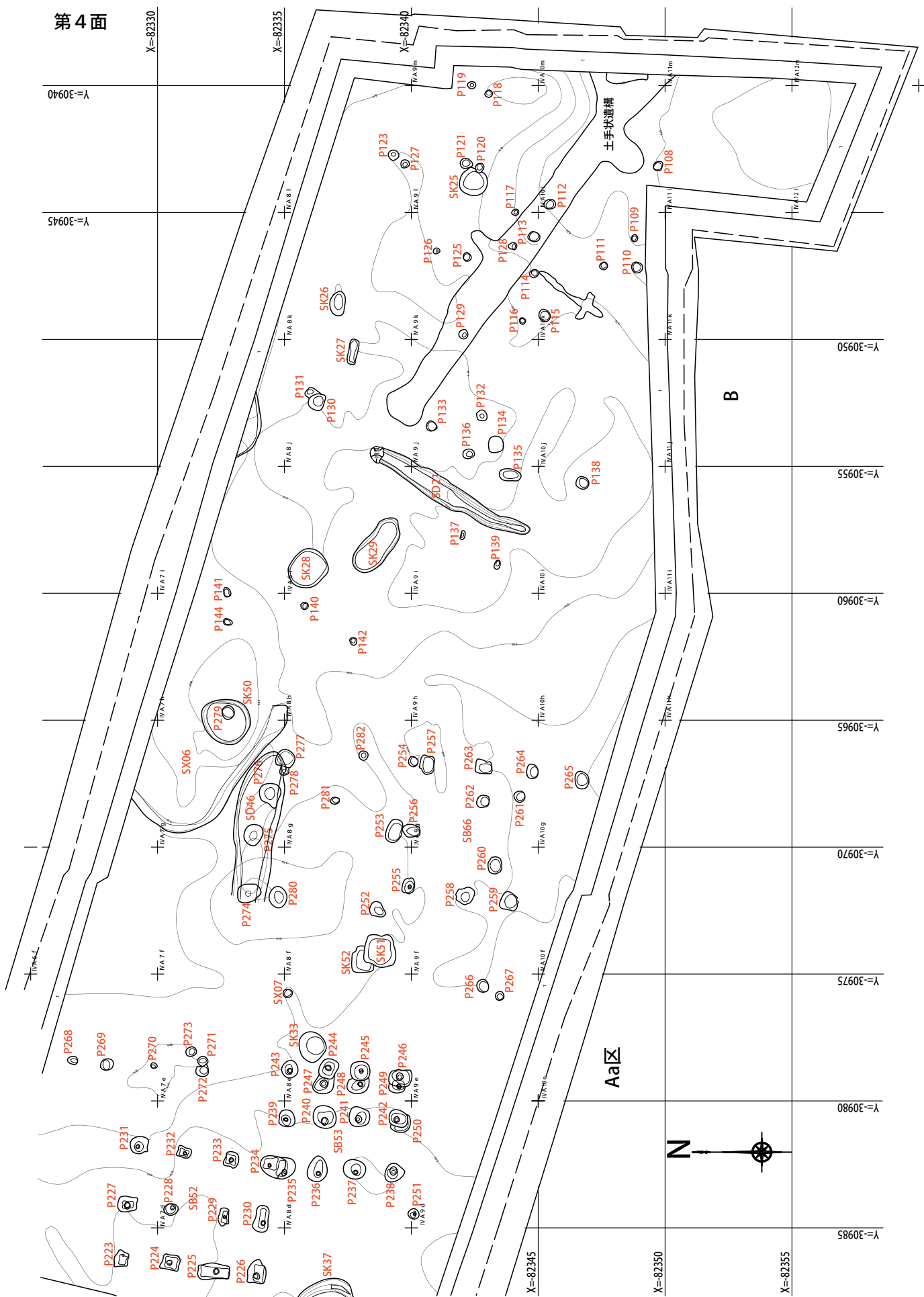


第3面



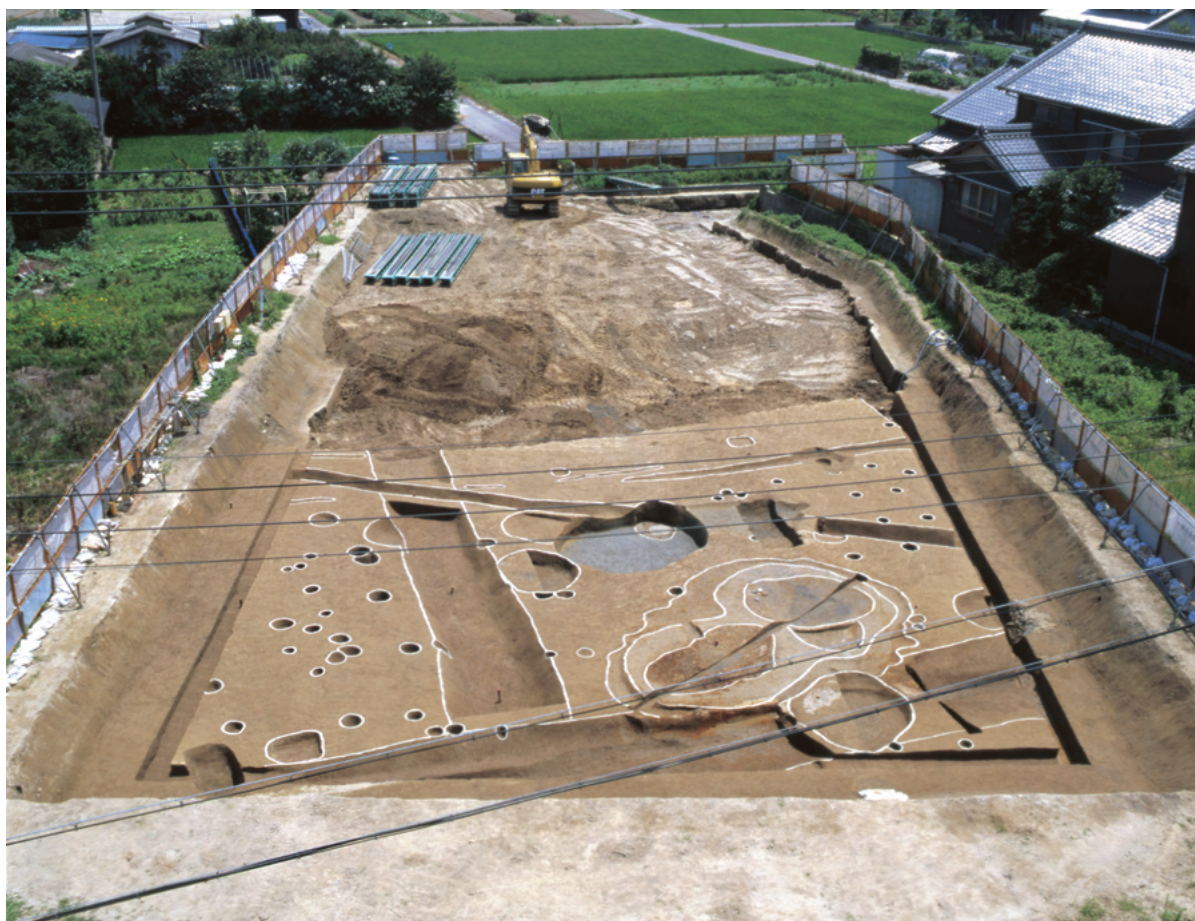


第4面





調査区全体（西からみる）

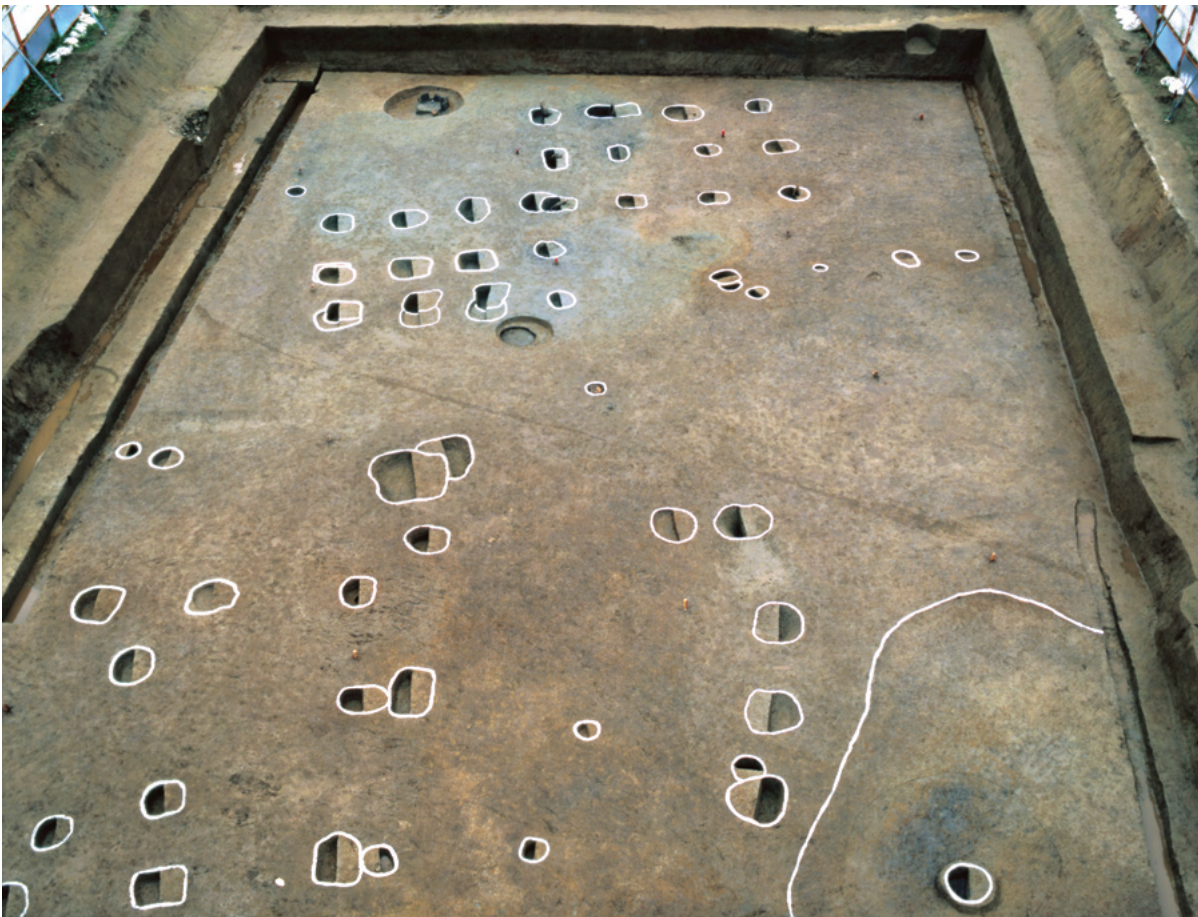


05 A区1面全体（西からみる）

写真図版 2



05A 区 3 面全体（東からみる）



05 A区 4 面全体（東からみる）



05 B区1面全体（西からみる）



05 B区2面全体（西からみる）

写真図版4



05 B区 3面全体（西からみる）



05 B区 4面全体（西からみる）



05 C区1面全体（南からみる）



05 C区2面全体（西からみる）

写真図版6



05 C区3面全体（西からみる）



05 A b区北壁土層断面（南からみる）



SB53 検出状況



SB52・SB53 検出状況（北からみる）



P225 柱根（南からみる）



SB52 柱根（南からみる）



柱穴の断面（05 A区南からみる）



P242 土層断面（南からみる）



SB02 全体（南からみる）



P88 土層断面（南からみる）

写真図版8



SB03 全体（南東からみる）



SB10～12 全体（北東からみる）



SB19 全体（南東からみる）



SB21 カマド（南東からみる）



SB20 全体（西からみる）



SB23 地床炉？（北西からみる）



SB27 全体（南からみる）



SB32 カマド状遺構（南東からみる）



SB37 全体（南からみる）



SB37 カマド（東からみる）



SB37 カマド（南からみる）



SB37 カマド支脚（東からみる）



SB49 全体（北西からみる）



SB50 全体（西からみる）

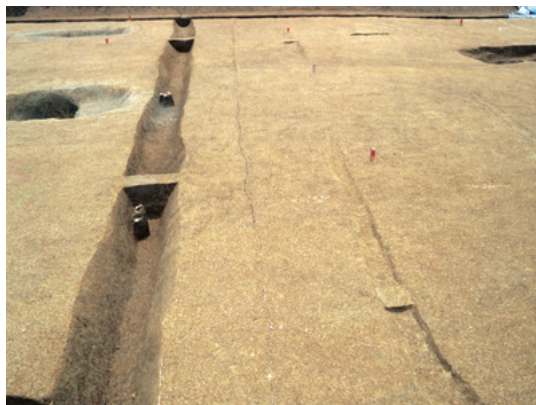


SB58 全体（北西からみる）



SB65 全体（東からみる）

写真図版 10



SD01・SD02 全体（南からみる）



SD08 土層断面（南からみる）



SD11（西からみる）



SD14 全体（西からみる）



SD33（南西からみる）



SD23 全体（南西からみる）



SD46 全体（西からみる）



SD64 全体（南からみる）



SX07 (西からみる)



SX09 全体 (北からみる)



SX08 全体 (東からみる)



SK20 (南からみる)



SX05 (北東からみる)



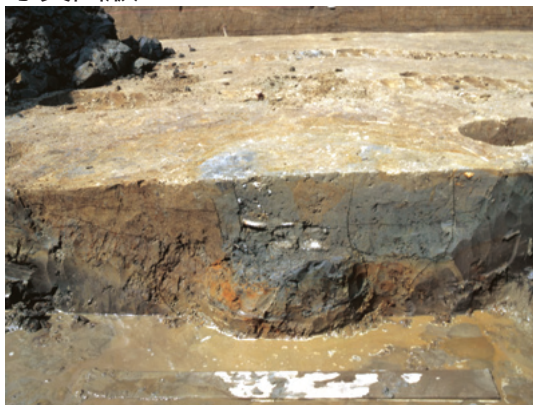
SX05 骨片 (北西からみる)



SK14 土層断面 (南からみる)



SX03 全体 (南東からみる)



SK32 土層断面 (南からみる)



SK37 (南からみる)



SK33 土層断面 (東からみる)



SK32 全体 (北東からみる)



SK58 1 段目 (東からみる)



A

E



B

F



C

G



SK58 3 段目 (西からみる)



D

- A 1 段目土層断面
- B 1 段目下板材
- C 2 段目全体
- D 2 段目結筒
- E 4 段目全体
- F 底部粘土張
- G 竹筒

SK58



16



17



8



12



1



6



11



14



3



2



18



4

写真図版 14



SB 03



SB 04



SB 05



SB 06



SB 06



SB 06



SB 08



SB 09



SB 09



SB 09



SB 10



SB 10



写真図版 16



SB 27



SB 28



SB 32



SB 33



SB 34



SB 35



SB 36



SB 47



SB 48



SB 49



SB 50



SB 56



写真図版 18

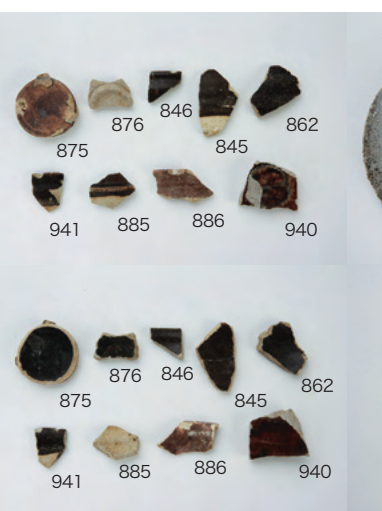
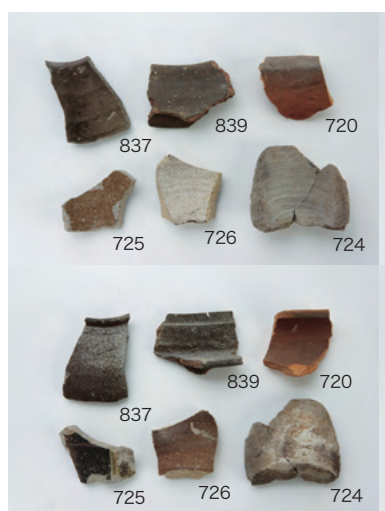
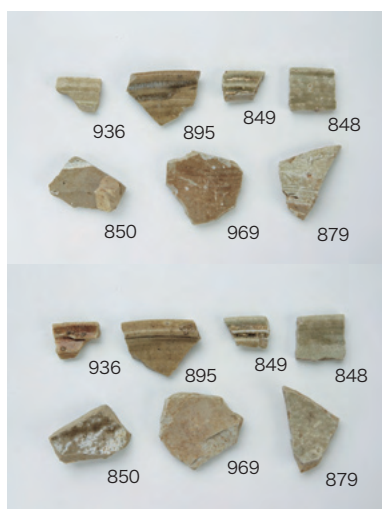
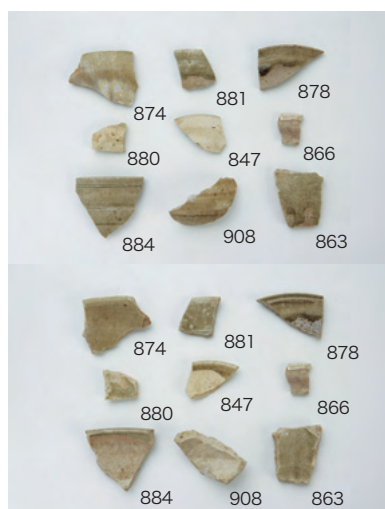








写真図版 22



写真図版 24



SK 58 出土布片



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第159集

下津新町遺跡

2009年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社